

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第2集

箕輪遺跡

上前原遺跡 3次、4次

市内遺跡（旧大里町・旧江南町） I

2 0 0 8

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第2集

みのわいせき
箕輪遺跡

かみまえはらいせき
上前原遺跡 3次、4次

市内遺跡（旧大里町・旧江南町） I

2 0 0 8

埼玉県熊谷市教育委員会

序

平成17年10月1日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成19年2月13日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約20km、東西約14kmにわたり、面積は159.88 km、人口は20万人を超えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。

新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の2大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、新市として初めて刊行する埋蔵文化財発掘調査報告書となります。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました皆様にはあつくお礼申し上げます。

平成20年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、「箕輪遺跡」と「上前原遺跡」の発掘調査報告書である。
箕輪遺跡 埼玉県熊谷市箕輪 34-1 番地所在（埼玉県遺跡番号64-40）
上前原遺跡 埼玉県熊谷市千代 65-1 番地先他所在（埼玉県遺跡番号65-22）
- 2 本調査は、個人住宅造成・建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査である。箕輪遺跡は旧大里町教育委員会が、上前原遺跡は旧江南町教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織と経緯は、各「調査に至る経過」に記載のとおりである。
箕輪遺跡の発掘調査期間は、平成10年2月2日から平成10年3月18日及び、平成11年3月1日から平成11年3月18日までである。
整理・報告書作成期間は、平成19年4月16日～平成20年3月31日までである。
上前原遺跡の発掘調査期間は、平成16年11月2日から平成16年11月29日及び、平成18年8月1日から平成18年8月31日までである。
整理は平成18年10月1日より平成19年12月10日まで、報告書作成期間は、平成19年9月1日～平成20年3月31日までである。
- 4 発掘調査の担当は
箕輪遺跡は、旧大里町教育委員会 出縄 康行が発掘を担当し、整理報告書作成・編集執筆は熊谷市教育委員会寺社下 博が行った。
上前原遺跡は、旧江南町教育委員会の森田 安彦と新井 端が発掘を担当し、整理報告書作成・編集執筆は熊谷市教育委員会新井 端が行なった。
- 5 発掘調査における写真撮影は、
箕輪遺跡は、現場写真を出縄が、遺物の写真撮影は寺社下が行った。
上前原遺跡は、現場写真を森田と新井が、遺物の写真は新井が行なった。
- 6 本書にかかる資料は熊谷市教育委員会が保管している。
- 7 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。
記して感謝申し上げます。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 挿図縮尺は、各挿図中に示してある。

遺構の略記号は次のとおりである。

S 1 竪穴住居跡 S S 集石土壇 S K 土壇

- 2 挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。

- 3 挿図中の遺物の縮尺は、次のとおりである。

土器片・土器… 1 / 3 ・ 1 / 4 ・ 1 / 6 石器・石製品… 1 / 3 ・ 1 / 4

土製品・滑石製模造品・古銭… 1 / 2 瓦・石製品… 1 / 6

- 4 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・土器・石器断面 白抜き

須恵器・断面 黒塗り

灰釉陶器・断面 

回転糸切り 

回転ヘラ削り 

回転ヘラナデ 

- 5 挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、() が付されるものは推定値を表す。

- 6 遺物拓影図は、原則として向って左側に外面を示した。なお、内外面両方を示す場合には左側に内面、右側に外面を示した。

- 7 写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。

- 8 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行1994）を参考にした。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

I 箕輪遺跡の調査

1. 発掘調査の概要

- 1 調査に至る経過
- 2 発掘調査の経過
- 3 整理・報告書作成の経過
- 4 箕輪遺跡発掘調査の組織
- 5 整理・報告書作成の組織

II 遺跡の立地と環境

III 遺跡の概要

IV 遺構と遺物

住居跡

古墳

方形周溝墓

井戸跡

溝跡

堀・土塁

柱列・ピット群

V まとめ

VI 上前原遺跡の調査

- 1 調査に至る経過
- 2 発掘調査・報告書作成の経過
- 3 発掘調査の組織

VII 上前原遺跡の立地と環境

VIII 上前原遺跡の概要

- 1 調査の方法
- 2 検出された遺構と遺物

IX 遺構と遺物

1 第3次調査地点

- 1) 住居跡
- 2) 土 壙
- 3) 石土壙
- 4) 出土遺物

2 第4次調査地点

- 1) 住居跡
- 2) 土壙
- 3) 溝
- 4) 出土遺物

3 調査のまとめ

図版 箕輪遺跡

上前原遺跡

報告書抄録

箕輪遺跡 挿図目次

第1図	埼玉県内の地形図
第2図	周辺の遺跡分布図
第3図	箕輪遺跡長地点位置図
第4図	遺跡配置図
第5図	第1号集住居跡
第6図	第1号集住居跡出土遺物
第7図	第2号住居跡出土遺物、第2号住居跡、第4号溝跡
第8図	第3号住居跡出土遺物
第9図	第4号住居跡
第10図	第4号住居跡出土遺物
第11図	第5号・6号住居跡
第12図	第5号住居出土遺物
第13図	第7号住居跡出土遺物・第6号溝跡出土遺物
第14図	第8号住居跡出土遺物
第15図	第9号住居跡出土遺物・第1号墳
第16図	第1号噴出土遺物
第17図	第1号方形周溝墓
第18図	第1号方形周溝墓出土遺物
第19図	第2号方形周溝墓出土遺物、第1号・第2号土杭
第20図	第1号井戸跡出土遺物
第21図	第1号・2号溝跡出土遺物
第22図	第3号溝出土遺物、第4号溝跡・第5号溝跡出土遺物
第23図	第7号溝跡出土遺物
第24図	堀
第25図	堀出土遺物
第26図	堀出土遺物
第27図	堀出土遺物
第28図	土塁
第29図	土塁出土遺物 (1)
第30図	土塁出土遺物 (2)
第31図	柱列 ピット (1)
第32図	柱列 ピット (2)
第33図	遺構外Ⅰ出土遺物
第34図	遺構外Ⅱ出土遺物
第35図	試掘トレンチ出土遺物

第1表	周辺遺跡一覧表
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表
第6表	第5号住居跡出土遺物観察表
第7表	第5号住居跡第6号溝跡出土遺物観察表

第8表	第8号住居跡出土遺物観察表
第9表	第9号住居跡出土遺物観察表
第10表	第1号墳出土遺物観察表
第11表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表
第12表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表
第13表	第1号井戸跡出土遺物観察表
第14表	第1号・2号溝出土遺物観察表
第15表	第3号・5号溝跡出土遺物観察表
第16表	第7号溝跡出土遺物観察表
第17表	堀出土遺物観察表
第18表	土塁出土遺物
第19表	遺構外Ⅰ出土遺物観察表
第20表	遺構外Ⅱ出土遺物観察表
第21表	試掘トレンチ遺物観察表

図 版

上前原遺跡 挿図目次

第1図	調査地点位置図
第2図	第Ⅲ次発掘調査地点
第3図	第Ⅲ次1. 2号住居跡
第4図	第Ⅲ次1. 2. 3号集石土壇
第5図	第Ⅲ次4. 5号集石土壇
第6図	第Ⅲ次6. 7. 10号集石土壇
第7図	第Ⅲ次11. 12. 17. 18号集石土壇
第8図	第Ⅲ次13. 14. 19号集石土壇
第9図	第Ⅲ次8. 9. 15. 16号集石土壇
第10図	第Ⅲ次20号集石土壇
第11図	第Ⅲ次21. 22. 23. 24. 25. 26. 28号集石土壇
第12図	第Ⅲ次27. 29. 31. 32号集石土壇
第13図	第Ⅲ次33. 34. 35号集石土壇
第14図	第Ⅲ次36. 37. 38号集石土壇
第15図	第Ⅲ次39. 40号集石土壇
第16図	第Ⅲ次41. 42. 44号集石土壇
第17図	第Ⅲ次第1号住居跡・土器
第18図	第Ⅲ次1. 2号住居跡・土器
第19図	第Ⅲ次2号住居跡・土器
第20図	第Ⅲ次2号住居跡・土器
第21図	第Ⅲ次2号住居跡・土器
第22図	第Ⅲ次2号住居跡・土器
第23図	第Ⅲ次1号梅甕、1. 3. 4集石土壇・土器
第24図	第Ⅲ次7. 9. 13. 14号集石土壇・土器
第25図	第Ⅲ次8号集石土壇・土器
第26図	第Ⅲ次16. 19号集石土壇・土器
第27図	第Ⅲ次22. 24. 26. 29. 30号集石土

壇・土器	
第28図	第Ⅲ次33号集石土壇・土器
第29図	第Ⅲ次33. 35号集石土壇・土器
第30図	第Ⅲ次33. 35号集石土壇・土器
第31図	第Ⅲ次38. 40. 41. 43. 44. 45号集石土壇・土器
第32図	第Ⅲ次1. 2. 3. 4号土壇・土器
第33図	第Ⅲ次5. 6号土壇・土器
第34図	第Ⅲ次6. 7号土壇・土器
第35図	第Ⅲ次47. 46号土壇・土器
第36図	第Ⅲ次包含層一括・土器
第37図	第Ⅲ次包含層一括・土器
第38図	第Ⅲ次包含層一括・土器
第39図	第Ⅲ次包含層一括・土器
第40図	第Ⅲ次出土土製品
第41図	第Ⅲ次第1号住居跡・石器
第42図	第Ⅲ次1. 2号住居跡・石器
第43図	第Ⅲ次2号住居跡・石器
第44図	第Ⅲ次2号住居跡・石器
第45図	第Ⅲ次2. 3. 5. 14. 16. 19. 22号集石土壇・石器
第46図	第Ⅲ次19. 29. 30. 38. 40号集石土壇・石器
第47図	第Ⅲ次42号集石土壇・石器
第48図	第Ⅲ次6. 7. 47号土壇・石器
第49図	第Ⅲ次包含層一括・石器
第50図	第Ⅲ次包含層一括・石器
第51図	第Ⅲ次包含層一括・石器
第52図	第Ⅲ次包含層一括・石器
第53図	第Ⅲ次包含層一括・石器
第54図	第Ⅳ次発掘調査地点
第55図	第Ⅳ次住居跡土層図
第56図	第Ⅳ次住居跡・土壇土層図
第57図	第Ⅳ次住居跡、土壇・土器
第58図	第Ⅳ次土壇・土器
第59図	第Ⅳ次住居跡、土壇・石器
第60図	第Ⅳ次包含層一括・土器

第1表	第Ⅲ・Ⅳ次出土土器観察表
第2表	第Ⅲ・Ⅳ次出土石器観察表
第3表	第Ⅲ次集石土壇計測表

図 版

I 箕輪遺跡の調査

1 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成9年12月、土地所有者であり事業主でもある福田ますみ氏より、自宅裏の敷地を小区画の家庭菜園用地として分譲するとともに福田氏個人の農地として改良する旨の連絡を受けた。当事業予定地は、埋蔵文化財包蔵地内であるため試掘調査の実施に協力して欲しい旨を伝え、了承を得た。後日、福田氏より試掘調査依頼書の提出があり、大里村教育委員会では事業予定地1,642㎡を対象に、平成10年1月12日から1月16日にかけて試掘調査を行った。調査区に幅2mのトレンチを東西方向に4本設定し、重機で表土を除去するとともに調査区東側隅に一部残る土塁とそれに伴う堀の有無を確認するため南北方向にトレンチ1本を設定した。調査は遺構、遺物の有無と併せて基本土層を確認した。調査区南西側では現地表から約60cmでローム層を検出するが、主だった遺構や遺物は確認されなかった。一方、調査区北東側においては、現地表から約40cmで方形周溝墓と思われる溝の一部と弥生式土器を確認する。調査区東側では、古墳跡1基、平安時代の住居跡1軒等を確認するものの土塁に伴う堀については検出することはできなかった。その後、事業主と遺跡の保存について協議を行い、今回の家庭菜園として分譲することから遺構への影響が少ないものと判断したため工事に際しては十分注意し行うよう指示を行った。しかしながら東側に残る一部土塁については、現状保存を求めたが、農地とし改良するため変更等は不可能であったため、記録保存を目的に発掘調査を実施することとした。発掘の通知は、平成10年4月16日付け大里教発第160号、同161号で提出している。

箕輪遺跡第2地点については、平成11年1月に原因者である岡田英昭氏より、個人専用住宅建設に伴う試掘調査依頼書の提出があり、村教育委員会では平成11年1月29日に391㎡を対象とした試掘調査を行った。住居跡1軒や土塁に伴う堀が検出された。後日、岡田氏と村教育委員会は遺跡の保存等について協議を行ったが遺跡の現状保存は困難とのことから、記録保存を目的とした発掘調査を行う措置をとることとなった。発掘の通知は、平成11年4月6日付け大里教発第130号で提出している。

2 発掘調査の経過

箕輪遺跡は平成10年2月2日から3月18日にかけて実施した。2月4日から土塁の測量を行い、現況測量図を作成する。終了後、土塁の精査を人力で行う。土塁覆土中には拳大のロームブロックをはじめ人頭大の凝灰岩質砂岩や少量の遺物が出土したが、土塁の構築時期を示す遺物は検出されなかった。2月16日にはローム面まで掘り下げ、その結果、古墳の周溝と古墳時代前期の住居跡1軒を検出した。遺構は3月6日に完掘し、写真撮影を行い、機材を撤去して全ての作業を終了した。

箕輪遺跡第2地点は、平成11年3月1日から3月26日にかけて実施した。重機によるローム面までの表土除去を行うが、廃土の置き場の確保が困難なため調査区を2分割し、東側区より遺構調査を開始する。検出遺構は住居跡1軒、溝2条、堀の一部である。東側区終了後、廃土を反転させ西側区の遺構調査を開始する。西側区においては、住居跡1軒、方形周溝墓2基とともに土塁に伴う堀を検出する。遺構は3月24日に完掘し、写真撮影を行い、機材を撤去して全ての作業を終了した。

3 整理・報告書作成の経過

箕輪遺跡の整理・報告書作成作業は、平成19年4月16日より出土遺物の水洗い・注記、復元、実測・拓本取りと進め、これと並行して図面整理・写真整理を実施していった。10月には遺物及び遺構図のトレースを行い、図版の作成を行っていった。さらに遺物写真撮影・写真図版作成・報告書割付・原稿執筆を行い、平成20年2月5日に作業を終了した。そして、印刷業者の選定の後報告書の印刷に入り、校正を行い、3月末日に報告書を刊行した。

4 箕輪遺跡発掘調査の組織（平成9年度・10年度）

調査主体者	大里村教育委員会
事務局	教 育 長 金井 岩夫
	教 育 次 長 金子 富夫
	社会教育係長 宮崎 哲
	文化財担当 出縄 康行
	発掘作業員 8名

5 整理・報告書作成の組織（平成19年度）

調査主体者	熊谷市教育委員会	
事務局	教 育 長	野原 晃
	教 育 次 長	増田 和巳
	社会教育課長	関口 和佳
	社会教育課文化財保護担当副参事	今井 宏
	社会教育課副課長	新井 端
	社会教育課副課長	出縄 康行
	社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之
	主査	寺社下 博
	主査	吉野 健
	主任	松田 哲
	主事	松村 聡

Ⅱ 遺跡の立地と環境

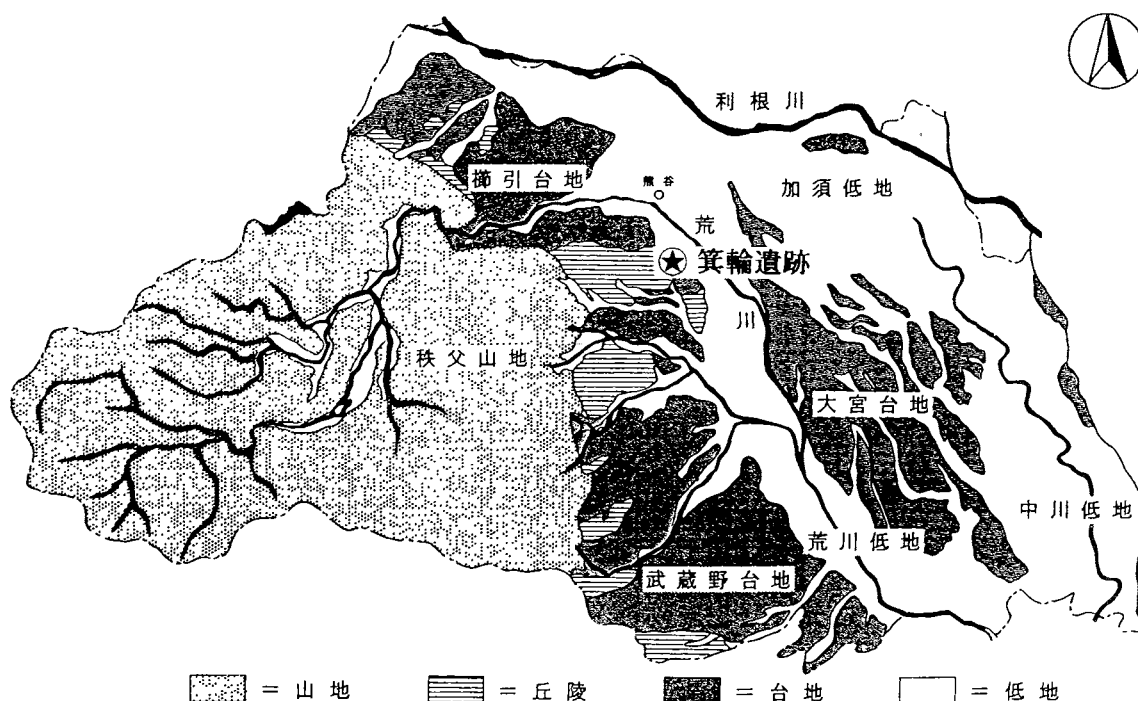
熊谷市は、北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧熊谷市と旧江南町・旧大里町との境を荒川が、それぞれ西から南東方向に向かって流れており、両河川が最も近接する地域である。市域の大半は両河川によって造りだされた妻沼低地及び熊谷扇状地に占められているが、西部は櫛引台地、南部は江南台地（一部比企丘陵）によって形作られている。旧大里町内の台地は、丘陵部から高低差をもつ三つの平坦面に区分される。

箕輪遺跡は、標高27～25mの最下段の台地上に位置し、低断崖を経て、東側一帯は荒川及び和田吉野川によって造りだされた低地帯が形成されている。同じ最下段の台地上には、北側に北廓遺跡（3）、西側に玉太岡遺跡（4）、南から東側に中廓遺跡（5）が本遺跡と接しながら、本遺跡を取り囲んだ状況で立地している。また西側の玉太岡遺跡との間には、全長74m、前方後円墳のとうかん山古墳（A）が所在している。箕輪遺跡は、縄文時代をはじめ弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、そして土塁が残る中世館跡の遺跡として周知の遺跡であるが、周囲の遺跡もまた、縄文時代各期・弥生時代後期を中心に、断続的に長期に及ぶことを特徴としている。

本遺跡の南に位置する中段の台地上には、弥生時代後期から古墳時代前・中期、そして平安時代に及ぶ船木遺跡（6）、同じく弥生時代後期（一部中期の土器も観察されている）を中心としながら、平安時代の住居跡内から「有」字印をも出土している円山遺跡（7）が所在している。

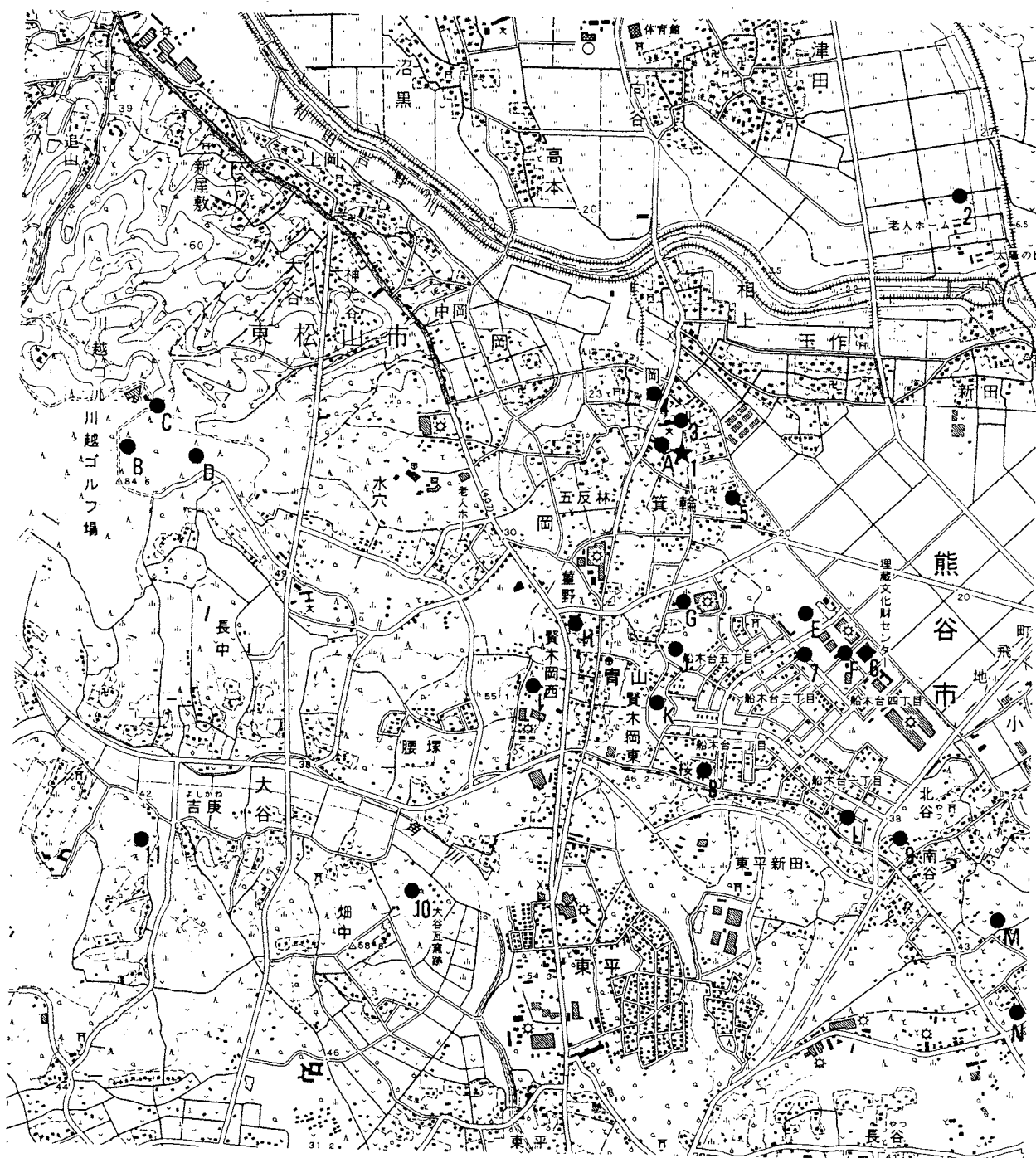
上段の台地上には、その最高位に径90mの円墳・甲山古墳が所在している。

一方、断崖下に広がる荒川及び和田吉野川によって造り出された低地帯でも、古墳時代前期の大型の方形周溝墓に代表される下田町遺跡（2）にみられるように、弥生時代後期以降大規模な集落が展開されていくのである。



第1図 埼玉県の地形図

第2図 周辺の遺跡分布図



第1表 周辺遺跡一覧表

古墳・古墳群		D	秋葉塚	H	賢木岡古墳群	L	大境南古墳群
A	とうかん山古墳	E	円山古墳群	I	甲山古墳	M	庚塚古墳
B	三千塚古墳群	F	船木古墳群	J	楓山古墳	N	田甲原古墳
C	雷電山古墳	G	阿諏訪野古墳	K	東山古墳群		
集落跡・その他		3	北廓遺跡	6	船木遺跡	9	北谷南遺跡
1	箕輪遺跡	4	玉太岡遺跡	7	円山遺跡	10	大谷瓦窯跡
2	下田町遺跡	5	中廓遺跡	8	桜谷遺跡	11	吉ヶ谷遺跡

Ⅲ 遺跡の概要

箕輪遺跡は、東経136° 36′ 23″、北緯36° 56′ 26″の熊谷市箕輪34-1他に所在する。

全体では、先にも記したように縄文時代をはじめ弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、そして土塁が残る中世館跡の遺跡として知られている。今回報告するのは、遺跡北西隅にあたる区域（第3図）である。遺跡は、北に接して縄文時代前期、弥生時代後期（住居跡・方形周溝墓）、奈良・平安時代の遺構・遺物を出土した北廓遺跡（吉見小学校内を中心とする）、南に接して縄文時代晩期の祭祀遺物を出土した中廓遺跡が位置しており、現状では3遺跡に分割されてはいるが、本来は沖積地を望む低位台地の先端部に一つの遺跡を形成していたと考えられる。さらに、北廓遺跡とは県道青山熊谷線を挟んで位置する東松山市岡の玉太岡遺跡は、弥生時代後期～平安時代の複合遺跡であるが、やはり同一遺跡を形成しているといえる。

また西50mにはとうかん山古墳が位置し、本遺跡で点々と検出されている古墳跡との関連をうかがわせる。

Ⅳ 遺構と遺物

調査区は、南北ほぼ35m、東西22mで、南北に長く変則的な形状となるが、検出された遺構数は、住居跡9軒、古墳址1基、方形周溝墓2基、井戸跡1基、溝跡7条、堀1条、土塁、掘立列3列、ピット等がある。各遺構は、かなり密に分布し、重複しているものがほとんどである。便宜上、整理時に各辺10mの方眼（東西A～D、南北0～4）を配した。呼称は各々北東の交点名を用い、Bラインと1ラインの交点から南部及び西部10m範囲をB-1区とした（第4図）。

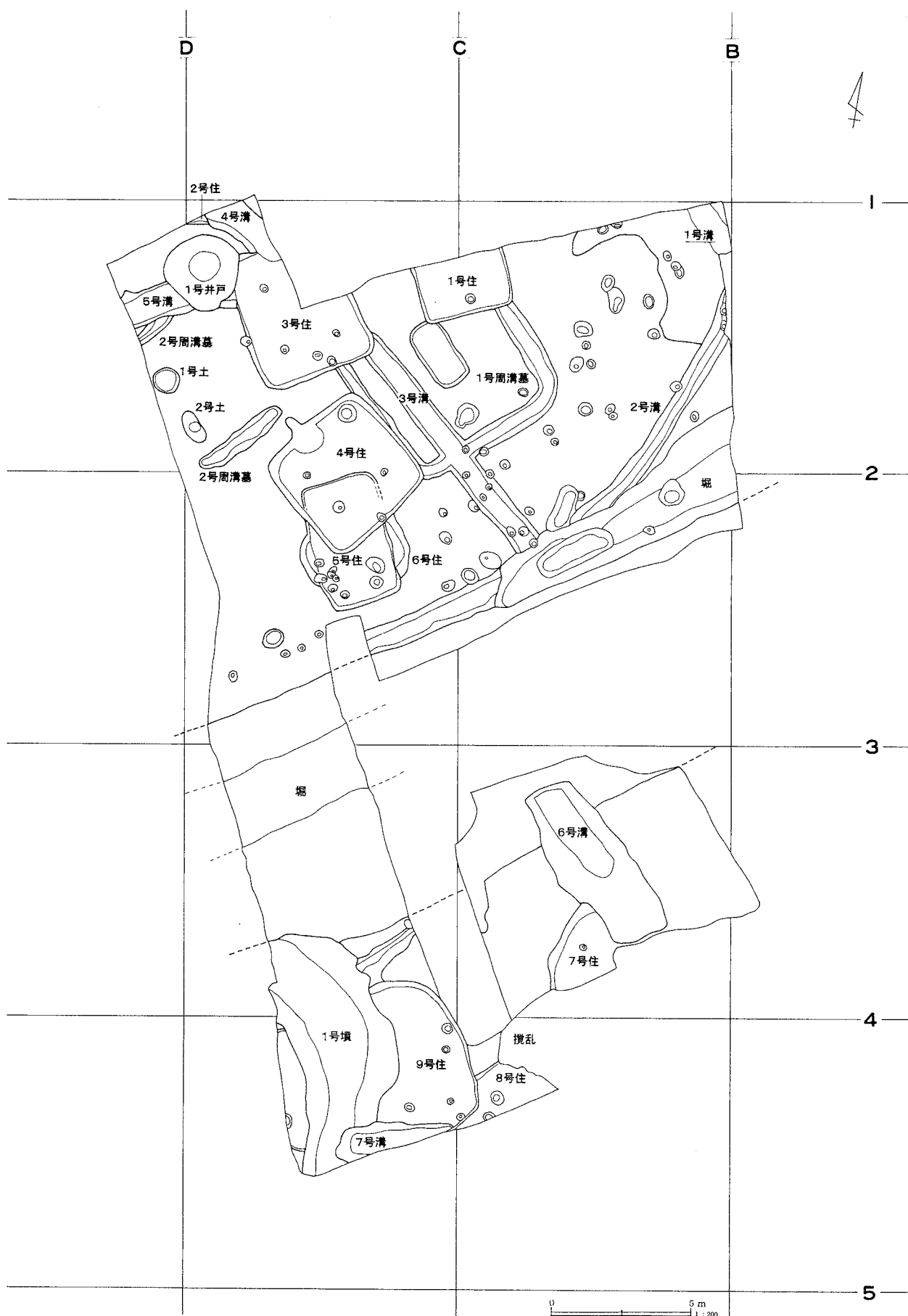
9軒検出された住居跡は、北側のC-1、-2区と、南側のC-4ポイント付近の2箇所集中する。方形周溝墓は北側の住居跡集中地域に2基が接して位置し、古墳址は、南端部に一部が検出されている。中央部に東西行している堀は、調査区内でも西端と北辺が調査されたに過ぎず、さらに東西に延伸している。また堀は、本来当位置に存在した多くの遺構を削除していることは、想像に難くない。土塁は、北辺の1ライン上（調査区域外・北土塁と呼称）、及びB-3区からC-3区へ、そして南に折れてC-4区へと移行している（南土塁と呼称）。

出土遺物の時期は、縄文前期から近世に及ぶが、小片のものが大部分であり、流れ込みの様相を示すものが多い。こうした状況の中、第1号方形周溝墓主体部からガラス小玉が、土塁下から須恵器短頸壺がほぼ完形で、また試掘トレンチの方形周溝墓と思われる溝の一部から弥生土器を検出している。

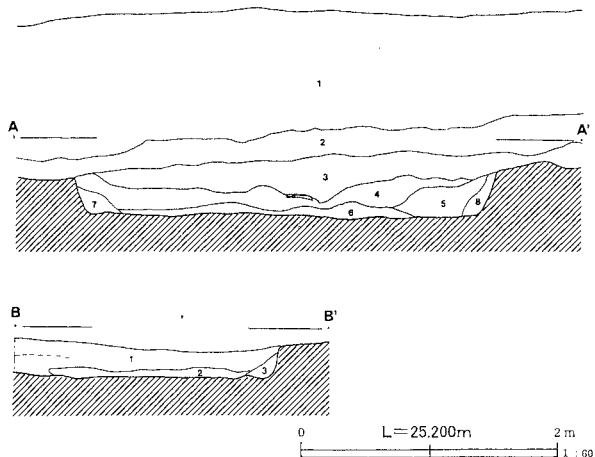
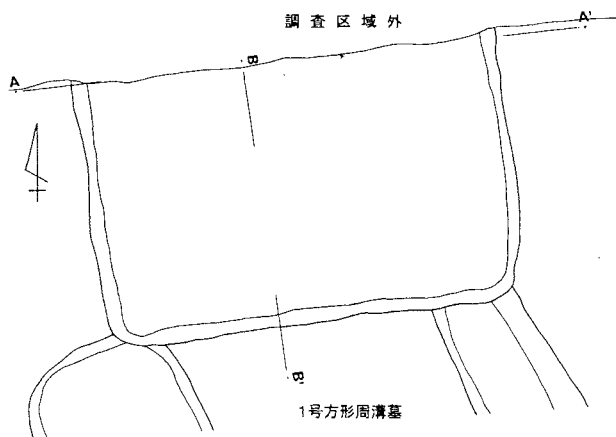
第1号住居跡（第5図・第6図） B-1区からC-1区に渡って位置している。2.10m部分を残し北側半分は調査区外である。第1号方形周溝墓の主体部から北西側の溝に至る地域を切断している。残存している南辺は3.25mを計り、両隅は矩形を呈する。全体では南北方向に長軸をもつ長方形を呈するものと思われる。長軸の方位はN-8°-Wを示す。床面はやや固く、ほぼ水平を成すが、柱穴等は検出されていない。またカマドも検出されていない。遺物は、全て覆土中からであるが、須恵器蓋、同杯、同甕、土師器杯、同甕、同甕、砥石等が出土している。



第3図 箕輪遺跡調査地点位置図



第4図 遺構配置図



第1号住居跡

土層説明(A-A'、B-B')

- 1 暗褐色粘土。褐色土粒を主とし、粒子粗く多量の砂粒を含む。ローム粒を少量含む。粘性弱く、締りやや強い。
- 2 暗褐色粘土。褐色土粒を主とするが、ローム粒を多量に含む。粘性弱く、締りやや強い。
- 3 黒褐色粘土。黒色土粒を主とし、粒子粗く褐色粒子を少量含む。ローム粒・焼土粒を少量含む。粘性弱く、締りやや強い。
- 4 黒褐色粘土。第3層にローム粒を多量に含んだ土層。粘性弱く、締りやや強い。

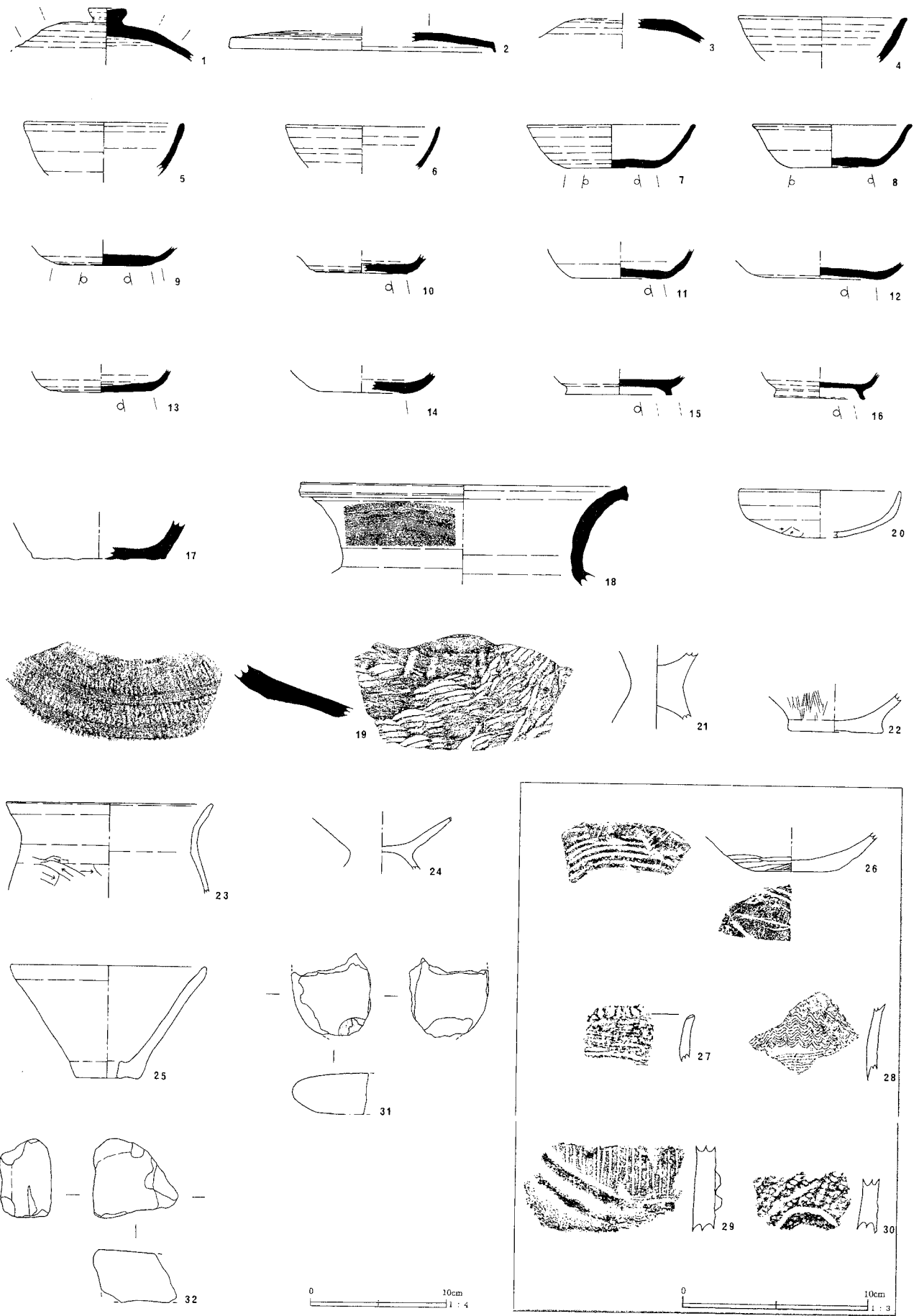
- 5 暗褐色粘土。褐色土粒を多く含む。ローム粒・焼土粒・粘性粒をやや多く含む。粘性弱く、締りやや強い。
- 6 暗褐色粘土。黒色土粒を少量含む。粒子の細かい褐色土粒を主とし、ローム粒・焼土粒を多く含む。粘性やや強く、締りやや強い。
- 7 黒褐色粘土。粒子の粗い黒色土粒と、直径1～2cmのロームブロックを多く含む。粘性やや強く、締りやや強い。
- 8 褐色粘土。直径1～2cmのロームブロックを少量と、ローム粒を多量に、また少量の黒色土粒を含む。粘性・締りやや弱い。

第5図 第1号住居跡

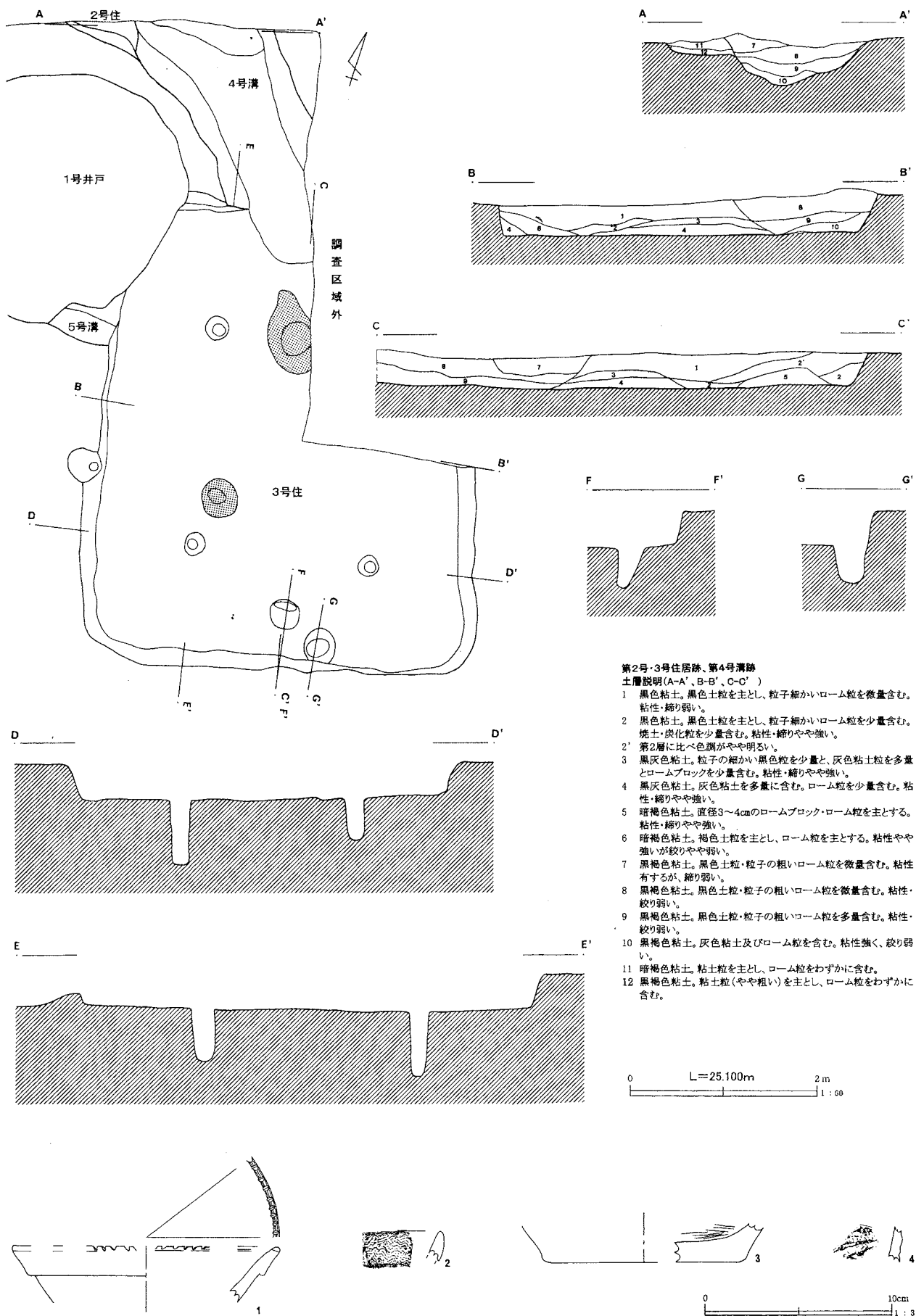
第2号住居跡(第7図) C-1区に南辺の一部のみがみられるが、大部分は調査区外である。また第3号溝跡にも大きく切断されている。残存しているのは南壁の一部80cm範囲のみであるが、壁がほぼ直立し、床面が固く水平を成すところから住居跡としたものである。遺物は、弥生式の壺形土器片がわずかに出土したのみである。

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表(第6図)

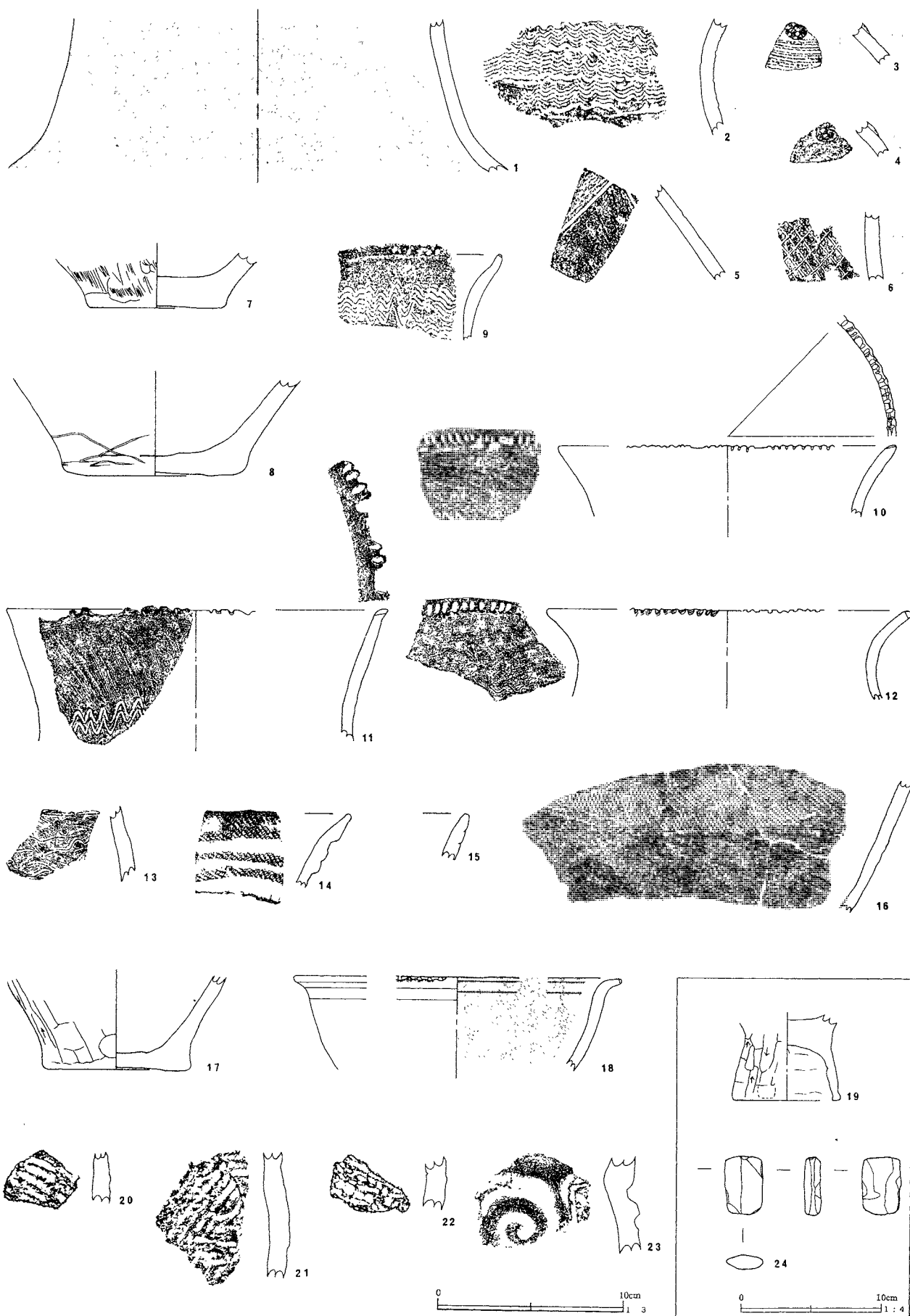
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・蓋	-	-	-	A・B・F・J・N	B	青灰	口縁欠3/4	
2	須恵器・蓋	-	-	-	A・B・F・N	A	青灰	口縁部1/8	
3	須恵器・蓋	-	-	-	A・D・F・N	C	青灰	大井部1/3	
4	須恵器・杯	(12.4)	-	-	A・B・F	B	青灰	口縁部1/6	
5	須恵器・杯	(11.8)	-	-	A・B・F・N	B	緑灰	口縁部1/8	外面煤付着。
6	須恵器・杯	(11.4)	-	-	A・B・F	A	青灰	口縁部1/8	
7	須恵器・杯	12.4	3.2	6.8	A・B・F・N	B	青灰	一部欠	
8	須恵器・杯	11.6	3.1	6.0	A・B・F	B	灰	2/3	
9	須恵器・杯	-	-	6.5	A・B・F・I・N	B	青灰	底部1/2	
10	須恵器・杯	-	-	(6.6)	A・B・F・I・N	B	青灰	底部1/3	
11	須恵器・杯	-	-	6.5	A・F・N	B	青灰	底部2/3	
12	須恵器・杯	-	-	(8.2)	A・B・F・N	B	青灰	底部1/4	
13	須恵器・杯	-	-	(7.6)	A・B・F・I・N	B	青灰	底部1/6	
14	須恵器・杯	-	-	(6.6)	A・F・N	C	紫灰	底部1/4	
15	須恵器・高台椀	-	-	7.8	A・B・F・H・N	A	青灰	底部1/2	
16	須恵器・高台付杯	-	-	(6.6)	A・B・D・F・I	A	暗青灰	底部1/3	
17	須恵器・壺	-	-	(9.8)	A・B・E・F・I	B	灰	底部1/4	
18	須恵器・甕	(24.0)	-	-	A・N・E・I	B	暗青灰	口縁部1/2	
19	須恵器・甕	-	-	-	A・H・N	B	青灰	肩の一部	
20	土師器・杯	(11.9)	(3.5)	-	A・B・G・J	B	にぶい橙	1/2底部中央欠	
21	土師器・高杯	-	-	-	A・B・I・N	B	灰赤	3/4接合部のみ	
22	土師器・壺	-	-	(7.0)	A・B・C・J・N	B	にぶい赤褐	底部1/2	
23	土師器・甕	(15.3)	-	-	A・C・J・N	B	にぶい赤褐	1/6	内面炭化物。外面煤付着。
24	土師器・台付甕	-	-	-	A・B・E・H・J・K・M	B	にぶい褐	接合部のみ	外面吸炭。
25	土師器・甕	(14.5)	(8.3)	(4.7)	A・B・H・I・K・N	B	橙	1/3	
26	弥生・壺	-	-	(4.1)	A・H・N	B	にぶい橙	底部1/3	外面吸炭。木の葉底。
27	弥生・深鉢	-	-	-	A・C・I・N	B	褐	小片(口縁部)	
28	弥生・深鉢	-	-	-	A・B・C・I・N	A	褐	小片	外面煤付着。
29	縄文土器	-	-	-	A・B・C・N	B	橙	小片	加曾利E。
30	縄文土器	-	-	-	A・B・D・I・J	B	橙	小片	加曾利E。
31	磨石	重さ145g							
32	砥石	重さ160g							3面使用、二次加熱。



第6图 第1号住居跡出土遺物



第7図 第2号住居跡出土遺物、第3号住居跡、第4号溝跡



第8图 第3号住居跡出土遺物

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表(第7図)

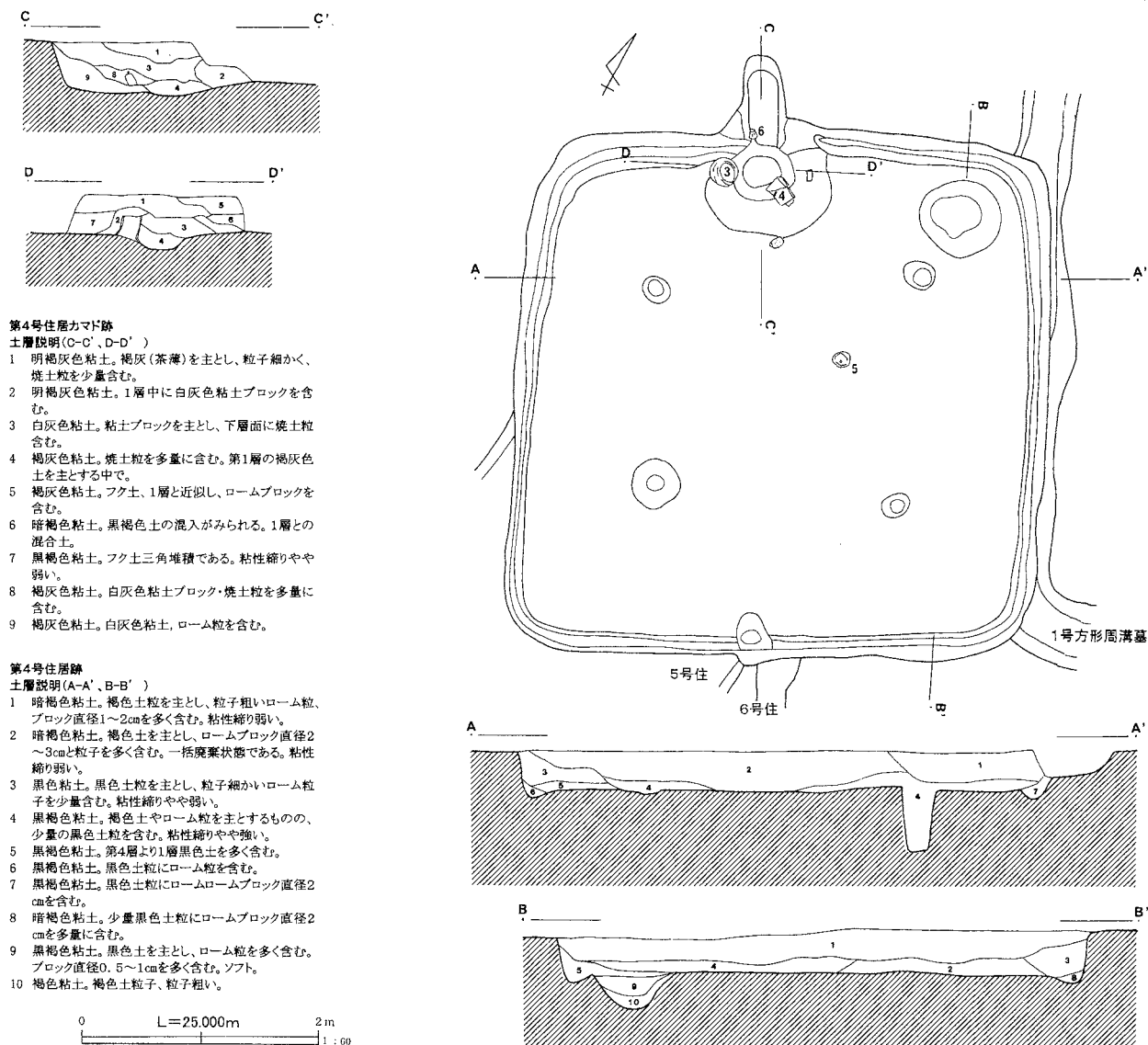
No.	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	弥生・壺	(14.2)	-	-	A・B・E・H・N	B	橙	口縁	
2	弥生・壺	-	-	-	A・B・E・I・J	B	にぶい橙	小片(口縁部)	
3	弥生・壺	-	-	(10.8)	A・B・I・N	B	橙	底部1/4	
4	縄文土器	-	-	-	A・D	B	黄橙	小片	黒浜。

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表(第8図)

No.	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	弥生・壺	-	-	-	A・N・C・B・H・J	B	明赤褐	頸部	全面化粧土、全面朱塗。
2	弥生・壺	-	-	-	A・B・E・I	B	明赤褐	小片(頸部)	内面(頸部下位)外面文様帯以外朱塗。
3	弥生・壺	-	-	-	A・B・E・N	B	にぶい黄橙	小片	内外面朱塗。
4	弥生・壺	-	-	-	A・B・H・M	B	橙	小片	外面表面剥離、内面朱塗。
5	弥生・壺	-	-	-	A・C・D・I・N	A	明赤褐	小片	
6	弥生・壺	-	-	-	A・B・E・J・N	A	褐	小片	内面朱塗。
7	弥生・壺	-	-	7.6	A・B・C・G・I	B	明黄褐	底部のみ	
8	弥生・壺	-	-	10.2	A・I・N	B	黄褐	底部のみ	内面表面剥離。
9	弥生・甕	-	-	-	A・B・C・E・H・I・N	B	明赤褐	破片(口縁部)	口唇部部分的押圧、外面煤付着。
10	弥生・甕	(18.2)	-	-	A・E・I・J	B	にぶい橙	口縁部1/8	外面煤付着。
11	弥生・甕	(20.4)	-	-	A・E・I・N	B	黒褐	口縁部1/7	全面吸炭、外面煤、内面炭化物付着。
12	弥生・甕	(19.3)	-	-	A・B・I・N・E	B	褐	口縁部1/4	内面吸炭。外面煤付着。
13	弥生・甕	-	-	-	A・C・H・N	A	黒褐	小片	内外面吸炭。
14	弥生・甕	-	-	-	A・B・D・I・N	B	橙	小片(口縁部)	
15	弥生・甕	-	-	-	A・B・N	B	明黄褐	小片(口縁部)	
16	弥生・甕	-	-	-	A・B・H・I・N	B	黒褐	破片	
17	弥生・甕	-	-	12.2	A・B・E・I・N	B	褐	底部のみ	外面吸炭、内面炭化物付着。
18	弥生・鉢(高杯)	(17.8)	-	-	A・B・I・N	B	にぶい黄橙	口縁一部	内面朱塗、外面一部吸炭。
19	土師器・台付甕	-	-	(8.0)	A・B・D・E・H・M・N	B	明赤褐	台部1/2	底部内外面吸炭。
20	縄文土器	-	-	-	A・B・D・I・N	B	橙	胴部小片	黒浜。
21	縄文土器	-	-	-	A・B・D・I・N	B	明褐	胴部小片	黒浜。
22	縄文土器	-	-	-	A・B・D・I・N	B	にぶい黄橙	胴部小片	黒浜。
23	縄文土器	-	-	-	A・B・I・J・N	B	明赤褐	胴部小片	加曽利E。
24	砥石	最大長4.2、最大幅2.7、最大厚1.2、重さ13.8g						ほぼ完形	3面使用。

第3号住居跡(第7図・第8図) C-1区に位置している。北東部分は調査区外である。北側では第4号溝跡、第5号溝跡、第1号井戸跡に切断されている。また東側では、第3号溝跡及び第1号方形周溝墓に切断されている。隅はやや丸味をもつが、長軸5.10m、短軸4.16mを計り、全体では長方形を呈する。主軸方位はN-12°-Wを示す。床面は多少凹凸があるものの、ほぼ水平面を成す。床面の縦穴対角線上に径20～25cm、深さ50～73cm3本の柱穴が検出されている。芯々間距離は長軸側2.40m、短軸側1.95mを計る。南辺中央の壁から28cm離れた位置に径32cm、深さ45cm、壁に向けて傾斜をもつものと、中央からやや東寄りの壁直下に径35cm、深さ40cmのもの、2本のピットが検出されている。炉は、柱穴間に二箇所検出されている。北辺短軸側は、柱穴間ほぼ中央にあって、規模は95×50プラスαcmを計る。いま一つは西側長軸間の南西柱穴寄りにあって、44×38cmを計る。遺物は、弥生式の壺、同甕、同鉢、小型の砥石等が出土している。

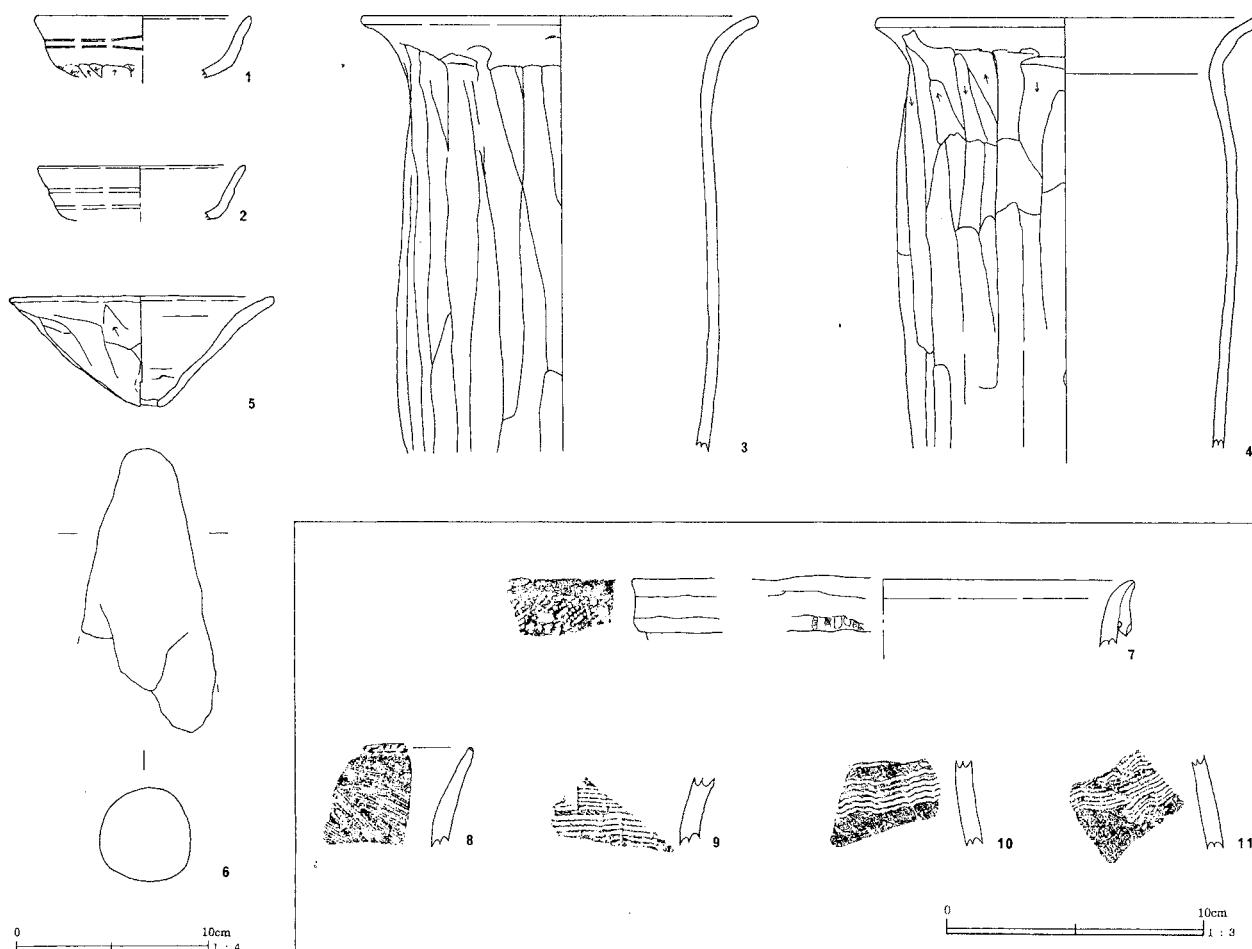
第4号住居跡(第9図・第10図) C-1区からC-2区に渡って位置している。第6号住居跡、第1号方形周溝墓を切断し、第5号住居跡を削平している。南北4.55m、東西4.60mを計り、全体では正方形を呈する。主軸方位はN-25°-Wを示す。床面は多少凹凸があるものの、ほぼ水平面を成す。壁直下の床面には、幅10cm前後の周溝が、カマド脇から全周している。また縦穴の対角線とずれるものの、径24～40cm、深さ50～55cm4本の柱穴が穿たれている。芯々間距離は北側2.30m、東側2.00m、南側2.08m、西側1.69mを計る。北東隅には、径65～70cm、深さ33cmを計る、円形で丸底の貯蔵穴が、また南壁中央直下には、径30cm、深さ35cmのピットが穿たれている。カマドは、北壁中央西寄りに設置されて



第9図 第4号住居跡

いる。焼成部は全て竪穴内にあって、横幅53、縦幅50cmでほぼ正円形を呈し、深さ6cmを計る。両脇に土師器甕を倒立させて袖として利用している。前面はなだらかに傾斜し横幅110、縦幅80cm(焼成部を含む)の燃焼部となる。奥壁はほぼ直立し、8cmの段差をもつ。段差上面の最前部には土製支脚が立てられる。支脚の背面は床面が傾斜をもって煙出しへと連続している。煙出しは長さ77cm、幅35cmを計る。遺物は、土師器杯、同甕、同甗、土製支脚等が出土している。

第5号住居跡(第11図・第12図) C-2区に位置している。第6号住居跡を切断しているが、第4号住居跡に切断され(第11図に掲載した土層図には第4号住居跡に切断された様子がみられないが、遺跡発掘現場で観察された通りにした)ている。両長軸壁がやや蛇行するが、全体では南北(長軸)4.75m、東西(短軸)2.86mを計り、長方形を呈する。主軸方位はN-7°-Wを示す。床面は多少凹凸が目立つ。本住居跡に伴うピットは、南東隅付近の2本のみであり、南西隅付近のピット群は構成の所産である。南東隅ピットの内南壁寄りのものは、径48×53cm、深さ5cm、他のピットは径70×48cm、深さ6cmを計



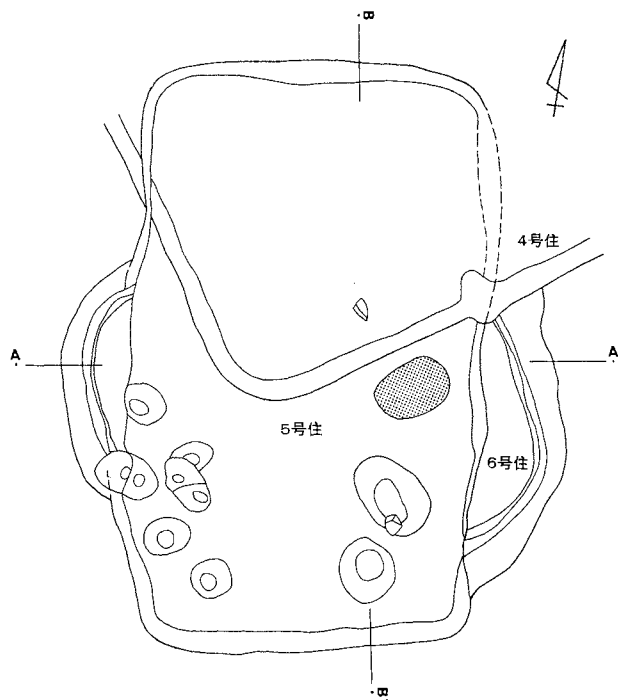
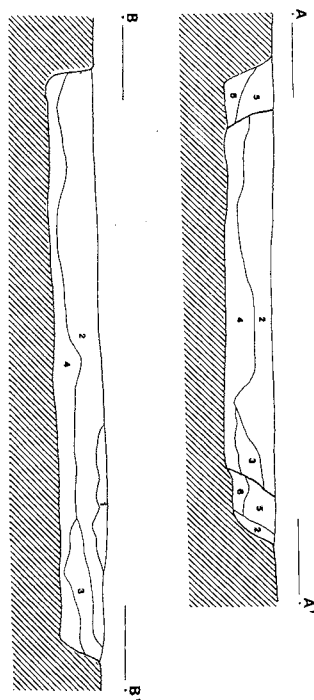
第10図 第4号住居跡出土遺物

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表(第10図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(11.2)	-	(9.4)	A・B・E・I・J・N	B	明赤褐	1/5	
2	土師器・杯	(11.0)	-	-	A・B・E・I・J	B	黒褐	口縁部1/6	外面黒色。
3	土師器・甕	21.0	-	-	A・B・G・J・K・N	B	橙	底部欠4/5	外面煤付着。
4	土師器・甕	19.8	胴部最大径18.0	-	A・B・D・H・N	B	浅黄橙	底部欠	外面煤、内面炭化物付着、二次加熱。
5	土師器・甕	13.8	5.8	2.0	C・E・K・N・I・G	B	にぶい黄橙	ほぼ完形	ほぼ全面吸炭、穿孔部外面表面剥離。
6	支脚	最大長15.0、最大幅(7.6)	-	-	A・B・E・I	-	褐灰	2/3	胎土が砂質、焼きが甘く分解しやすい。
7	弥生・壺	(19.6)	-	-	A・B・E・I・J・N	B	橙	口縁一部	貼り付け口縁下端に押圧。
8	弥生・甕	-	-	-	A・D・H・I・N	B	にぶい褐	小片(口縁部)	口唇部押圧。外面炭化物付着。
9	弥生・甕	-	-	-	A・E・I・N・B	B	にぶい黄褐	小片	
10	弥生・甕	-	-	-	A・B・N・O	B	明褐	小片	
11	弥生・甕	-	-	-	A・J・N・D	B	黒褐	小片	外面黒色。

る。いずれも柱穴とはみられない。炉は、中央東壁寄りにみられる。長円形を呈し、径61×42cm、深さ3cmを計る。遺物は、小片のみであるが、弥生式の壺、同甕等が出土している。

第6号住居跡(第11図) C-2区に位置している。第4号・第5号住居跡に切断されているが、直接的には第5号住居跡に切断されている部分が多い。そのため正確な規模は知れないが、全体ではほぼ隅隅正方形を呈し、南北3.6m、東西3.8mを計ると思われる。主軸方位はN-63°-Eを示す。床面は多少凹凸がみられる。床面上にピット等はみられないが、壁直下には幅10～16cmの周溝がめぐっている。



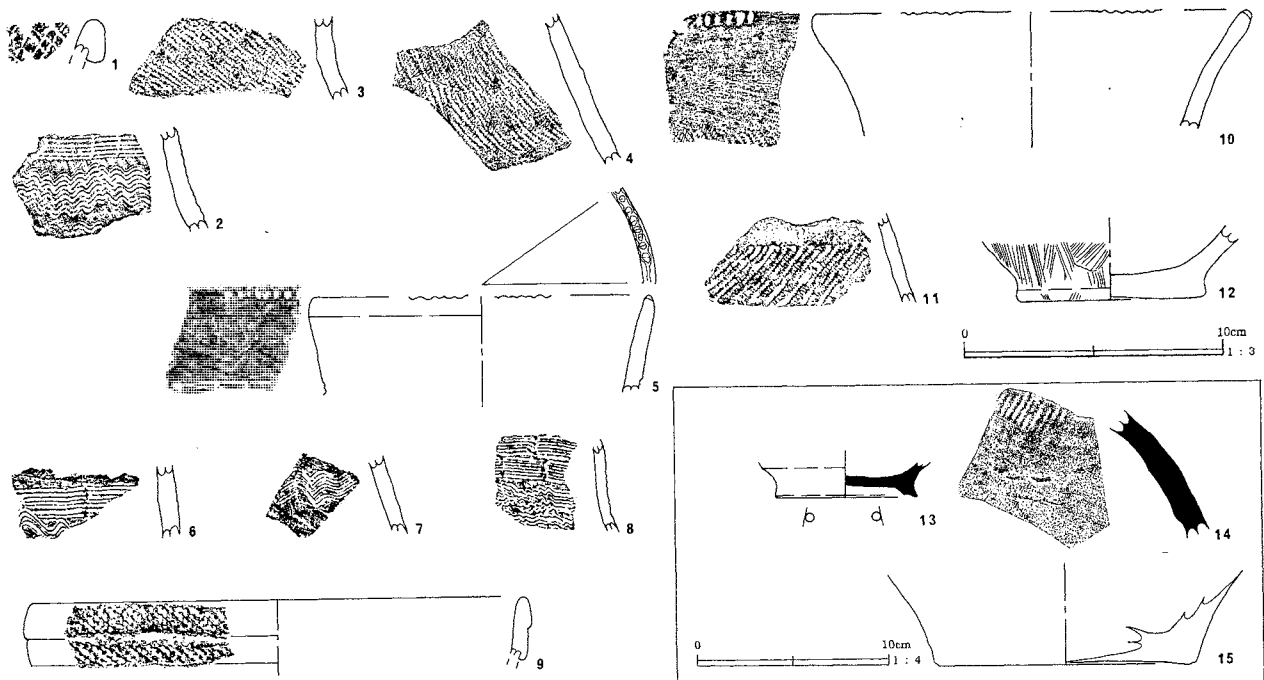
- 第5号・6号住居跡
土層説明(A-A', B-B')
- 1 灰褐色粘土。白灰色粘土ブロック・焼土ブロックを多量に含む。粘性弱く締りも弱い。
 - 2 黒褐色粘土。黒色土粒、粒子粗を主とし、ローム粒を多く含む。白色粘土も少量含む。粘性締り弱い。
 - 3 黒褐色粘土。ローム粒を多く含むが、2層より少ない。
 - 4 黒色粘土。黒色土、粒子粗いローム粒・粘土粒・焼土粒を多く含む。粘性締りやや強い。
 - 5 黒褐色粘土。黒色土粒を主とし、粒子細かい。粘性やや強く締り強い。
 - 6 暗褐色粘土。黒色土粒を少量含む。ローム粒を多量に含む。ブロックも少量含む。

0 L=25.100m 2m
1:60

第11図 第5号・6号住居跡

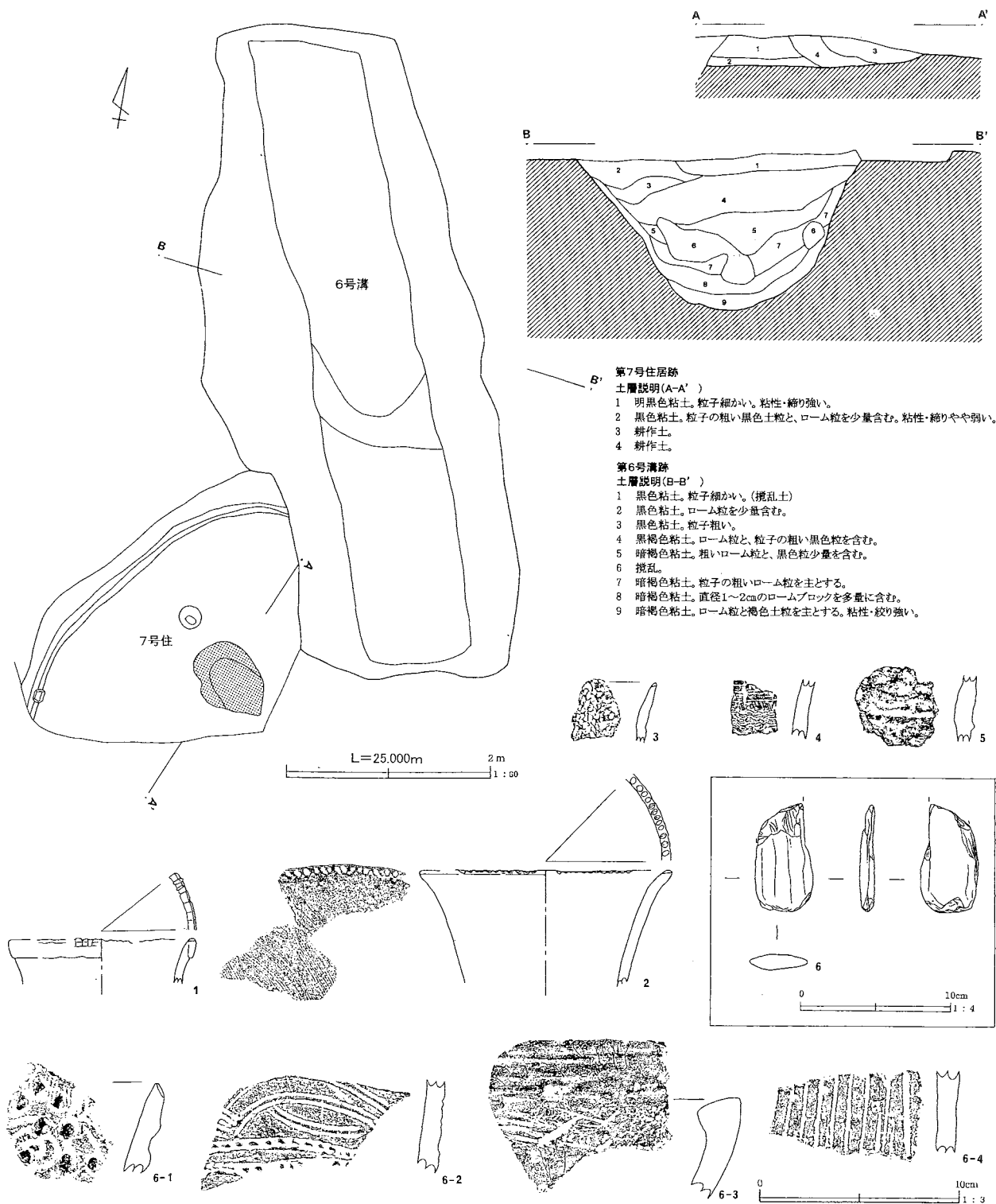
第6表 第5号住居跡出土遺物観察表(第12図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生・壺	-	-	-	N・M	B	浅黄	小片(口唇部)	外面沈線による斜格子文。
2	弥生・壺	-	-	-	I・J	B	橙	小片(頸部)	
3	弥生・壺	-	-	-	A・B・K	B	明赤褐	小片(頸部)	
4	弥生・壺	-	-	-	N・I・H	A	にぶい黄橙	小片(頸部)	
5	弥生・甕	(13.2)	-	-	A・B・C・G・I・N	B	にぶい褐	口縁部1/8	口唇部押圧不連続。
6	弥生・甕	-	-	-	N・G	B	赤褐	小片(胴部)	



第12図 第5号住居跡出土遺物

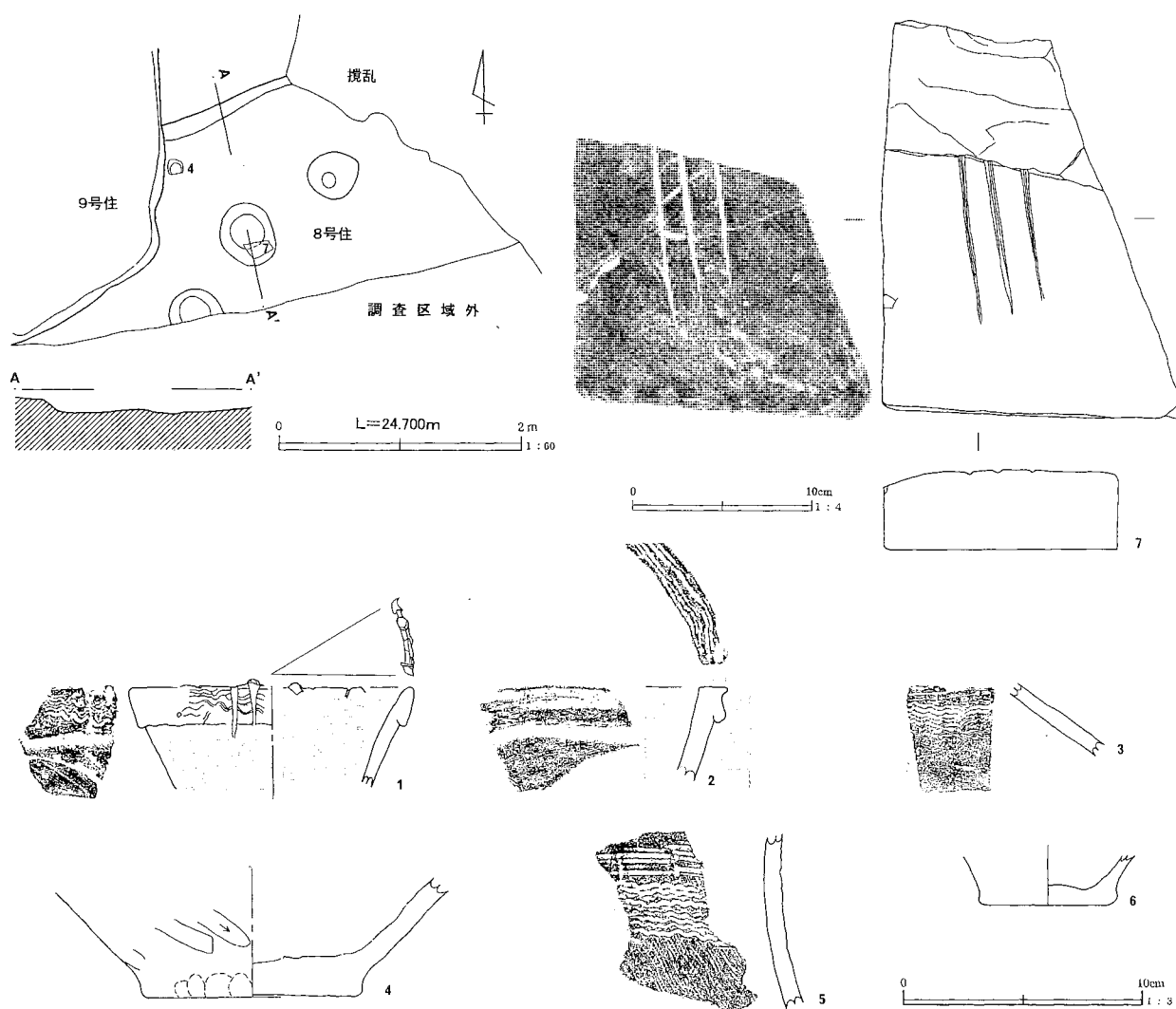
7	弥生・甕	-	-	-	I・N	B	褐	小片(胴部)	
8	弥生・甕	-	-	-	I・N・J	B	明褐	小片(胴部)	
9	弥生・甕	(19.5)	-	-	A・B・N・I	B	橙	口縁部1/8	内外面煤付着。
10	弥生・甕	(17.4)	-	-	A・B・H・I・N	B	灰黄褐	口縁の一部	口唇部押圧不連続。内外面炭化物付着。
11	弥生・甕	-	-	-	N・A・J	B	黒褐	小片(胴部)	外面煤付着。
12	弥生・壺	-	-	7.3	A・B・E・K	B	明赤褐	底部1/2	内外面一部吸炭。
13	須恵器・高台椀	-	-	7.6	A・B・C・H・N	C	赤褐	底部のみ	焼き甘く、一部表面剥離。
14	須恵器・甕	-	-	-	A・N・I	A	灰オリーブ	破片	外面自然釉。
15	土師器・壺	-	-	(13.6)	A・B・E・H・I・K・N	C	明赤褐	底部1/3	一部吸炭。表面剥離した部分多い。



第13図 第7号住居跡出土遺物、第6号溝跡出土遺物

第7表 第7号住居跡、第6号溝跡出土遺物観察表(第13図)

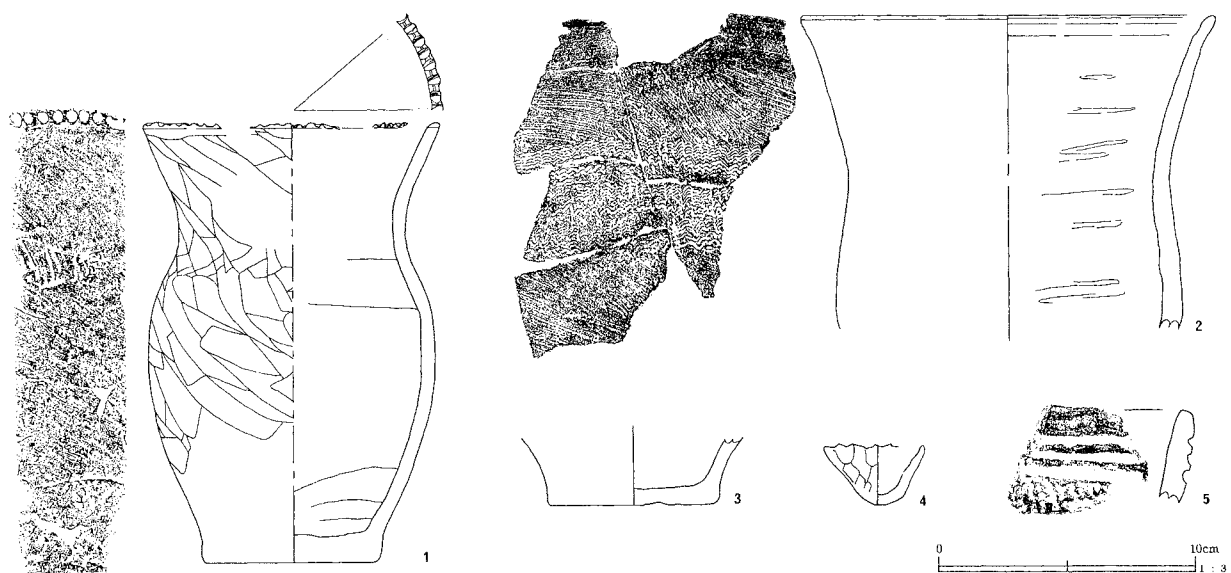
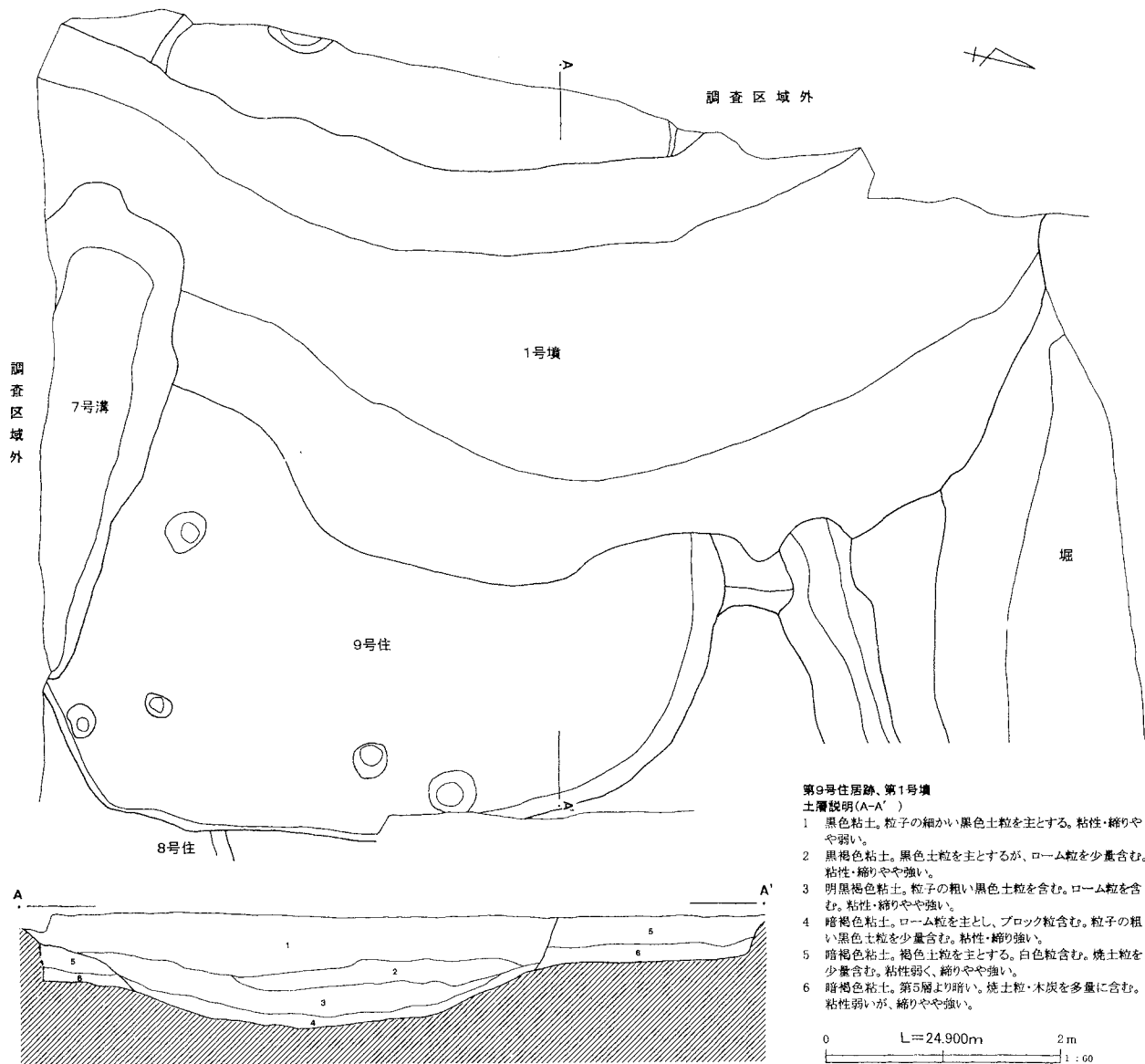
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生・壺	(9.4)	-	-	A・B・I	B	明赤褐	口縁部	内外面吸炭。
2	弥生・甕	(12.5)	-	-	A・B・E・F・I・M・N・O	B	褐	口縁部一部	全面吸炭。外面煤付着。
3	弥生・甕	-	-	-	A・B・E・N	B	橙	小片(口縁部)	
4	弥生・甕	-	-	-	B・K・N	B	にぶい黄橙	小片(胴部)	
5	縄文土器	-	-	-	A・B・D・N	B	にぶい黄褐	小片(胴部)	黒灰。
6	石斧	最大長6.7、最大幅3.8、最大厚1.0、重さ40.9g						1/2	
6-1	縄文土器	-	-	-	A・B・I	B	明黄褐	小片(口縁部)	関山。
6-2	縄文土器	-	-	-	A・B・I・J・N	B	橙	破片(胴部)	諸A。
6-3	縄文土器	-	-	-	A・B・C・I・J・N	B	明赤褐	破片(口縁部)	加曾利E。
6-4	縄文土器	-	-	-	A・B・C・E・I・N	B	明赤褐	小片(胴部)	加曾利E。



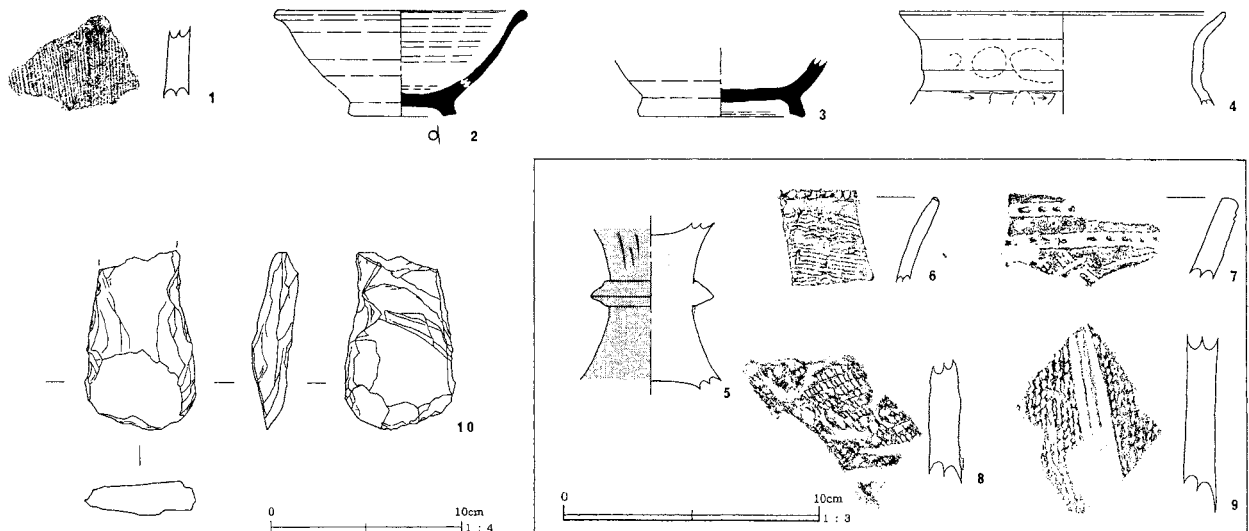
第14図 第8号住居跡出土遺物

第8表 第8号住居跡出土遺物観察表(第14図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生・壺	(12.0)	-	-	A・B・C・F・I・M・N	B	橙	口縁一部	口唇の一部刻み目。口縁部2条の棒状浮文。全面朱塗。
2	弥生・壺	-	-	-	A・B・C・E・I・M	B	明赤褐	小片(口縁部)	大部分表面剥離。全面朱塗。
3	弥生・壺	-	-	-	A・B・H	B	にぶい黄	小片	
4	弥生・壺	-	-	9.2	A・B・E・I・N	B	明褐	底部のみ	内面表面剥離。
5	弥生・甕	-	-	-	A・B・D・E・I	B	黒	破片	外面吸炭。煤付着。
6	弥生・甕	-	-	5.4	A・B・E・N・J		にぶい黄	底部のみ	内外面吸炭。
7	板碑使用研磨石	最大長22.0、最大幅17.0、最大厚4.4							緑泥片岩。



第15図 第9号住居跡出土遺物、第1号墳



第16図 第1号墳出土遺物

第9表 第9号住居跡出土遺物観察表(第15図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生・甕	(11.7)	17.5	7.0	A・E・I・N	B	にぶい橙	1/2	内外面一部吸炭。
2	弥生・甕	(15.9)	-	-	A・E・H・I・N	B	にぶい黄橙	口縁部1/3	内外面吸炭、外面煤付着。
3	弥生・甕	-	-	6.8	A・E・I・N	B	灰褐	底部のみ	外面吸炭。
4	手捏	(4.0)	2.4	-	A・E・B・N	B	黄橙	2/3	
5	縄文土器	-	-	-	A・B・D・E・I・J・N	B	赤褐	小片(口縁部)	加曾利E。

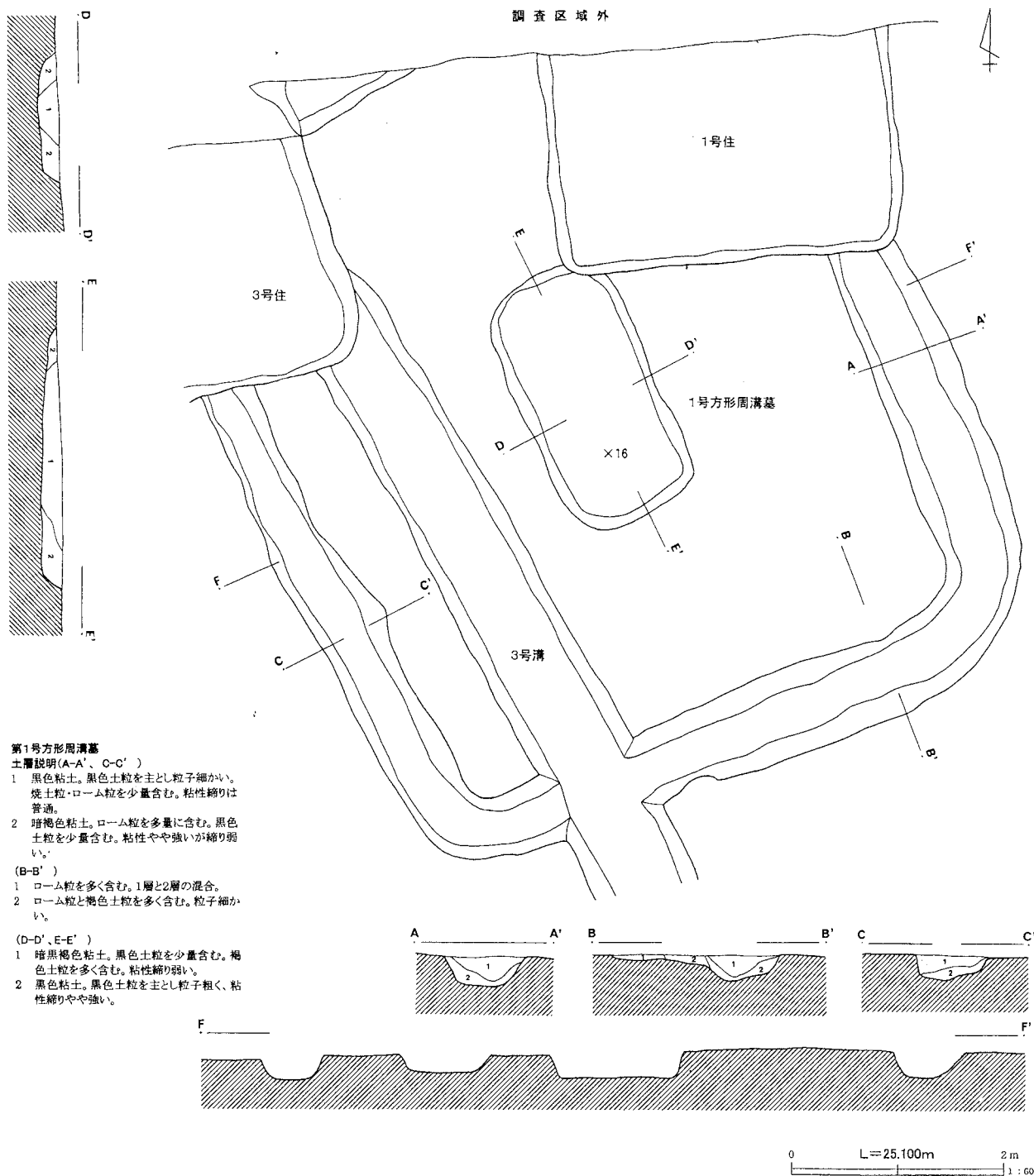
第10表 第1号墳出土遺物観察表(第16図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	円筒埴輪	-	-	-	A・E・H・N	A	橙	小片	
2	須恵器・高台椀	(13.4)	(5.7)	(5.7)	A・B・N	B	黄褐	1/5	
3	須恵器・壺	-	-	(8.9)	A・B・N	B	灰オリーブ	1/2	
4	土師器・甕	(17.3)	-	-	A・B・E・H・I・J	B	橙	口縁部1/5	外面吸炭。
5	弥生・高杯	-	-	-	A・E・G・I・J・N	B	赤褐	-	外面及び杯部内面朱塗。
6	弥生・甕	-	-	-	A・B・E・H・I・N	B	明褐	小片(口縁部)	内外面吸炭。
7	縄文土器	-	-	-	A・E・H・N	B	明赤褐	小片(口縁部)	諸A。
8	縄文土器	-	-	-	A・B・E・H・K・N	B	橙	小片	加曾利E。
9	縄文土器	-	-	-	A・B・E・H・J・N	B	にぶい黄橙	小片	加曾利E。
10	打製石斧	最大長9.4、最大幅5.8、最大厚2.0、重さ143.6g						2/3	

遺物は、ほとんど出土していない。

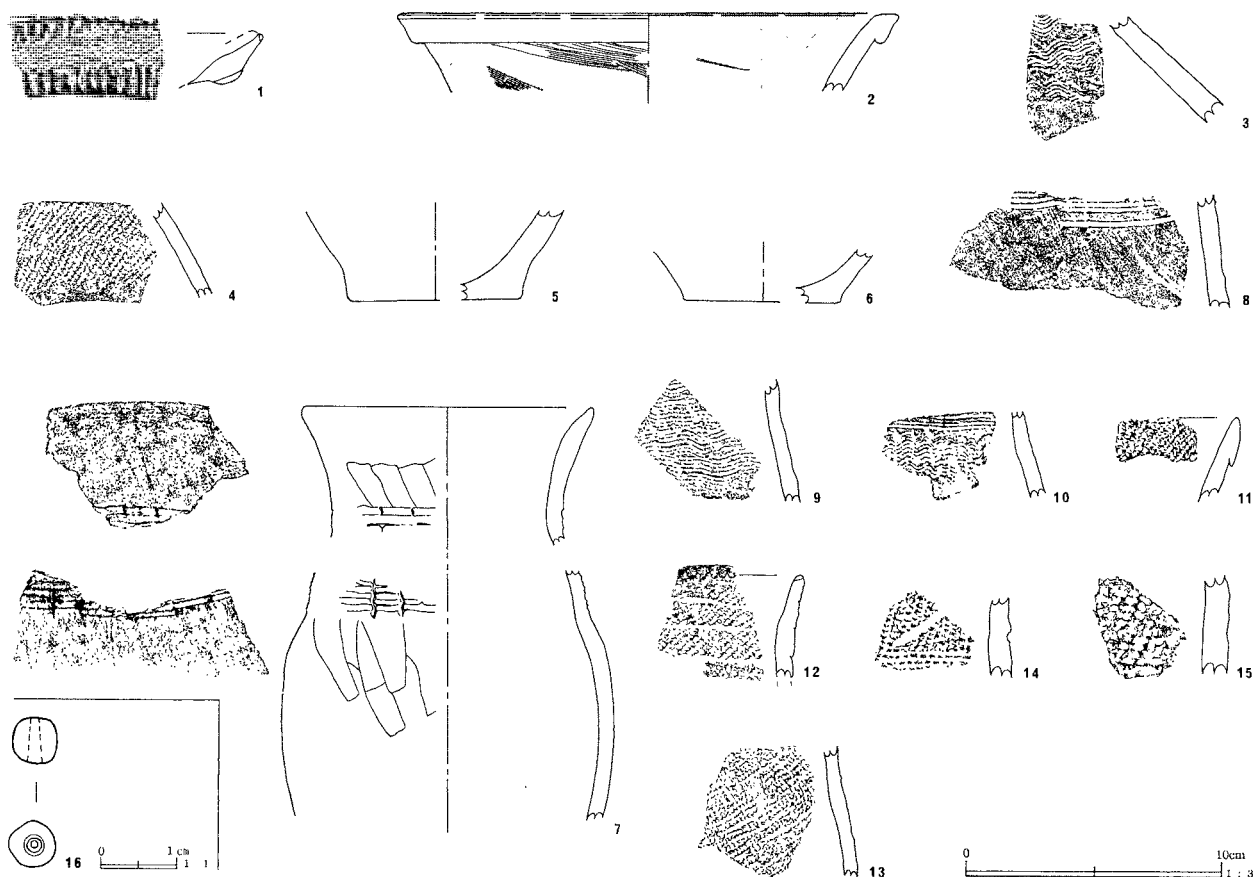
第7号住居跡(第13図) B-3区に北西部の一部がみられるが、北側を第8号溝跡に切断され、大部分は南側の調査区域外に当たる。このため、規模・形態等是不明であるが、北辺は丸味をもっており、短辺であると思われることから、全体では小判形を呈するものと推定される。やや凹凸をもつ床面上には、炉とピットがみられる。炉は、南側がやや直線的となるが、全体では長円形を呈すと思われ、径87×60cm、深さ3cmを計る。焼土は薄い、底面は焼土化が強い。ピットは、径23×21cm、深さ10cmを計る。壁直下には幅11～14cmの周溝がめぐっている。遺物は、弥生式の壺、同甕、小型の打製石斧等が出土している。

第8号住居跡(第14図) B-4区に北部の一部がみられるが、西側を第9号住居跡及び第7号溝跡に切断され、東側は攪乱を受けている。また大部分は南側の調査区域外に当たる。このため、規模・形



第17図 第1号方形周溝墓

態等是不明であるが、北辺は、直線を呈していることが知れる。床面は、やや凹凸がみられるもののほぼ水平面を成す。床面上にみられるピットは3本あるが、本住居跡に伴うものはない。3本の内、中央のものは、青石を伴っている。検出された青石は、直角よりやや広めの隅部をもつ板石塔婆の残片を利用した砥石と思われ、厚さも4.2cmに整えられたものである。住居跡に伴う遺物は、弥生式の壺、同甕が出土している。

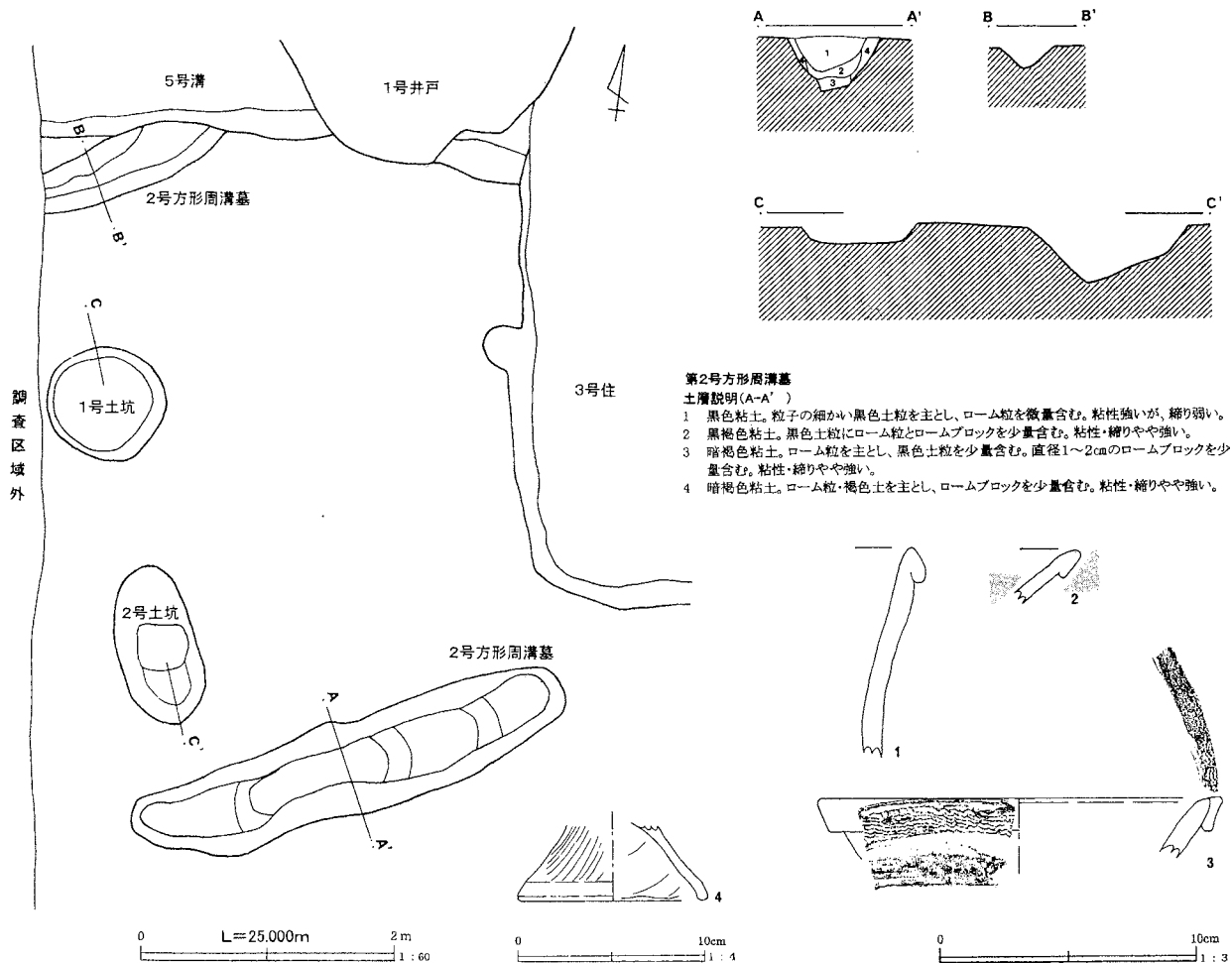


第18図 第1号方形周溝墓出土遺物

第11表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表(第18図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生・壺	-	-	-	A・B・H・I・M	B	にぶい黄橙	小片(口縁部)	貼り付け部のみ。上下端押圧。
2	弥生・壺	(20.0)	-	-	B・E・I・N	B	にぶい黄橙	口縁一部	内外面朱塗(口唇部は不明)。
3	弥生・壺	-	-	-	A・B・C・D・H・I・N	B	にぶい黄橙	小片(肩部)	外面文様帯以外朱塗。
4	弥生・壺	-	-	-	A・B・D・E・I・J	B	にぶい黄橙	小片	
5	弥生・壺	-	-	(7.0)	A・I・N	B	褐	底部1/4	外面炭化物付着。
6	弥生・甕	-	-	(6.3)	A・B・E・H・N	A	褐	底部1/6	外面炭化物付着。
7	弥生・甕	(11.6)	-	-	A・B・E・I・J・N	B	明黄褐	口縁1/5、胴1/3	内外面共炭化物付着。
8	弥生・甕	-	-	-	A・I・J・N	B	にぶい黄褐	破片(胴部)	外面炭化物付着。
9	弥生・甕	-	-	-	A・I・J・K・N	B	橙	小片(胴部)	外面一部炭化物付着。
10	弥生・甕	-	-	-	A・G・J・I	B	黒褐	小片(胴部)	全面吸炭。
11	弥生・甕	-	-	-	A・B・E	B	にぶい褐	小片(口縁部)	外面炭化物付着。
12	弥生・甕	-	-	-	A・I	B	黒褐	小片(口縁部)	全面吸炭。
13	弥生・甕	-	-	-	B・E・I・K	B	黒褐	小片(胴部)	
14	縄文土器	-	-	-	K・I・N	B	橙	小片(胴部)	諸C。
15	縄文土器	-	-	-	B・D・N	B	にぶい黄	小片(胴部)	加曾利E。
16	ガラス小玉	最大長0.6、最大幅0.6、孔径0.2、重さ0.2g							

第9号住居跡(第15図) C-4区を中心に位置している。中央を第1号墳に、南部を第7号溝跡に切断され、西隅は調査区域外に当たる。また東端部の上面には南土塁が築かれている。このため、規模・形態等は不明といわざるをえないが、西辺の西南隅および東辺の両隅は丸味をもち、さらに東辺に膨らみもみられるところから、全体では小判形を呈するとしうる。両長軸壁がやや蛇行するが、全体では東西(長軸)7.22+αm、南北(短軸)5.80mを計り、大型の住居跡である。主軸方位はN-77°-Eを示す。床面は多少凹凸が目立つ。本住居跡に伴うピットは、確認されていない。遺物は、弥生式の甕の



第19図 第2号方形周溝墓出土遺物、第1号・2号土坑

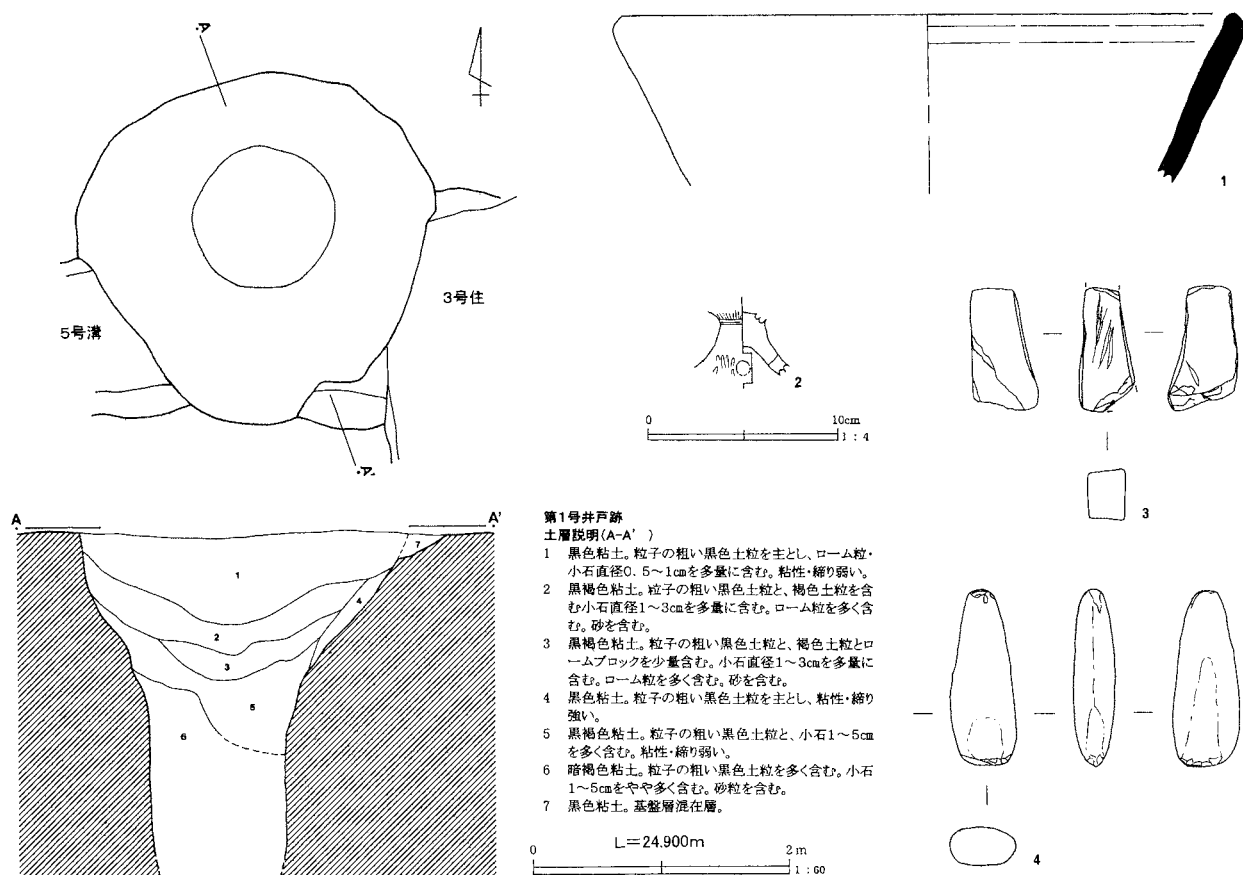
第12表 第2号方形周溝墓出土遺物観察表(第19図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生・壺	-	-	-	A・B・H・I・N	B	にぶい黄橙	破片(口縁部)	外面表面剥離。
2	弥生・壺	-	-	-	A・B・D・I・N	B	にぶい赤褐	小片(口縁部)	貼り付け口縁外面以外朱塗。
3	弥生・壺	(16.2)	-	-	A・B・G・I・J・N	B	橙	破片(口縁部)	口縁内面貼り付けの痕跡。
4	土師器・台付甕	-	-	(10.0)	A・B・E・G・I・N	B	橙	台部1/4	内外面吸炭。

他、小型の手捏土器が出土して、特徴的である。

第1号墳(第15図・第16図) C-3区からC-4区に渡って位置している。第9号住居跡を切断しているが、堀及び第7号溝跡に切断されている。東隅の一部が調査されたのみであり、主体部を含めた本体の大部分は、西側の調査区域外に残存していると思われる。推定径は8m前後を計る。周溝幅は、残存状況の良いところで見ると3.70mを計る。溝底は緩いU字形を呈し、深さは50cmを計る。遺物は、円筒埴輪片が出土している。

第1号方形周溝墓(第17図・第18図) B-1区からC-1区に渡って位置している。第1号・第3号住居跡・第4号住居跡及び第3号溝跡に切断され、北辺の大部分は北側の調査区域外に当たる。北辺



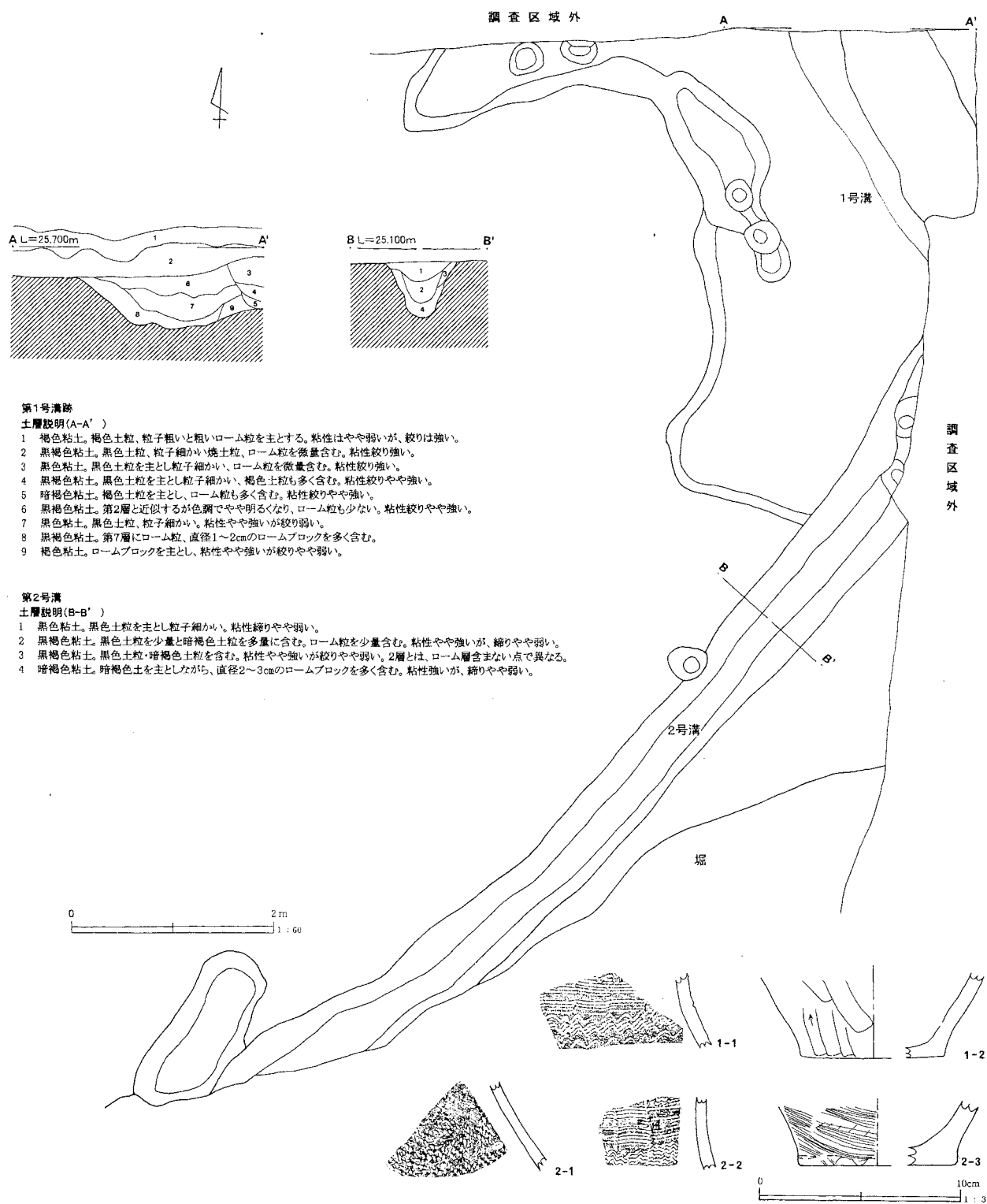
第20図 第1号井戸跡出土遺物

第13表 第1号井戸跡出土遺物観察表(第20図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・鉢	(33.4)	-	-	A・B・E・I・N	C	灰黄	口縁部1/8	
2	土師器・高杯	-	-	-	A・H・I・J・N	B	橙	高台一部	
3	砥石	最大長6.5、最大幅2.7、最大厚3.5、重さ77.0g						1/2	5面使用。
4	打製石斧	最大長9.5、最大幅3.5、最大厚2.2、重さ120.0g						完形	

が明確でないが、隅にやや丸味をもつ溝が全周するものと思われる。内径は、南北（長軸）6.73m、東西（短軸）5.57mを計り長方形を呈する。溝幅は50～80cm、深さは全体でほとんど変化がなく25cm前後を計り、断面は一部U字形を呈する部分もみられるが、概ね矩形を呈する。外径は、南北（長軸・推定）7.2m、東西（短軸）6.85mを計る。主軸方位はN-25°-Wを示す。方台部中央には、主体部と思われる隅円長方形の土坑があり、南北（長軸）2.06m、東西（短軸）0.86mを計る。底面は凹凸はほとんど見られない。南端が最も深く21cmを計るが、北に向けて直線的に傾斜して浅くなる。北端の深さは9cmである。遺物は小片が多いものの、各溝内から弥生式の壺、同甕が出土している。また主体部と思われる土坑の中央南寄り部分からは、ブルーのガラス玉が出土している。

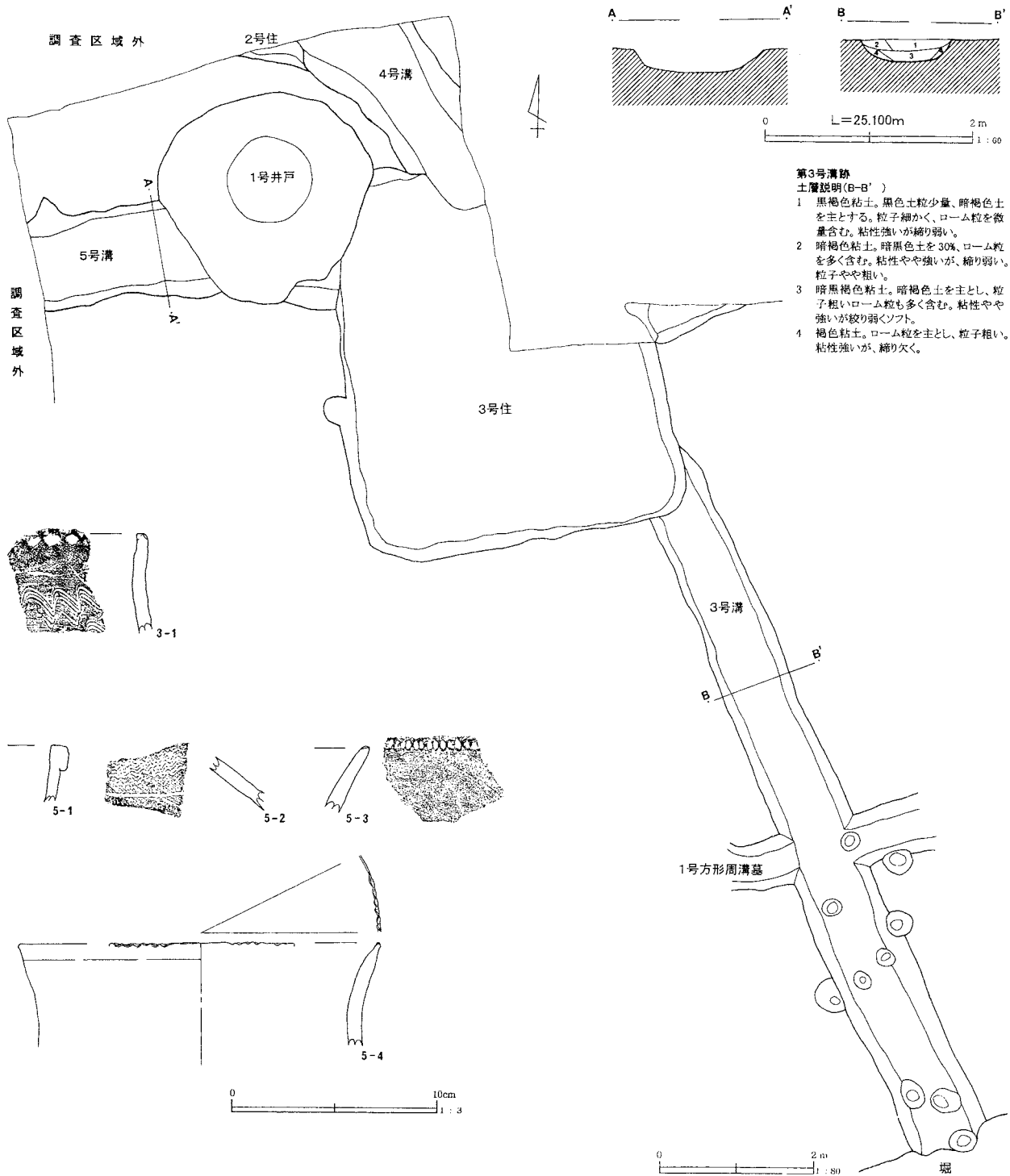
第2号方形周溝墓（第19図） C-1区からD-1区に渡って位置している。東辺は第3号住居跡、西辺は調査区域外に位置しているものと思われ、全体では四隅に陸橋をもち、4本の溝が独立して方形に囲繞する形をとるものと考えられる。直接の重複関係は、北溝が第5号溝跡に切断されているのみであ



第21図 第1号・2号溝跡・出土遺物

第14表 第1号・2号溝跡出土遺物観察表(第21図)

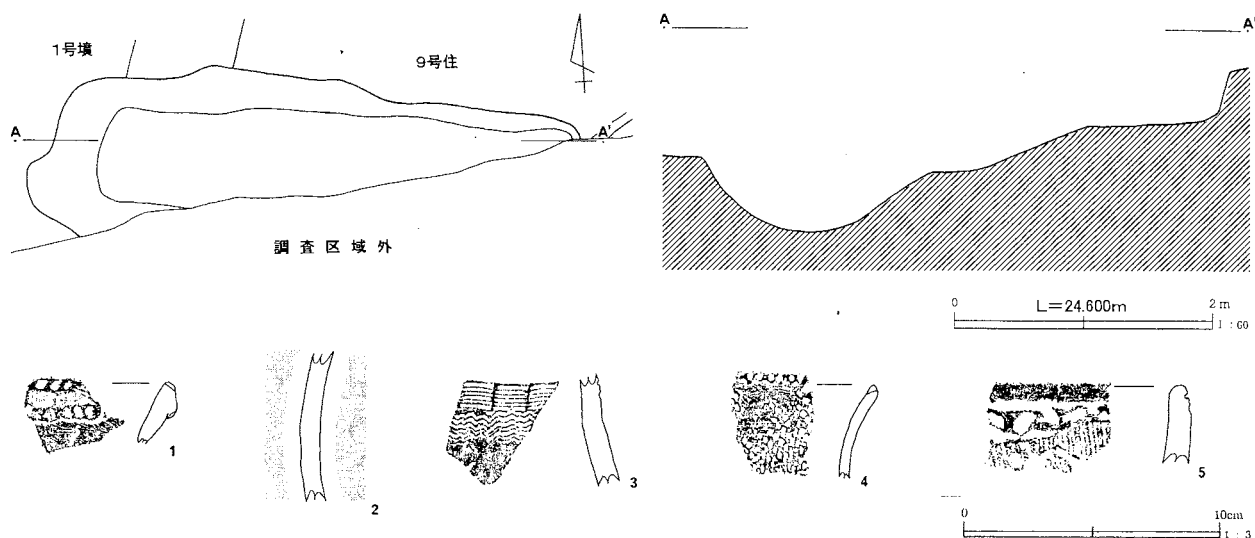
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1-1	弥生・甕	-	-	-	A・B・I・N	B	にぶい橙	小片(頸部)	内外面吸炭。
1-2	弥生・甕	-	-	(7.2)	A・E・G・I・N	B	にぶい褐	底部1/4	内面炭化物付着。
2-1	弥生・壺	-	-	-	A・B・E・I	B	にぶい橙	小片	二次加熱。
2-2	弥生・甕	-	-	-	A・B・I	A	にぶい褐	小片(胴部)	内外面吸炭。
2-3	弥生・甕	-	-	(8.2)	A・B・I・H・N	B	褐	底部1/4	内外面炭化物付着。



第22図 第3号溝跡出土遺物、第4号溝跡、第5号溝跡出土遺物

第15表 第3号・5号溝跡出土遺物観察表(第22図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
3-1	弥生・甕	-	-	-	A・B・E・I・N	B	灰褐	小片(口縁部)	口唇部押捺。外面内面口唇部吸炭。
5-1	弥生・壺	-	-	-	A・B・I・N	B	にぶい褐	小片(口縁部)	両面に渡って煤付着。
5-2	弥生・壺	-	-	-	A・B・C・H	B	にぶい黄褐	小片	
5-3	弥生・甕	-	-	-	A・C・H・N	B	にぶい赤褐	小片(口縁部)	両面吸炭。
5-4	弥生・甕	(17.7)	-	-	A・B・C・I	B	明黄褐	小片(口縁部)	口唇部押圧連続せず。



第23図 第7号溝跡出土遺物

第16表 第7号溝跡出土遺物観察表(第23図)

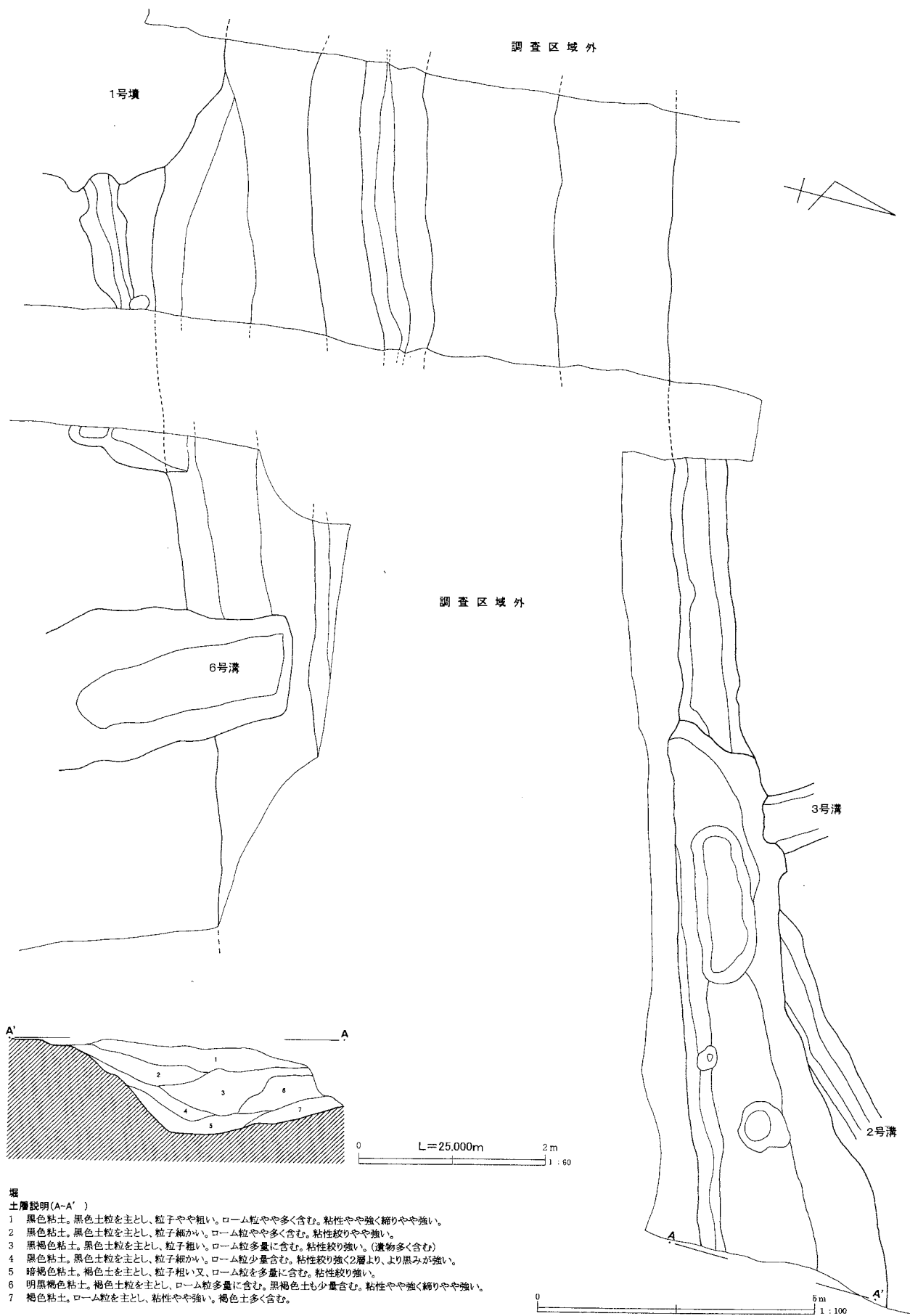
No.	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	弥生・壺	-	-	-	A・B・F・N	B	明赤褐	小片(口縁部)	
2	弥生・壺	-	-	-	A・B・F・I・K・N	B	明赤褐	破片(頸部)	内外面朱塗。
3	弥生・甕	-	-	-	A・B・N	B	明赤褐	小片	
4	弥生・甕	-	-	-	A・B・N	B	橙	小片(口縁部)	
5	縄文土器	-	-	-	A・B・I・N	B	にぶい黄褐	小片(口縁部)	曾利。

る。規模が知れるのは南北間のみであり、内径4.60m、外径5.80mを計る。主軸方位はN-30°-Wを示す。南溝は、長さ3.65m、幅0.81mを計る。底面は、中央に向けて角度を変えて落ち込み、最深部はやや西寄りにあって43cmを計る。北溝は、最大幅50cm、深さ22cmが知れるのみである。方台部に位置する2基の土坑は、近世の所産であり、本周溝墓に伴うものではない。遺物は、溝内から弥生式の壺片がわずかに出土したに過ぎない。

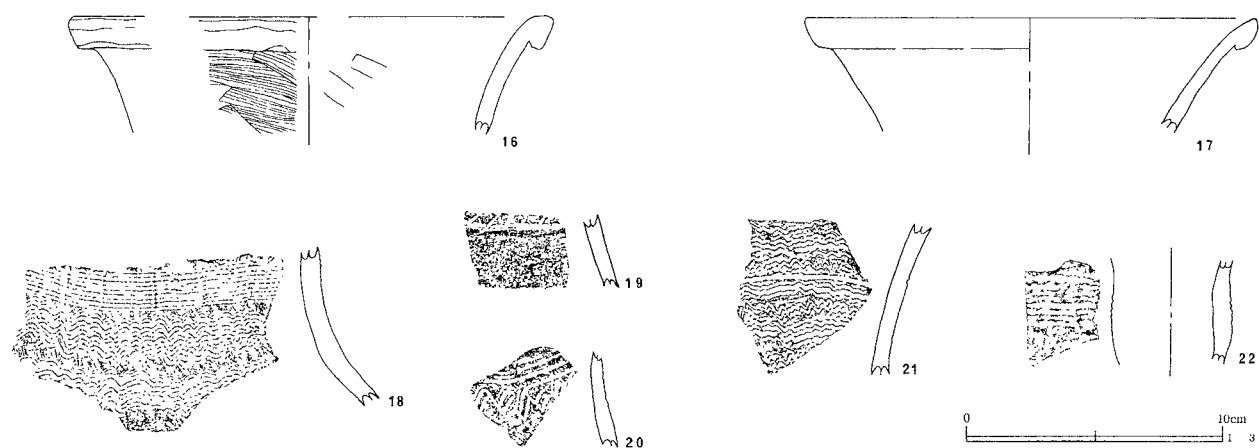
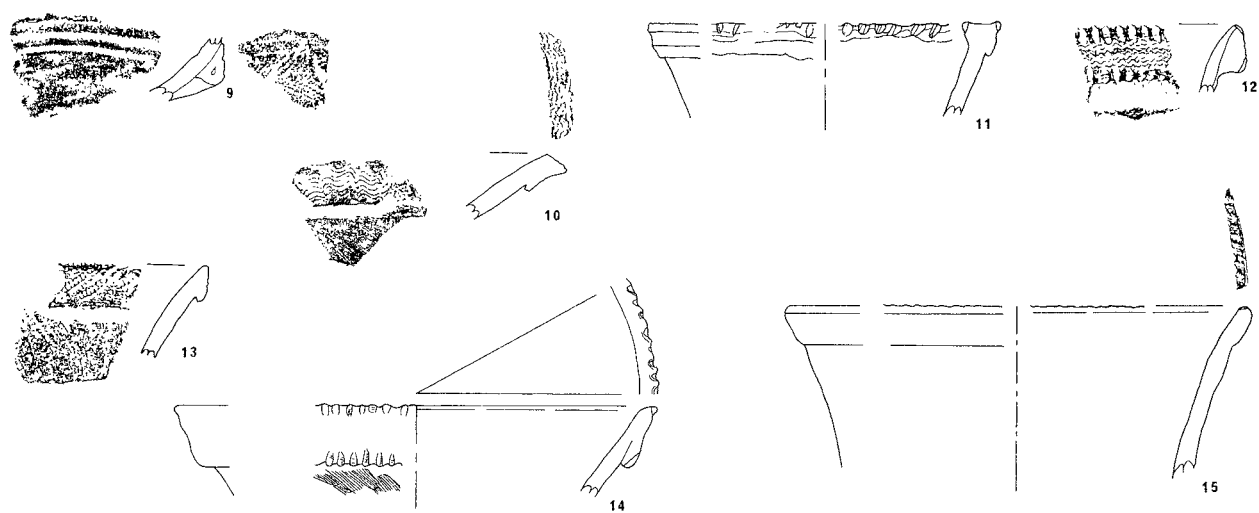
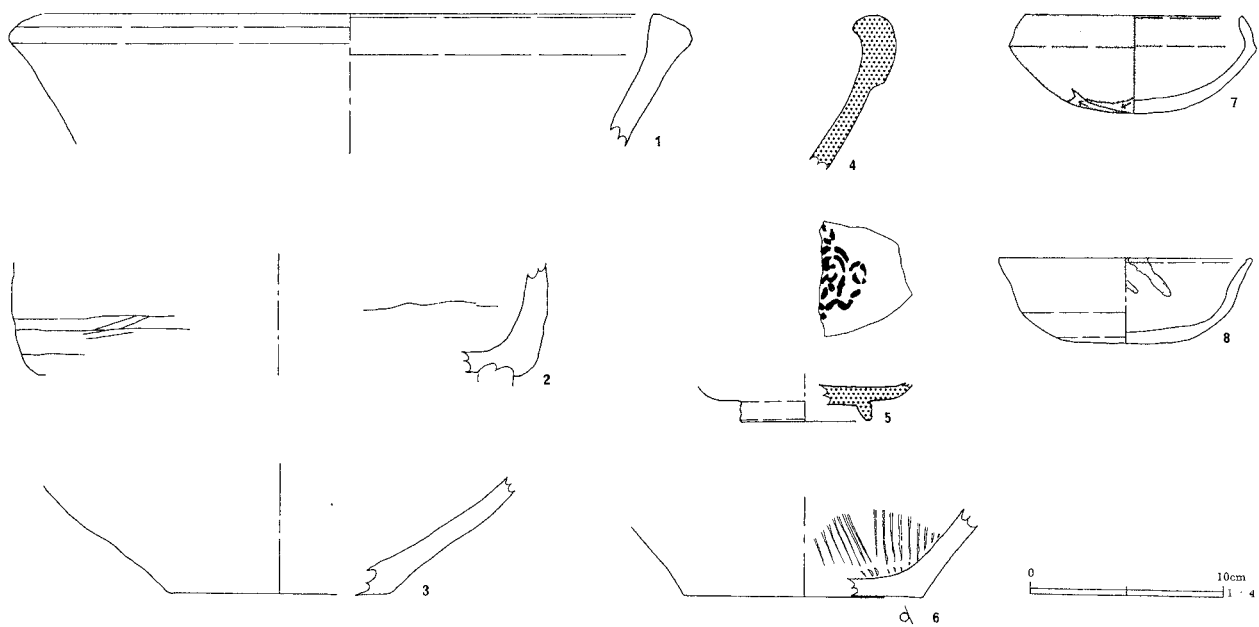
第1号井戸跡(第20図) C-1区からD-1区に渡って位置している。第3号住居跡及び第5号溝跡を切断している。平面形は、不整ではあるがほぼ円形を呈し、径2.80m前後を計る。断面形は、深さ110cmまで緩傾斜であるが、以下はほぼ垂直に掘り込まれており、全体で漏斗形を呈している。垂直部分は円形を呈し、径1.10m前後を計る。深さ2.70mまで調査されているが、以下は未調査である。覆土中特に小礫を多く含んでいる。本遺構に伴う遺物は出土していない。

溝跡(第21図・第22図・第13図・第23図) 溝跡は、7条検出されている。しかし、切断されたり調査区域外に延伸したりして、全容の知れるものはない。

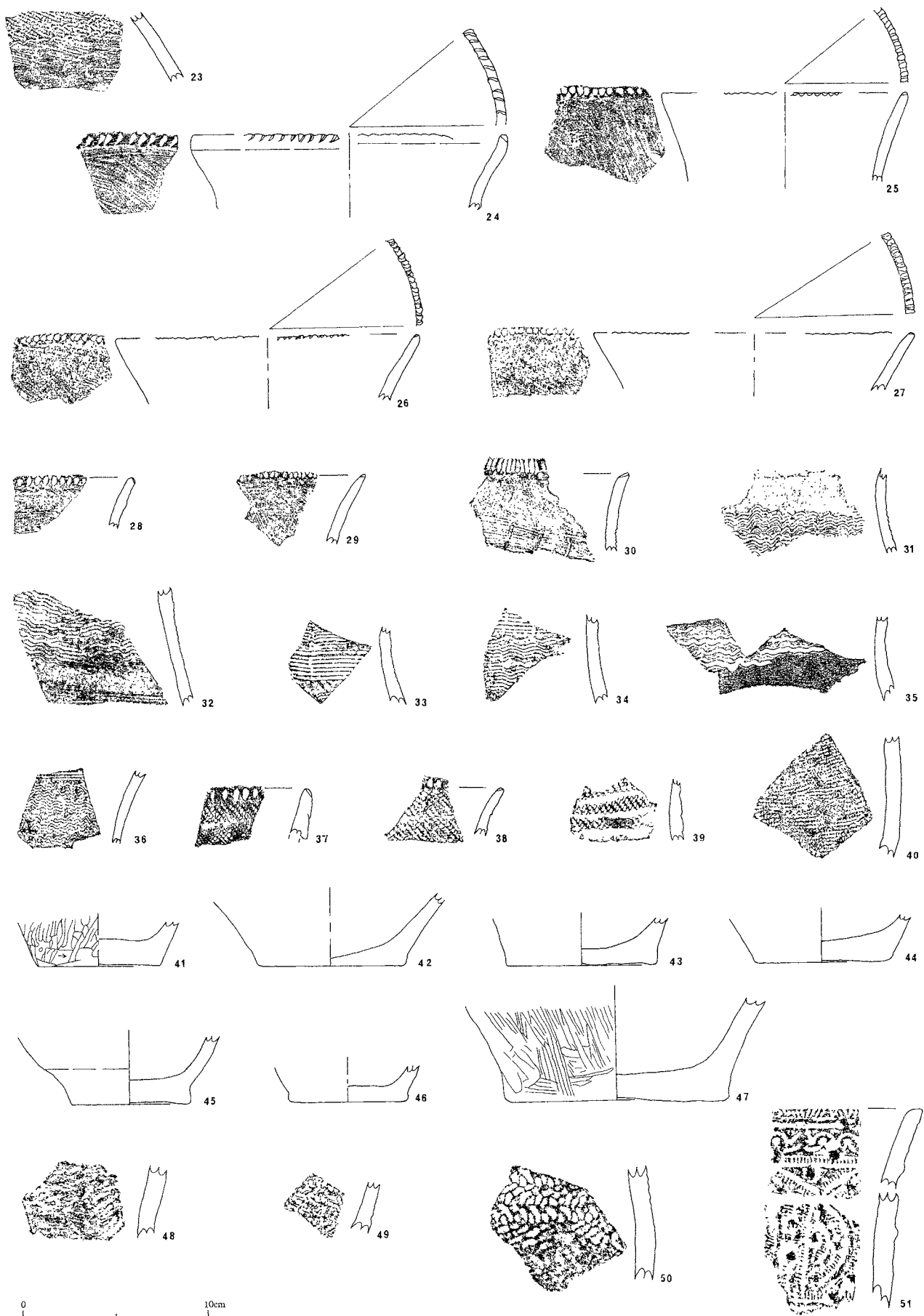
第1号溝跡(第21図) B-1区に一部がみられるが、覆土上から第2号溝跡に切断され、大部分は東側及び北側の調査区域外に当たる。規模・形態共に不明であるが、残存部の深さは50cm、幅は180cm以上であることが知れる。遺物は、弥生式の甕片がわずかに出土したに過ぎない。

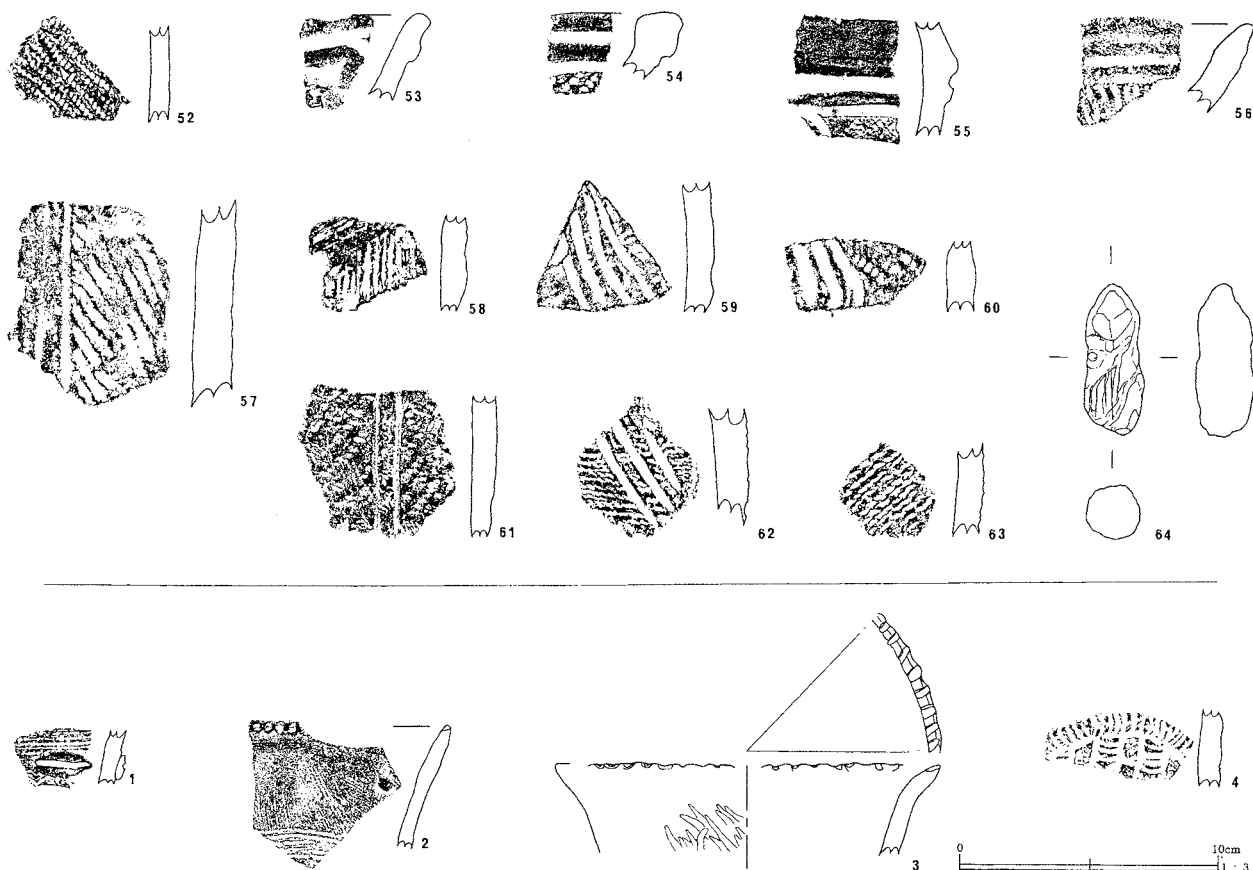


第24図 堀



第25図 掘出土遺物 (1)





第27図 堀出土遺物（3）

第17表 堀出土遺物観察表(第25、26、27図)

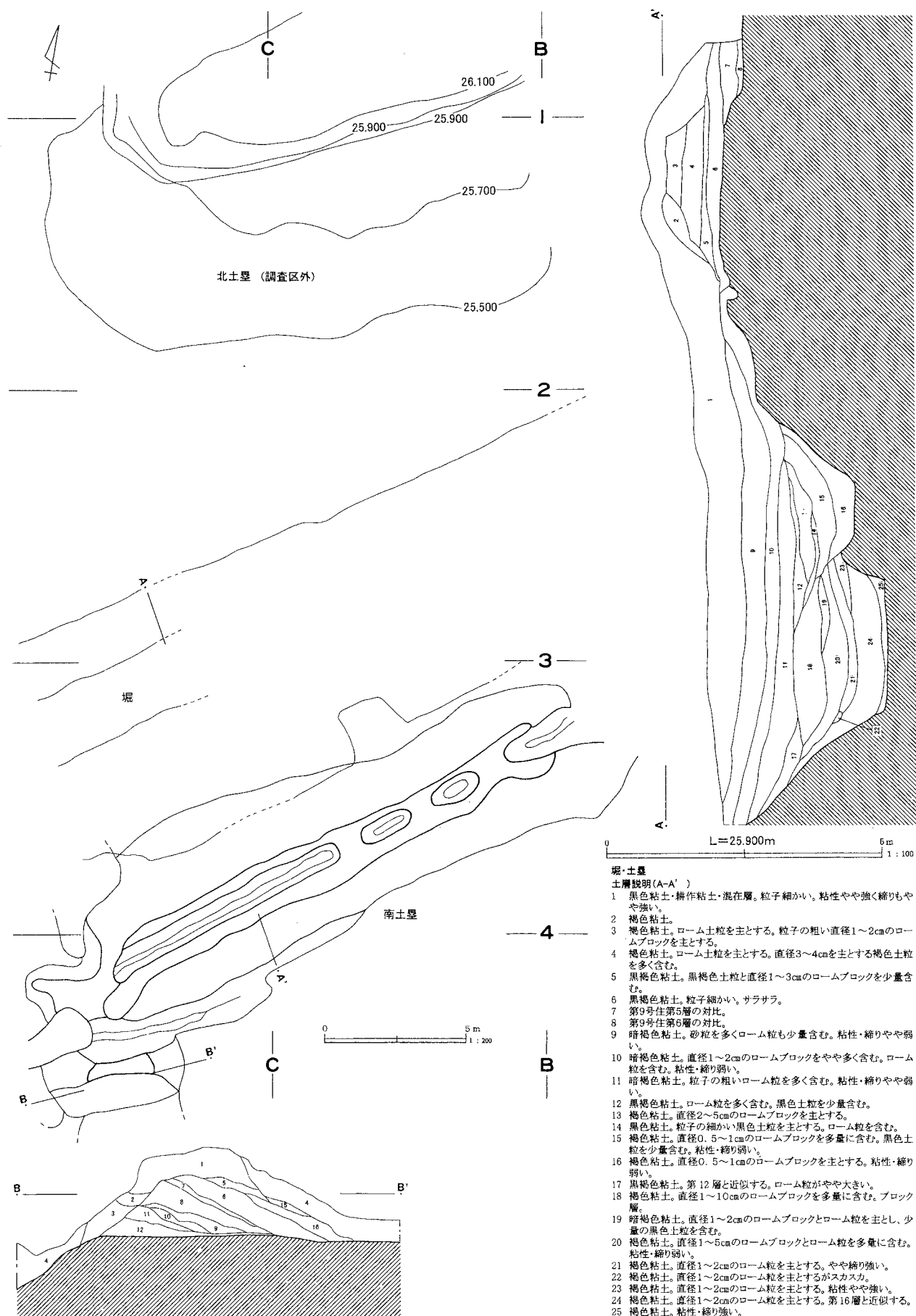
No.	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	焙烙	(36.0)	-	-	B・E・H・J・N	B	黄橙	1/12	
2	台付焙烙	-	-	(25.4)	A・B・E・I・N	B	橙	底部1/6(台部欠)	
3	常滑・壺	-	-	(11.5)	A・B・E・H・N	B	赤褐	底部一部	
4	陶器・鉢	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	破片(口縁部)	
5	陶器・高台椀	-	-	(7.2)	-	-	灰白	底部1/2	灰釉、内面底鉄釉絵。
6	常滑・擂鉢	-	-	(12.6)	A・B・E・N	B	明赤褐	底部1/4	
7	土師器・杯	(11.6)	5.2	-	A・B・I・N	B	明赤褐	3/4	朱泥。
8	土師器・杯	(13.4)	4.6	-	A・B・E	B	にぶい橙	2/3	内面口唇部の一部にタール付着。
9	弥生・壺	-	-	-	A・C・N	B	橙	小片(口縁部)	
10	弥生・壺	-	-	-	A・I・G・N	B	橙	小片(口縁部)	内外面文様帯以外朱塗。
11	弥生・壺	(13.8)	-	-	A・B・H・I・K・N	B	橙	口縁部1/8	外面押圧後横のナデ。
12	弥生・壺	-	-	-	A・E・I・G・N	B	にぶい褐	小片(口縁部)	
13	弥生・壺	-	-	-	B・D・H・I・N・O	B	にぶい赤褐	小片(口縁部)	内面炭化物付着。
14	弥生・壺	(19.1)	-	-	A・B・D・E・I・N	B	橙	口縁部1/10	口縁部外面表面剥離。
15	弥生・壺	(18.2)	-	-	B・C・I・N	B	にぶい黄橙	口縁部1/8	外面一部煤付着。
16	弥生・壺	(19.2)	-	-	A・E・K・N	B	橙	口縁部1/8	
17	弥生・壺	(17.8)	-	-	A・D・H・I・K・N	B	赤褐	口縁部1/8	
18	弥生・壺	-	-	-	B・E・J	B	明黄褐	破片(頸部)	内面頸部及び外面文様帯以外朱塗。
19	弥生・壺	-	-	-	A・C・E・K・N	B	橙	小片(肩部)	外面文様帯以外朱塗。
20	弥生・壺	-	-	-	A・B・E・I・N	B	橙	小片(頸部)	
21	弥生・甕	-	-	-	A・B・H・I・K・N	B	にぶい黄橙	破片	
22	弥生・甕	-	-	-	A・B・K	B	にぶい黄橙	小片(頸部)	
23	弥生・壺	-	-	-	H・K・O	B	橙	小片(肩部)	
24	弥生・甕	(17.6)	-	-	A・B・C・I・N・M	B	にぶい褐	口縁部1/9	
25	弥生・甕	(13.4)	-	-	A・B・D・I・M	B	褐	口縁部1/8	外面煤付着。
26	弥生・甕	(16.1)	-	-	A・B・D・H・N	B	灰褐	口縁部1/9	外面炭化物付着。
27	弥生・甕	(17.4)	-	-	A・H・I・N	B	明黄褐	口縁部1/10	内外面吸炭。
28	弥生・甕	-	-	-	A・B・C・E・I・N	B	にぶい黄褐	小片(口縁部)	内外面吸炭。
29	弥生・甕	-	-	-	A・B・C・I	B	にぶい黄橙	小片(口縁部)	内面吸炭。

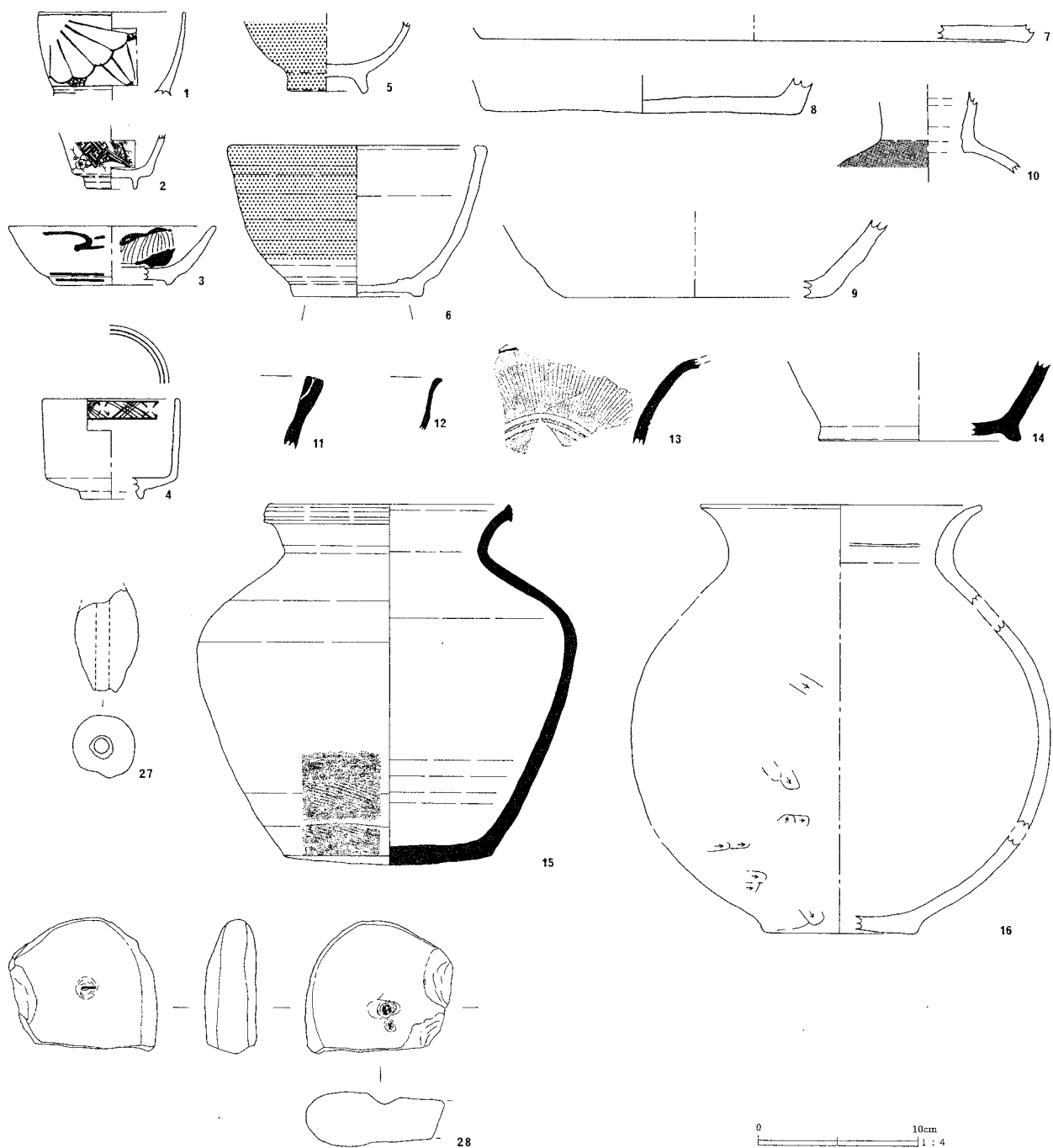
30	弥生・甕	-	-	-	A・B・I・J・N	B	黒褐	小片(口縁部)	内外面吸炭。
31	弥生・甕	-	-	-	A・B・F・I・J・O・N	B	にぶい黄褐	小片	外面吸炭。
32	弥生・甕	-	-	-	A・E・H・I・N	B	にぶい赤褐	破片(胴部)	外面吸炭。
33	弥生・甕	-	-	-	A・B・E・N	B	黒褐	小片(胴部)	外面煤付着。
34	弥生・甕	-	-	-	A・E・I・N	B	にぶい褐	破片(胴部)	外面煤付着。
35	弥生・甕	-	-	-	B・C・I・M	B	にぶい黄橙	破片	
36	弥生・甕	-	-	-	A・B・E・H・N	B	にぶい黄橙	小片	
37	弥生・甕	-	-	-	A・E・H	B	灰黄褐	小片(口縁部)	
38	弥生・甕	-	-	-	A・E・H・K・N	B	黒褐	小片(口縁部)	内外面吸炭。
39	弥生・甕	-	-	-	A・B・C・E	B	にぶい黄橙	小片	内面一部炭化物付着。
40	弥生・甕	-	-	-	A・E・K・N	B	にぶい黄橙	破片	外面一部炭化物付着。
41	弥生・壺	-	-	6. 2	A・K・H	B	にぶい黄褐	底部一部欠	内外面吸炭。
42	弥生・壺	-	-	(8. 0)	A・B・C・H・I・N	B	橙	底部1/2	
43	弥生・甕	-	-	8. 2	A・B・E・H・I・K・N	B	にぶい橙	底部2/3	内面一部炭化物付着。
44	弥生・甕	-	-	7. 0	A・B・E・G・I	B	橙	底部のみ	外面吸炭。
45	弥生・甕	-	-	6. 4	A・B・C・N	B	明赤褐	底部3/4	内底面吸炭二次加熱。
46	弥生・甕	-	-	6. 4	A・B・C・I・N	B	明赤褐	底部3/4	
47	弥生・壺	-	-	12. 2	A・B・C・I・N	B	にぶい赤褐	底部4/5	剥離した部分多。
48	縄文土器	-	-	-	A・B・D・E・N	B	橙	小片	黒浜。
49	縄文土器	-	-	-	A・B	B	にぶい黄褐	小片	黒浜。
50	縄文土器	-	-	-	A・B・D・E・N	B	褐	破片	黒浜。
51	縄文土器	-	-	-	A・C・I・N・O	B	明黄褐	破片(口縁部)	関山。
52	縄文土器	-	-	-	A・B・I・N・D	B	橙	小片(胴部)	諸A。
53	縄文土器	-	-	-	A・E・I・N	B	褐灰	小片(口縁部)	加曽利E。
54	縄文土器	-	-	-	A・E・I・N	B	灰	小片(口縁部)	加曽利E。
55	縄文土器	-	-	-	A・E・I・N	B	にぶい橙	小片(胴部)	加曽利E。
56	縄文土器	-	-	-	A・B・E・I・N	B	灰褐	小片(口縁部)	加曽利E。
57	縄文土器	-	-	-	A・B・D・E・K・N	B	明黄褐	破片	加曽利E。
58	縄文土器	-	-	-	A・B・D・E・H・N	B	橙	小片(胴部)	加曽利E。
59	縄文土器	-	-	-	A・B・E・H・K・N	B	橙	小片(胴部)	加曽利E。
60	縄文土器	-	-	-	A・B・E・H・M・N	B	明褐	小片(胴部)	加曽利E。
61	縄文土器	-	-	-	A・B・H・K・N	B	橙	破片(胴部)	加曽利E。
62	縄文土器	-	-	-	A・B・N	B	橙	小片(胴部)	加曽利E。
63	縄文土器	-	-	-	A・B・N	C	明赤褐	小片(胴部)	加曽利E。
64	土製品	-	-	-	A・B・I・N	B	明黄褐	完形	
1	弥生・壺	-	-	-	A・B・D・G・N	B	赤褐	小片	内面剥離。
2	弥生・甕	-	-	-	C・D・E・I	B	橙	小片(口縁部)	
3	弥生・甕	(15. 2)	-	-	A・B・E・I・J・N	B	黄褐	口縁部1/8	内外面吸炭。
4	縄文土器	-	-	-	A・E・I・J・N	B	にぶい褐	小片(胴部)	内外面吸炭。

第2号溝跡(第21図) B-1区、-2区、C-2区に渡って、B-2区内では堀に、B-1区内ではいったん調査区域外に出るものの、大きく弧を描いて広がる(第1号溝を切断)。しかし堀に北接(堀によって切断されている)するC-2区中央部から西へは延伸していない。長さ22m以上、幅65～83cmを計る。断面はV字形を呈し、深さは55cmを測る。遺物は、弥生式の壺片及び同甕片がわずかに出土したに過ぎない。

第3号溝跡(第22図) B-2区からC-1区に渡って位置し、南側を堀に切断され、北側は調査区域外に延伸している。第1号方形周溝墓及び第3号住居跡を切断している。長さ10m以上、幅84～106cmを計る。断面は緩い矩形を呈し、深さは22～25cmを計る。遺物は、弥生式の甕片がわずかに出土したのみである。

第4号溝跡(第22図) C-1区に位置し、南北両側は調査区域外に当たる。第2号及び第3号住居跡を切断している。幅108～132cmを計る。断面は緩い矩形を呈し、底面の一部がU字形に深まる特徴を持つ。深さは25～30cm、U字形の深まりで42～45cmを計る。不明確ではあるが、覆土と形態の共通性から、第3号溝跡と連続する可能性が高い。遺物は、ほとんど見られなかった。



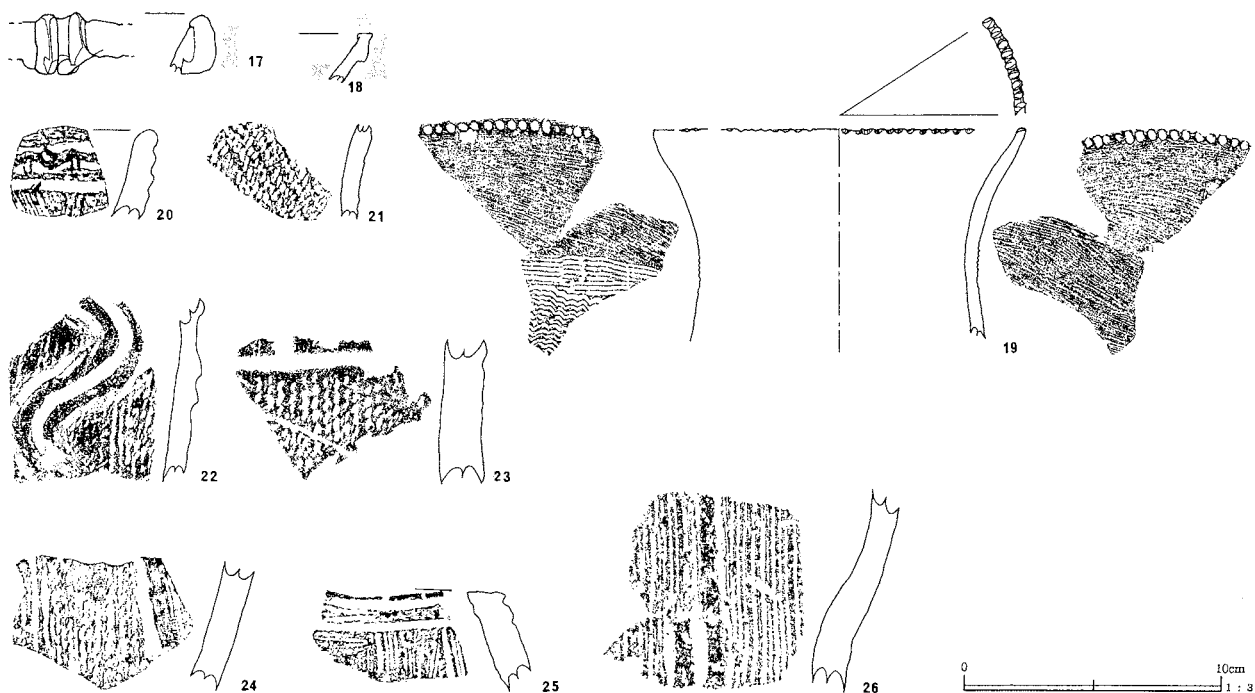


第29図 土壘出土遺物（1）

第18表 土壘出土遺物観察表(第29、30図)

No.	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	磁器・高台椀	(9.2)	-	-	-	-	灰白	1/5	藍絵付。
2	磁器・高台椀	-	-	3.0	-	-	灰白	下位のみ	
3	磁器・染付小鉢	(12.7)	3.7	(7.0)	-	-	明オリーブ灰	1/10	
4	磁器・筒椀	(8.7)	6.4	(4.0)	-	-	明緑灰	1/3	
5	陶器・椀	-	-	5.0	-	-	淡黄	下位のみ	内外面貫入全面釉。
6	陶器・鉢	15.4	9.7	8.1	-	-	明黄褐	3/4	内面全面、外面底部以外黄褐釉。
7	焙烙	-	-	(34.4)	A・B・E・G・I	B	黒褐	底部1/10	
8	瓦器・壺	-	-	(20.0)	A・B・C・D・E・I・N	B	黄褐	底部1/5	
9	常滑・甕	-	-	(16.5)	A・B・E	A	にぶい赤褐	底部1/6	

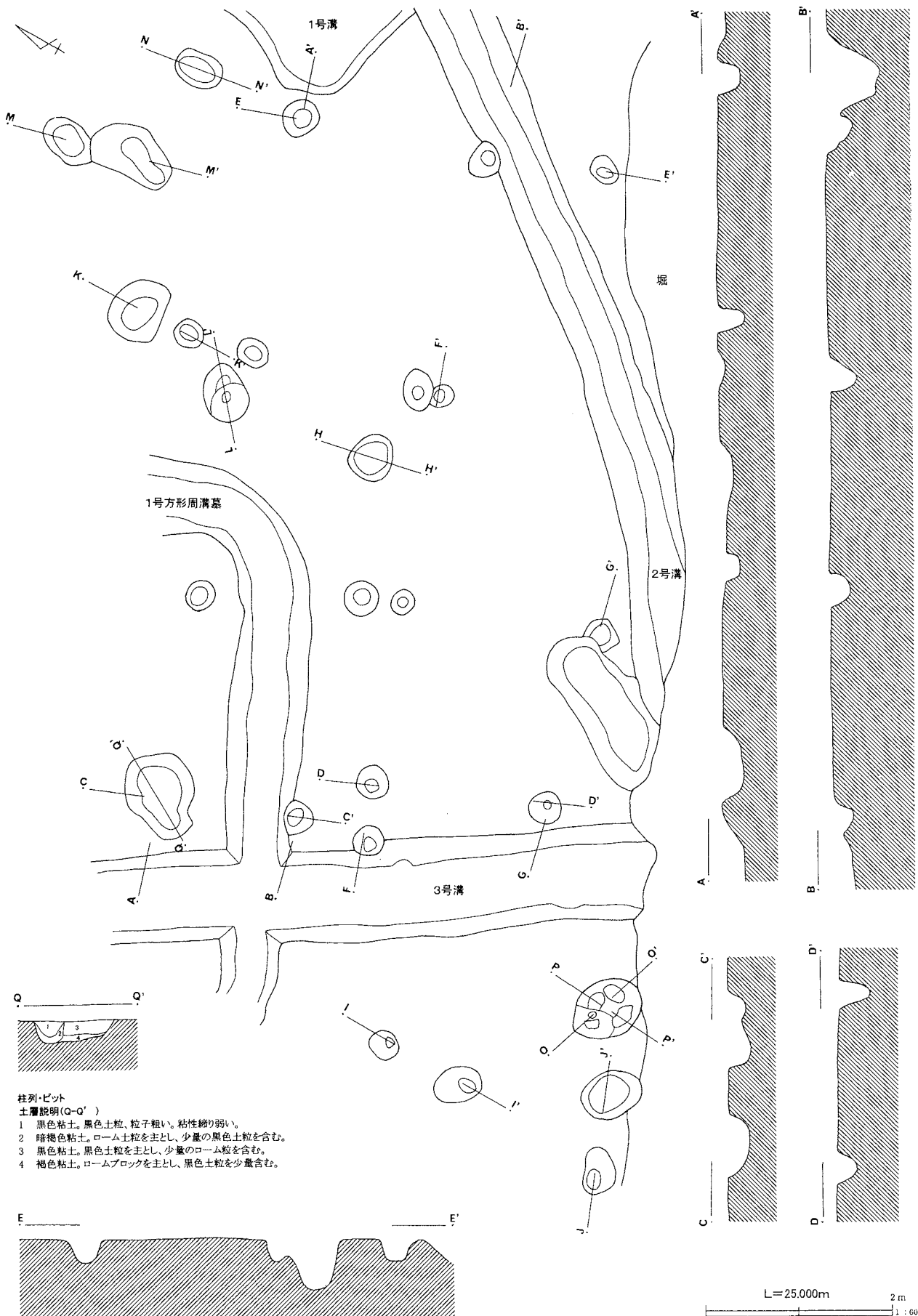
10	灰釉・壺	-	-	-	A・B	A	灰オリーブ	頸部1/3	
11	須恵器・片I	-	-	-	A・B・N	B	灰オリーブ	小片(口縁部)	
12	須恵器・杯	-	-	-	A・C・F	B	浅黄	小片(口縁部)	
13	須恵器・壺	-	-	-	A・B・N	A	黒	破片(頸部)	
14	須恵器・壺	-	-	(12. 8)	A・I・L	A	暗灰黄	底部	
15	須恵器・短頸壺	15. 2	22. 9	13. 2	A・B・F・N	A	灰	4/5	
16	土師器・甕	(17. 9)	(27. 1)	(9. 8)	A・B・D・I	B	赤褐	1/5(一部未接合)	
17	弥生・壺	-	-	-	A・B・D・I・N	B	橙	小片(口縁部)	内面朱塗。
18	弥生・壺	-	-	-	A・C・I・N	A	明黄褐	小片(口縁部)	貼り付け口縁以外内外面朱塗。
19	弥生・甕	(14. 8)	-	-	A・E・I・J・N	B	にぶい褐	口縁部1/6	内外面吸炭。
20	縄文土器	-	-	-	A・B・D・I	B	橙	小片(口縁部)	諸A。
21	縄文土器	-	-	-	A・B・I・H・N	B	赤褐	小片	諸A。
22	縄文土器	-	-	-	A・B・C・E・H・K・N	C	にぶい赤褐	破片	加曽利E。内外面吸炭。
23	縄文土器	-	-	-	A・D・I・J	B	にぶい黄橙	破片	加曽利E。
24	縄文土器	-	-	-	A・B・E・J	B	オリーブ黒	破片(胴部)	加曽利E。
25	縄文土器	-	-	-	A・B・E	B	浅黄橙	小片(口縁部)	加曽利E。
26	縄文土器	-	-	-	A・B・E・N	B	明赤褐	破片(胴部)	加曽利E。
27	土錘	長さ6. 4、径4. 0、孔径1. 0、重さ82. 9g						一部欠	
28	磨石	重さ350g							閃緑岩



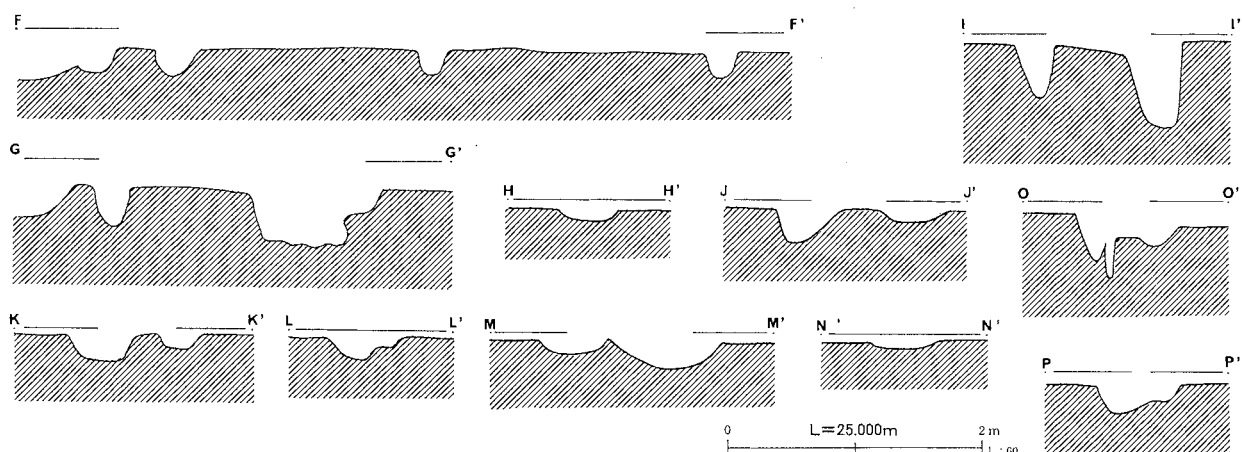
第30図 土壘出土遺物(2)

第5号溝跡(第22図) C-1区からD-1区に渡って弧を描いて位置している。東側は第3号住居跡を切断しているものの、覆土途中で存在しなくなり、西側は調査区域外に延伸している。第1号井戸跡に切断されている。幅110cm前後を計る。断面は緩い矩形を呈し、深さは22～25cmを計る。遺物は、弥生式の甕片がわずかに出土したのみである。

第6号溝跡(第13図) B-3区に位置する。南は端部を本区内に認められるが、北側は堀に切断され、堀の北側までは延伸していない。第7号住居跡を切断している。幅205～275cm前後を計る。断面は緩いU字形を呈し、深さは150cm前後を計る。遺物は、縄文式の土器片がわずかに出土したのみである。



第31図 柱列・ピット (1)



第32図 柱列・ピット（2）

第7号溝跡（第23図） C-4区に位置し、南半部は調査区域外に当たる。第9号住居跡及び第1号墳を切断している。長さは410～445cm前後を計る。断面は緩いU字形を呈し、深さは45～80cm前後を計る。遺物は、弥生式及び縄文式の土器片がわずかに出土したのみである。

堀・土塁（第24図・第25図・第26図・第27図・第28図・第29図・第30図） 南北にほぼ平行して2条の土塁が築造されている。南土塁に北接しては、これに伴う幅9mに及ぶ堀が、土塁と並行して掘削されている。

堀（第24図・第25図・第26図・第27図・第28図） B-1区、-2区、-3区からC-2区、-3区に渡って位置している。重複する全ての遺構を切断している。B-1区、-2区及びC-2区では、深掘りされた堀本体に北東部から別溝様に接する北端部を、C-2区、-3区では本体の一部を調査したにすぎず、共に大部分は東西の調査区域外に延伸している。

堀本体に北東部から別溝様に接する溝は、深掘りされた堀本体との間に切り合い関係がみられないことから、堀の一部としたものである。長さ・幅共に計測はできないが、西側に向けて幅を減ずる様相を呈している。深さは、100cm前後であるが、第3号溝と接するあたりでは深度を強め120cmを計るようになる。方位は堀本体とやや異なりN-48°-Eを示す。

堀本体は、新旧2条（新堀が南土塁に近接して掘削されている）が重複している。全体の幅は9.31mを計り、方位はN-55°-Eを示す。新旧両堀とも断面は略葉研掘りで、底面は平坦面を成している。新堀は、南土塁北底面から1.60m幅で、深さ40cmの平坦面（平坦部幅は100cm前後）をもつ。平坦面から堀底面までの深さは170cm前後を計る。新堀の上面幅7.80m、底面幅1.05mを計る。

旧堀は、南斜面を切断されているため上面の規模は不明であるが、北斜面の上位を共有しており、ほぼ同規模を示すと思われる。また土層の堆積状況から、平坦面も共有した可能性がある。平坦面から堀底面までの深さは245cm前後を計る。

遺物は、焙烙、陶器、常滑、土師器杯、弥生式・縄文式土器片が出土しているが、時期を直接示す状況にはない。

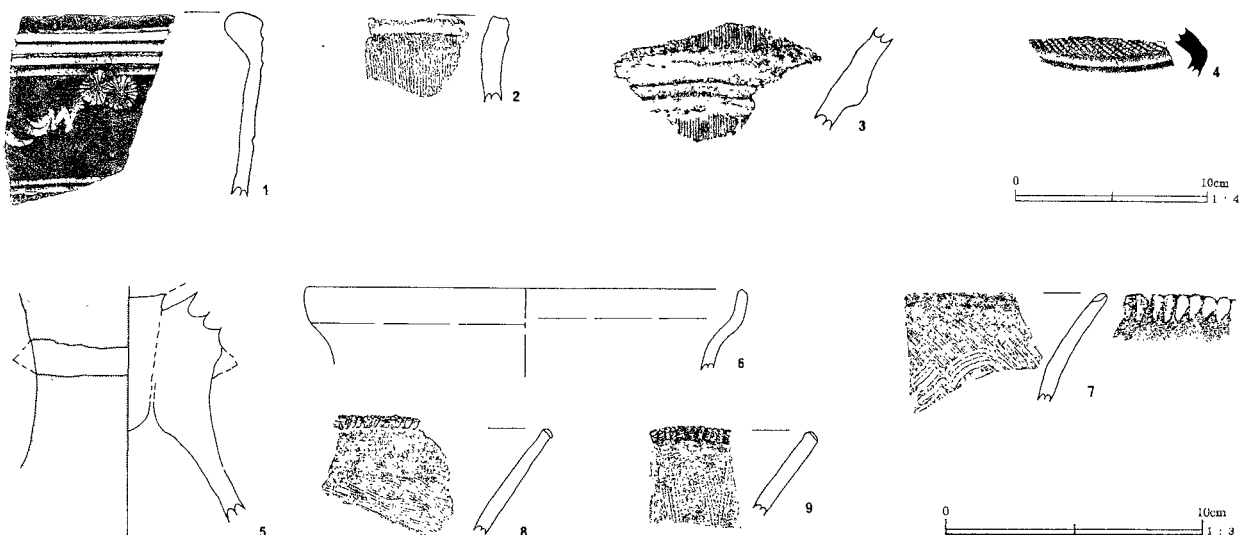


第33図 遺構外 I 出土遺物

第19表 遺構外 I 出土遺物観察表(第33図)

No.	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	陶器・杯	(10.2)	-	-	-	-	オリーブ灰	1/5	全面灰釉様(ガラス質)釉。
2	灰釉・壺	-	-	-	A・B	A	灰オリーブ	頸部・肩の一部	
3	須恵器・杯	-	-	5.2	A・D・M・N	B	にぶい黄褐	底部のみ	
4	円筒埴輪	-	-	-	A・B・E・K・N	B	赤褐	破片	
5	円筒埴輪	-	-	-	B・E・J・N	B	赤褐	破片	
6	円筒埴輪	-	-	-	A・B・J・N	B	明赤褐	破片	
7	弥生・壺	-	-	-	A・I・E	B	橙	小片(口縁)	内面丁寧なミガキ。
8	弥生・壺	-	-	-	A・B・E	B	にぶい褐	小片(胴部)	外面文様帯以外ミガキの後朱塗。

9	弥生・壺	(21.8)	-	-	A・G・I・N	B	橙	口縁部1/8	
10	弥生・壺	-	-	(6.4)	A・B・C・E・I・N	B	橙	底部1/3	
11	弥生・鉢	-	-	-	A・B・E・I・H	B	明赤褐	小片(口縁)	口唇部文様帯以外全面朱塗。
12	縄文土器	-	-	-	A・B・C・H・I	B	橙	小片(口縁)	関山。
13	縄文土器	-	-	-	A・B・E・H・K	B	橙	小片(口縁)	諸A。
14	縄文土器	-	-	-	A・B・I・H・N	B	明赤褐	小片	諸A。
15	縄文土器	-	-	-	A・B・E・H・K・N	B	にぶい黄橙	小片	加曾利E。
16	縄文土器	-	-	-	A・B・C・D・N	C	橙	小片	加曾利E。
17	縄文土器	-	-	-	A・B・H・J	B	黄灰	小片(口縁)	安行。
18	黒曜石	最大長(5.0)、最大幅2.0、最大厚0.6、重さ5.4g						ほぼ完形	
19	石鏃	最大長2.7、最大幅2.2、最大厚0.4、重さ1.4g						完形	
20	石斧	最大長(7.5)、最大幅5.7、最大厚1.7、重さ69.5g						2/3	



第34図 遺構外Ⅱ出土遺物

第20表 遺構外Ⅱ出土遺物観察表(第34図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	焙烙	-	-	-	A・C・E・N	B	黄灰	破片(口縁部)	
2	円筒埴輪	-	-	-	A・B・E・I・H・N	B	にぶい赤褐	破片	
3	胡顔形円筒埴輪	-	-	-	A・B・C・D・E・H・I・J・N	B	赤褐	破片	
4	須恵器・壺	-	-	-	A・B・D	A	灰	小片(肩口)	
5	弥生・高杯	-	-	-	A・B・C・I・N	B	にぶい黄橙	接合部のみ	外面朱塗。
6	弥生・壺	(17.4)	-	-	A・E・N	B	橙	小片(口縁)	
7	弥生・甕	-	-	-	A・D・I・N	B	にぶい黄褐	小片(口縁)	口縁部及び外面吸炭。外面炭化物付着。
8	弥生・甕	-	-	-	A・B・J・N	B	黒褐	小片(口縁)	内外面吸炭。
9	弥生・甕	-	-	-	A・B	B	黒褐	小片(口縁)	

土塁(第28図・第29図・第30図) 調査区域外に残存している北土塁は、北辺の1ライン上に位置し、C-1区内では西端をみるが東は延伸している。全体に崩れが激しく底面幅が12mにも及ぶが、本体幅は5m前後、高さは減地表面から80cm前後の規模をもっている。

南土塁は、B-3区からC-3区にかけて底面長さ22.8m、上面幅4.0m前後、幅9.6m範囲に築造されており、高さは1.45m前後を計る。そして西端に接続するように南に向かう様相を示してC-4区へと移行しているが、延伸部分は残存していない。また、調査された新旧両堀には、南曲する様相はまったくみられない。方位は北土塁がN-63°-E、南土塁がN-55°-Eを示す。南土塁は平積みで、版築等の様相はみられない。



第35図 試堀トレンチ出土遺物

第21表 試堀トレンチ出土遺物観察表(第35図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
	弥生・短頸壺	24.2	-	-	A・B・D・II・I・N	B	にぶい黄橙	口縁部、胴部1/8	

遺物は、縄文式土器から近世陶器まで混在して出土している。多くは小片であるが、C-4区の底面部分から須恵器短頸壺が出土している。土塁の時期を直接示すものはない。

柱列・ピット群（第31図） ピットは、B-1区・-2区を中心に分布しているが、このうちA-A'、B-B'、F-F'の3ラインのピットが列を成すと考えられる。いずれも4本のピットから成る。AラインはN-71°-Eの方位を示し、ピットの規模は、西から、径75cm、30cm、35cm、40cm、深さ20cm、18cm、30cm、24cm、芯々間距離は2.15m、2.74m、2.63m（全長7.52m）を計る。BとFラインの東端ピットは共通すると思われる。BラインはN-75°-E、FラインはN-70°-Eの方位を示す。このうちBラインピットの規模は、西から、径38cm、38cm、40cm、24cm深さ23cm、25cm、31cm、29cm、芯々間距離は2.52m、2.31m、2.72m（全長7.55m）を計る。またFラインピットの規模は、西から、径32cm、28cm、27cm、24cm深さ22cm、22cm、22cm、29cm、芯々間距離は2.71m、2.30m、2.72m（全長7.55m）を計る。

V まとめ

検出された遺構は、住居跡 9 軒、古墳址 1 基、方形周溝墓 2 基、井戸跡 1 基、溝跡 7 条、堀 1 条、土塁 2 条（内 1 条は調査区外）、掘立列 3 列、ピット等であった。時期は縄文時代から近世に及んでいる。

9 軒検出された住居跡は、第 6 号住居跡が縄文時代、第 4 号住居跡が古墳時代後期、第 1 号住居跡が奈良時代に帰属する以外、第 2 号住居跡、第 3 号住居跡、第 5 号住居跡、第 7 号住居跡、第 8 号住居跡、第 9 号住居跡、9 軒のうち 6 軒の住居跡が弥生時代後期に属するものと思われる。弥生時代後期に属するとみられる 2 基検出された方形周溝墓と共に、本期が、遺構群の中核を成すものとされよう。

弥生時代後期に属する住居跡の示す大きな特色は、2 種類の平面形態がみられる点にある。2 種類の平面形態とは、第 3 号住居跡、第 5 号住居跡の示す長方形と、第 7 号住居跡、第 9 号住居跡の示す小判形の 2 形態（第 2 号住居跡、第 8 号住居跡は形態不明）である。このうち、他遺構との重複関係から時期的な指標となるのは、長方形を呈する第 3 号住居跡である。土層の観察によると、同住居跡は、第 1 号方形周溝墓・第 3 号溝跡によって切断されている（第 7 図・土層図 B-B' 8・9 層は、第 1 号方形周溝墓の屈曲部分で両遺構が重複し、住居跡を切断した状況を示している。ただし、8・9 層は、どちらの遺構に帰属するのか判断できていない）と判断された。しかし本質的に、第 1 号方形周溝墓と第 3 号溝跡の覆土が近似しているため、区分は困難であり明確なものではなく、他の両遺構重複部分でも両遺構は平面的にも区分できていない。このような状況ではあるが、長方形を呈する第 3 号住居跡は、総合的な要素から、第 1 号方形周溝墓及び第 3 号溝跡より古いとしたものである。

一方、小判形である第 9 号住居跡は、長軸長 7 m を超える大型住居である。また、出土遺物が甕、手捏土器であり、特徴的である。

このような住居跡の分布状況は、類例が少ないながら、同類の各々が近接して、長方形である第 3 号住居跡、第 5 号住居跡は堀の北域、小判形である第 7 号住居跡、第 9 号住居跡は堀の南域という区分が伺える。この長方形住居跡群と、小判形住居跡群の各々の選定理由が時期差なのか、他の理由によるものか、出土遺物の分析とともに、さらに見極める必要がある。

住居跡出土の弥生式土器群は、細片が多く、適正に示せるものではないが、一応後期の遺物のみであるとみられる。また、後期土器群は、櫛描文系土器が主体であり、客体的に吉ヶ谷津式系土器を含むという大きな特色（第 5 号住居跡出土土器は、吉ヶ谷津式系土器の比率が最も多いが、櫛描文系土器との比率はほぼ同じ）をもっている。

方形周溝墓は、平面形態の異なる 2 基が検出されている。第 1 号方形周溝墓は、長方形に溝が圍繞する形態であり、第 2 号方形周溝墓は、四隅に陸橋部をもつ形態である。第 2 号方形周溝墓は、合い向かう南北に平行する溝 2 条が確認されたに過ぎないが、2 溝もしくは 3 溝で構成されて可能性が高い。こうした異なる形態の方形周溝墓が並立・近在しているが、その中でみられる差が時期差によるものかどうか、貧しい遺物量では検討できかねる、というのが現状である。住居跡群と周溝墓群の立地区分と、それぞれの内部にみられる差を今後、資料を重ねることによって検討を進めたい。

断崖を挟んで東部低地帯を望む、低位台地の先端部にあつて、北廓遺跡、中廓遺跡、そして玉太岡遺跡の 3 遺跡の中心に位置する本遺跡の存在は、大規模な堀と土塁を備えた居館址が、中世の所産であった可能性も含めて、益々大きなものとなろう。

VI 上前原遺跡の調査

1 調査に至る経過

上前原遺跡は江南台地の縁辺部に広がるが、市街化地域に続く幹線道路が南北に通行している。これに則った東西・南北道路で土地が方格に区画されるため宅地化が急速に進んでいる。遺跡内では過去に二回の発掘調査を実施しその成果を報告している。

第3次発掘調査地点は熊谷市千代（旧江南町大字千代字上前原65-1、65-4、65-5）で台地北縁辺部にかかる地点であった。平成16年9月に住宅の建築造成にかかる事前調査として試掘調査を実施したところ、表土下より縄文時代中期を中心とした土器及び集石土壌が多数現れ、開発予定地の中心部に多くの遺物と遺構が確認された。現況での保存が困難であったため、同年11月に建築主である腰塚 秀夫氏より旧江南町教育委員会が依頼を受けて記録保存のための発掘調査を実施したものである。調査にかかる事務は、文化財保護法にかかる事業者の「埋蔵文化財発掘届」（平成16年10月15日付）に江南町教育委員会の副申を添え埼玉県教育委員会に進達し、旧江南町教育委員会からは「埋蔵文化財発掘調査の通知」（平成16年10月21日付江教第2039号）を埼玉県教育委員会へ通知している。その後、埼玉県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（平成16年11月9日付）の通知を受理した。

4次発掘調査地点は熊谷市千代（旧江南町字上前原140）で平成18年7月に住宅建造にかかる事前調査として試掘調査を実施したところ、建物部分を中心に縄文時代中期から後期の竪穴住居跡及び土壌が確認された。建物部分に重なる位置の遺構については現況での保存が困難であることから、同年8月に建築主である新井明代氏より旧江南町教育委員会が依頼を受けて記録保存のための発掘調査を実施したものである。調査にかかる事務は、文化財保護法にかかる事業者の「埋蔵文化財発掘届」（平成18年6月26日付）に江南町教育委員会の副申を添え埼玉県教育委員会に進達し、旧江南町教育委員会からは「埋蔵文化財発掘調査の通知」（平成18年6月30日付江教第803号）を埼玉県教育委員会へ通知している。その後、埼玉県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（平成18年7月13日付）の通知を受理した。

2 発掘調査・報告書作製の経過

第3次発掘調査は、平成16年11月2日より平成16年11月29日まで行った。現場には作業員12名を投入し遺構の確認を進め、集石土壌群の規模と範囲の把握を順次行っていった。調査区には基準杭を設定し遺物の分布・集石土壌の記録を図・写真等で作製した。集石土壌は40基以上に及び、大量の礫の扱いに苦慮した。取上げた土器・石器等の埋蔵物は平成16年12月2日付けで熊谷警察署に発見届（江教第2323号）を、埋蔵文化財保管証は埼玉県教育委員会へ提出した。

第4次発掘調査は、平成18年8月1日より平成18年8月31日まで行った。現場は作業員10名を投入し遺構の確認を進め、住居跡1軒及び土壌4基、ピット約30基を確認し、順次発掘作業を行った。取上げた埋蔵物は平成18年8月31日付けで熊谷警察署に発見届（江教第1274号）を、埋蔵文化財保管証は埼玉県教育委員会へ提出した。報告書作成は、江南町が熊谷市に合併したことからこれを熊谷市教育委員会に引き継ぎ平成19年9月より市立江南文化財センターにて作業を実施した。調査費用及び報告書作成には、3次・4次とも平成16年、18年度の文化財関係国庫補助事業の対象とし、国1/2、埼玉県1/4、江南町（熊谷市）1/4の費用負担を行った。19年度は市費にて整理・報告書作成事業を実施し刊行した。

3 発掘調査の組織

1 上原原遺跡第3次発掘調査の組織（平成16年度）

主体者	江南町教育委員会					
事務局	教育長	岡部	弘行			
	教育次長	岡田	恒雄			
	主査	新井	端			
	主査	森田	安彦			
発掘担当者	森田 安彦					
発掘調査参加者	阿部早百合	大塚 宏子	岡田 君代	岡田 クニ	佐藤 幸男	
	杉田 君香	田中 節子	藤 敏則	水野 正和	村井美津子	
	守屋 憲治	関口 進				

2 上原原遺跡第4次発掘調査の組織（平成18年度）

主体者	江南町教育委員会					
事務局	教育長	馬場	攻			
	教育次長	岡田	恒雄			
	次長補佐	新井	端			
発掘担当者	新井 端					
発掘調査参加者	大塚 宏子	岡田 君代	岡田 クニ	桜沢 昌三	関口 進	
	杉田 君香	藤 敏則	水野 正和	守屋 憲治	茂木 君江	
	大島 安子	小澤 三春	志村モト子	広澤 愛		

3 上原原遺跡第3・4次発掘調査の整理・報告書作成の組織（平成19年度）

主体者	熊谷市教育委員会	
事務局	教 育 長	野原 晃
	教育次長	増田 和巳
	社会教育課長	関口 和佳
	社会教育課文化財保護担当副参事	今井 宏
	社会教育課副課長	新井 端
	社会教育課副課長	出縄 康行
	社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之
	主査	寺社下 博
	主査	吉野 健
	主任	松田 哲
	主事	松村 聡
報告書編集・執筆者	新井 端	
編集協力	今井 宏	森田 安彦

VII 上原遺跡の立地と環境

上原遺跡の立地と環境については、第1次発掘調査報告書（1988）、第2次発掘調査報告書（2006）に詳述してあることから、ここでは概要を述べるにとどめる。遺跡は江南台地の北縁部に立地し、崖線は沖積地と約10mの急崖となっている。西側は東原遺跡との境界とした旧谷をなぞって通行する市道部分を一応の遺跡境界とするが、この谷は台地奥へ侵入しないので台地上では遺跡は連続しているものと考えられる。東から南方向は柴沼に至る開析谷により半島状の台地に区分され、その末端から谷に移行する斜面部に遺跡の範囲は広がる。ほぼ東西450m、南北350mで標高では約50m～53mの緩斜面地から平坦部に、縄文時代から古代の集落・古墳が営まれていた（第1図）。

上原遺跡周辺の遺跡分布を見ると、江南台地の崖線部に大小規模の遺跡が濃密に営まれており、西側は消滅した東原遺跡で、工事に際し縄文時代中期後半加曾利E式期の埋甕や土器石器が採取されたことから、集落の展開する地区であったと推定される。さらに西側では開析谷を挟んだ台地上の畑地は宮下遺跡で、縄文時代中期の遺物が散布し、連続する山林部分では縄文時代中期の埋甕のほかに平安時代の鍛冶集落が発掘されている。さらに西側へ続く台地縁部には権現坂遺跡があり、縄文時代中期加曾利E1式の住居跡5軒、集石土壌20数基が発掘されたほか、埴輪窯跡・粘土採掘場なども確認されている。さらに西側の台地奥部の西原遺跡では加曾利E3～4式期にわたる集落跡が発掘調査されており、52軒の住居跡が確認されている。また、南西側では萩山遺跡が開析谷に南面して立地しており、縄文時代早期燃糸文期の住居跡が20数軒発掘されたほか、後期称名寺式期の住居跡6軒、集石土壌、平安時代の住居跡1軒などが確認された。江南台地の縁辺部や台地を開析する谷部分を中心に集落跡の分布が濃密で、上原遺跡周辺では縄文時代中期中葉以降の集落が継続しているようである。

古墳群は上原原1、2号墳が現存しているものの内部主体は不明であったが、Ⅱ次調査で川原石積の同張り形の横穴式石室を持つ3号古墳を発掘調査した。石室構造や出土遺物から7世紀後半以降の時期を示している。なお、本遺跡の東側に開析谷を挟んで方形墳1基と小円墳からなる行人塚古墳群が分布しているほか、台地奥部に古墳群の分布は見当たらない。

過去の調査をみると、第1次地点は台地縁から150mほど台地内に入った地点で、集落居住区の廃棄場所と考えられる南から侵入する小支谷に堆積した遺物包含層と住居跡1軒を確認している。縄文時代早期、中期、後期に属する遺物の出土が大半を占めていた。第2次地点は台地縁から350mほど台地内に入った地点で、古墳跡1基、縄文時代中期後半の住居跡2軒、溝などが確認され、古墳石室からは鉄刀、耳飾などが出土した。

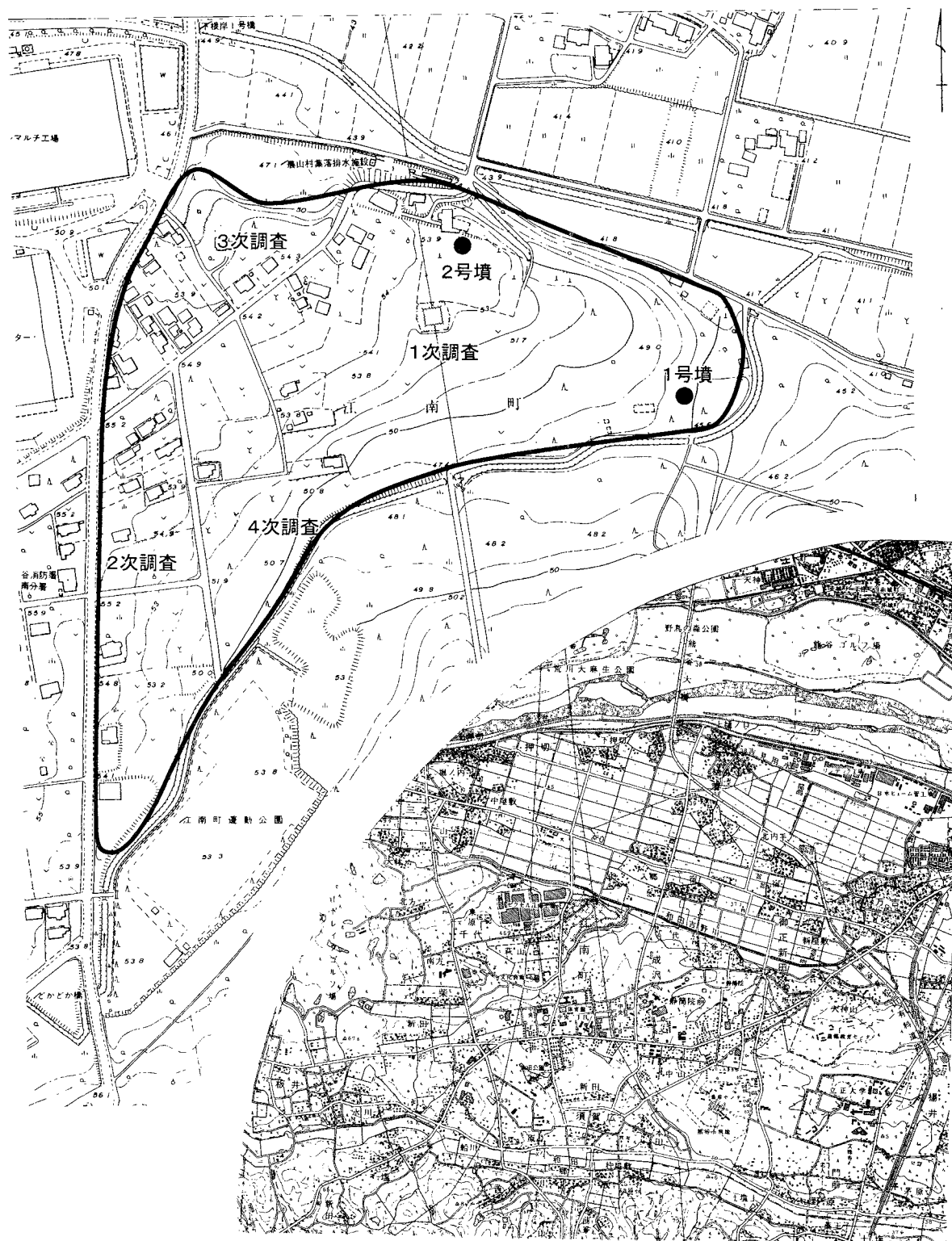
第3次調査地点は遺跡の北辺崖線上で、約650㎡部分には縄文時代中期の40基以上の集石群と住居跡が集中して検出された。隣接地の畑からも多数の土器石器が採取されており、遺構遺物の密度は濃厚である。

第4次調査地点は第2次調査地点の東に隣接する場所で、縄文時代後期の住居跡1軒と土壌などが確認された。

注 1988 江南町教育委員会 「本田・東台 上原原」 江南町文化財調査報告書第8集

1995 江南町 「江南町史 資料編1 考古」

2006 江南町教育委員会 「上原原遺跡第2次発掘調査報告書」 江南町文化財調査報告書第15集



第1図 上原遺跡の地形と調査地点 (1/5000) (1/50000)

VIII 上前原遺跡の概要

1 調査の方法

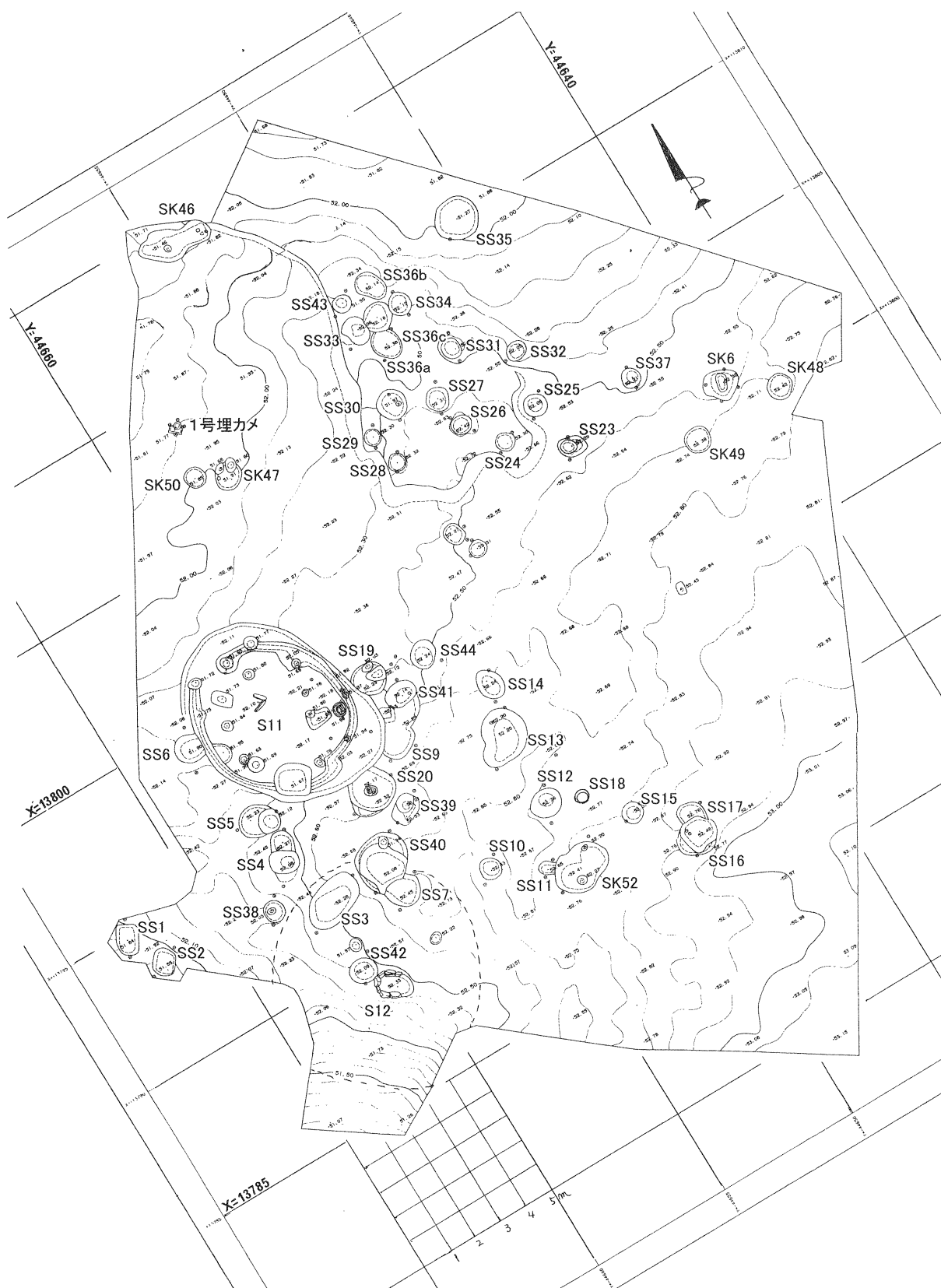
第3次調査地点は現況が山林であったため雑木の伐採の後、表土除去を行い試掘調査を実施したところ、表土下10cm～15cmで遺物包含層に達した。立木等の株拔根は遺構を破壊する恐れがあることから、これを抜かずに発掘作業を進めることとした。また、開発区北側斜面部は現況保存となるため調査区から除き、台地上の平坦面を中心に調査区設定を行い、4m方眼グリットを設定した。表土除去は小型バックホーと人力によりおこない、遺構の確認とその掘削を進めた。調査区一面に土器と礫が散布する状況から集石遺構を主とした遺跡が現れると予想できた。集石遺構の特性として中小の自然礫・破碎礫が多量に使用されることから、その実測図化にも多くの時間を要することが予想された。実際確認された集石遺構は50基ほどで、その平面図作成と断面図作成については写真測量を行うことにより作業の迅速化を図ることとした。集石の調査は土壌内に詰まった礫の数量・重量を確認後、サンプルのみ採取した。さらに、集石下に1、2号住居跡も確認された。発掘調査の終了段階で調査区の地形測量を行い1/100図を作成した（第2図）。

第4次調査地点は現況が畑地で覆土は軟らかい耕作土であった。耕作に際して取り出された土器石器等の遺物が農道の隅などに広範に分布している状況であった。試掘調査の結果住居跡、土壌などが確認されていたので、発掘調査では対象区の覆土を確認面までバックホーにより除去した。調査地区には2m方眼のグリットを設定し、遺構の調査を進めた。住居跡、土壌、小ピット、溝を掘上げた後に全体の地形測量を行い1/50図を作成した。また、ラジコン飛行機により調査区及び遺跡の空中写真を撮影した（第50図）。

2 検出された遺構と遺物

第3次調査区から検出された遺構は縄文時代の住居跡2軒、集石土壌43基、土壌8基、埋蔵1基 平安時代墓壇1基である。現況山林の覆土は薄く、直に礫・土器等が出土するため遺構のはっきりとした形を確認するまでは、散乱する礫、土器片等はグリットごとに一括で取り上げ、集石遺構が形として確認できるまで全体を掘り下げた。集石は重複数では48基となったが、その分布を見ると尾根の中央を残すように、斜面部への変換点に密集して検出されるが、遺構の分布は標高52m付近が下限である。但し、2号住居跡の炉跡が斜面部で検出されたことから西側斜面はかなり流失または削平を受けているものと思われる。集石土壌は基本的に平面が円形、断面は掘り鉢状をしているが、直径40cm以上の例が大半で、中には1mを越える例もあった。詰められた礫は例外なく加熱を受け焼け焦げた状態（焼礫）を呈しており、断片となっている礫が目立った。このような土壌では土壌下部の地山面はほとんど焼けてはいない状況であったが、焼礫とともに炭化物粒子を多く含む覆土で埋まっていたことから、集石土壌の下部に張り石を持つ集石土壌とともに蒸し焼き施設としての利用が想定された。1号竪穴式住居跡は、覆土上層に集石の一部が多量に混入していたことから集石群と同時期かやや遡るものと考えられる。2号竪穴式住居跡は掘り込みの壁がまったく検出されず、斜面部に炉跡のみが確認された。集石の掘り込みや、土地の流失などにより斜面地となったものと推定される。46号土壌は平安時代の墓壇で、供えられた4つの須恵器碗が出土している。

出土遺物の大半は縄文時代の土器・石器であり、中期中葉から中期後半までの時期を示す土器様式が確認される。石器も打斧を中心に擦り石や石皿など調理用道具などが確認される。本地点の特徴である集石遺構は、0.5kmほど南西の萩山遺跡や2kmほど西方の権現坂遺跡地点でも同時期の遺構が確認されており、台地域での縄文人の生活活動の活発であったことが推察される。



第2図 上原遺跡第3次発掘調査地点（1：200）

IX 遺構と遺物

1 第3次調査地点

1) 住居跡

1号竪穴式住居跡 (S1 1 第3図 第17・18図) 舌状台地の西側緩斜面部に立地する。南北に膨らむ形をするが、壁溝は直径約5mのほぼ円形を呈することから、平面形はほぼ円形をするものと考えられる。主柱穴は6本で、壁溝に沿い略円形に配置される。直径30～40cm。深さ26～40cmを測る。炉跡は住居北半部、主柱穴列の内側に石組炉が設けられる。石組みは長さ40cmの川原石2個が残っており、当初は4個で組まれていたようである。なお、北側と南側にも50cm大の炉跡と考えられる皿状の掘り込みがある。床面は直床で良く踏み固められていた。覆土は2層で茶褐色土の一次堆積土上に、集石由来の焼礫・破碎礫、土器片が混入していた。住居跡に伴う遺物は土器・石器を中心に床上面に広く散布していた。また、ほぼ完形品の粗製の甕形土器が3点出土(第19図6、7 第20図6)している。鉢形土器も出土しており時期を示す資料には勝坂式期の甕(第22図1)や、加曾利E2式の土器などがみられる。

2号竪穴式住居跡 (S1 2 第3図 第19～22図) 舌状台地の西側斜面部に立地する。住居部分の大半が地形流失のせいか炉跡しか残らない。炉跡は10～15cm大の河原石を楕円形に並べることで炉を形作っている。長さ1.2×1.0mを測る。北側に接する直径1mの皿状の掘り込みも炉跡であった可能性がある。柱穴は二箇所の小ピットがこれに相当し、直径30cm、深さ28cmを測る。かつての住居跡の規模は不明だが、直径6m近い竪穴式住居跡であったろう。炉跡周辺に勝坂式期の深鉢片(第18図1)が集中して出土することから、本住居に伴う遺物と把握している。

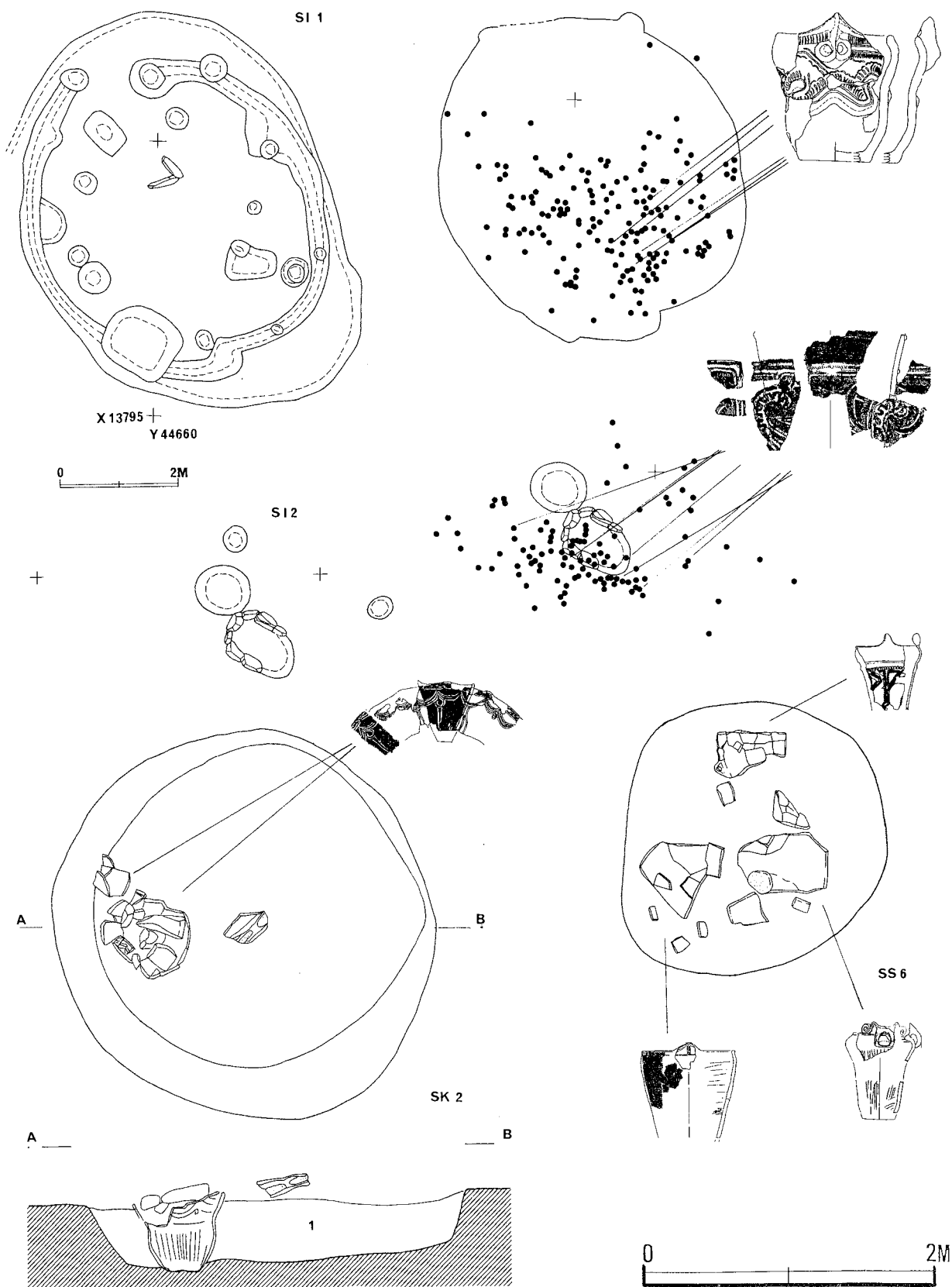
2) 土 壙

1号土 壙 (SK 1 第4図) 集石群や住居からやや離れた場所に単独で発見された埋甕遺構である。直径54cm深さ38cmを測る。埋甕に使用された土器(23図1)は円筒形で上方に開く形をしており、19図6、19図7、20図5の甕形土器と同じく簡素な縄文で飾られた土器であったろう。

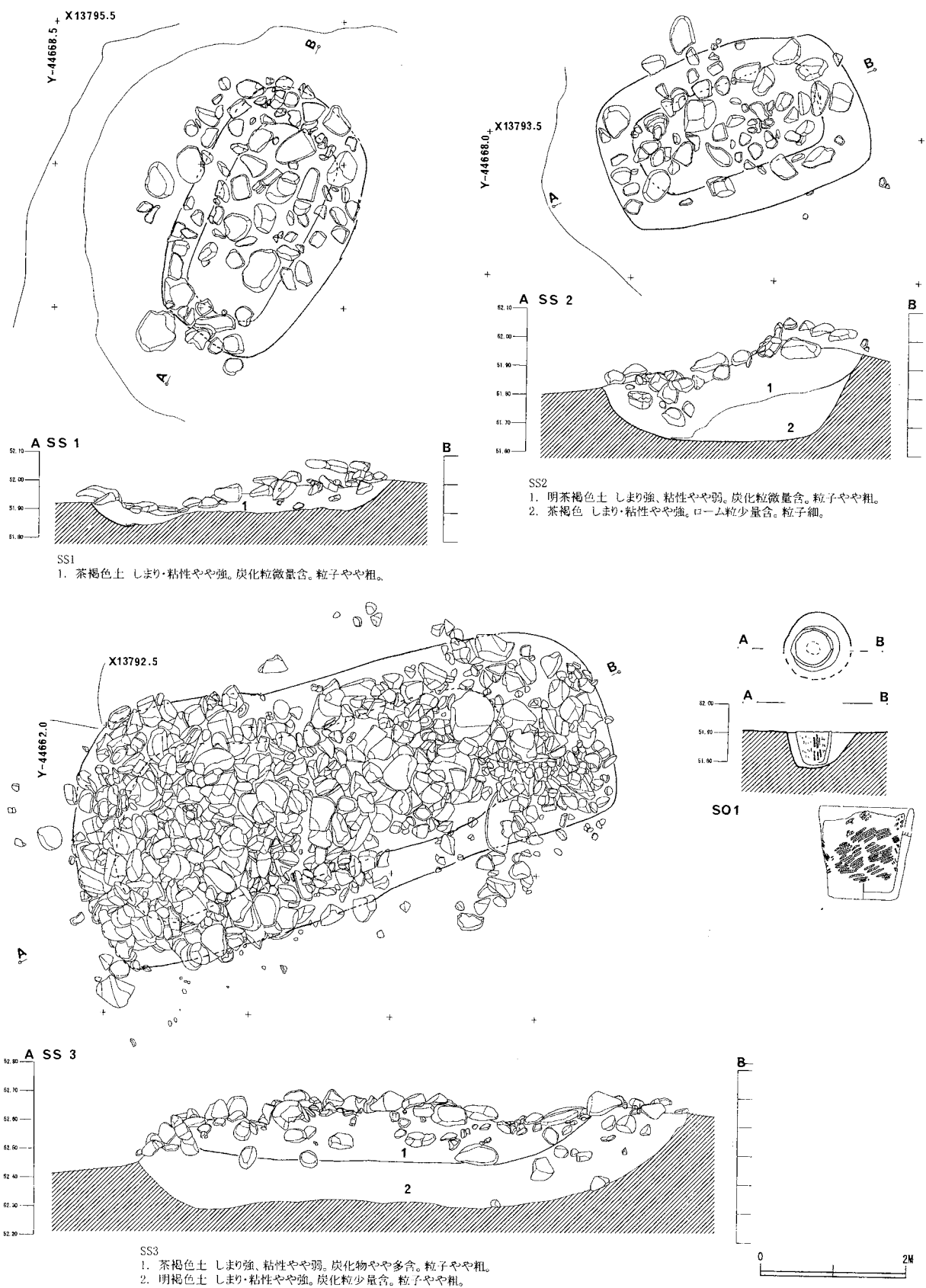
2号土 壙 (SK 2 第3図) 2号住居の南東側から発見された遺構である。平面は円形で、直径2.6m、深さ34cmを測る。暗茶褐色土の覆土である。土壙の隅に寄せられた甕(30図10)が正位で出土したが、底部は欠いていた。一気に埋められた覆土や供えられた甕のあり方は、この土壙が墓跡であったことを推測させる。あらかじめ底の除かれた甕形土器が副葬されたものであろう。

また、集石には重複しないが同程度の規模を示す6、47、48、49、50、52号土壙がある。互いに重複することもなく、覆土の状況などから墓壙であった可能性も考えられるが、出土遺物がほとんどなく判断が困難な状況であった。

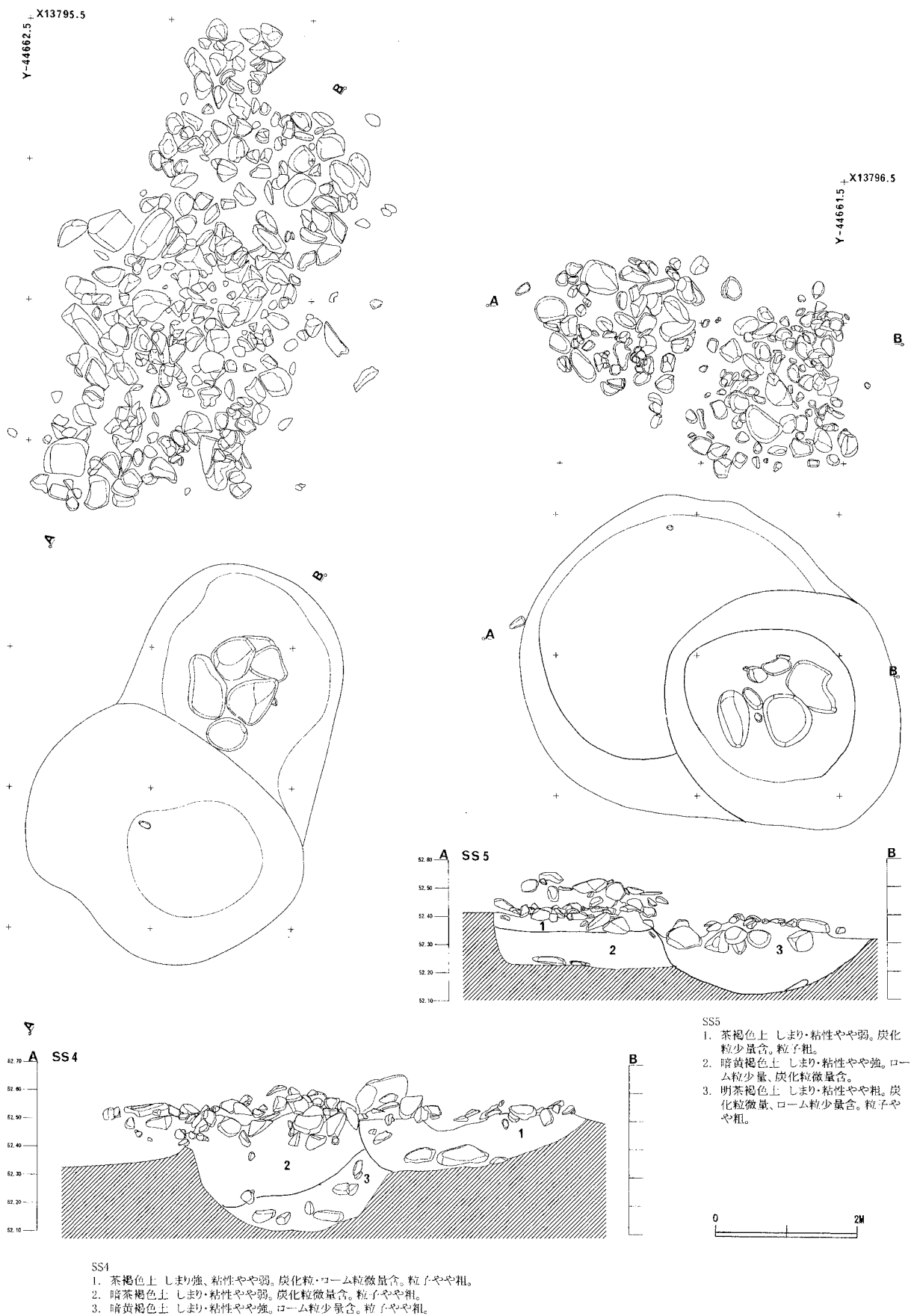
46号土 壙 (SK46 第16図) 調査区の北辺から単独で発見された。西側にかく乱が入るが、一辺1.8m×0.8m、深さ 0.5mの長方形をしていた。出土須恵器の位置から東方頭位を採る埋葬遺構と推定さ



第3図 上前原遺跡第3次 1. 2号住居跡・2号土坑・6号集石 (1/100) (1/40)



第4図 上前原遺跡第3次 1. 2. 3号集石土墳・1号埋甕実測図 (1/40)



第5図 上前原遺跡第3次4.5号集石土壌実測図 (1/40)

れるが、棺の部材や副葬品は発見できなかった。頭部周辺には10世紀後半代に造られた焼きの悪い須恵器鉢が4個体（32図3～6）出土したが、出土状況から棺上に置かれたものが棺内に落ち込んだように見受けられた。4の鉢は灯明皿に使われた際の油煙や燈芯痕跡が残っている。5の鉢には体部外面に「而」の墨書が認められた。

3) 集石土壌

1号集石土壌（SS1 第4図） 76×112cm、楕円形 掘り込みは浅く、礫は散漫である。

2号集石土壌（SS2 第4図） 65×86cm、楕円形 掘り込みはやや深く、上・中層に礫を多く含む。

3号集石土壌（SS3 第4図） 196×90cm、楕円形 礫の集中状況から二回以上の作り替えが想定される。礫は上・中層に集中している。

4号集石土壌（SS4 第5図） 76×70cm、円形 掘り込みは浅く、土壌下部に敷石を配している。重複する先行する土壌は90×100m、掘込みが深く上層に礫が集中する。

5号集石土壌（SS5 第5図） 110×130cm、楕円形 掘り込みは浅く、一方に下部敷石がある。

6号集石土壌（SS6 第6図） 90×104cm、楕円形 掘り込みは浅く礫が多い。下部に扁平楕円礫を配す。覆土中に甕形土器の大型破片が敷かれたような状態で出土した。土器は勝坂式期などであることから、本土壌は中期前葉に営まれたものと考えられる。

7号集石土壌（SS7 第6図） 90×105cm、楕円形 掘込みが深い、下・中層に礫が少なく上層に多い。

8号集石土壌（SS8 第9図） 140×171cm、楕円形 掘り込みは浅く多量の礫中に甕形土器が横倒しとなっていた（26図1）。土器は称名寺式期であることから後期に営まれたものと考えられる。下部敷石は扁平河原石を挿鉢状に配している。

9号集石土壌（SS9 第9図） 90×95cm、楕円形 掘り込みは浅く礫はやや少なめである。

10号集石土壌（SS10 第6図） 76×75cm、円形 掘り込みは深く、礫がびっしりと詰まる。

11号集石土壌（SS11 第7図） 55×60cm、楕円形 掘り込みは浅く、礫がやや少ない。

12号集石土壌（SS12 第7図） 110×120m、楕円形 掘り込みは深く、覆土中に礫が多い。下部敷石は河原石を挿鉢状に配している。

13号集石土壌（SS13 第8図） 115×110cm、楕円形 掘り込みは深く、中層に大量の礫が詰まっていた。

14号集石土壌（SS14 第8図） 90×95cm、楕円形 掘り込みはやや浅く、上層に礫が集中する。

15号集石土壌（SS15 第9図） 65×70cm、楕円形 掘り込みは浅く、上層に礫が多い。

16号集石土壌（SS16 第9図） 56×64cm、楕円形 掘り込みは浅く、上層に礫が多い。

17号集石土壌（SS17 第7図） 70×65cm、楕円形 掘り込みは浅く、上層に礫が多い。

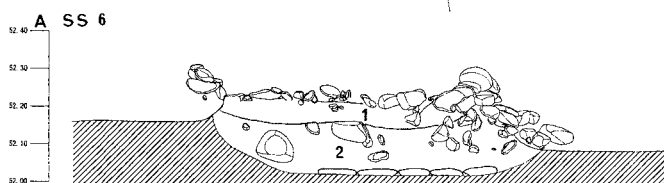
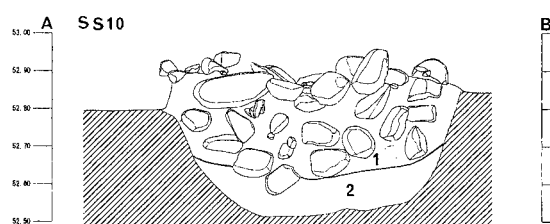
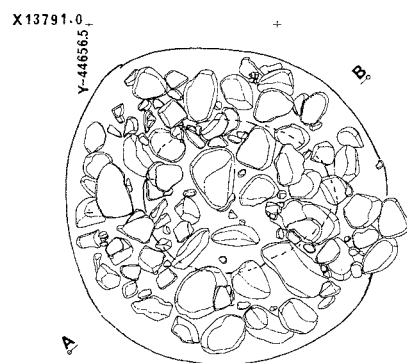
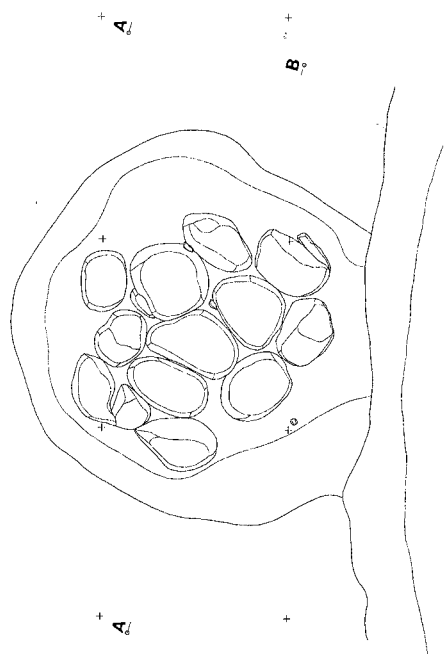
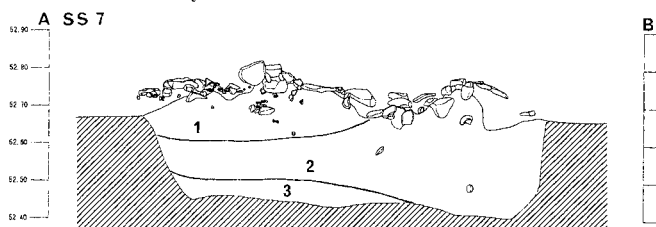
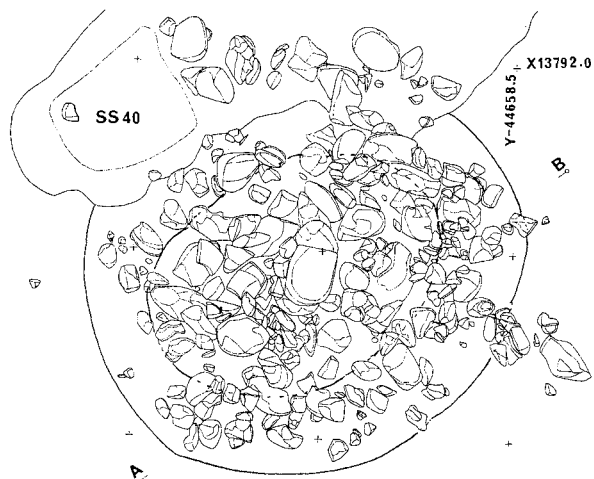
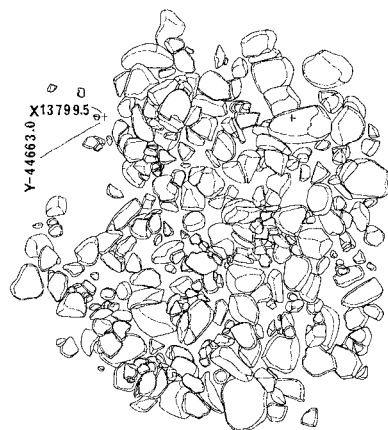
18号集石土壌（SS18 第7図） 45×60cm、楕円形 掘り込みは浅く、礫が下層まで認められる。

19号集石土壌（SS19 第8図） 90×115cm、楕円形 掘り込みは浅く、中層以上に礫が多く認められる。

20号集石土壌 本土壌は1号竪穴式住居跡の覆土上層に廃棄された大量の礫を集石としていたが、

SS7

1. 暗茶褐色土 しまり・粘性弱。炭化粒微量含。粒子やや粗。
2. 茶褐色土 しまり強、粘性やや弱。炭化粒・ローム粒微量含。
3. 黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒やや多含。粒子粗。

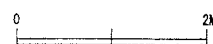


SS6

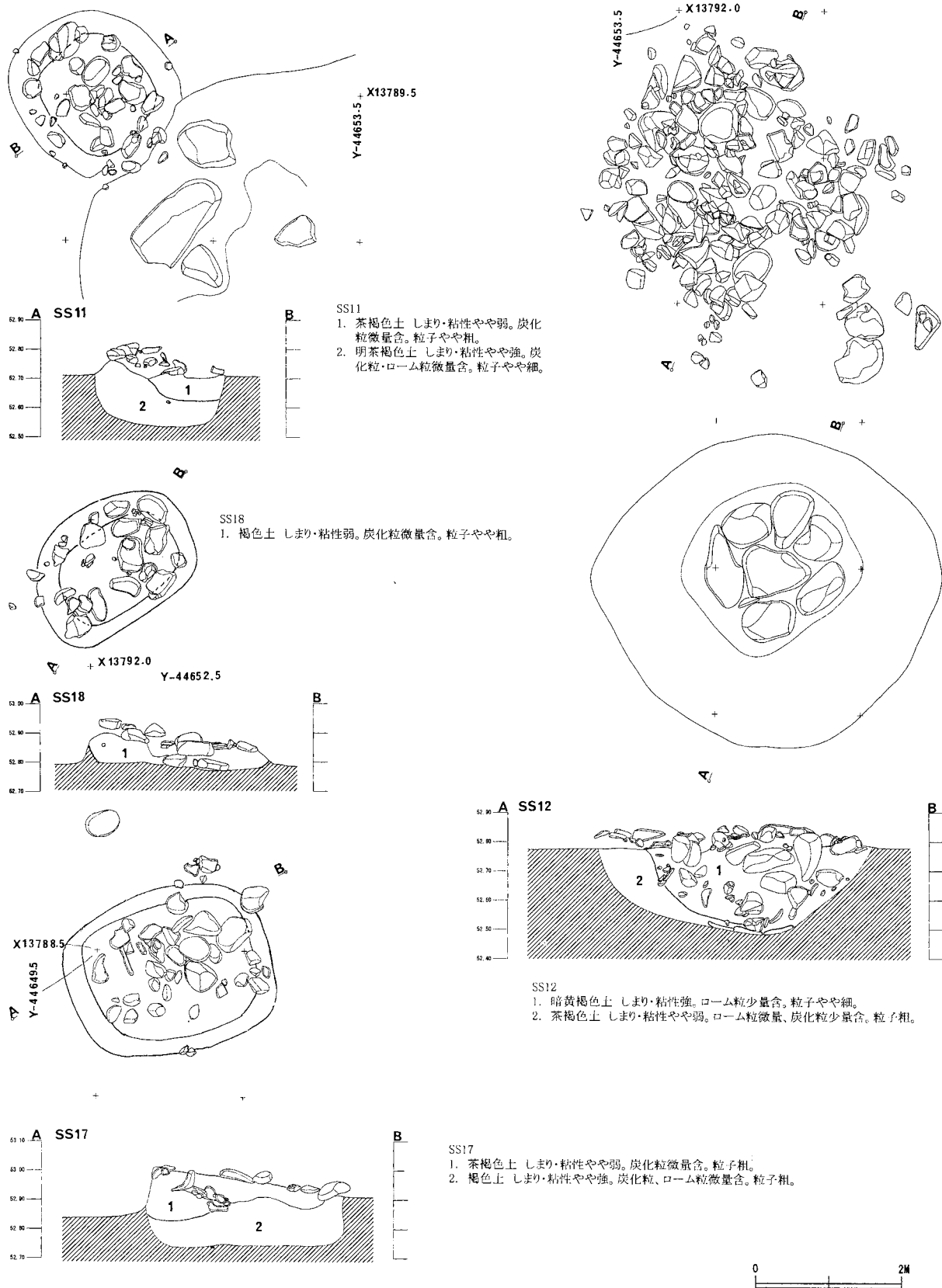
1. 褐色土 しまり・粘性やや弱。炭化粒少量含。粒子粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。炭化粒微量、ローム粒少量含。粒子やや細。

SS10

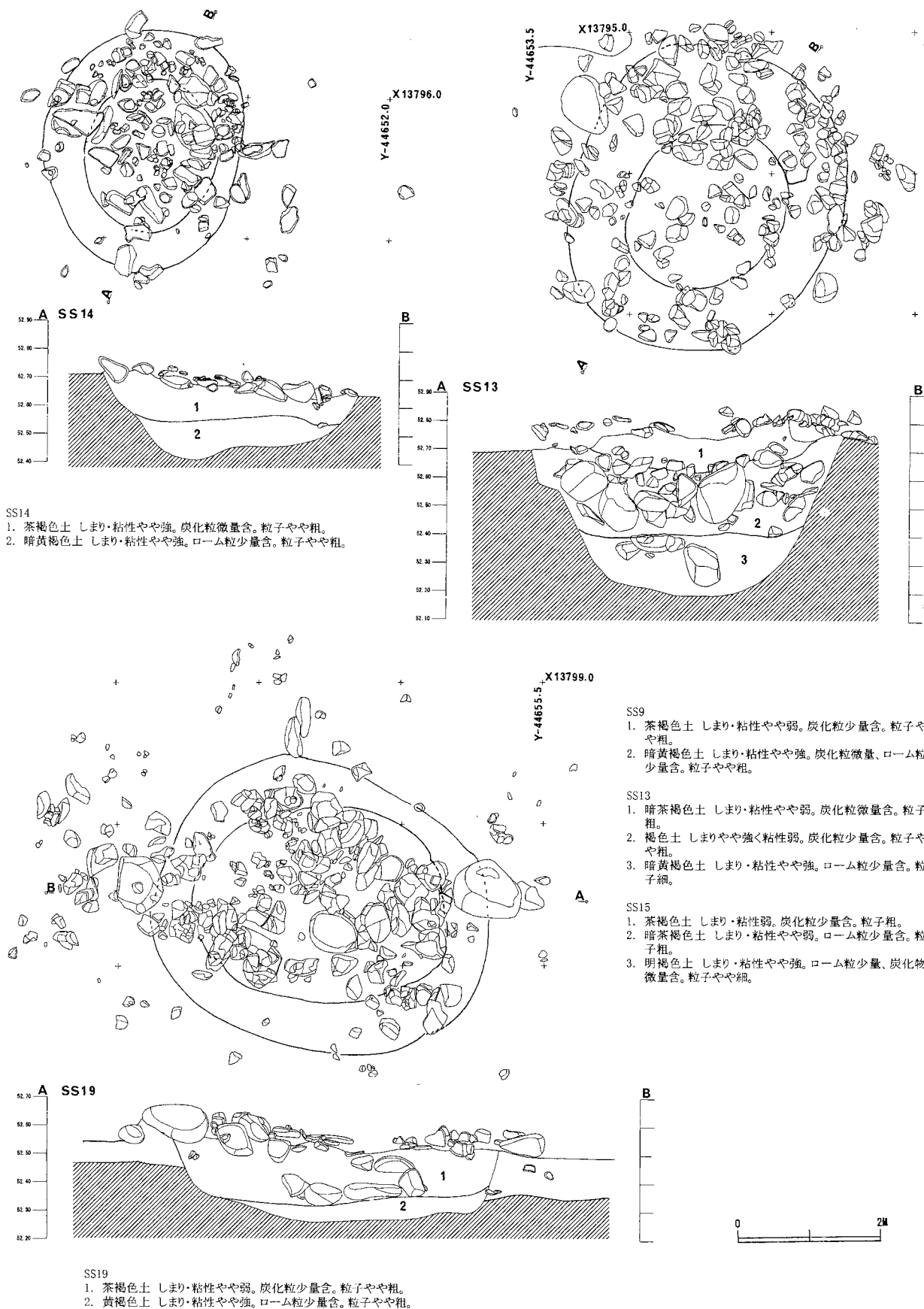
1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。炭化粒やや多含。粒子やや粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒少量、炭化粒微量含。粒子やや細。



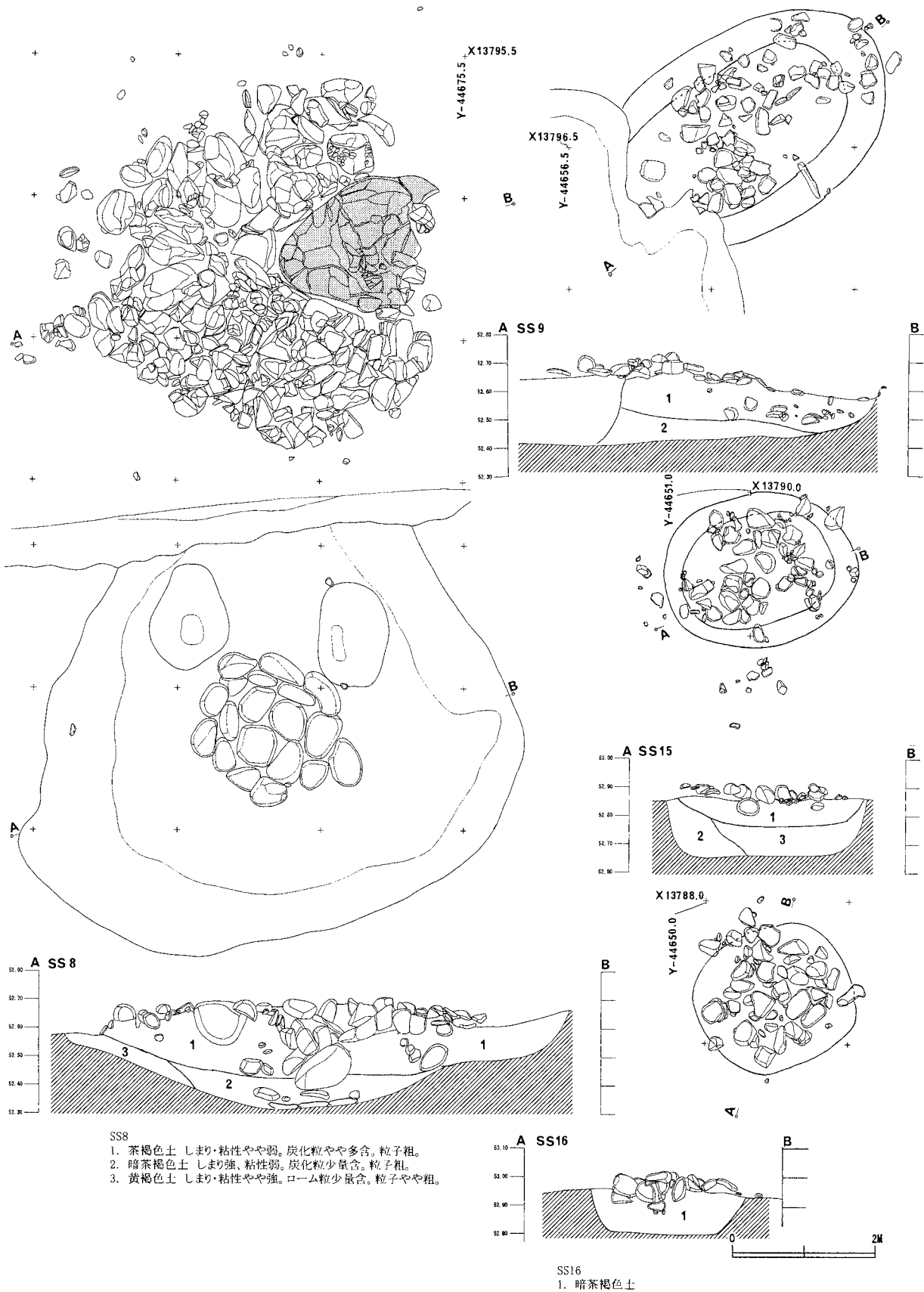
第6図 上前原遺跡第3次6. 7. 10号集石土壌実測図 (1/40)



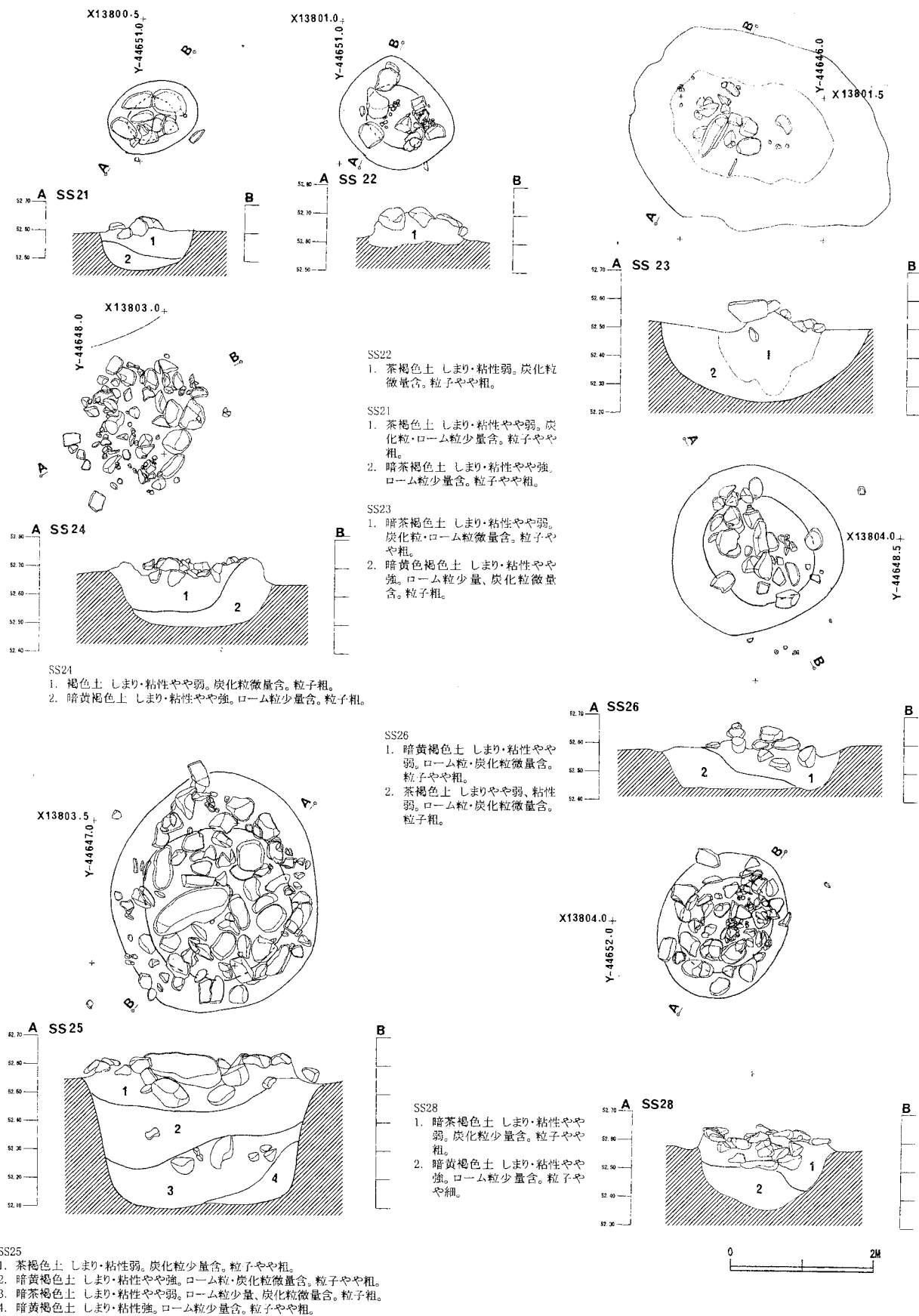
第7図 上前原遺跡第3次11. 12. 17. 18号集石土壌実測図 (1/40)



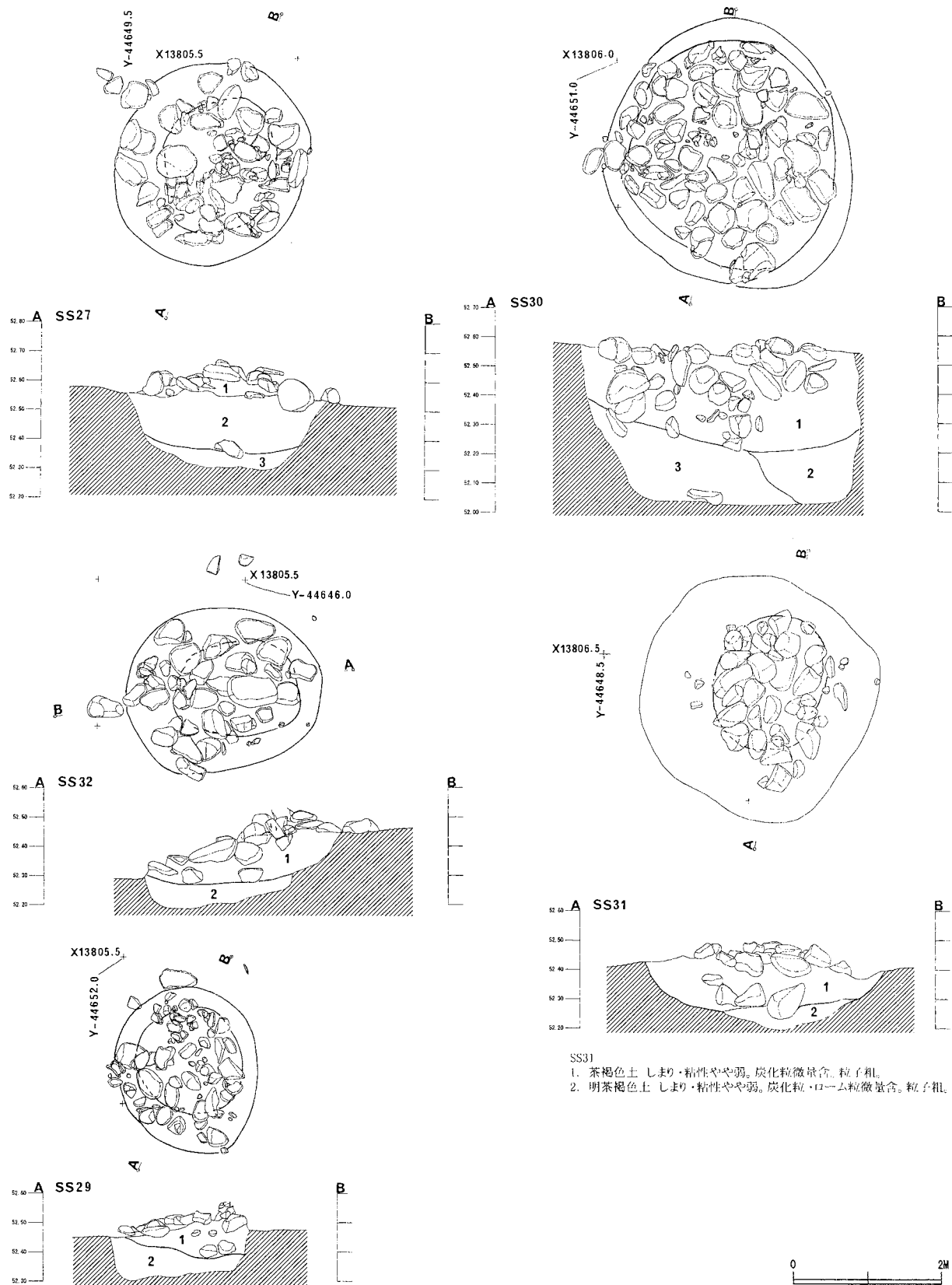
第8図 上前原遺跡第3次13. 14. 19号集石土壌実測図 (1/40)



第9図 上前原遺跡第3次8. 9. 15. 16号集石土墳実測図 (1/40)

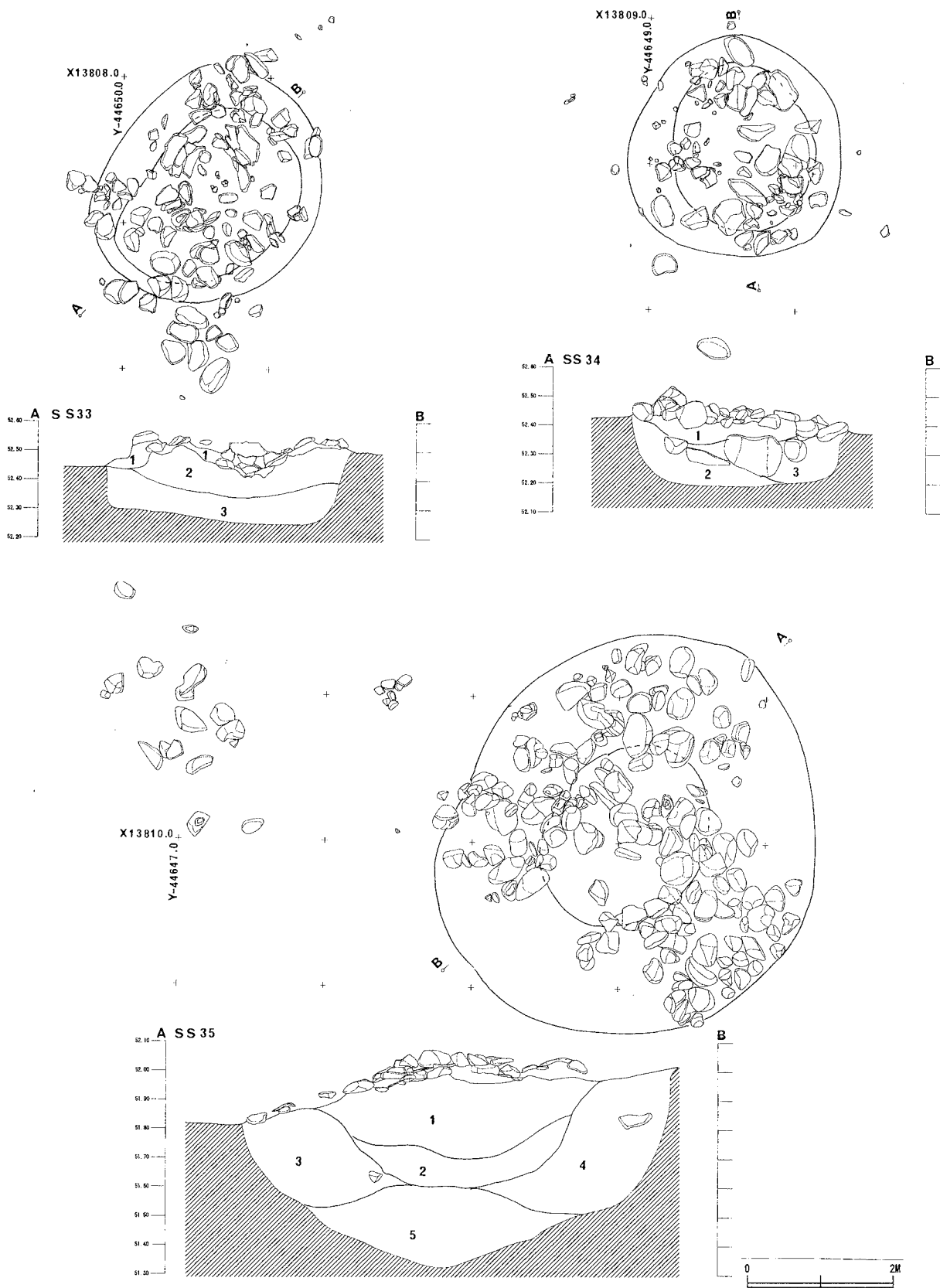


第10図 上原遺跡第3次21. 22. 23. 24. 25. 26. 28号集石土坑実測図 (1/40)



SS29
 1. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。炭化粒・ローム粒少量。粒子やや粗。
 2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、炭化粒微量。粒子やや細。

第11図 上前原遺跡第3次27. 29. 30. 31. 32号集土土壤実測図 (1/40)



第12図 上前原遺跡第3次33. 34. 35号集石土壌実測図 (1/40)

調査の途上で住居跡の覆土をなすものとして、集石土壇から竪穴式住居とした。

21号集石土壇 (S S 21 第10図) 50×30cm、楕円形 掘り込みは浅く、礫は少ない。
22号集石土壇 (S S 22 第10図) 36×32cm、円形 掘り込みは浅く、礫が少ない。
23号集石土壇 (S S 23 第10図) 68×86cm、楕円形 掘り込みは浅く、礫が少ない。
24号集石土壇 (S S 24 第10図) 48×55cm、円形 掘り込みはやや深いが、礫上層に多い。
25号集石土壇 (S S 25 第10図) 78×70cm、円形 掘り込みは深い、礫が多く詰まっていた。
26号集石土壇 (S S 26 第10図) 46×65cm、楕円形 掘り込みは浅く、礫やや少ない。
27号集石土壇 (S S 27 第11図) 58×66cm、楕円形 掘り込みはやや深く、上層に礫が多い。
28号集石土壇 (S S 28 第10図) 50×52cm、円形 掘り込みはやや深く、上層に礫が多い。
29号集石土壇 (S S 29 第11図) 51×47m、楕円形 掘り込みは浅く、上層に礫が多い。
30号集石土壇 (S S 30 第11図) 71×90cm、円形 上～中層に多量の礫が詰まっていた。
31号集石土壇 (S S 31 第11図) 84×80cm、円形 掘鉢状の掘り込み 多量の礫が上・中層に集中する。

32号集石土壇 (S S 32 第11図) 48×68cm、楕円形 上中層に礫が多い。
33号集石土壇 (S S 33 第12図) 126×85cm、楕円形 掘り込みは浅く、上層に礫が多い。覆土から口縁部に円形刺突と弧状の沈線を配した深鉢形土器(第23図)が出土している。

34号集石土壇 (S S 34 第12図) 65×74cm、楕円形 掘り込みは浅いが、礫が多く詰まる。
35号集石土壇 (S S 1 第4図) 130×148cm、楕円形 掘鉢状の深い掘り込みだが、礫は上層からのみ確認される。

36号集石土壇 (S S 36 第13図) 二基以上の土壇が重複している。aは80×110cm、掘鉢状の掘り込みをしている。上層に大量の礫が詰まっており、下部敷石も配されている。bは100×80cm、集石中に甕体部下半(第28図17)が混在していた。

38号集石土壇 (S S 37 第13図) 51×60cm、楕円形 掘り込みは深く、礫が少ない。
38号集石土壇 (S S 38 第13図) 56×76cm、楕円形 掘り込みはやや深く、上層に礫が集中する。
39号集石土壇 (S S 39 第14図) 90×110cm、楕円形 掘り込みは深く掘鉢状、上層に大量の礫があり、河原石をつかい下部敷石を配している。

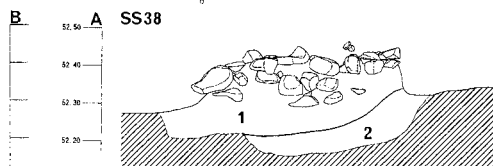
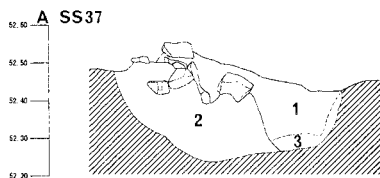
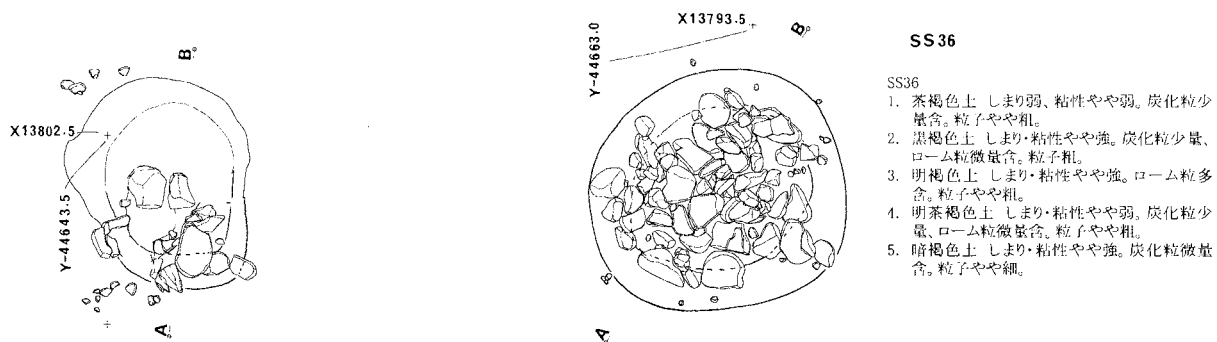
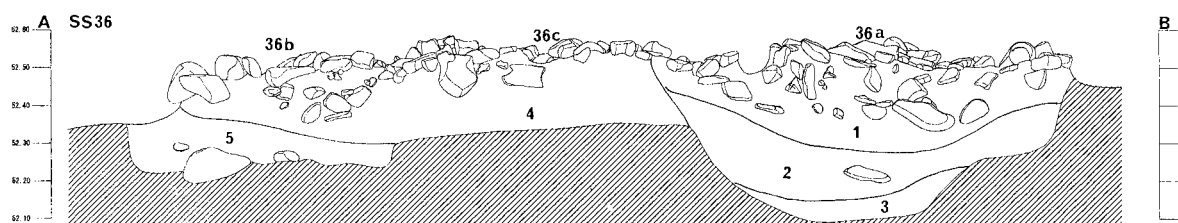
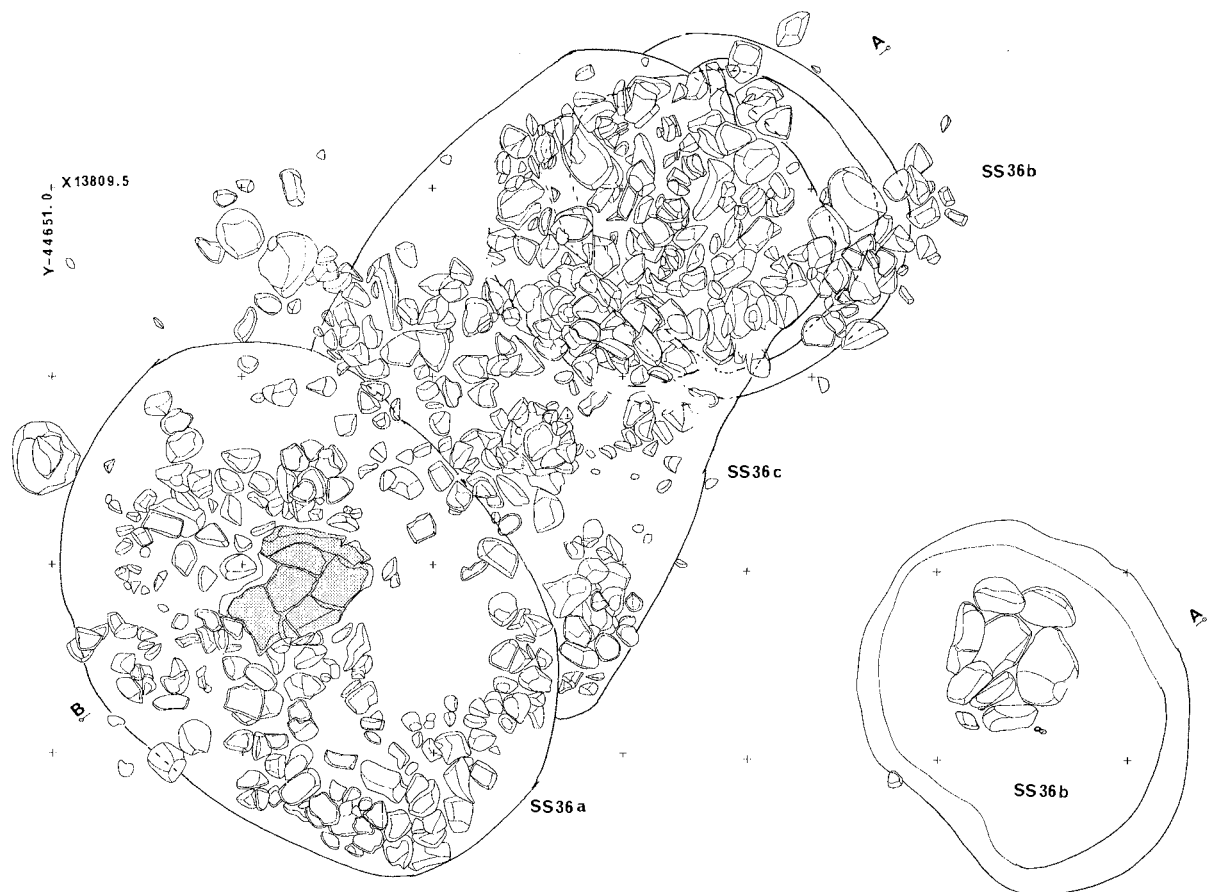
40号集石土壇 (S S 40 第14図) 180×185cm、楕円形 掘り込みは深く掘鉢状、上層に大量の礫がある。

41号集石土壇 (S S 41 第15図) 90×50cm、楕円形 掘り込みは深くたらい状、上層～下層まで多くの礫が混在している。

42号集石土壇 (S S 42 第15図) 85×76cm、楕円形 掘り込みは深くたらい状、上層に大量の礫がある。

44号集石土壇 (S S 44 第15図) 90×92cm、楕円形 掘り込みはやや浅い、上層に大量の礫があり、河原石を使い下部敷石を配している。

以上、集石土壇に使用された礫の数量等は、表3のとおりであるが、その多くは当時台地下を流れていたであろう荒川より採取されたものである。その礫の大きさ、分量を考えると、土器形式の変遷とあいまって、数世代数百年に及ぶ労働の累積が想定される。

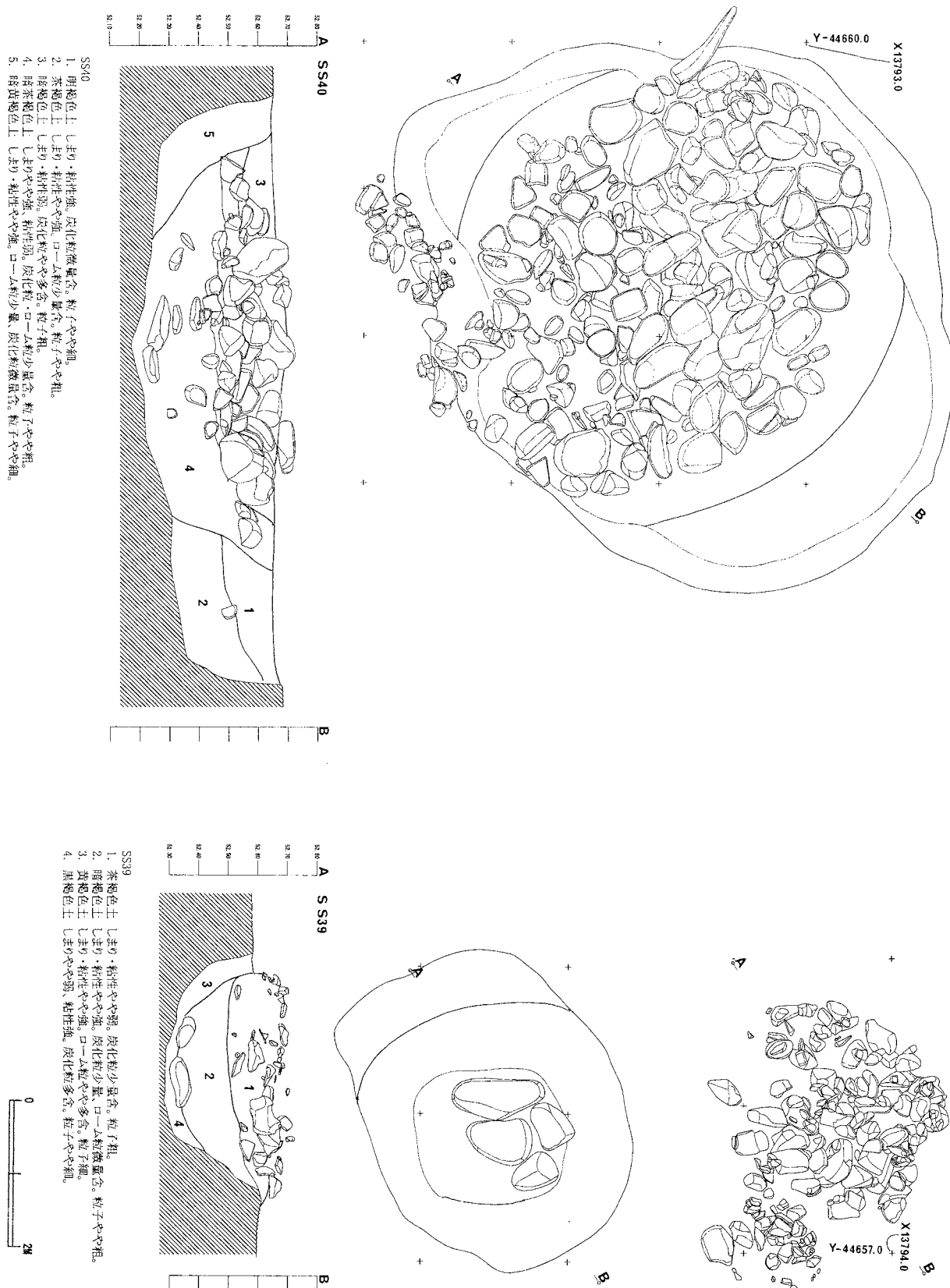


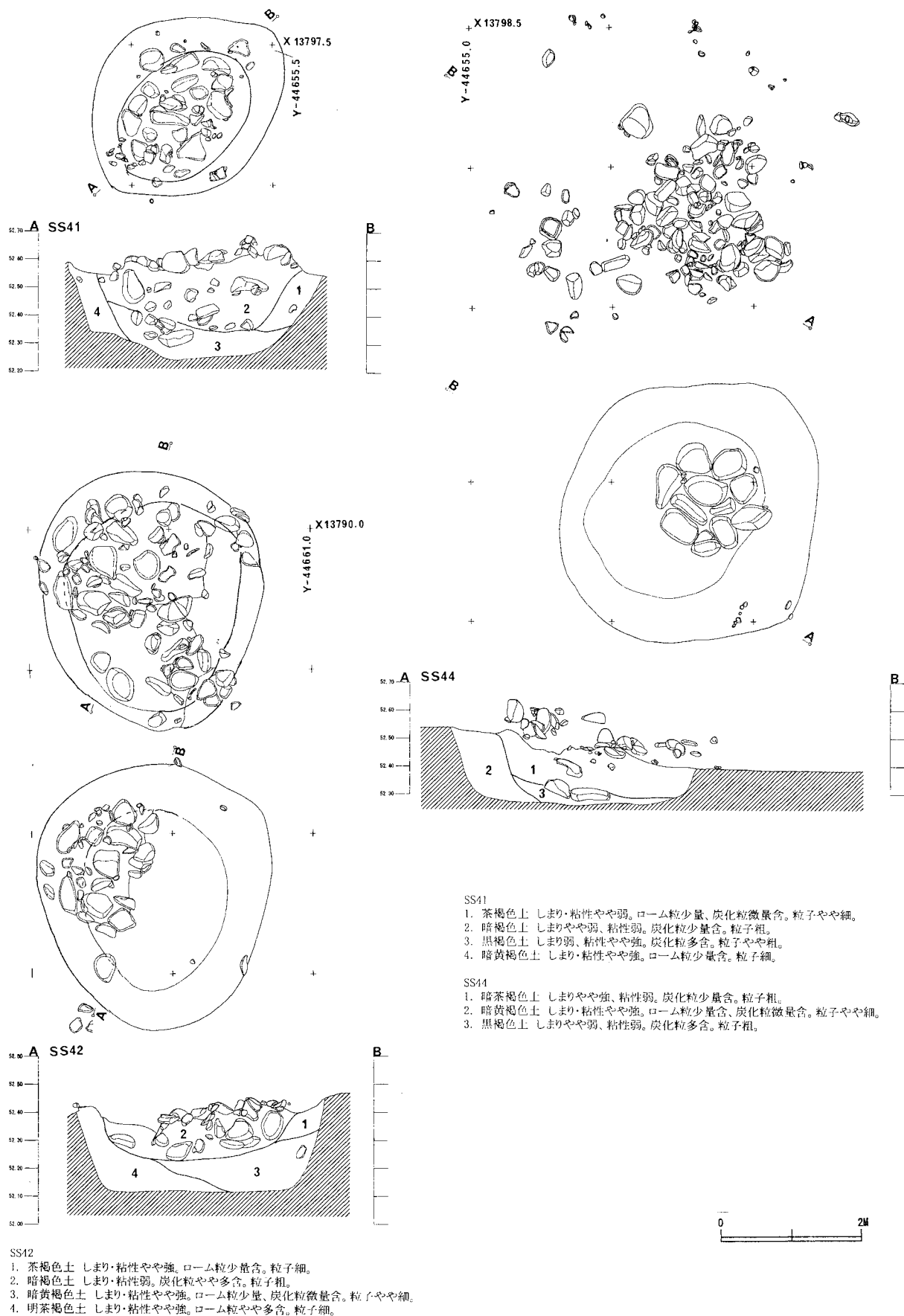
- SS37**
1. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。炭化粒少量含。粒子やや粗。
 2. 暗茶褐色土 しまりやや強、粘性弱。炭化粒・ローム粒微量含。粒子粗。
 3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子粗。

- SS38**
1. 暗褐色土 しまりやや強、粘性弱。炭化粒微量含。粒子粗。
 2. 茶褐色土 しまり強、粘性やや弱。炭化粒微量含。粒子やや細。

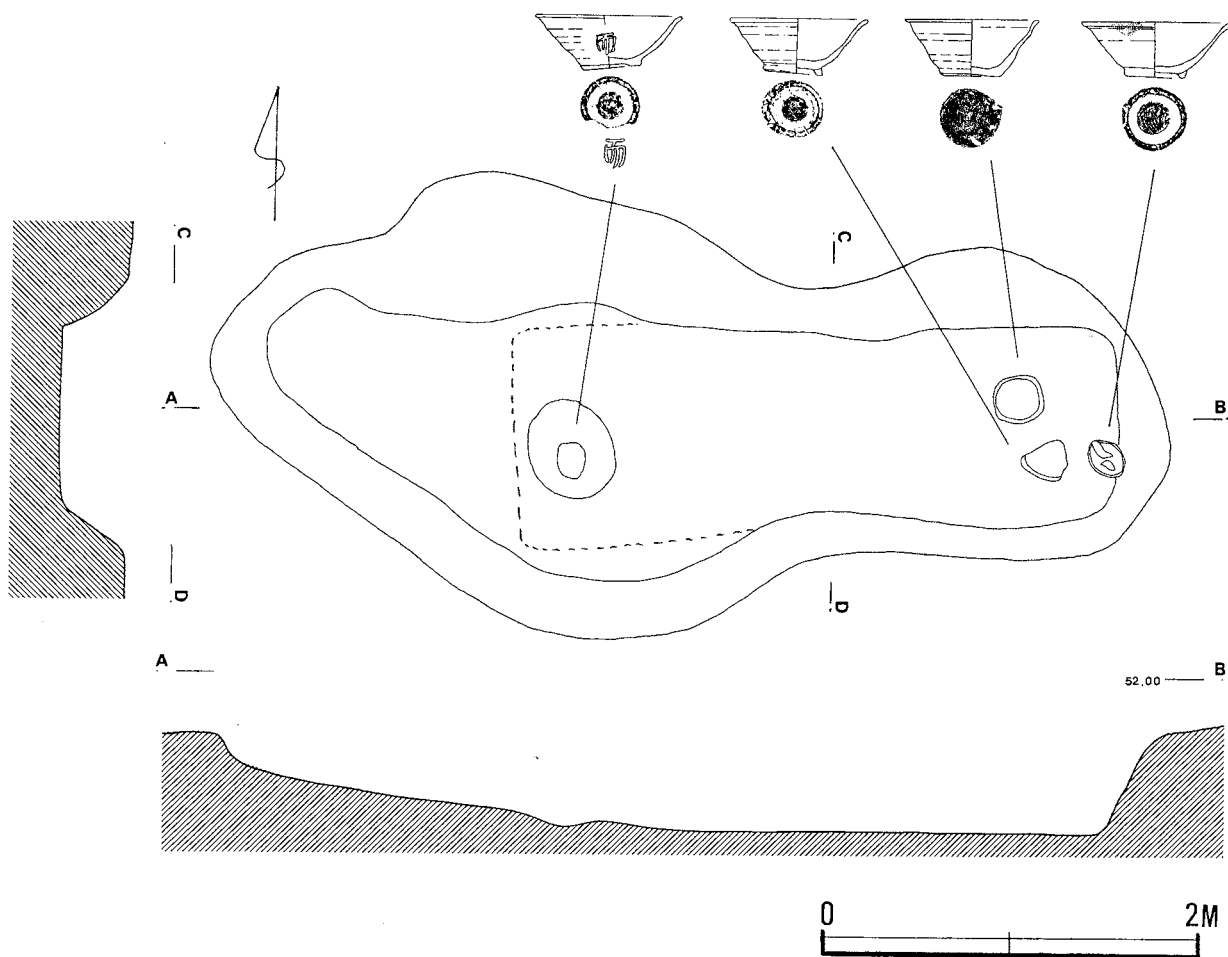
第13図 上前原遺跡第3次36. 37. 38号集石土壌実測図 (1/40)

第14図 上原遺跡第3次39. 40号集石土壌実測図 (1/40)





第15図 上前原遺跡第3次41. 42. 44号集石土壌実測図 (1/40)



第16図 上前原遺跡第3次46号土壌実測図 (1/40)

SS27

1. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。炭化粒少量含。粒子粗。
2. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。炭化粒・ローム粒微量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり強、粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子粗。

SS30

1. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。炭化粒少量含。粒子粗。
2. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、炭化粒微量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり強、粘性やや弱。ローム粒少量、炭化粒微量含。粒子やや細。

SS32

1. 茶褐色土 しまり弱、粘性やや弱。炭化粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり強、粘性やや弱。炭化粒・ローム粒微量含。粒子細。

SS33

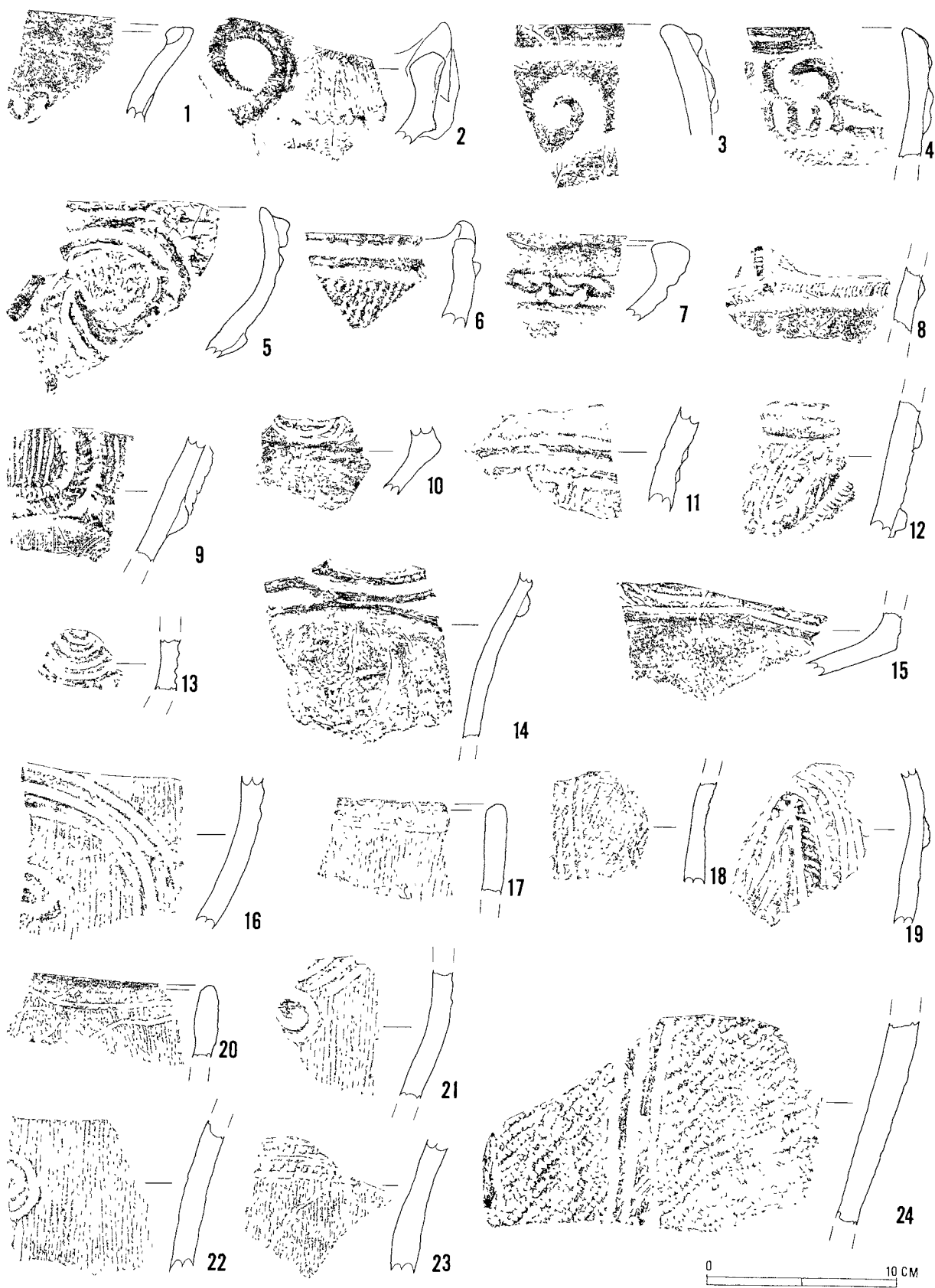
1. 茶褐色土 しまり・粘性弱。炭化粒多含。粒子粗。
2. 暗茶褐色土 しまりやや強、粘性弱。炭化粒微量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり強、粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。

SS34

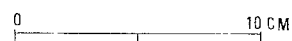
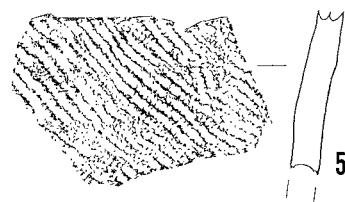
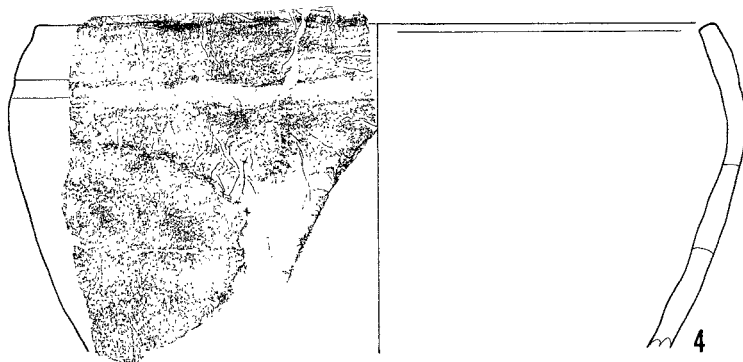
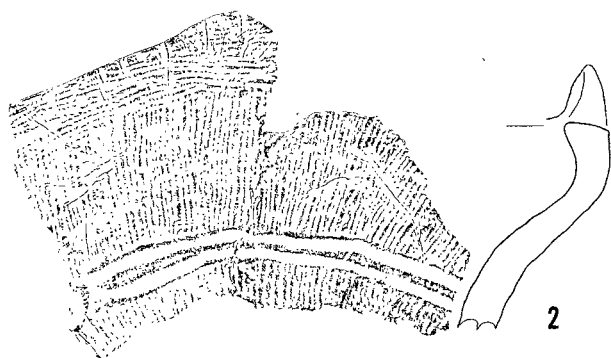
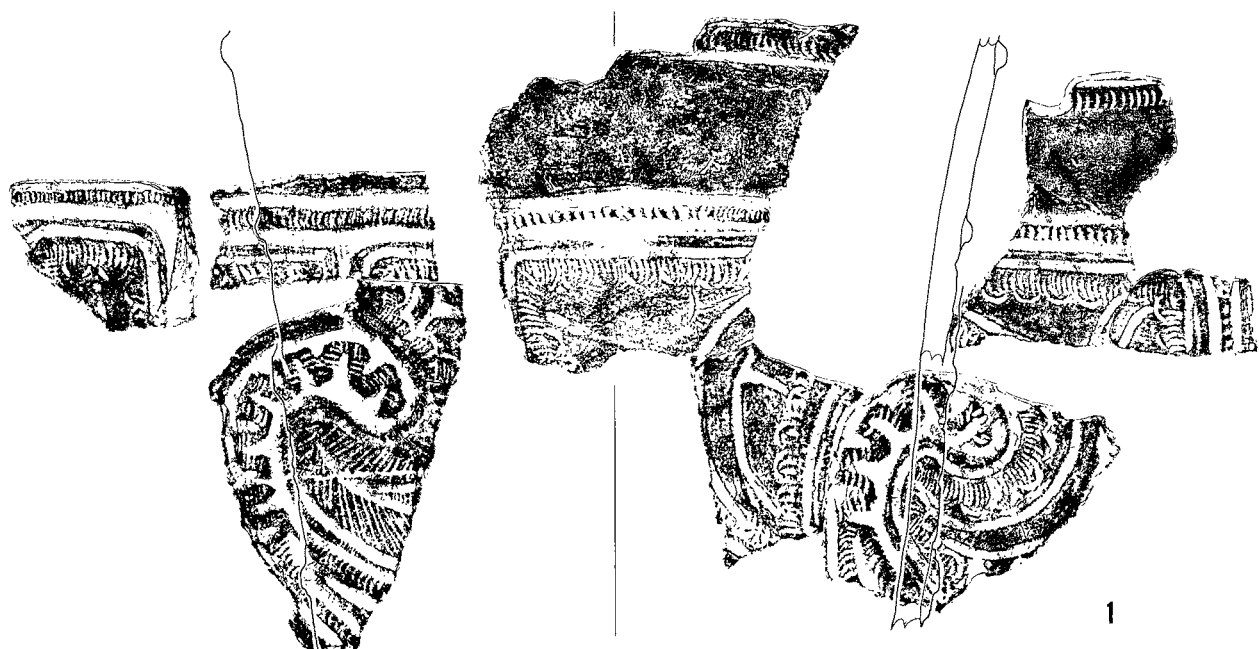
1. 茶褐色土 しまり・粘性弱。炭化粒少量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり強、粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子粗。
3. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。炭化粒・ローム粒微量含。粒子やや粗。

SS35

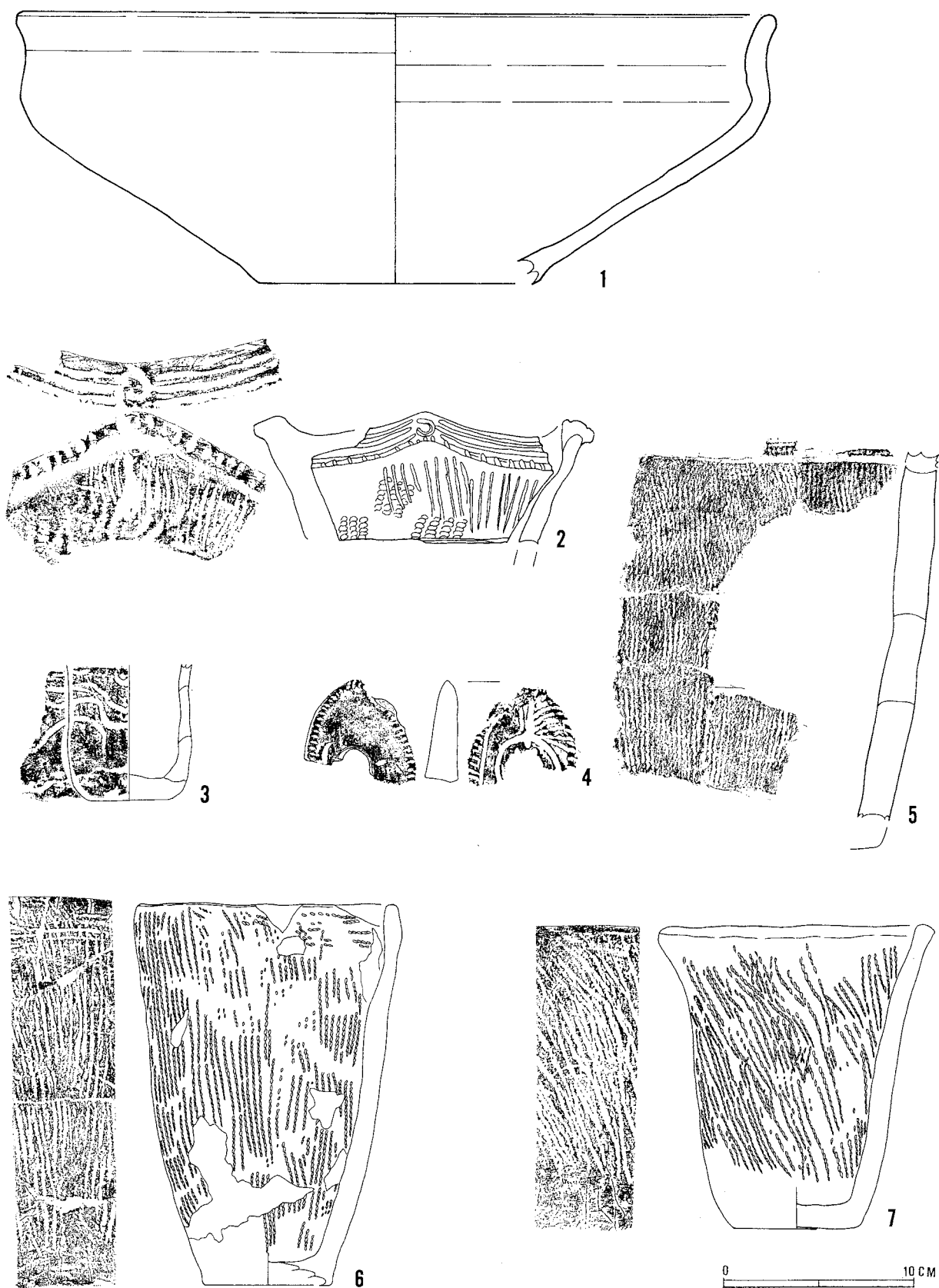
1. 茶褐色土 しまり・粘性弱。炭化粒少量含。粒子粗。
2. 明茶褐色土 しまりやや強、粘性弱。炭化粒微量含。粒子粗。
3. 暗茶褐色土 しまり・粘性強。炭化粒微量、ローム粒少量含。粒子やや細。
4. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多、炭化粒微量含。粒子粗。
5. 明黄褐色土 しまり強、粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子粗。



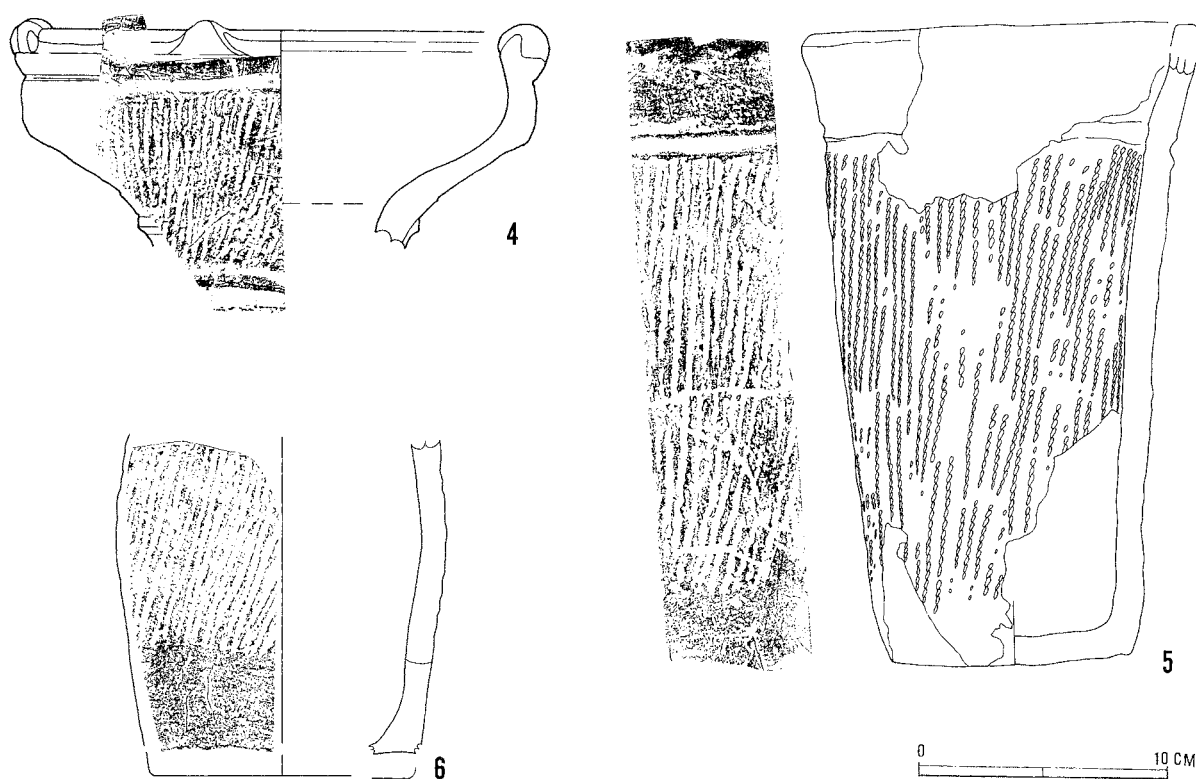
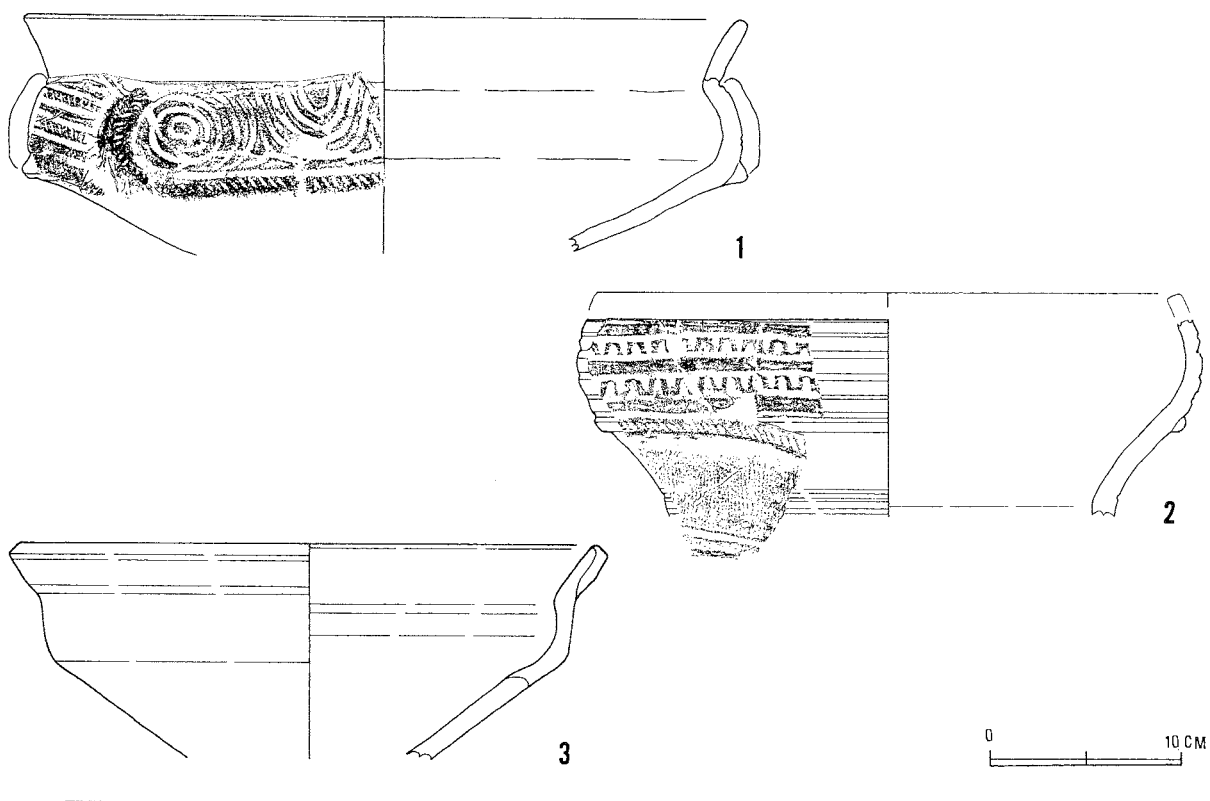
第17図 上前原遺跡第3次1号住居跡出土土器 (1/3)



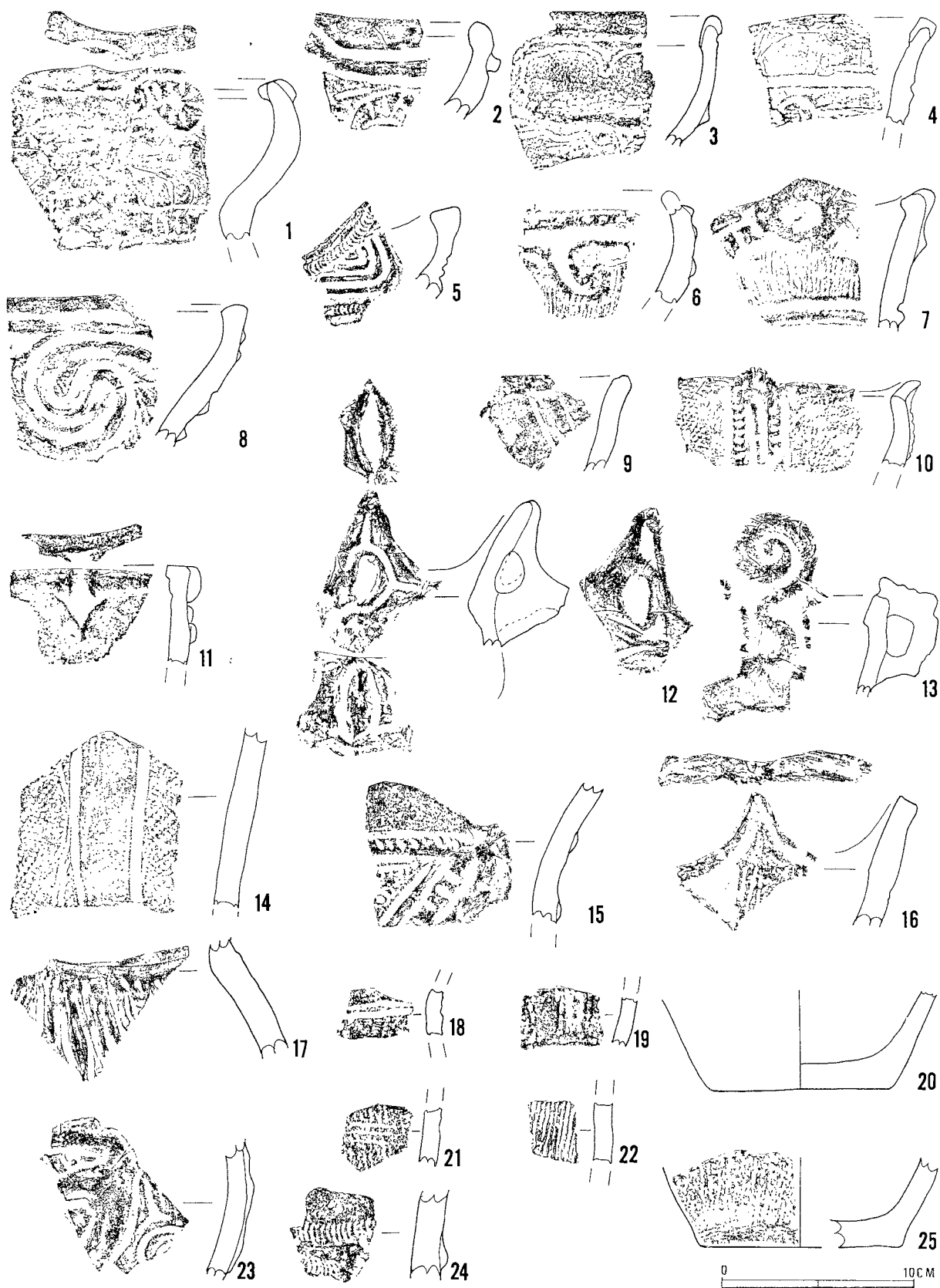
第18図 上前原遺跡第3次 1. 2. 3号住居跡出土土器 (1/3)



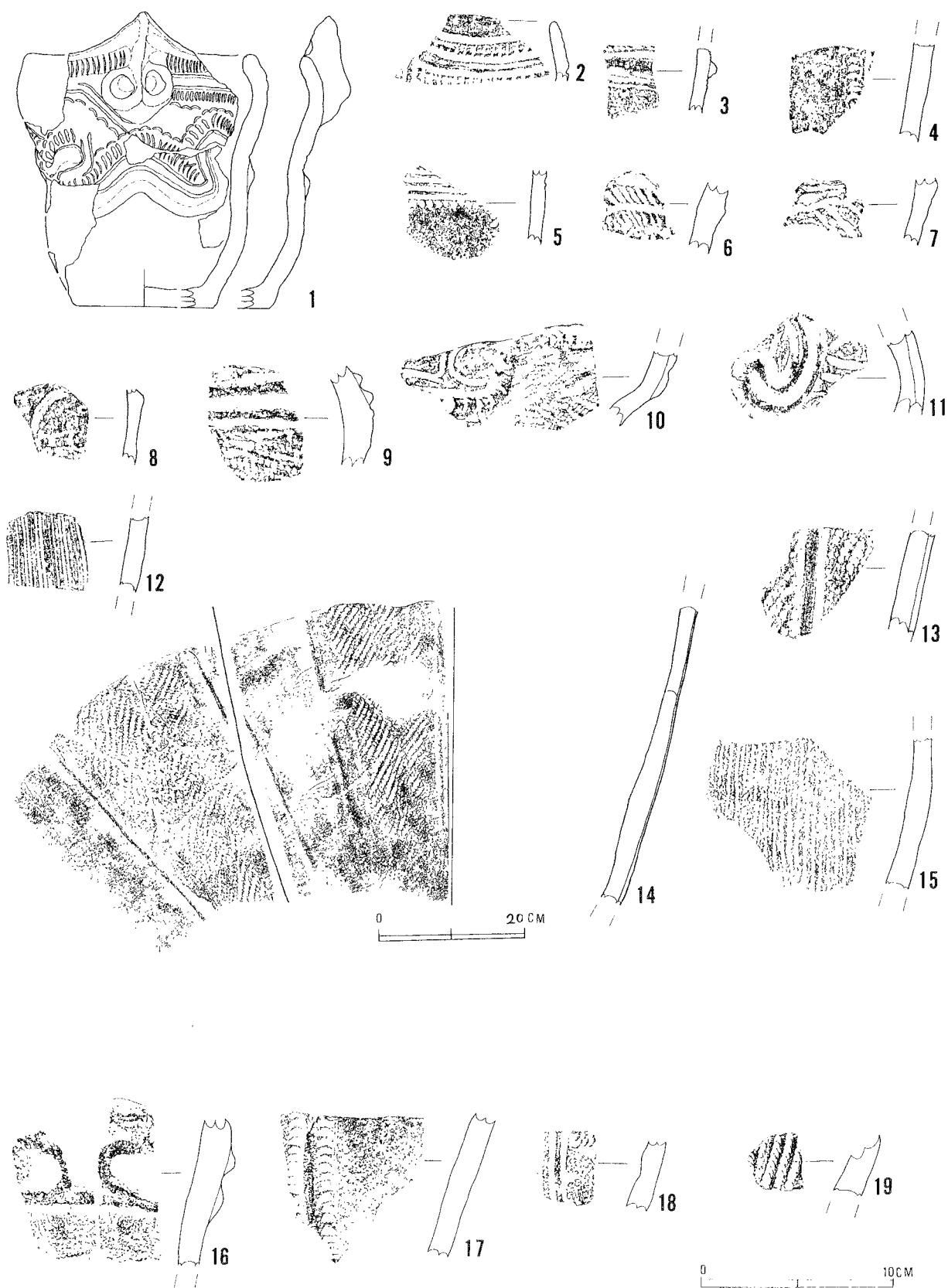
第19図 上前原遺跡第3次2号住居跡出土土器 (1/3)



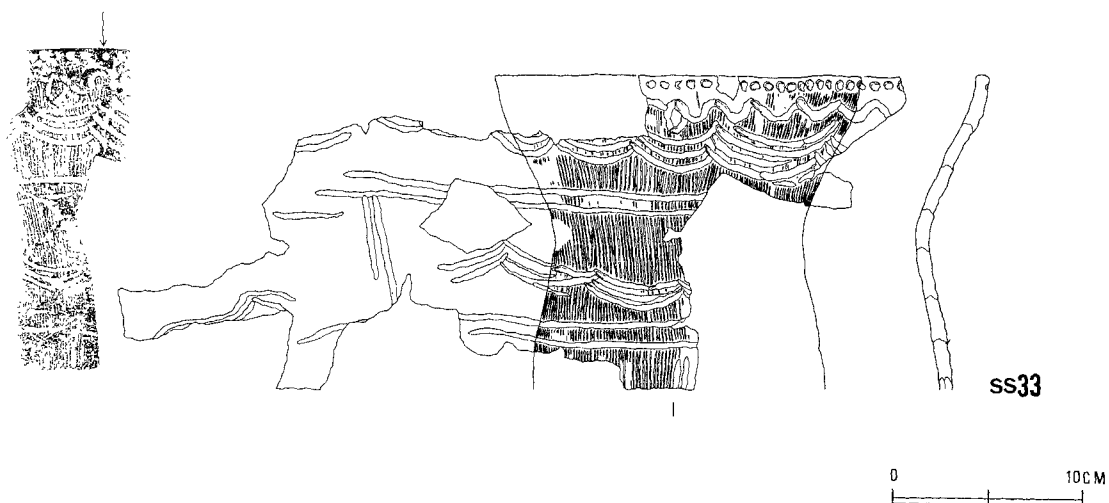
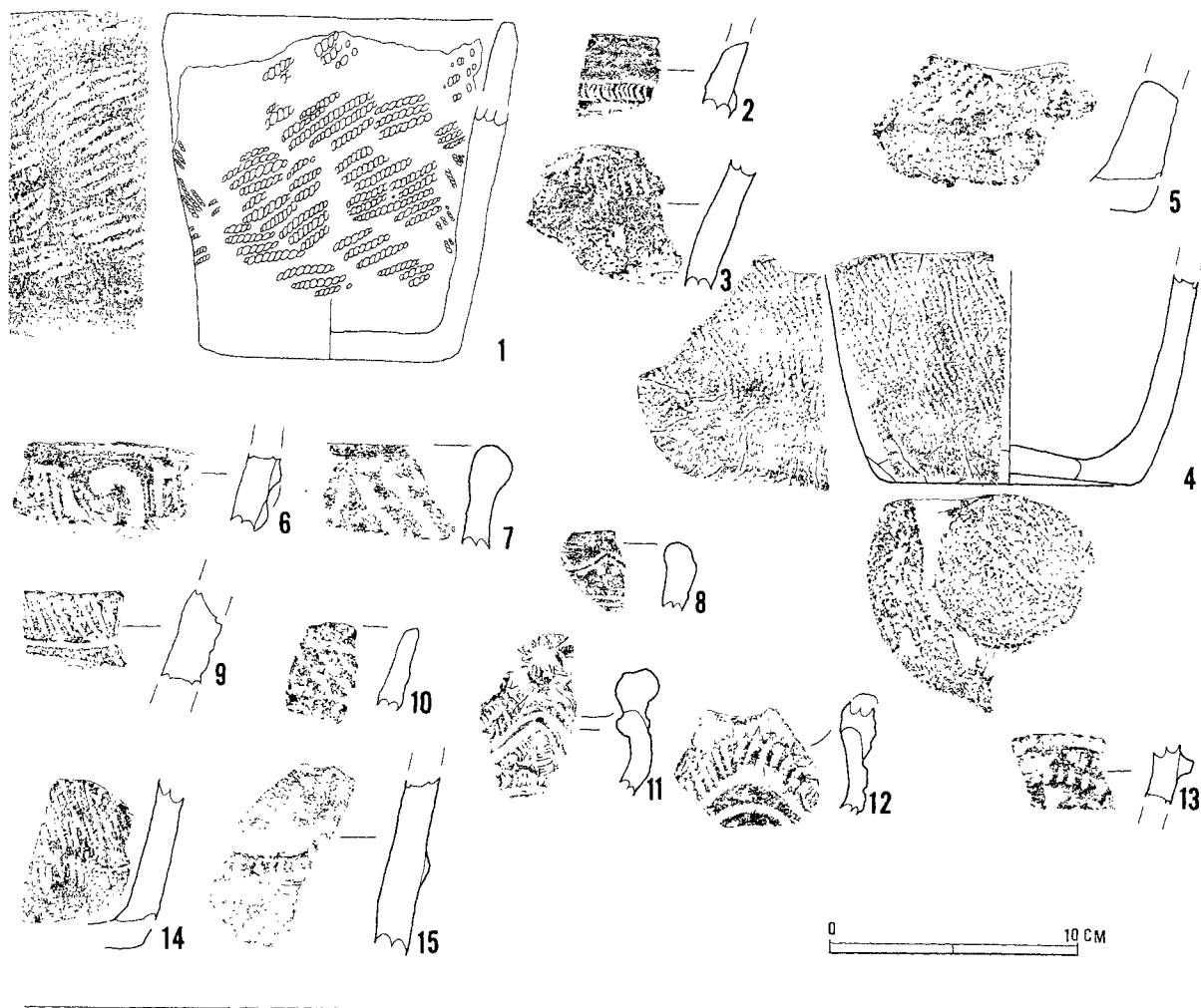
第20図 上前原遺跡第3次2号住居跡出土土器 (1/3)



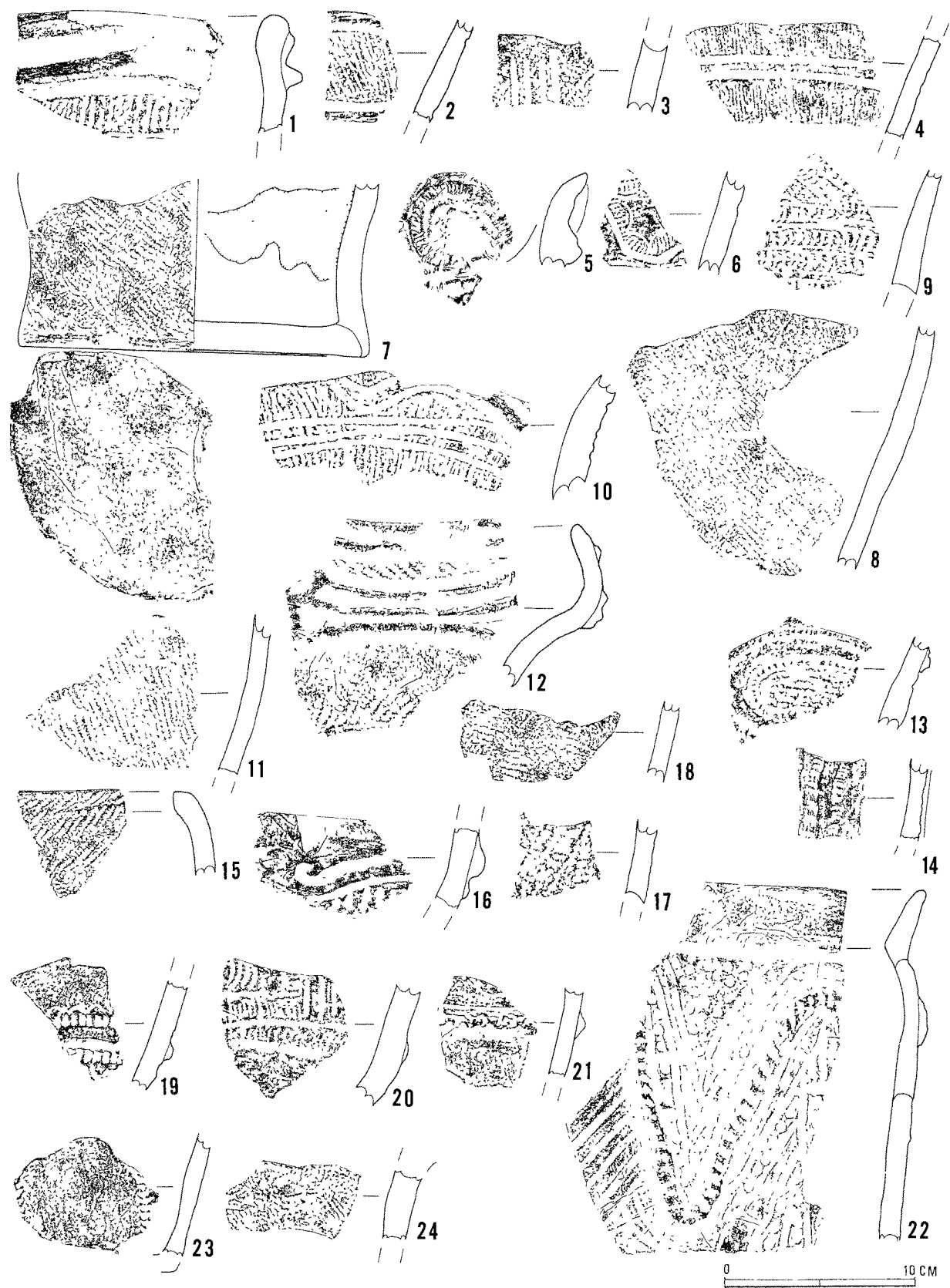
第21図 上前原遺跡第3次2号住居跡出土土器 (1/3)



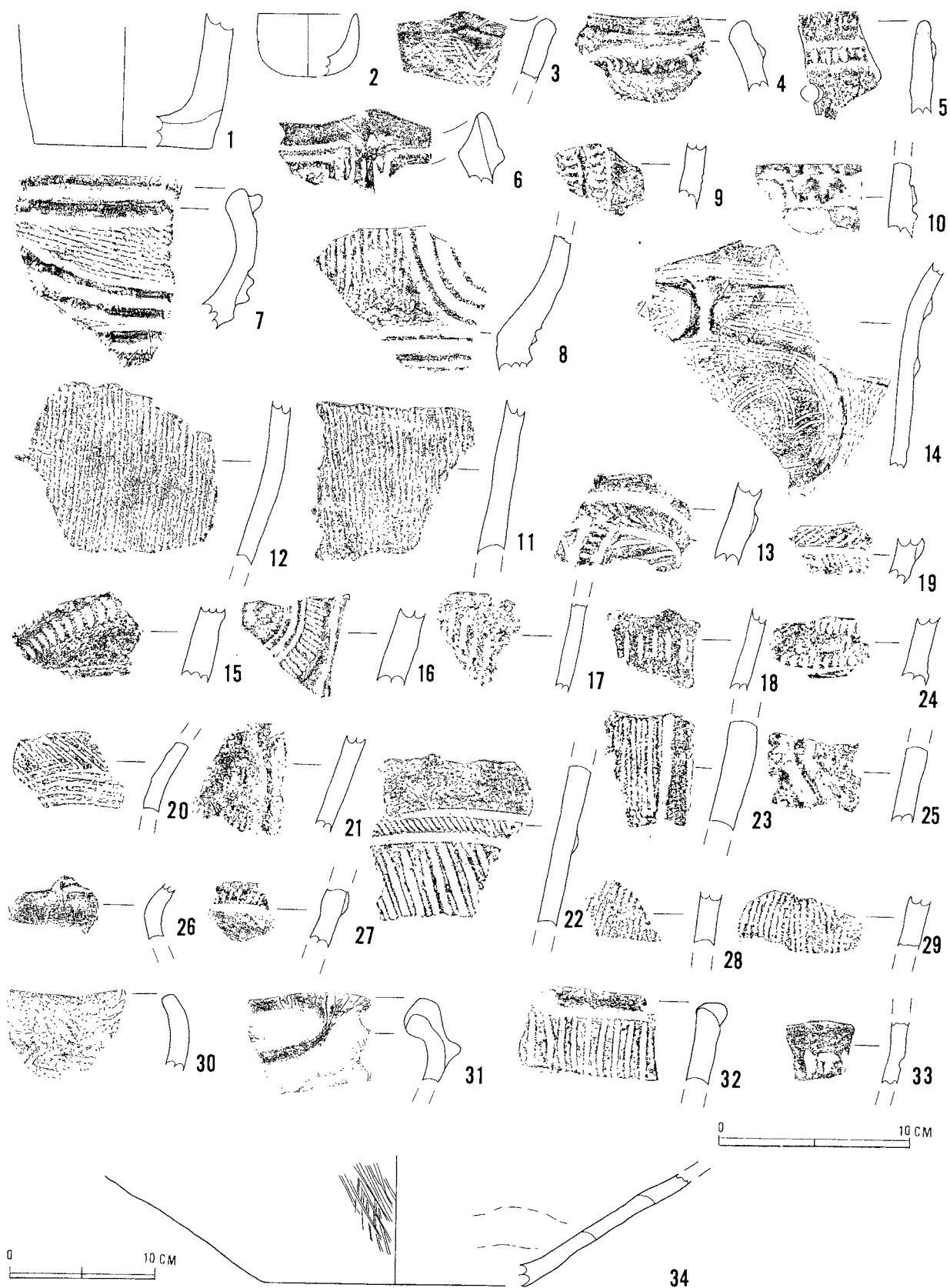
第22図 上前原遺跡第3次2.3号住居跡出土土器 (1/3)



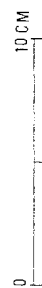
第23図 上前原遺跡第3次 1. 3. 4号集石土墳・1号埋甕 (1/3)・33号集石土墳出土土器 (1/4)



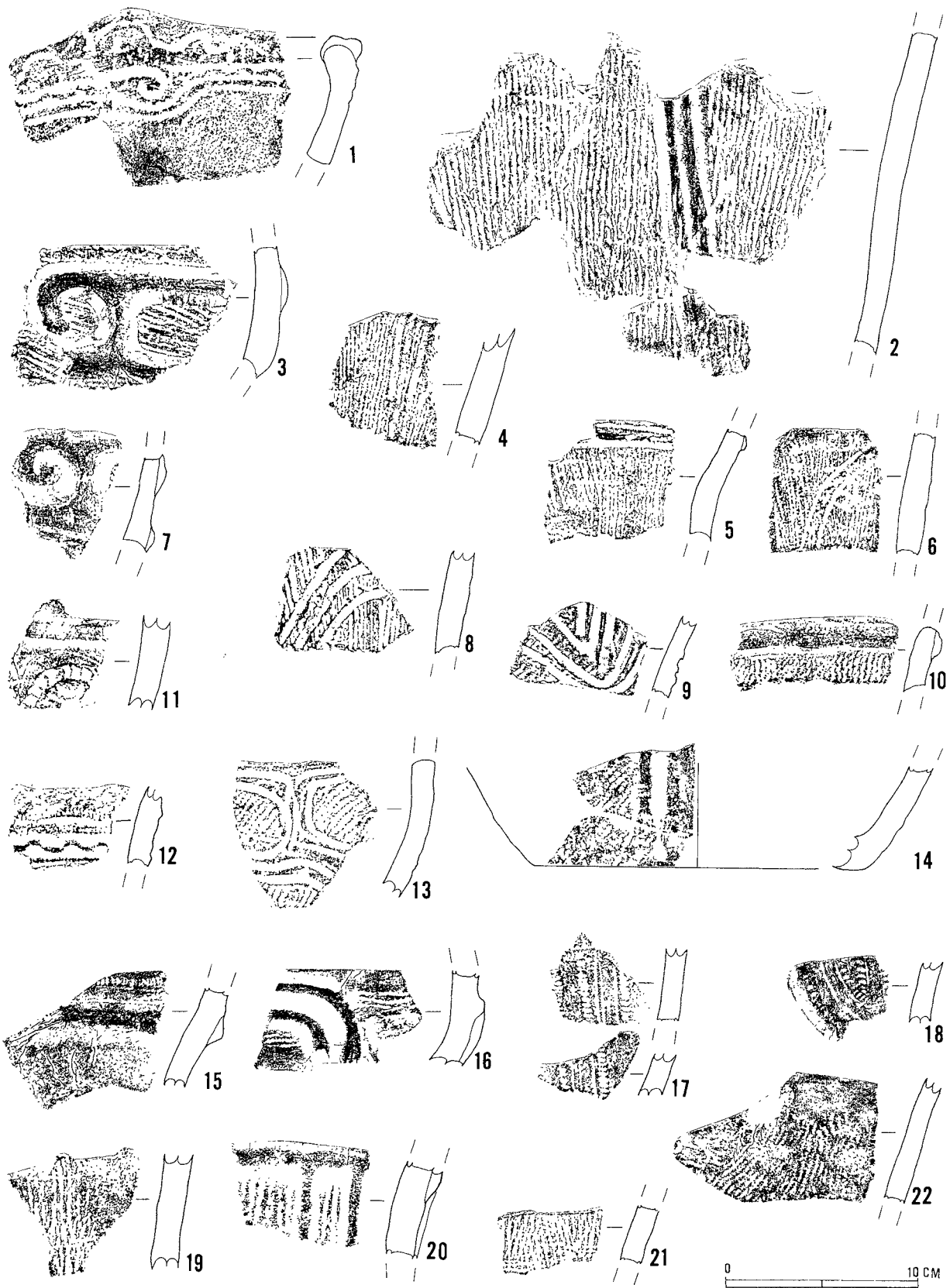
第24図 上前原遺跡第3次7. 9. 13. 14. 16号集石土壙出土土器 (1/3)



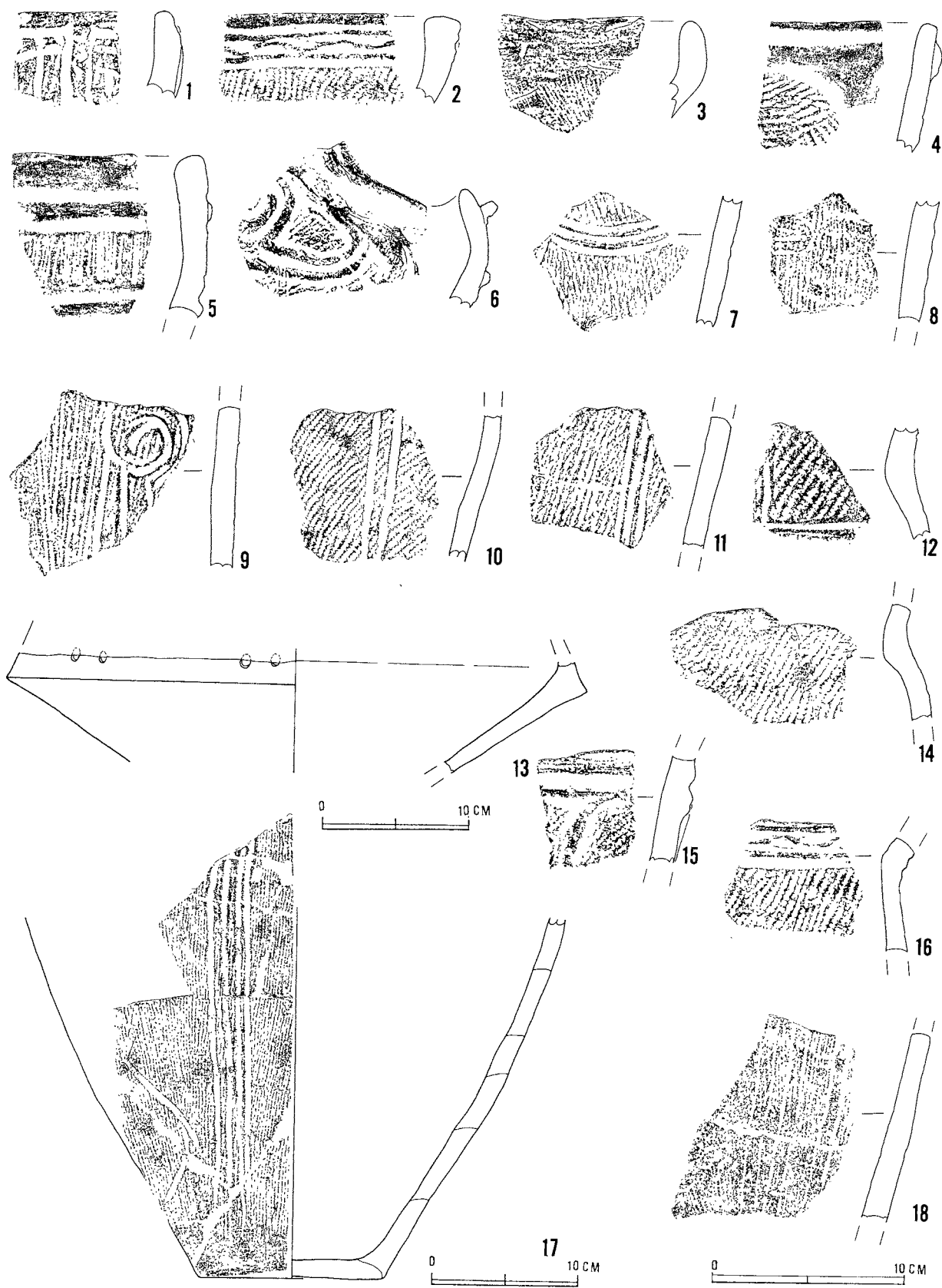
第25図 上前原遺跡第3次16. 17. 24. 26. 29. 30号集石土壙出土土器 (1/3) (1/4)



第26図 上原遺跡第3次8号集石土壙出土土器 (1/3) (1/4)



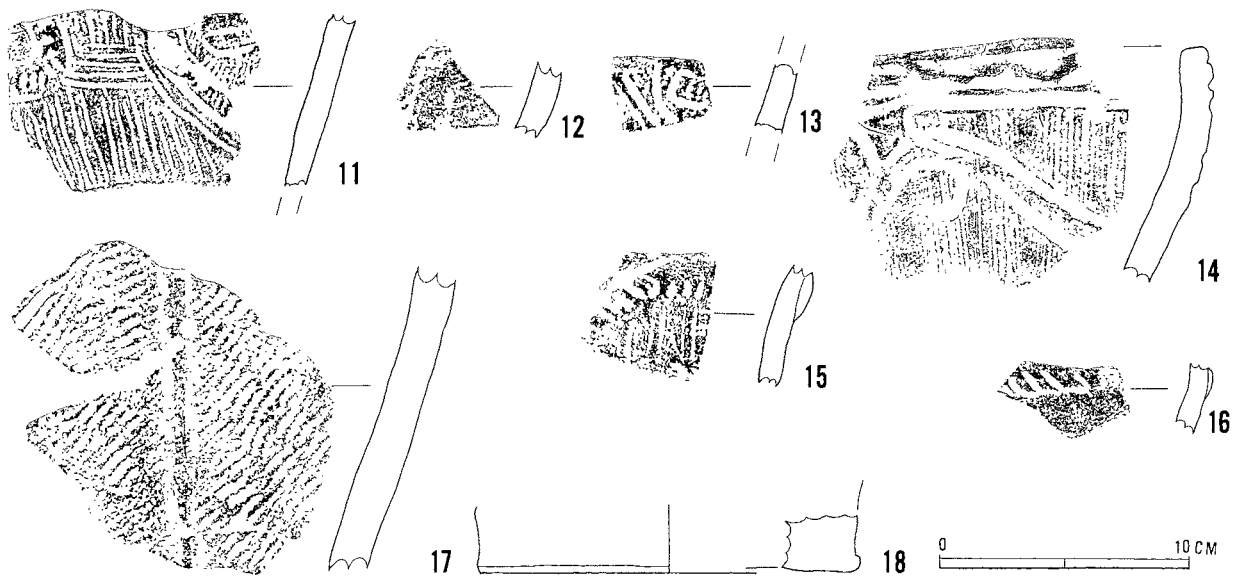
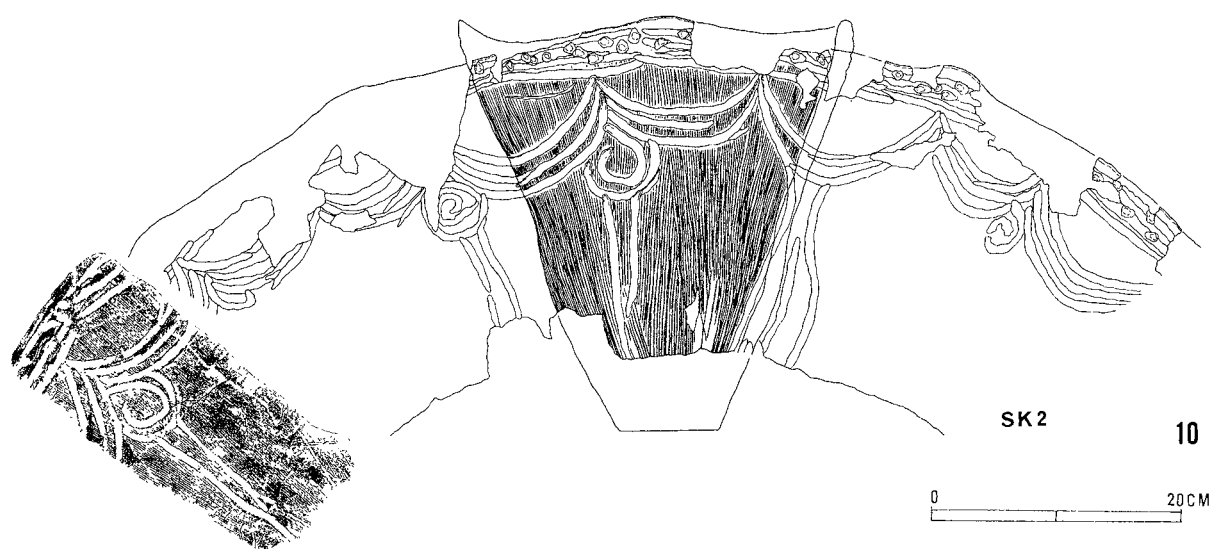
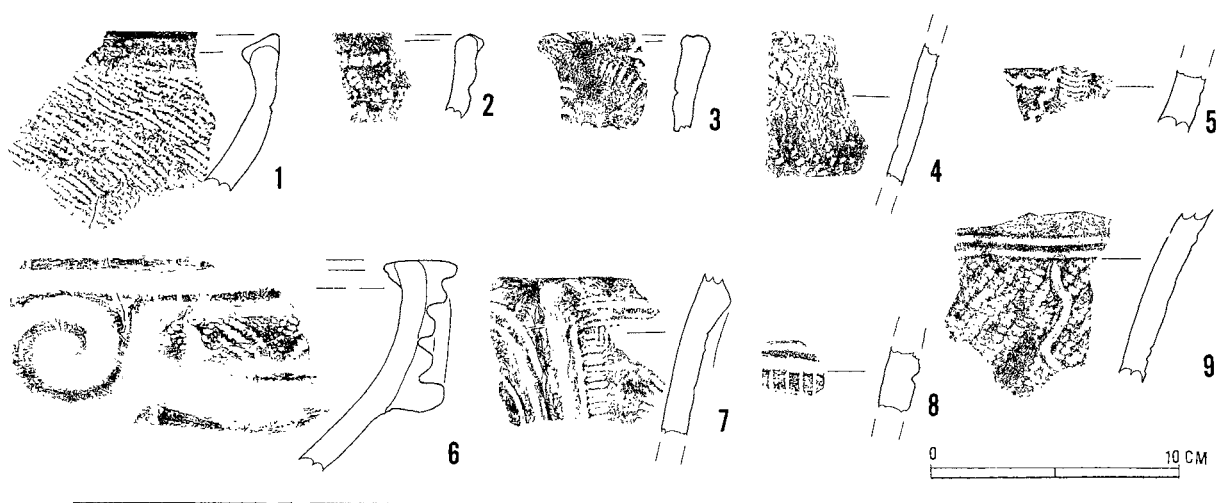
第27図 上前原遺跡第3次33. 35号集石土壙出土土器 (1/3)



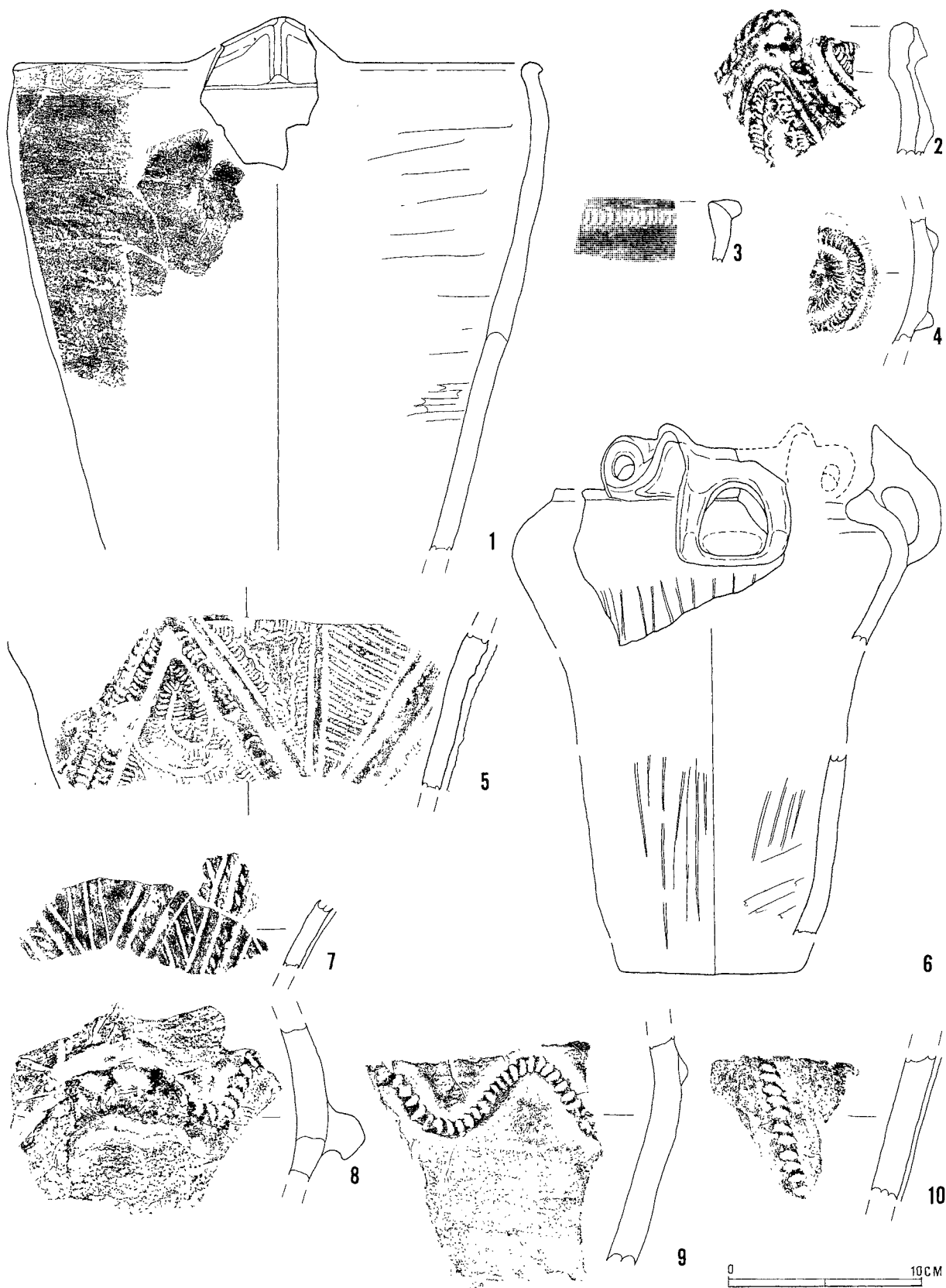
第28図 上前原遺跡第3次36号集石土壙出土土器 (1/3) (1/2)



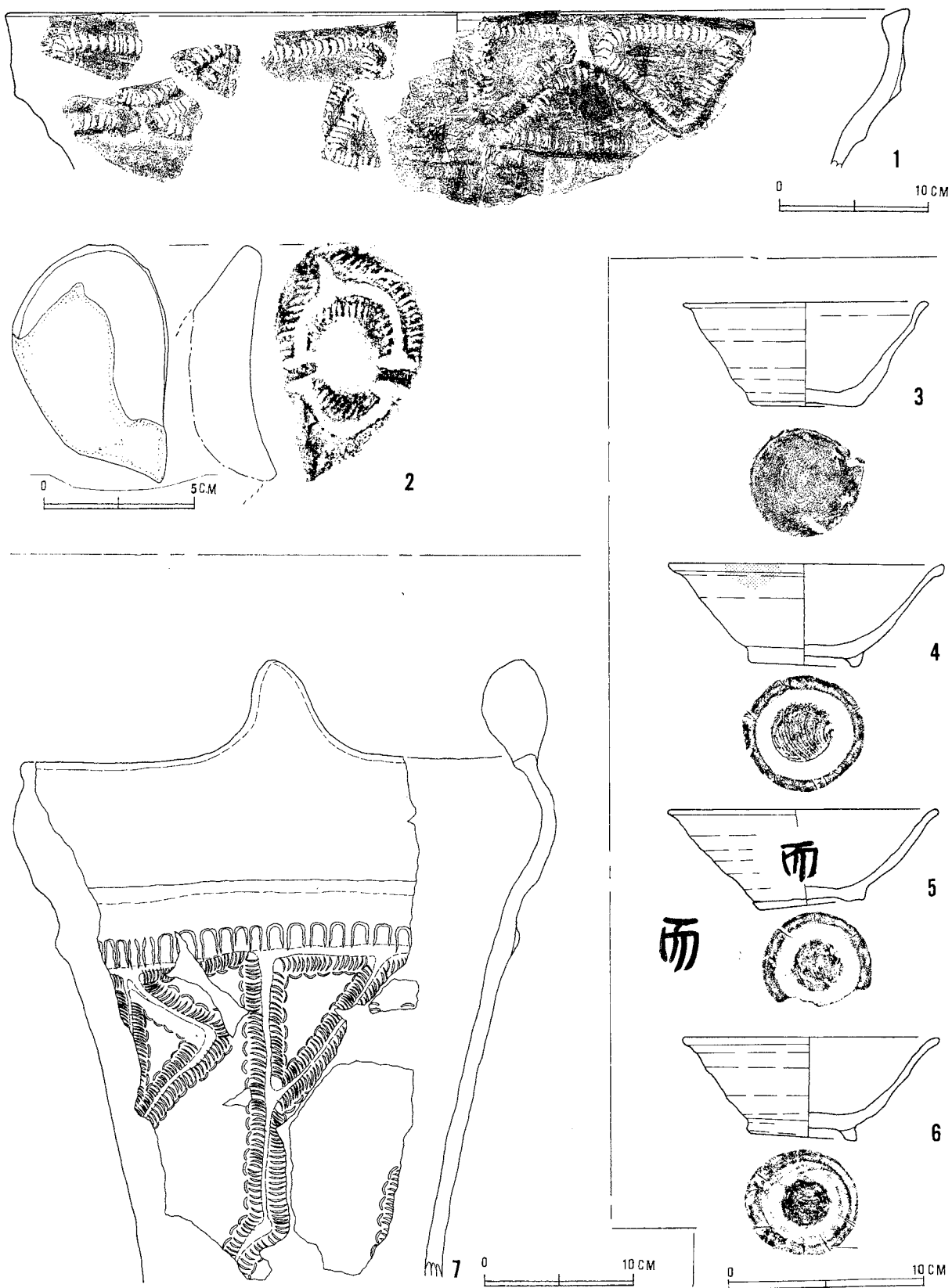
第29図 上前原遺跡第3次38. 40. 41. 43. 44. 45号集石土壙・47号土壙出土土器 (1/3)



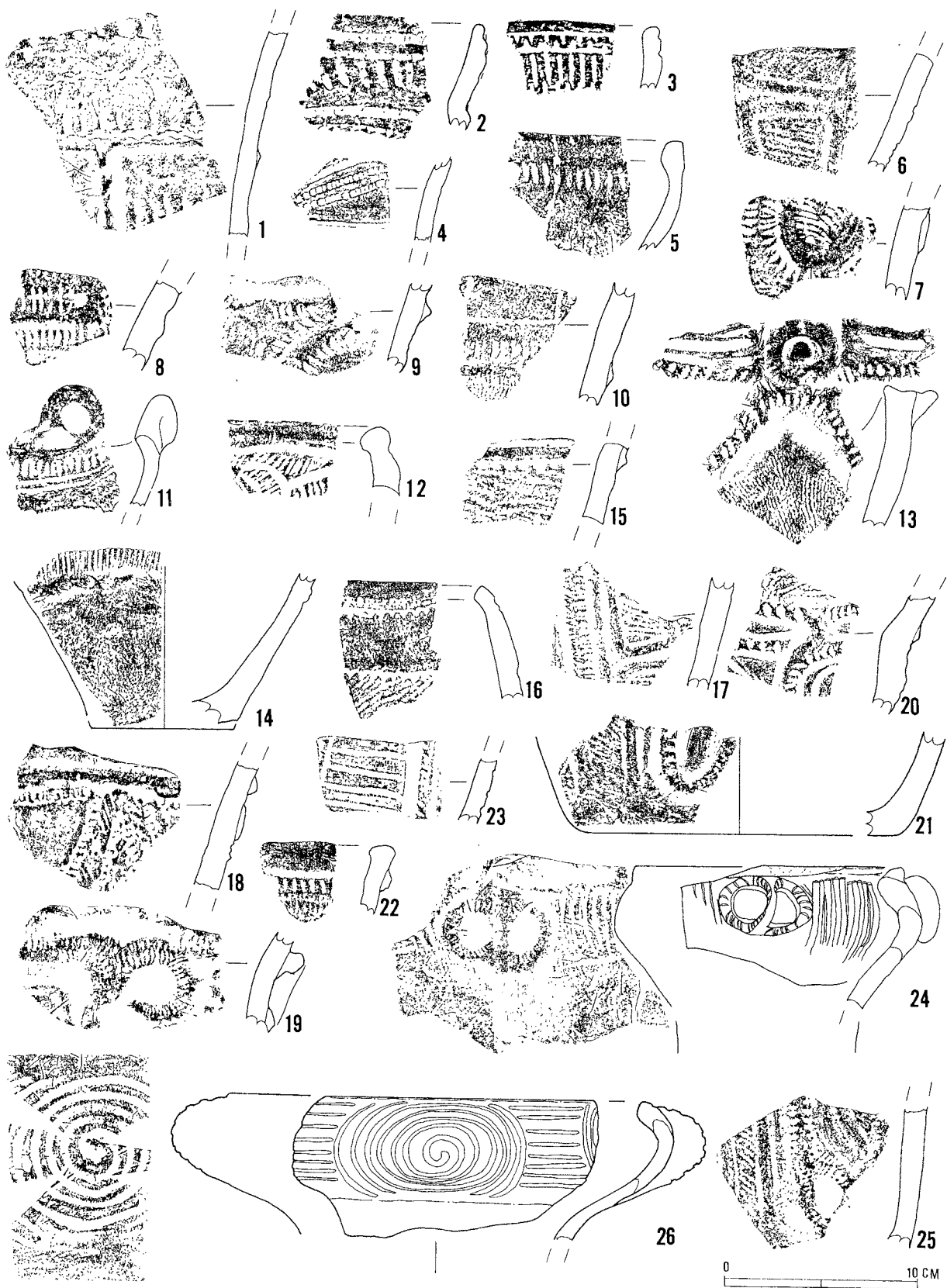
第30図 上前原遺跡第3次 1. 2. 3. 4号土壇出土土器 (1/3)



第31図 上前原遺跡第3次48. 49号土壙出土土器 (1/3)



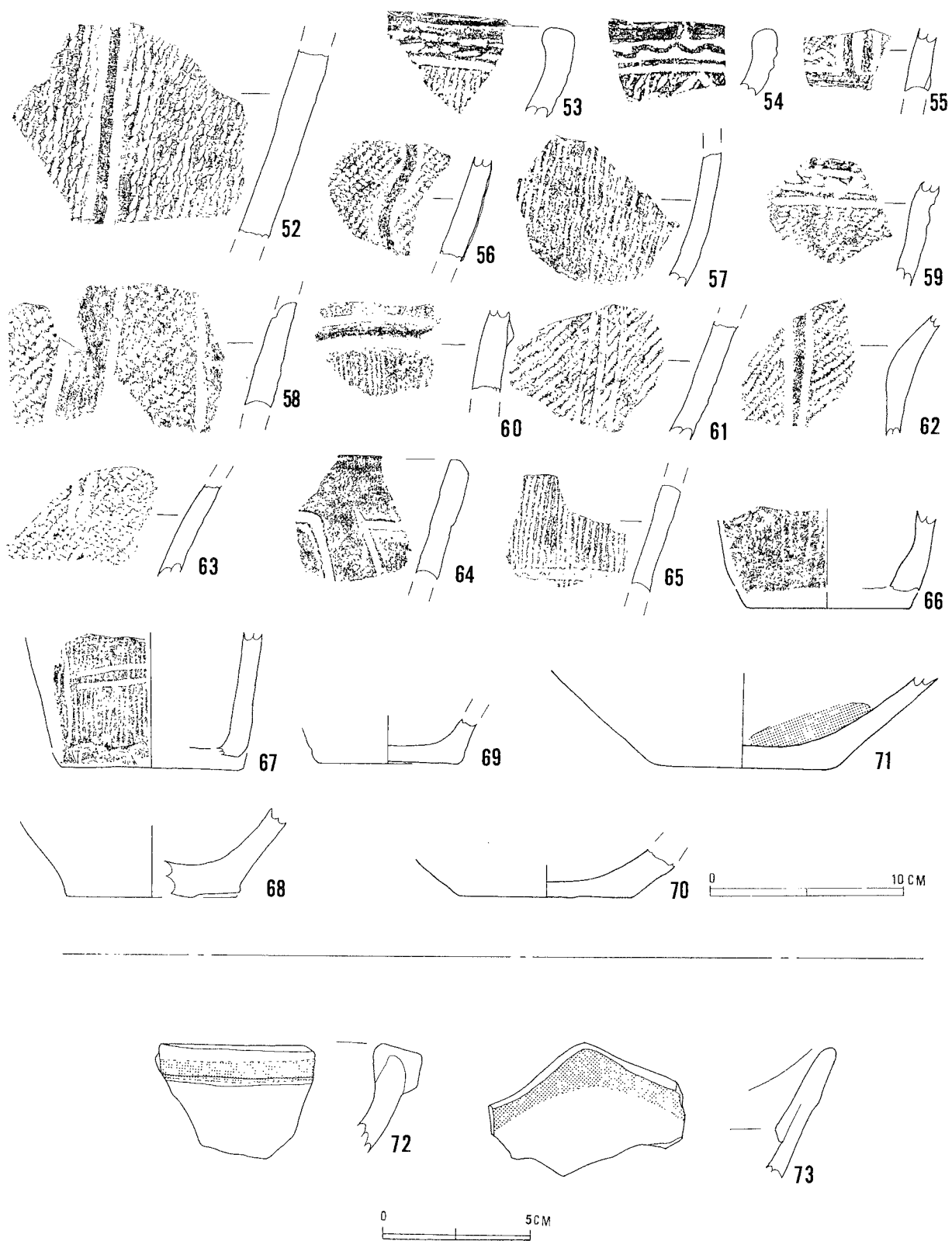
第32図 上前原遺跡第3次7. 46. 48号土壙出土土器 (1/3)



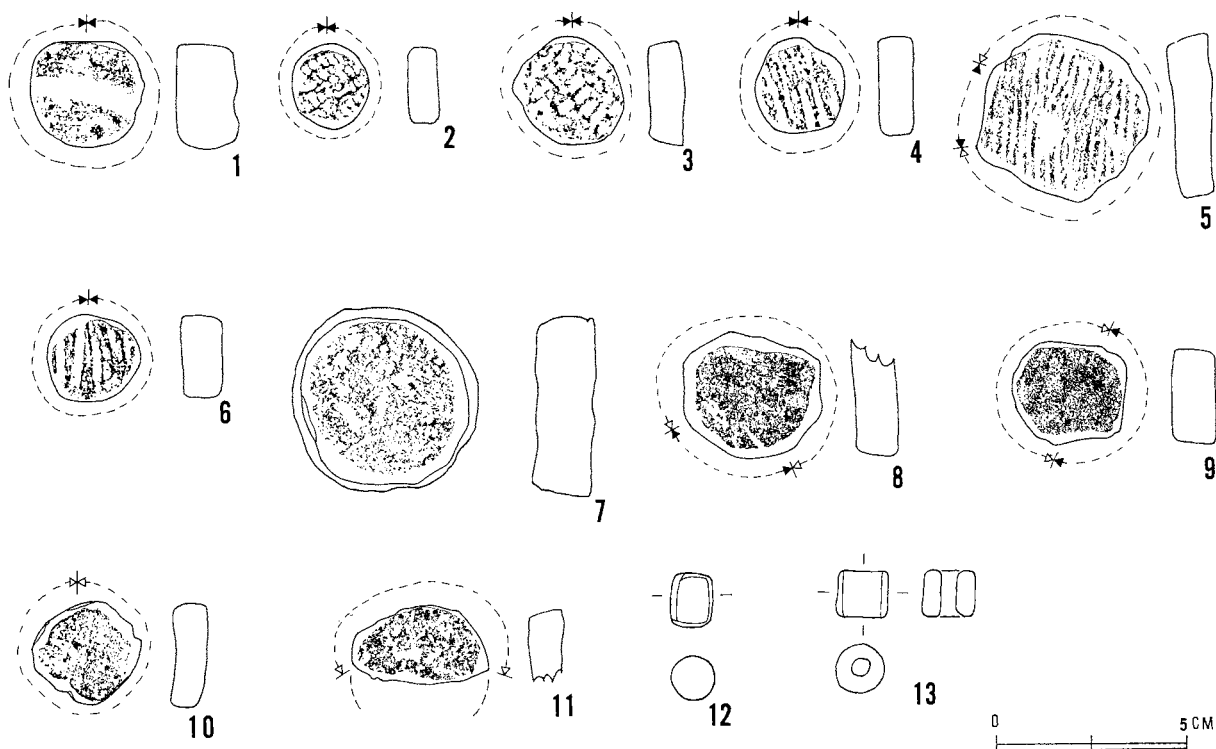
第33図 上前原遺跡第3次包含層出土土器 (1) (1/3)



第34図 上前原遺跡第3次包含層出土土器 (2) (1/3)



第35図 上前原遺跡第3次包含層出土土器 (3) (1/3) (1/2)



第36図 上前原遺跡第3次出土土製円盤、他 (1/2)

4) 出土遺物

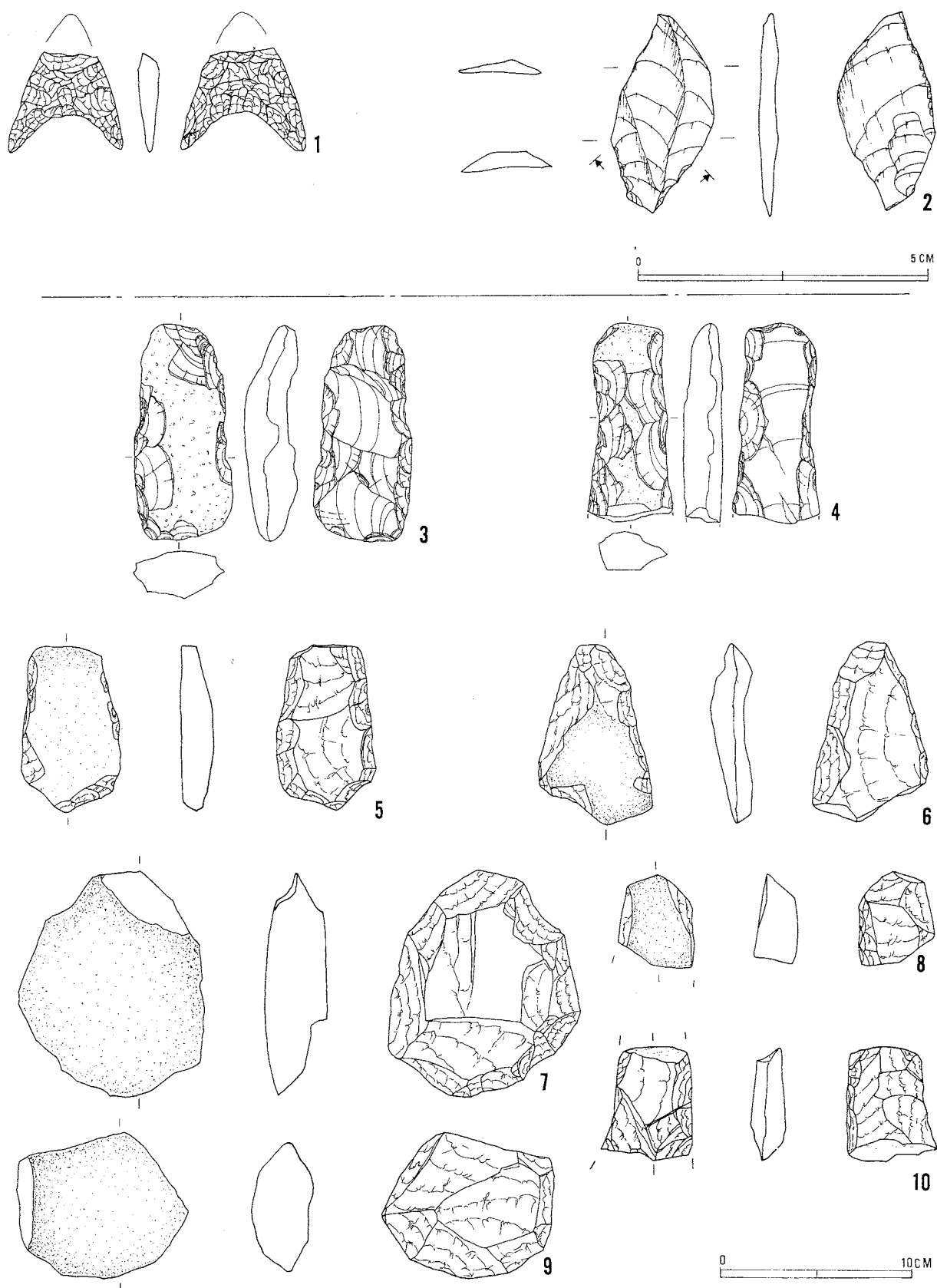
住居跡、土壙から出土した縄文式土器の多くは、ほとんどが破片資料であったがそのいくつかは図上復元をした。2号住居に残された土器は深鉢、浅鉢、甕などの器種が充実している。石器も打製石斧。磨石などが揃っていた。2号住居の一括の出土遺物は江南台地域での勝坂式期の様相知る数少ない資料とし貴重である。

包含層から出土した土器も中期前半から後期まで見られるが、主体は中期前半の勝坂式期から加曾利E2式ころである。また、中部地方の曾利系の土器や阿玉台式系の土器も少量ながら伴っている。

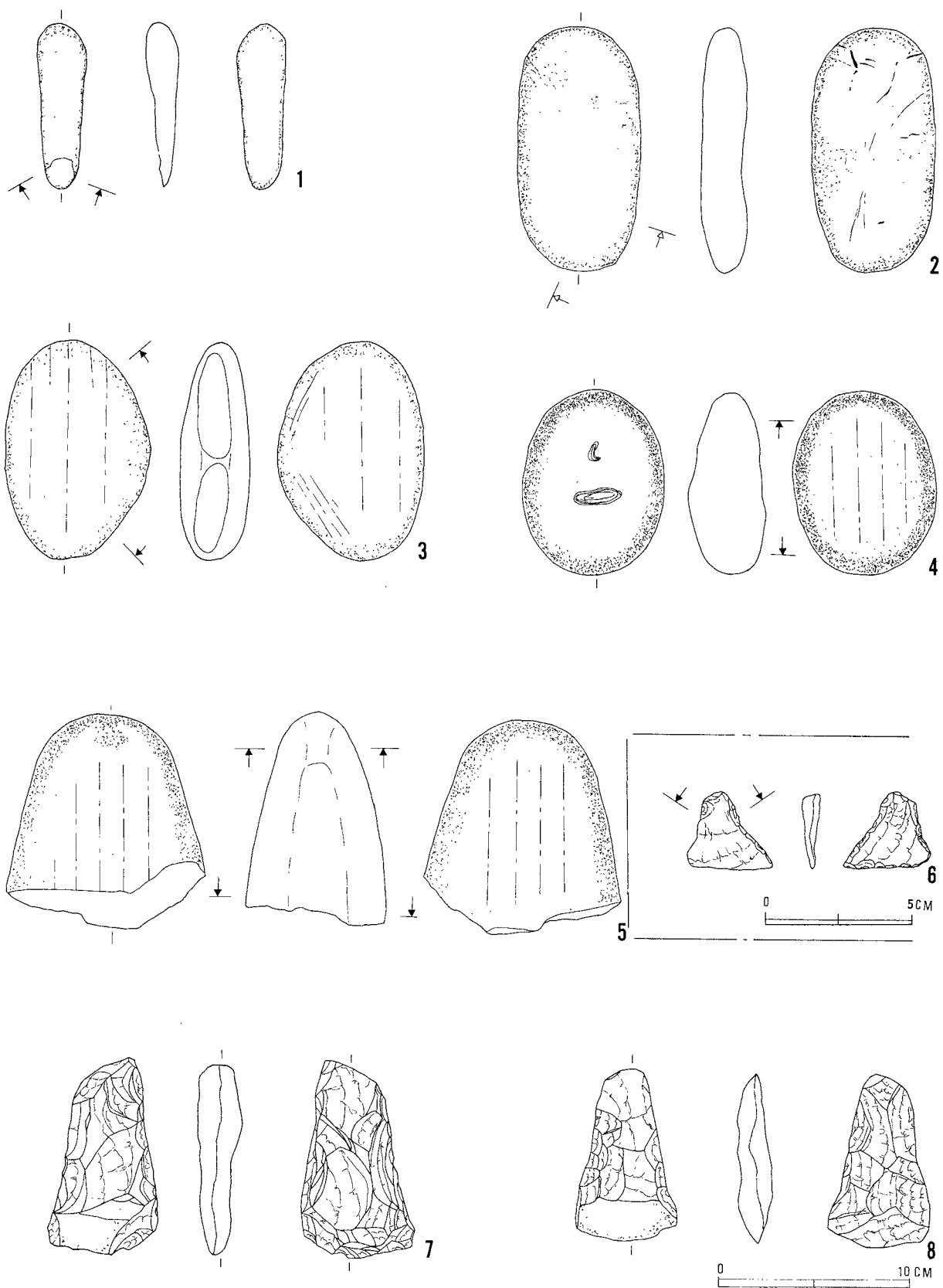
土製品 (第36図)

同時期の土器片を用いた土製円盤 (1～6、8～11) と耳飾 (7、12、13) がある。7は土器片利用ではなく粗製の土製円盤状の製品であり、焼成前から周縁を作り出すことから耳飾である可能性が大きい。12、13は柱状をした耳飾りで13は管状をしている。

石器はナイフ形石器を (第37図2) を除いて、中期から後期に属するもので、1・2号住居跡の出土品に、打製石斧・磨石・搔器が多数見られる。また、集石土壙からは磨石、石皿破片など大型の石器の出土がみられ、被熱赤変している例が多い。さらに、包含層からはこれらの石器類が混在して数多く出土した。



第37図 上前原遺跡第3次1. 2号住居跡出土石器 (1) (1/3)



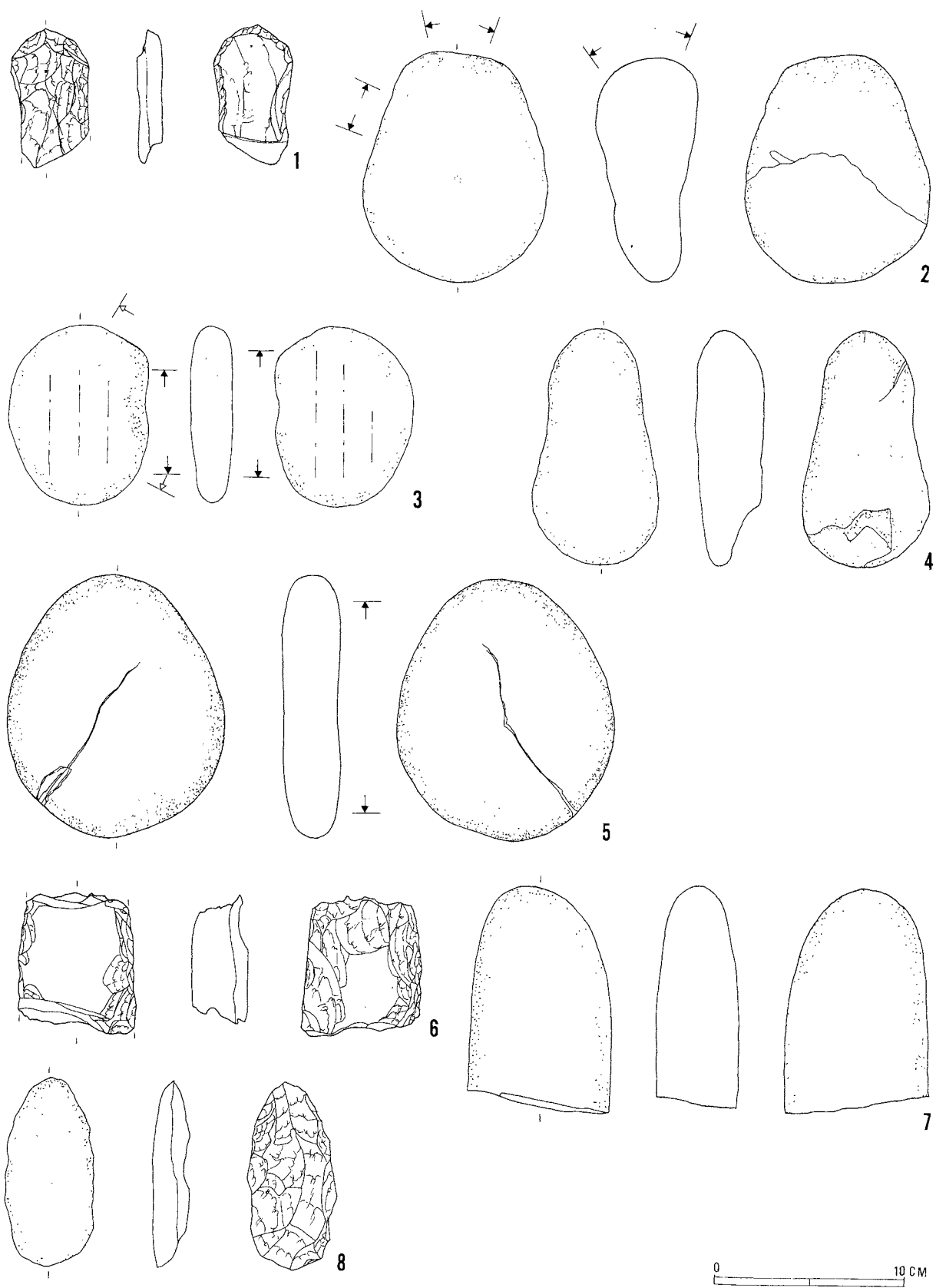
第38図 上前原遺跡第3次 1. 2号住居跡出土石器 (2) (1/3) (1/1)



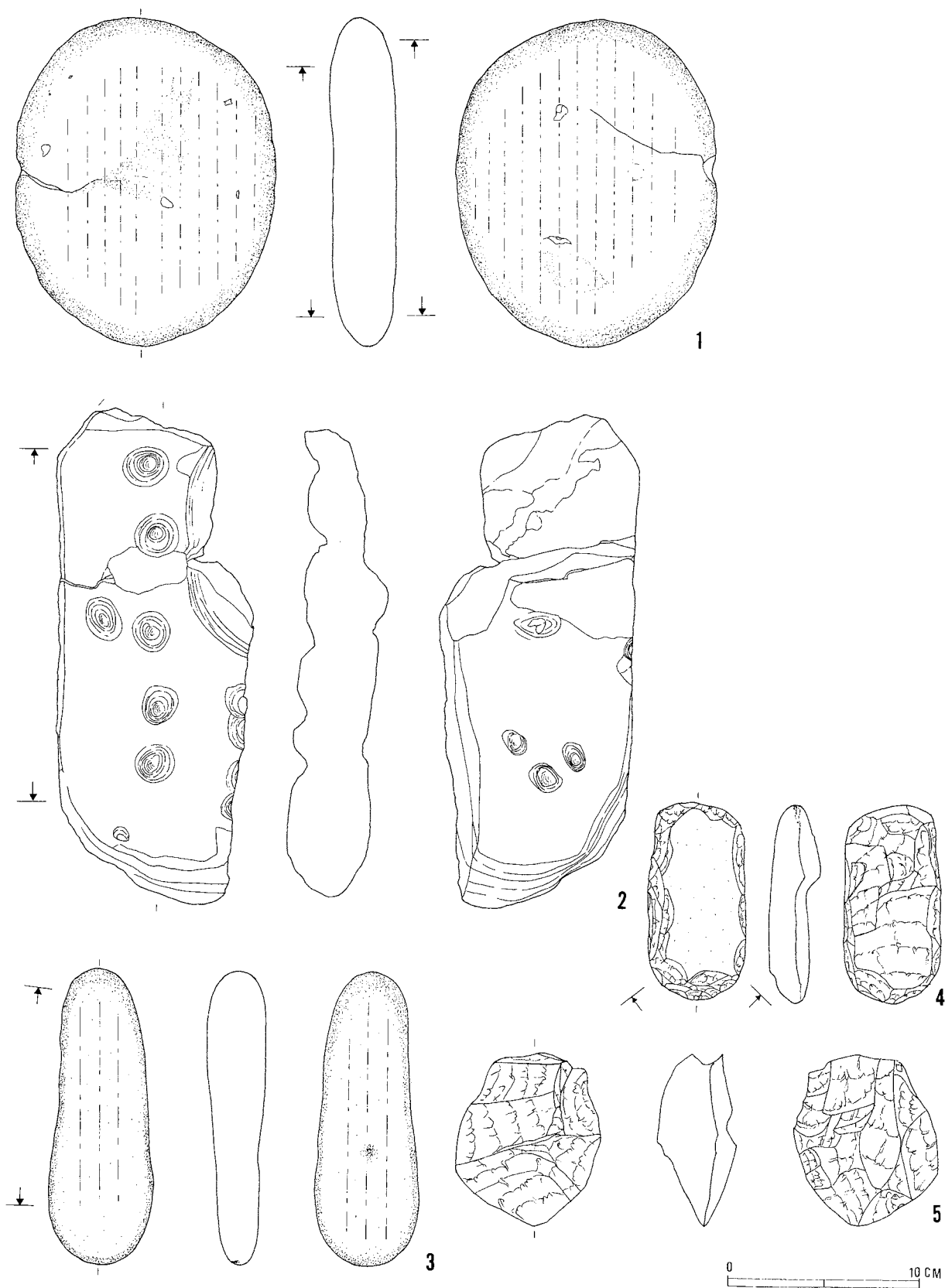
第39図 上前原遺跡第3次2号住居跡出土石器 (1/3)



第40図 上前原遺跡第3次2号住居跡出土石器 (1/3)



第41図 上前原遺跡第3次 2. 3. 5. 14. 16. 19. 22号集石土壙出土石器 (1/3)



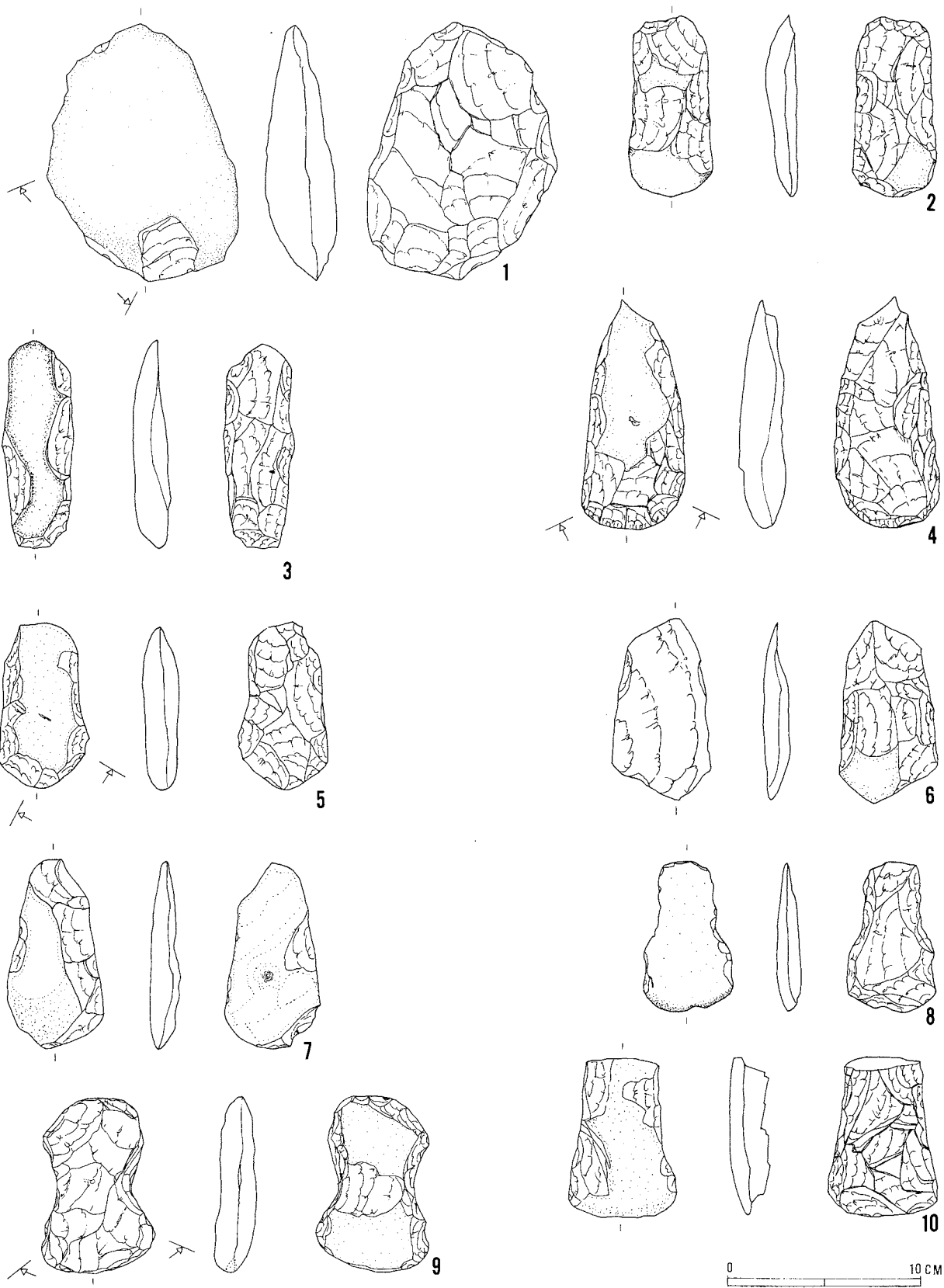
第42図 上前原遺跡第3次19. 29. 30. 38. 40号集石土壙出土石器 (1/3)



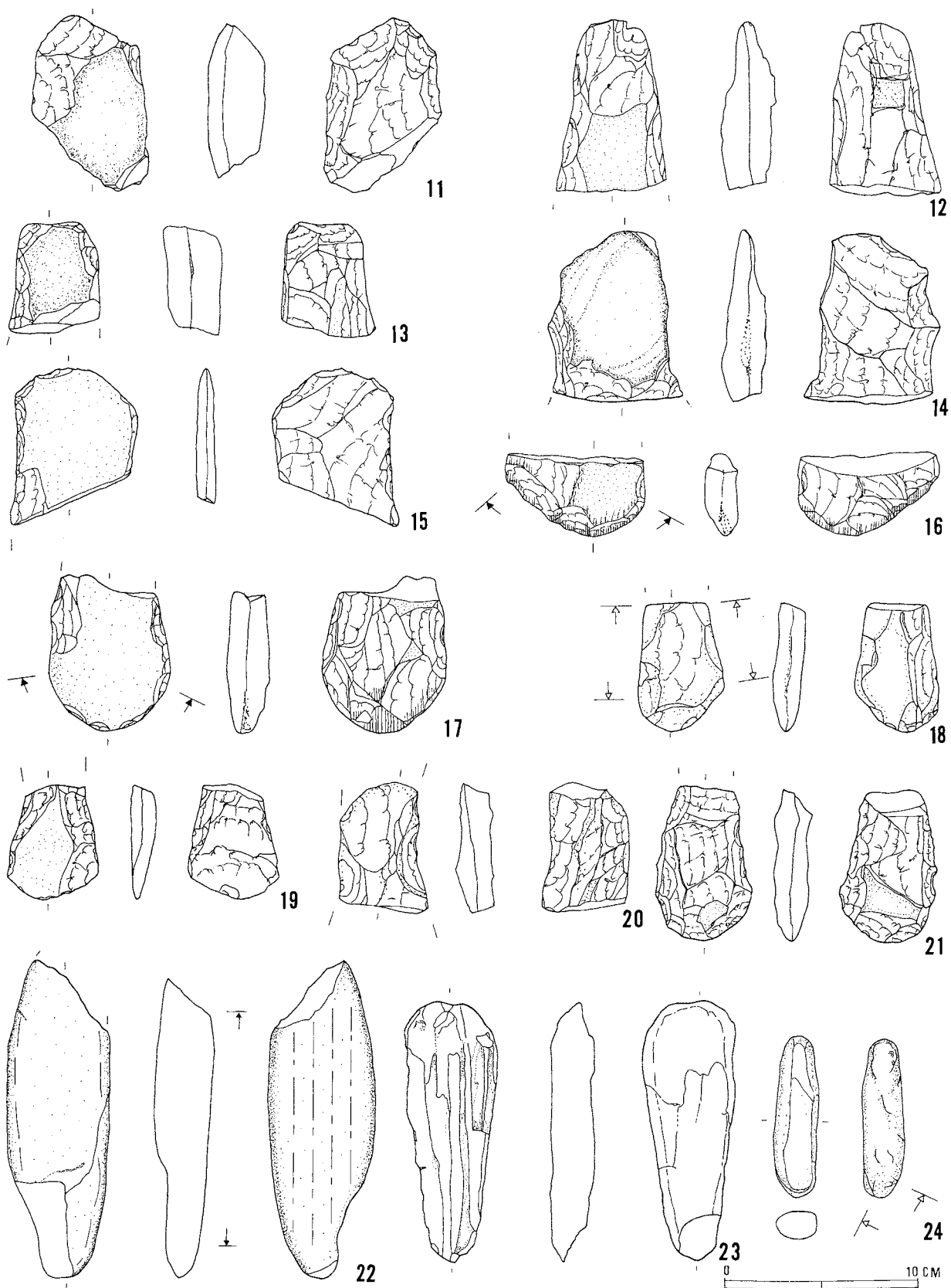
第43図 上前原遺跡第3次42号集石土壙出土石器 (1/3)



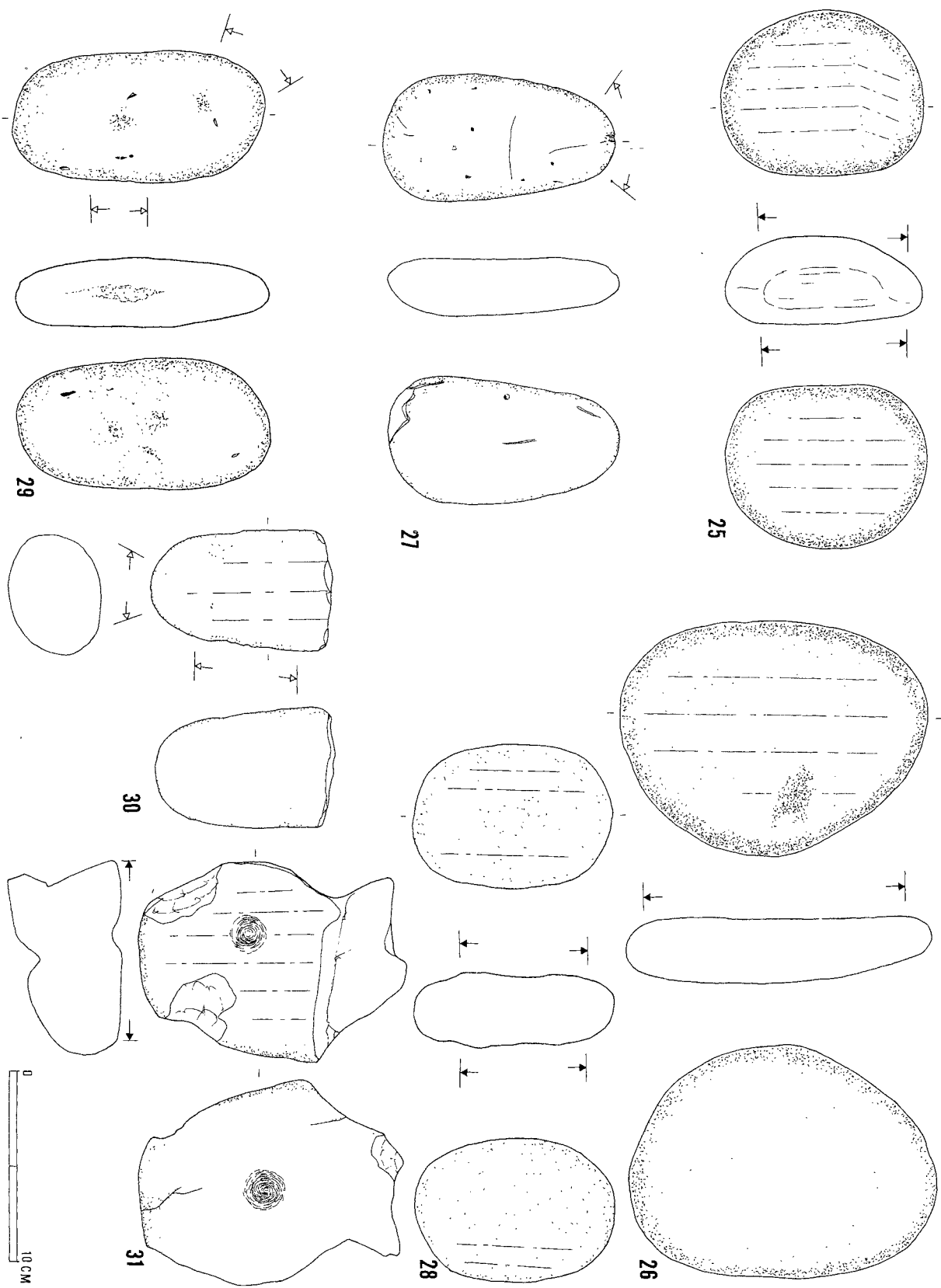
第44図 上前原遺跡第3次 1. 3. 47号土坑出土石器 (1/3) (1/2)



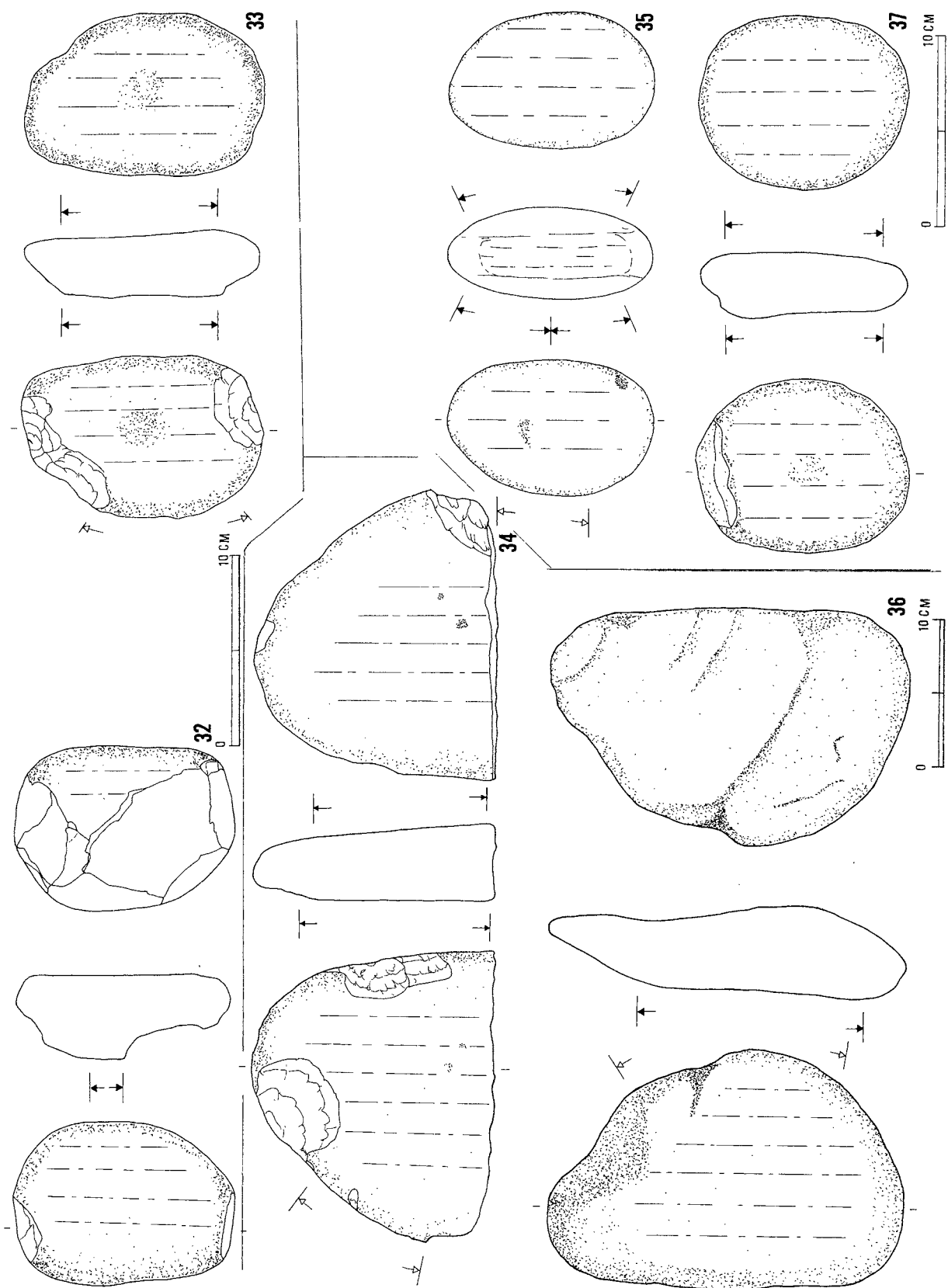
第45図 上前原遺跡第3次包含層出土石器(1)(1/3)



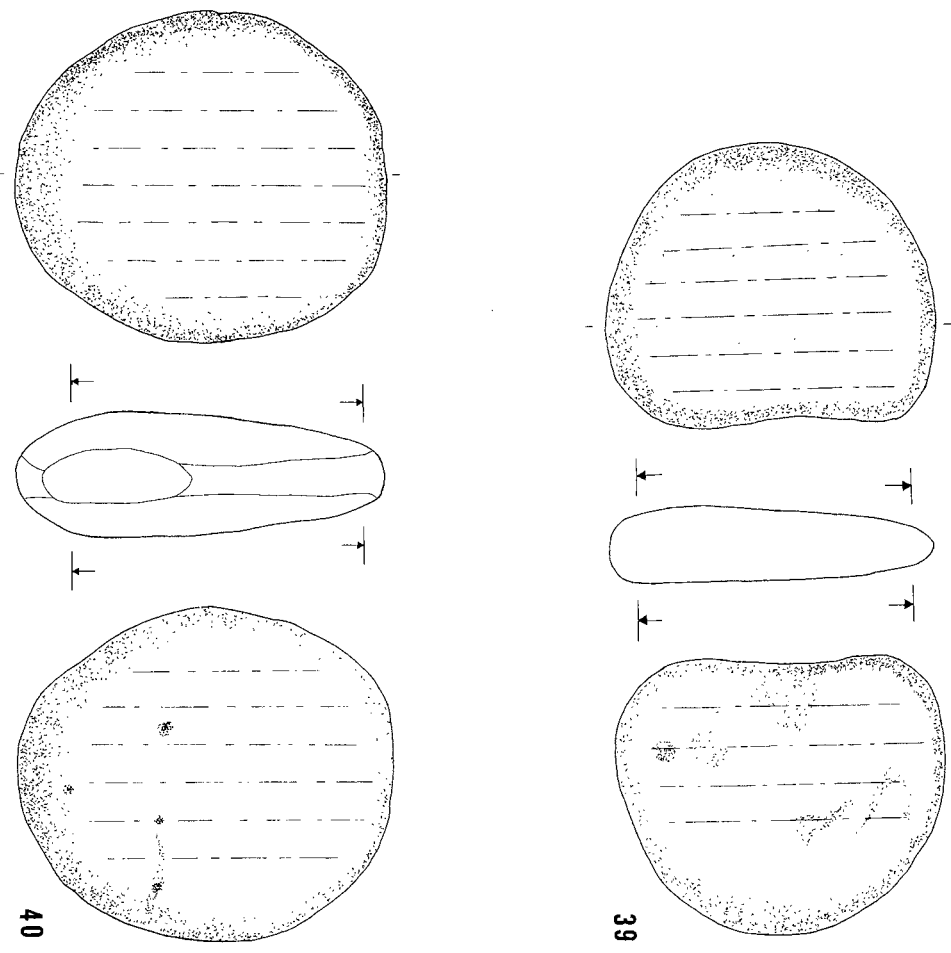
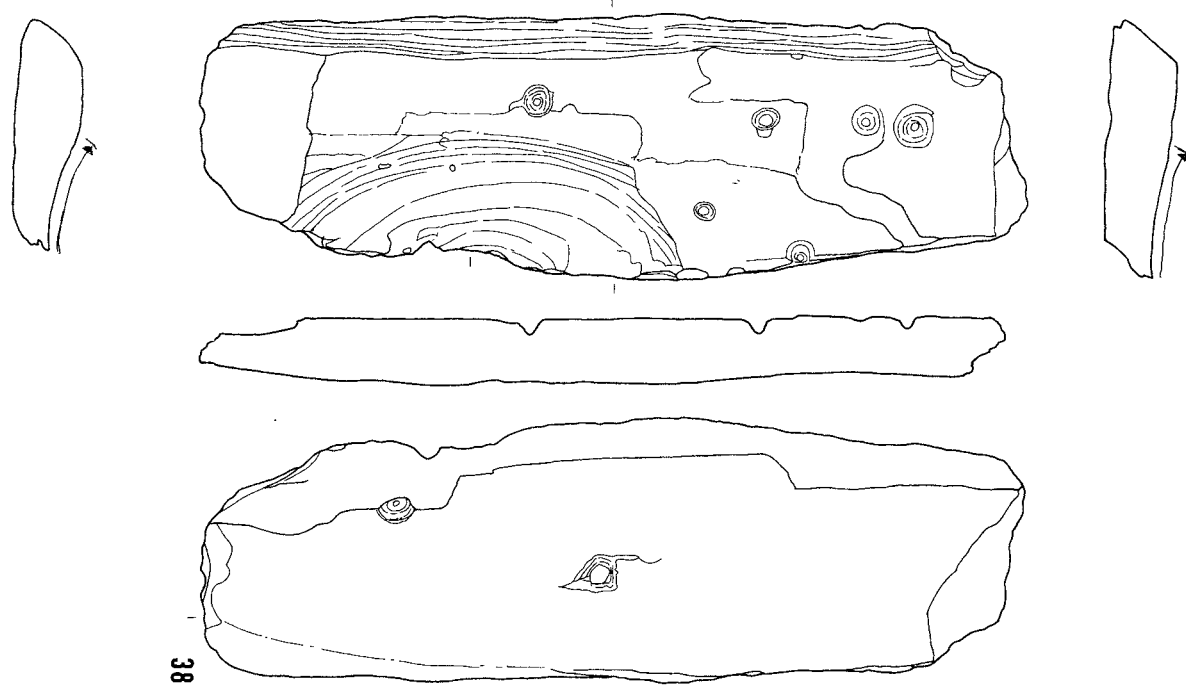
第46図 上前原遺跡第3次包含層出土石器(2)(1/3)



第47図 上前原遺跡第3次包含層出土石器(3) (1/3)



第48図 上前原遺跡第3次包含層出土石器 (4) (1/3) (1/4)



第49図 上原遺跡第3次包含層出土石器(5)(1/4)

2 第4次調査地点

1) 住居跡

1号竪穴式住居跡（SI 1 第51図） 調査区の東側に二分の一ほどを検出した。掘り込みははっきりせず床面と思われる硬化面が確認された。住居壁際を巡ると考えれる周溝痕跡が認められることから、その遺存部分を考慮すると直径約8mを測る本来円形の竪穴住居跡式住居であったと推定された。柱穴はいくつか認められた小ピットが相当すると考えられる。炉跡は調査区内では検出できなかった。出土遺物は土器碎片、石器等が検出された。

2) 土 壙

1号土 壙（SK1第51図） 平面楕円形、長さ3.1、幅1.6mを測る。底部は不整形で凹凸があった。縄文土器碎片が出土しているが出土量は少ない。

2号土 壙（SK2第51図） 平面楕円形、1.4×1.6mを測る。播鉢状に掘り込まれ、底部は平坦になっている。ほとんど遺物は出土していない。

3号土 壙（SK3第51図） 平面は長方形で、2.1×1、深さ25cmを測る。一部溝に切られるが底面までは達していない。墓壙の可能性が強いが、出土遺物はまったくなかった。

その他、時期不詳の小ピットが多数検出された。

3) 溝

1号溝（SD1第51図） 集調査区を北東南西方向に走る二条の小溝が検出されている。溝幅は約40cmで、両溝はほぼ並行して走っていることから溝芯で約2.4mの道路状遺構の側溝である可能性がある。出土遺物はなかった。

4) 出土遺物

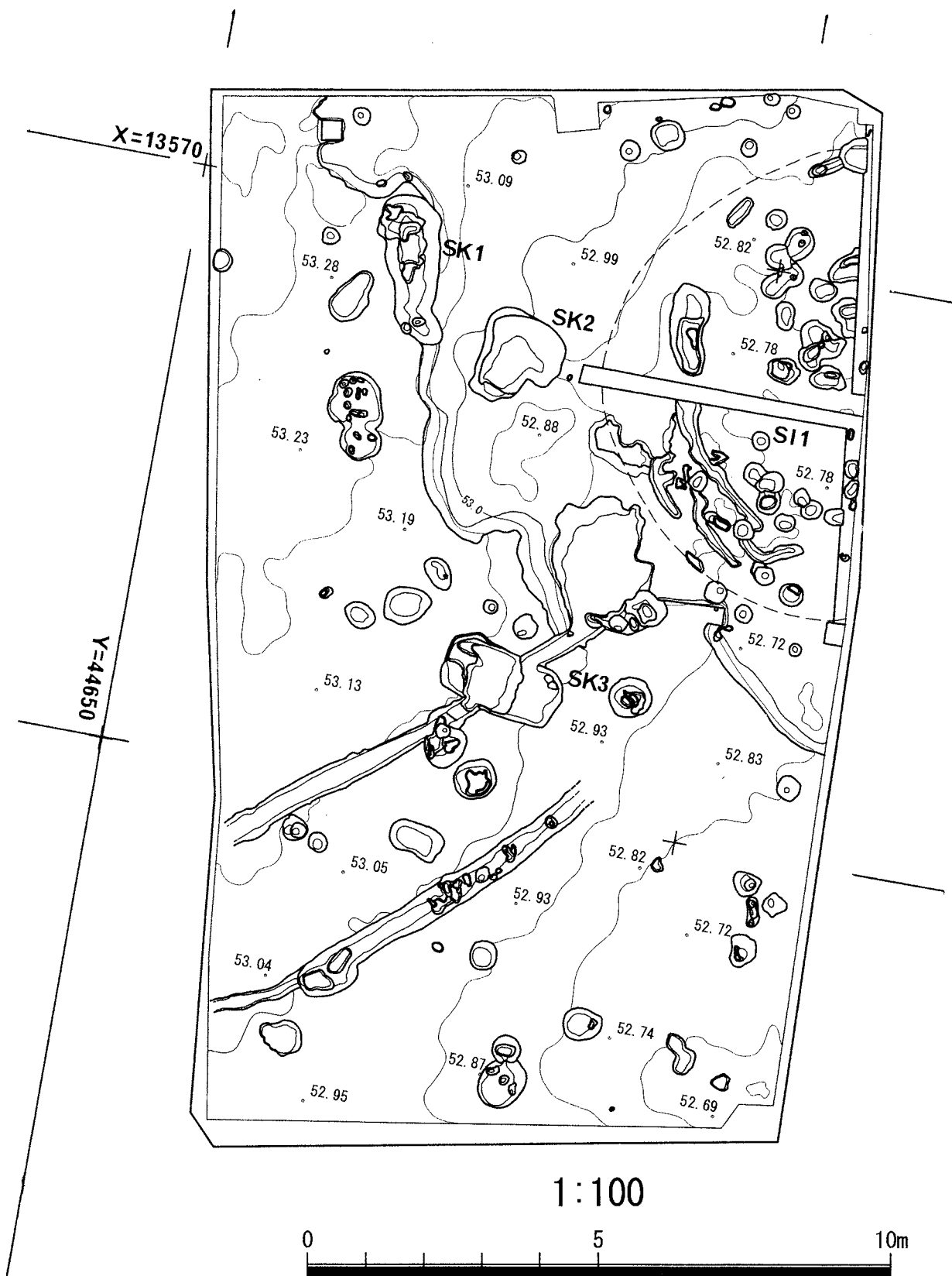
縄文式土器（第52・53図）

出土土器は遺構に伴う出土状態ではなく、包含層及び遺構覆土中からの検出であった。土器の形式は縄文時代後期の堀之内式期、称名寺式期の土器が主体を占めるが、いずれも細片で全体を残すものではなかった。52図1～10は沈線内に縄文を残し器面をよくナデでいる土器である。52図11はワラビまたはJ字状の沈線模様を描く土器である。53図1は波状口縁を呈する口縁突起のひとつである。他の土器も薄手で比較的焼きのよいものがみられる。住居跡、土壙など本調査区の遺構の期間を示す土器群である。

石器（第53・54図）

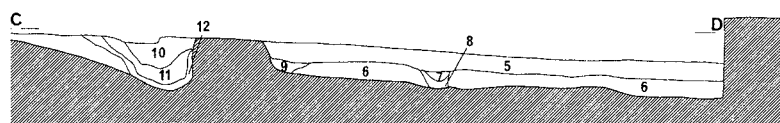
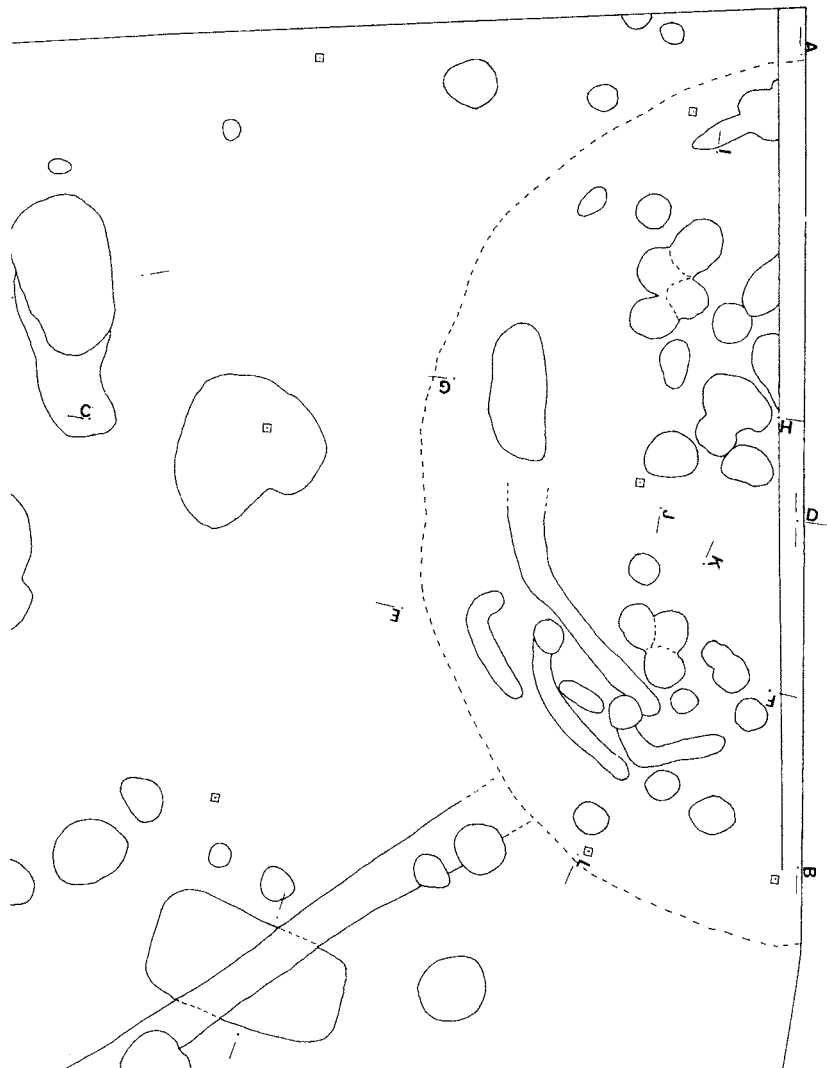
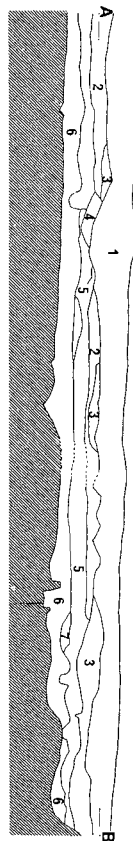
土器と同様に包含層、遺構覆土からの検出が主体である。1～5は礫器である。いずれも手持ちの良ように楕円礫の一方を大きく打ち欠き刃部としている。縄文時代早期の所産と推定され、第1次調査地点では大量に出土している。

6～9は打製石斧としたものであり、7、9は比較的整った撥形をしている。10、12は剥片を使用した搔器である。11は磨石である。



第50図 上前原遺跡第4次発掘調査地点 (1/100)

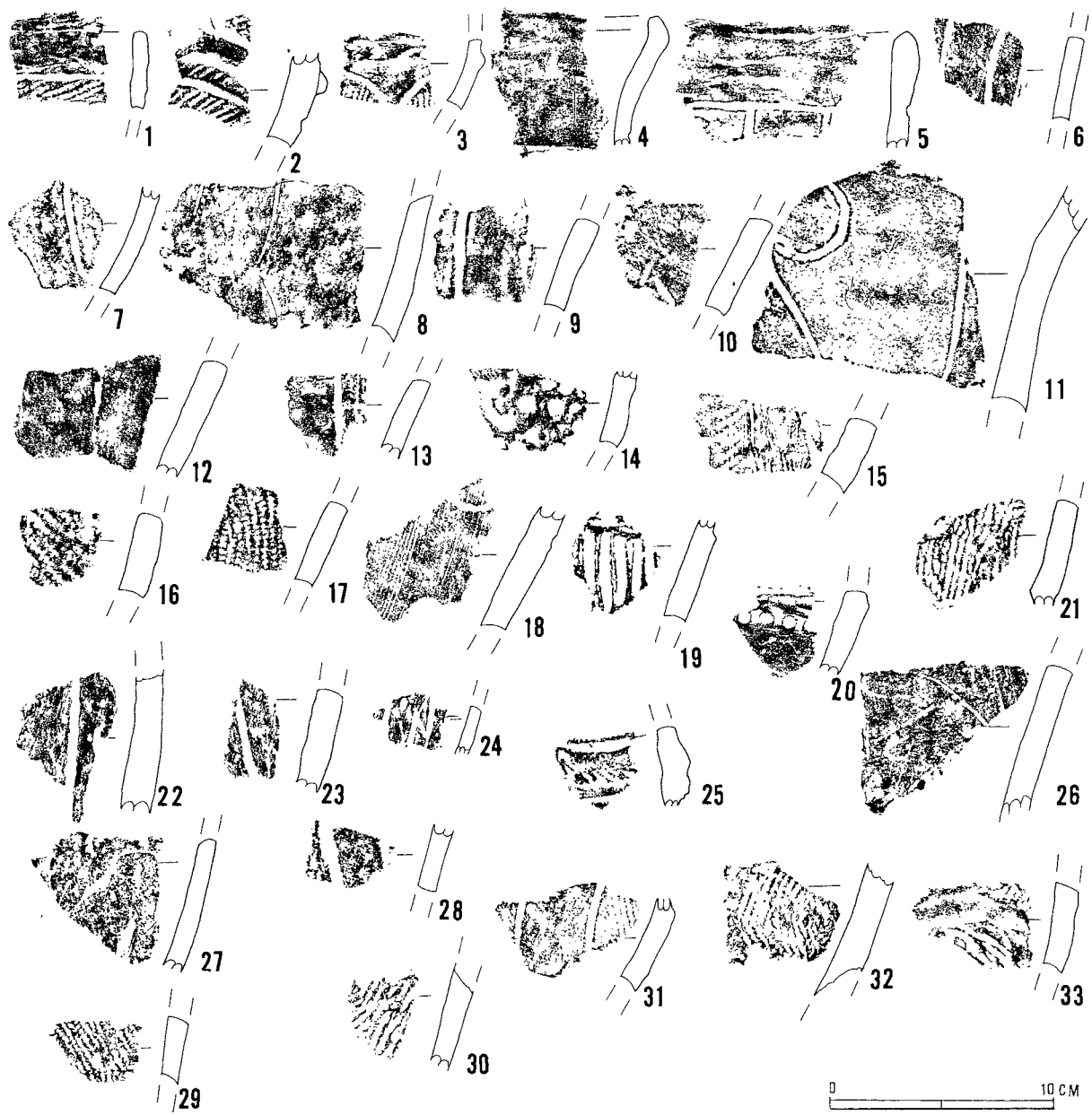
1. 黒褐色土 細粒砂質、縄文土器を含、耕作土。
2. 黒褐色土 ローム土を塊状に含。
3. 茶褐色土 ローム土多。
4. 黒褐色土 細粒。
5. 黒褐色土 黒褐色土、細粒、粘質。
6. 黄褐色土 ロームブロック塊黒色土から成る混合土、貼り床状。
7. ロームブロック塊質。



5. 黒褐色土 やや黄味あり。西側。
6. ロームブロック
10. 黒褐色土
11. 黒色土
12. 黄褐色土

0 2M

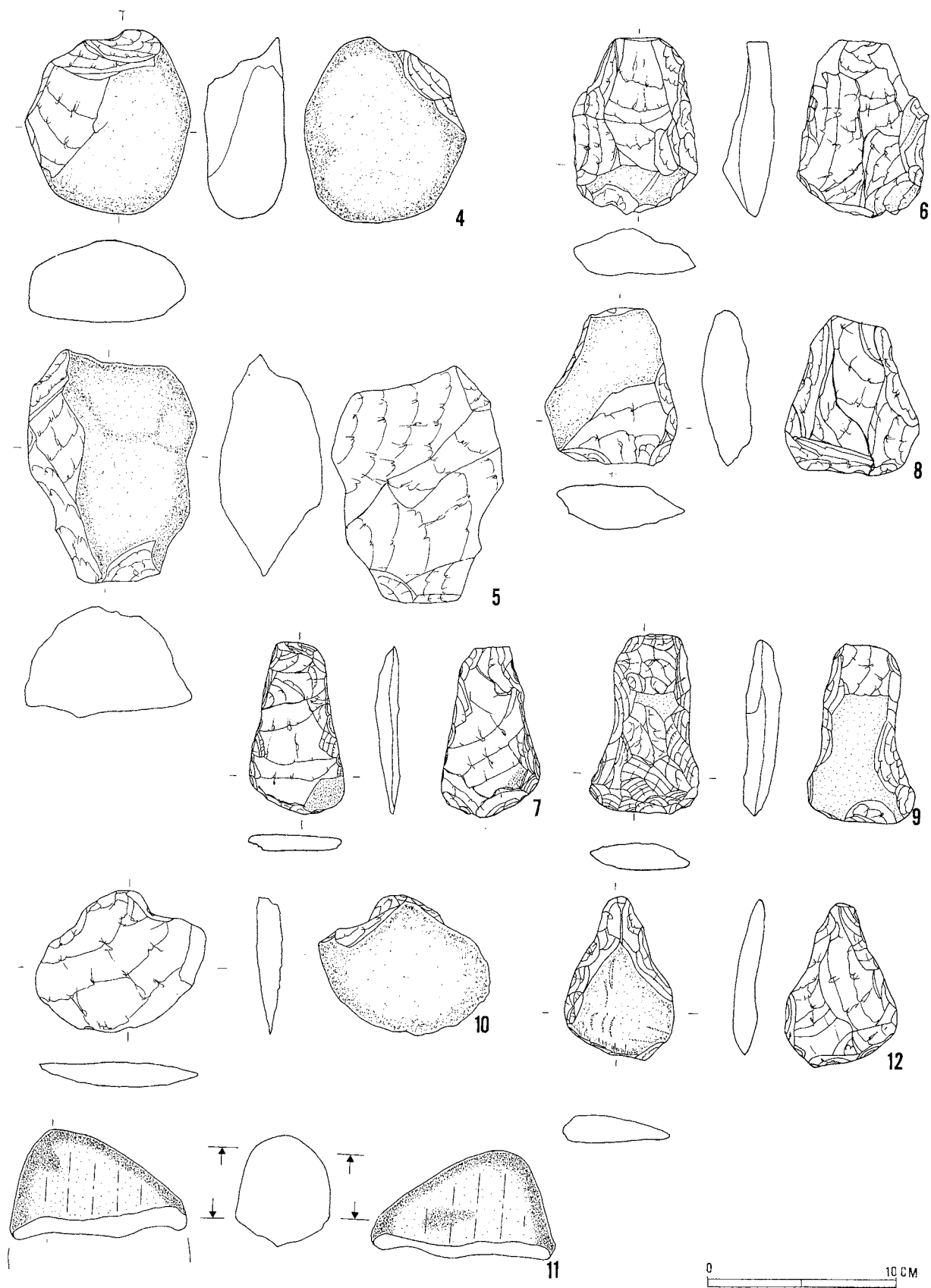
第51図 上前原遺跡第4次1号住居跡 (1/80)



第52图 上前原遺跡第4次第1. 3. 4. 5. 6. 7. 12号土坑出土土器 (1/3)



第53図 上前原遺跡第4次出土土器・石器 (1/3)



第54図 上前原遺跡第4次出土石器 (1/3)

3 調査のまとめ

3次・4次調査では、上前原遺跡の空間的な広がりとその時代を知る手がかりを得た。3次調査による出土遺物から縄文時代中期勝坂式期の集落と集石群の具体的な営みが明らかになった。荒川流域に面する江南台地上には同時期の遺跡の確認数はあまりないが、集石を伴う遺跡が上流域から寄居町南大塚遺跡、同貉沢遺跡、深谷市上本田遺跡、同船山遺跡、熊谷市西原遺跡、同権現坂遺跡などが知られ、当時の人々の定住と移動の実態を語るものと想定がなされている。上前原3次調査地点に運ばれた石材の総量は2.5トンに及ぶ、加熱を受け細片になった石材はたいてい一抱えもあるような河原石であったようで、打斧のような石器素材とは使用目的を異にして運ばれたことがわかる。

また、この時期、他地域に分布の中心を持つ土器群が含まれていることは他の遺跡でも知られているところであるが、今回の調査では曾利系土器が多く目についた。

4次調査では台地の奥部に縄文時代後期の住居が営まれたことが明らかになり、台地縁辺から台地奥部への集落の拡張または移動があったことを想定させる。

時期は下るが平安時代墓壙の発見は他の遺構が調査区外に広がる可能性があるものの、台地縁辺部の古代土地利用のあり方を知ることができる。当時の墓地の例は少なく、どのような社会的地位にあったのか興味深い。とくに墨書土器が供えられていたことは、墨書土器の性格の一端を考える契機にもなる。

第1表 上原遺跡第3・4次出土土器観察表

第3次1号住居跡 (S1-1) -第17図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	深鉢	キザミ	外：明褐色	A. J. K. N	B	口縁部	SI1	17
2	深鉢	渦巻、隆帯、貼付	外：褐色	A. J. N	A	口縁部	SI1	10
3	深鉢	渦巻、隆帯、貼付	内：茶褐色 外：黒褐色	A. I. J	A	口縁部	SI1	5
4	深鉢	渦巻、隆帯、貼付、地紋LR縄文	内：黒色 外：褐色	A. B. C. J. N	A	口縁部	SI1	19
5	深鉢	渦巻、隆帯、複	内：明黄褐色 外：灰黄褐色	A. B. J. N	B	口縁部	SI1	22
6	深鉢	隆帯、貼付、地紋LR縄文	内：赤褐色 外：明褐色	A. D. J. J. N	B	口縁部	SI1	32
7	深鉢	沈線、上下、キザミ	外：赤褐色	N. I. J	A	口縁部	SI1	35
8	深鉢	隆帯、貼付、キザミ、沈線	外：黒色	E. I. F	B		SI1	3
9	深鉢	隆帯、キザミ、沈線	外：褐色	N. D	B		SI1	29
10	鉢	沈線	内：黒色 外：褐色	A. C. I. J. N	B		SI1	34
11	深鉢	沈線	内：灰黄褐色 外：黒褐色	A. B. D. J. H	B		SI1	24
12		沈線、キザミ	内：明黄褐色 外：明赤褐色	B. D	B		SI1	23
13		沈線、同心円文	内：にぶい黄褐色 外：明黄褐色	A. I. J	B		SI1	28
14		隆帯、地紋LR縄文	内：褐色 外：黒色	A. E. J. N	B		SI1	1
15	鉢	沈線	内：黒褐色 外：にぶい黄褐色	A. C. J. K. N	B		SI1	21
16	深鉢	クシ目、沈線	外：褐色	N. E	B	20, 21, 22同一個体	SI1	15
17	深鉢	クシ目、沈線	外：赤褐色	A. N. I. J	A	口縁部	SI1	9
18	深鉢	地紋LR縄文、沈線	内：黒色 外：明赤褐色	A. C. J. N	B		SI1	27
19	深鉢	隆帯、沈線、刺突、キザミ	内：赤褐色 外：赤褐色	A. B. D. I. K. N	B		SI1	25
23	深鉢	クシ目、沈線	内：赤褐色 外：茶褐色	A. B. J	A		SI1	9
24		地紋LR縄文、沈線	外：赤褐色	A. C. J. N	B		SI1	18

第3次1.2号住居跡 (S11.2) -第18図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	深鉢	隆帯、キザミ、ワラビ手状文	暗茶褐色	A. G. K. N	B		SI1	2
2	深鉢	クシ目、沈線	外：赤褐色	A. I. J. N	A	口縁部	SI1	31
3	体部の一部	地文LR縄文	内：にぶい赤褐色 外：暗赤褐色	A. B. E. G. I	B	5_6同一個体	SI2	4
4	深鉢	沈線、以下無文	内：暗赤褐色 外：明赤褐色	A. D. G. I. N. K	B			6
5	体部の一部		内：にぶい赤褐色 外：にぶい赤褐色	A. J. E. N	A	内側焼土あり	SI3	1
6	体部の一部		内：にぶい赤褐色 外：暗赤褐色	A. B. E. I	B		SI2	3

第3次2号住居跡 (SS-20) -第19図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	広口鉢	無文、ナデ	明赤褐色	A. B. C. J. N	B		SS20	36
2	口縁深鉢	波状口縁、沈線、刺突、燃糸文	明赤褐色	A. B. D. I. N	B		SS20	37
3	小鉢	沈線	褐色	A. J. N	B		SS20	14
4	口縁	耳状の口縁飾り、沈線	明赤褐色	A. I. N. J	B		SS20	38
5	深鉢	LR燃糸文、頸部、沈線	にぶい褐色	A. N	B		SS20	7
6	深鉢	LR燃糸文	褐色	A. B. D. I. N	B	焼土有	SS20	40
7	深鉢	LR燃糸文	明赤褐色	A. B. C. N	B	焼土有	SS20	41

第3次2号住居跡 (SS-20) -第20図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	口縁広口鉢	頸部、沈線、渦巻文、キザミ	にぶい黄褐色	A. D. G. I. N	B		SS20	34
2	口縁深鉢	口縁部、沈線キザミ、体部燃糸文	灰褐色	A. I. N	B		SS20	2
3	口縁広口鉢	無文	にぶい赤褐色	A. B. N	B		SS20	1
4	口縁深鉢	口頸部、燃糸文	明赤褐色	A. B. D. E. I. N	B		SS20	33
5	底部深鉢	口頸部、沈線、体部燃糸文	赤褐色	A. B. E. N	B	内面炭化物付着	SS20	39
6	底部深鉢		明赤褐色	A. B. C. G. I. K. N	B	4と同一個体か	SS20	8.9

第3次2号住居跡 (SS-20) -第21図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	口縁深鉢	沈線、キザミ	褐色	A. B. N	B		SS20	30
2	口縁深鉢	貼付隆帯、沈線	暗赤褐色	A. B. N	B		SS20	29
3	口縁深鉢	連続刺突文	褐色	A. B. C. E. N. O	B		SS20	27
4	口縁深鉢	沈線	暗赤褐色	A. B. I. K. N	B		SS20	20
5	口縁深鉢	沈線、キザミ	赤褐色	A. B. E. N	B		SS20	26
6	口縁深鉢	沈線、渦巻文、燃糸文	赤褐色	A. B. J. N	B		SS20	31
7	口縁深鉢	沈線、渦巻文、燃糸文	赤褐色	A. B. J. N	B		SS20	32
8	口縁深鉢	隆帯渦巻文、燃糸文	にぶい黄褐色	A. B. J. K. N	B		SS20	20
9	口縁深鉢	刺突文	にぶい褐色	A. E. H. I. N	B		SS20	13
10	口縁深鉢	斜縄文、隆帯、キザミ	黒褐色	A. B. N	B		SS20	28
11	口縁深鉢	隆帯、キザミ	明赤褐色	A. I. N	B		SS20	21
12	口縁深鉢	飾り、沈線	灰黄褐色	A. E. G. N	B		SS20	25
13	口縁深鉢	飾り、沈線渦巻文	にぶい黄褐色	A. B. G. I. N	B		SS20	23
14	深鉢	LR斜縄文、沈線	にぶい黄褐色	A. E. G. I. K. N	B		SS20	11
15	深鉢	隆帯、キザミ、沈線	赤褐色	A. J. N	B		SS20	15
16	深鉢	波状口縁	にぶい赤褐色	A. G. N	B		SS20	22
17	深鉢	沈線	赤褐色	A. B. J. N	B		SS20	16

18		沈線、縄文地文	赤褐	A. B. N	B		SS20	3
19		無文、ナデ	明褐	A. B. N	B		SS20	18
20		無文、ナデ	橙	A. B. C. J. N	B		SS20	35
21		燃糸文	橙	A. B. N	B		SS20	4
22		燃糸文	黄褐	A. B. N	B		SS20	6
23		沈線、渦巻文	明赤褐	A. E. G. N	B		SS20	12
24		爪形連続文	褐	A. B. N	B		SS20	19
25		燃糸文	明赤褐	A. B. E. N	B		SS20	10

第3次2号住居跡（S12）-第22図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	小型甕	キャリバー型の甕、隆帯、沈線文	赤褐色	A. B. D. N	B	口縁	S12	16
2	深鉢	沈線、地紋L R 縄文	にぶい橙	A. E. G. N	B	口縁	S12	15
3	深鉢	隆帯、キザミ	灰褐色	A. D. N. O	B	体部の一部	S12	10
4	深鉢	刺突文	内：灰褐色 外：橙	A. K. N	B	体部 焼土あり	S12	5
5	深鉢	沈線、刺突	明赤褐色	A. I. N	B	体部	S12	7
6	深鉢	沈線、キザミ	灰褐色	A. E. G. I. N	B	体部	S12	12
7	深鉢	沈線	暗褐色	A. G. N	B	体部	S12	13
8	深鉢	沈線	にぶい褐色	A. B. I. K. N	B	体部	S12	11
9	深鉢	隆線、沈線	明赤褐色	A. E. K. N	B	体部	S12	2
10	深鉢	隆帯	にぶい赤褐色	A. E. I. N	B	体部	S12	1
11	深鉢	隆線、沈線、J 字文	明赤褐色	A. E. N	B	体部	S12	9
12	深鉢	クシ目	明赤褐色	A. D. G. N	B	体部	S12	14
13	深鉢	隆線、地紋L R 縄文	にぶい黄褐色	A. K. N	B	体部	S12	8
14	深鉢	隆起線、地紋L R 縄文	明褐色	A. B. N. D	B	体部	S13	2
15	深鉢	地紋L R 縄文	にぶい黄褐色	A. K. I. N	B	体部	S12	6
16	深鉢	隆走	明赤褐色	A. B. I. N	B	体部	SP5	1
17	深鉢	隆線、キザミ	褐色	A. B. E. I. N	B	体部	SP5-73	3
18	深鉢	沈線	にぶい赤褐色	A. B. C. E. J. N	B	体部	SP5-67	2
19	深鉢	先端部刺突	黒褐色	A. B. D. E. N	B	体部	SP5-79	4

第3次1_3_4号集石土坑（S S1.3.4）-第23図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	小型深鉢	地紋L R 縄文	赤褐	A. B. E. N	B		SS1	2
2		隆線、爪形、キザミ	にぶい褐色	A. C. N	B		SS1	1
3		爪形、キザミ	にぶい赤褐色	A. D. I. N	B		SS3	2
4	深鉢	地紋L R 縄文	橙	A. D. I. N	A	底部	SS3	1
5		地紋L R 縄文	橙	A. I. N	B		SS3	5
6		隆線、ワラビ手状	にぶい黄橙	A. T. I	A		SS3	4
7		隆線、キザミ目	にぶい黄	A. B. J. N	B	口縁部	SS4	1
8		沈線	明褐色	A. N	B	口縁部	SS4	3
9		集合沈線	暗赤褐	A. D. J. N	B		SS3	3
10		先端刺突	灰黄	A. H. O. N	B	口縁部	SS5	1
11		隆線、沈線、キザミ	にぶい黄褐	B	B	口縁部	SS4	6
12		沈線、キザミ	にぶい赤褐	A. B	B	口縁部	SS4	7
13		隆線、キザミ	明赤褐	A. B. J	B		SS4	2
14		沈線	明褐	A. D	B	底部	SS4	4
15		隆起線	赤褐	A. N. J	B		SS4	5

第3次33号集石土坑（S S-33）-図23図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	深鉢	クシ目文、連弧沈線、円形刺突	暗茶褐色	A. B. C	A	焼土有り	SS33	6

第3次7.9.13.14号集石土坑（S S7_9_13_14_16）-第24図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	深鉢	隆線、地紋L R 燃糸文	明赤褐	A. B. D. J. N	B	口縁	SS7	2
2	深鉢	沈線	橙	B. C	B		SS7	1
3	深鉢	2条沈線、地紋L R 縄文	明赤褐	A. N. I	A		SS7	3
4	深鉢	クシ目、沈線	明赤褐	A. D. N. I	A		SS7	4
5	深鉢	隆帯、キザミ	黒褐	A. D. I	A	口縁	SS9	1
6	深鉢	沈線、刺突	にぶい赤褐	A. I. N	B		SS9	2
7	深鉢	地紋L R 縄文	明赤褐	A. B. I. N	B	底部 8,11と同一個体か	SS13	1
8			暗褐	A. B. I. N	B		SS13	2
9		沈線、爪形文	赤褐	A. B. E. I. N	B		SS13	6
10		クシ目、沈線	赤褐	A. B. E. G. I. N	B		SS13	7
11			明赤褐	A. B. G. I. N	B		SS13	4
12		隆線、地紋L R 縄文	にぶい赤褐	A. B. I. N	B	口縁	SS13	8
13		沈線、連続刺突文	にぶい黄褐	A. D. G. N	C		SS13	9
14		隆起線、刺突文	にぶい褐	A. E. G. I. N	B		SS13	10
15		地紋L R 縄文	にぶい褐	A. B. N. O	B	口縁	SS13	3
16		隆帯、沈線、燃糸文	にぶい赤褐	A. B. D. N	B		SS14	1

17		L R 縄文	褐	A. B. N	B		SS14	2
18		L R 縄文	褐灰	A. B. LN	B		SS15	5
19	深鉢	隆起線、キザミ	にぶい褐	A. D. N	B	赤彩	SS16	4
20	深鉢	隆起線、キザミ、三次線	明褐	A. B. E. N	B	内に焼土あり	SS16	8
21	深鉢	隆起線、キザミ	にぶい赤褐	A. B. J. N	B		SS16	7
22	深鉢	隆起線、三次線、円形刺突	明赤褐	A. B. N	B		SS16	3
23	深鉢	斜縄文	赤褐	A. B. D. N	B		SS16	2
24	深鉢		にぶい橙	A. B. C. I. N	B		SS16	6

第3次16. 19. 24. 26. 29. 30. 号集石土坑 (S S-16_19) -第25図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	底部	無文、ナデ	明赤褐	A. B. C. I. N	B		SS16	5
2	ミニチュア土器	無文、ナデ	橙	A. B. N	B		SS16	1
3	口縁深鉢	沈線文	にぶい黄橙	A. B. I. N	B		SS19	5
4	口縁深鉢	隆起線、キザミ	明赤褐	A. B. G. N	A		SS19	6
5	口縁深鉢	隆起線、キザミ	明黄褐	A. B. I. N	B		SS19	2
6	口縁深鉢	隆起線、三次線	明赤褐	A. D. I. J. N	B		SS19	9
7	口縁深鉢	貼付隆帯、L R 斜縄文	明赤橙	A. B. G. I. N	A		SS19	1
8	深鉢	貼付隆帯、L R 斜縄文	にぶい赤褐	A. B. E. N	B		SS19	7
9	深鉢	隆帯、キザミ	にぶい赤褐	A. B. I. N	B		SS19	3
10	深鉢	隆帯、キザミ	黒褐	A. B. O. D	B		SS19	11
11	深鉢	縦位燃糸文	褐	A. B. D. N	B		SS19	10
12	深鉢	縦位燃糸文	にぶい褐	A. D. I. J. N	B		SS19	8
13	深鉢	縦位燃糸文	明褐	A. D. I. N	B		SS19	8
14	深鉢	隆帯、沈線	にぶい褐	A. C. G. N. O	B		SS20	2
15		刺突文	明赤褐	A. B. E. N	B		SS20	1
16		刺突、沈線	明褐	A. E. I. N	B		SS20	4
17		燃糸文	明褐	A. D. N. O	B		SS20	7
18			灰褐	A. D. N. O	B	4と同一個体	SS20	6
19		隆帯、縄文	明赤褐	A. B. D	B		SS24	2
20		沈線	褐	A. I. N	B		SS22	5
21		無文	明赤褐	A. B. I. K. N	B	内：炭化物あり	SS22	3
22		沈線文、横位燃糸文	明赤褐	A. D. N	B		SS24	1
23		燃糸文	明黄褐	A. B. N	B		SS24	3
24		刺突文	にぶい赤褐	A. B. N	B		SS26	2
25		沈線	明赤褐	A. N. O	B		SS26	1
26		沈線	にぶい赤褐	A. B. D. N	B		SS29	3
27		沈線、燃糸文	にぶい赤褐	A. B. D	B		SS29	2
28		L R 燃糸文	明黄褐	A. D. N	B		SS29	1
29		L R 燃糸文	明褐	A. B. E. N	B		SS30	5
30	口縁深鉢	L R 斜縄文	にぶい赤褐	A. B. I. N	B		SS30	2
31	口縁深鉢	隆帯	暗褐	A. B. N	B		SS30	3
32	口縁	沈線	明赤褐	A. I. N	B		SS30	1
33		キザミ	にぶい赤褐	A. B. N. O	B		SS30	4
34	底部広口鉢	無文、ナデ	明赤褐	A. C. D	A		SS29	4

第3次8号集石土坑 (S S-8) -第26図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	深鉢	沈線文、J 字文構成	橙	A. B. D. N	B	焼土あり	SS8	3
2		沈線文	にぶい赤褐	A. D. N	A		SS8	1
3		L R 縄文	明赤褐	A. N	A	口縁	SS8	2

第3次33号集石土坑 (S S-33_35) -第27図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	鉢深鉢	沈線、渦巻文、波状文	明赤褐	A. B. J. N	B		SS33	11
2	体部深鉢	クシ目文	明赤褐	A. B. E. N	B		SS33	14
3	体部深鉢	L R 燃糸文、隆帯	明赤褐	A. B. D. N	B		SS33	10
4	体部深鉢	クシ目文、沈線	にぶい黄橙	A. B. C	B		SS33	13
5	体部深鉢	クシ目文、沈線	にぶい赤褐	A. D. N	B		SS33	6
6	体部	クシ目文、沈線	橙	A. C. I. J. N	B		SS33	4
7	体部	隆帯、渦巻状	明赤褐	A. B. D. J. N	B		SS33	2
8	体部	クシ目文、沈線	明赤褐	A. B. D. N	B		SS33	7
9	体部	L R 斜縄文、沈線	にぶい黄橙	A. J. N	B		SS33	8
10	体部	隆帯、L R 燃糸文	赤褐	A. B. H	B		SS33	1
11	体部	沈線、キザミ	明赤褐	A. B. N	B		SS33	12
12	体部	沈線、刺突	にぶい黄橙	A. B. C. N	B		SS33	3
13	体部	L R 斜縄文、沈線内磨済	明黄褐	A. B. C. I. N	B		SS33	5
14	体部	L R 斜縄文、隆帯	明赤褐	A. B. J. N	B		SS33	9
15	体部	隆帯、無文ミガキ	明赤褐	A. D. I. N	A		SS35	3
16	体部	L R 燃糸文、渦巻隆帯	黄橙	A. D. I	B		SS35	5
17	体部	連続三角文沈線	明赤褐	A. I. N	A	同一個体	SS35	1

18	体部	爪形刺突、沈線	明赤褐	A. I. N	A	同一個体	SS35	1
19	体部	L R 燃糸文	橙	A. B. I. J. N	A		SS35	8
20	体部	L R 燃糸文、隆帯	にぶい黄橙	A. C. D. I	B		SS35	6
21	体部	L R 燃糸文	黄褐	A. D. I. N	B		SS35	2
22	体部	L R 斜縄文	にぶい橙	A. B. D. J. N	B		SS35	7

第3次36号集石土坑 (S S-36) -第28図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	口縁	L R 燃糸文、沈線、刺突	にぶい橙	A. D. I	A		SS36	10
2	口縁	L R 斜縄文、沈線、刺突文	にぶい黄橙	A. I. J. N	B		SS36	13
3	口縁	クシ目文	にぶい橙	A. D. N	B		SS36	17
4	口縁	L R 縄文、隆帯	にぶい赤褐	A. B. C. N	B		SS36	2
5	口縁	クシ目文、隆帯	明赤褐	A. B. J. C	B		SS36	14
6	口縁	L R 燃糸文、渦巻隆帯	暗赤褐	A. D. N	B		SS36	18
7		L R 燃糸文、三条沈線	灰褐	A. D. N	B		SS36	3
8		クシ目文	赤褐	A. C. I. N	B		SS36	9
9		クシ目文、沈線、渦巻	にぶい褐	A. B. C. J. N	B		SS36	11
10		L R 斜縄文、沈線	にぶい橙	A. B. C. J	B		SS36	7
11		L R 燃糸文、沈線	橙	A. B. D. N	B		SS36	8
12		L R 斜縄文、沈線	にぶい黄橙	A. D. I. K	A		SS36	12
13	浅鉢	無文、双円刺突	明赤褐	A. I. N. J	A		SS36	15
14		L R 斜縄文	灰褐	A. D. N	B		SS36	5
15		L R 斜縄文、隆帯	橙	A. I	A		SS36	16
16		L R 斜縄文、隆帯、刺突文	にぶい橙	A. B. D. J. N	B		SS36	4
17	深鉢底部	クシ目、沈線	橙	A. B. D. N	B		SS36	1
18		クシ目、沈線	明赤褐	A. B. N	B	焦土あり	SS36	6

第3次38_40_41_43_44_45_47集石土坑-第29図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1		羽状、L R 斜縄文、隆線、キザミ	黒	A. D. I. N	B		SS38	1
2	口縁	L R 斜縄文、沈線	褐	A. I. D	A		SS40	7
3	口縁	L R 斜縄文、隆線	褐	A. I. D	A		SS40	8
4	口縁	沈線	明褐	I. J. C. N	B		SS40	6
5		隆帯、キザミ	黒褐	A. I. N	A		SS40	2
6		沈線	明赤褐	I. N	B		SS40	3
7		隆帯、キザミ	褐	I. J. N	B		SS40	1
8		L R 斜縄文	橙	B. I. N	A		SS40	4
9		隆帯、キザミ、沈線	明褐	I. J. C. N	B		SS40	5
10	口縁	隆帯、連続弧文	明赤褐	B. C. J. N	B		SS41	6
11	口縁	L R 斜縄文	明赤褐	A. B. D. N	B		SS41	4
12	口縁	隆帯、キザミ	暗赤褐	B. D. N	B		SS41	3
13	口縁	連続爪形文	暗赤褐	B. C. J. N	B		SS41	5
14	口縁	ヘラナデ、無文	褐	A. N. I. D	A		SS41	2
15	台	無文	明赤褐	A. D. N	B		SS41	1
16		連続刺突文	明赤褐	A. N. I	B		SS44	1
17	口縁	L R 斜縄文、隆帯、隆線	にぶい橙	A. B. K. N	B		SS43	2
18	口縁	L R 斜縄文、沈線	橙	A. B. N	B		SS43	1
19	口縁	沈線、刺突	灰褐	A. E. G. N	B		SS43	3
20	口縁	隆帯、爪形、キザミ	明赤褐	N	B		SS44	2
21	口縁	隆帯、渦巻	にぶい赤褐	A. B. E. I. N	B	焼土あり	SS45	2
22		L R 燃糸文	褐	A. B. I. N	B		SS45	1
23	口縁	連続爪形文	にぶい褐色	A. B. C. I. N	B		SD5	9
24	体部の一部	隆線、連続爪形文	内：にぶい橙 外：灰褐	A. I. N	B		SD5	3
25	体部の一部	沈線、連続爪形文	内：灰黄褐 外：にぶい赤褐	A. I	B		SD5	4
26	体部の一部	L R 縄文	にぶい褐	A. B. C. G	B		SD5	6
27	口縁	沈線、無文	褐色	A. N. O	B		SD5	8
28	体部の一部	隆線、キザミ、クシ目文	内：赤褐 外：暗褐	A. H. I. N	B		SD5	6
29	口縁1/6	L R 燃糸文	内：赤褐 外：褐色	A. B. D. N	B		SD5	7
30	口縁	L R 燃糸文	内：にぶい黄橙 外：にぶい褐	A. C. N	B		SD5	8
31	底部	L R 燃糸文	内：にぶい黄褐 外：にぶい橙	A. B. C. I. K. N	B	内：炭化物付着	SD5	1

第3次1_2_3_4号土坑-第30図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	口縁	L R 斜縄文	褐	A. E. I. N	B		SK1	1
2	口縁	爪形連続刺突文	にぶい赤褐	A. E. I. N	B		SK1	4
3	口縁	爪形連続刺突文	にぶい赤褐	A. E. I. N	B		SK1	3
4	体部	R L 斜縄文	にぶい褐	A. B. E. H. I. N	B		SK1	5
5	体部	連続刺突文	にぶい黄褐	A. B. N	B		SK2	5
6	口縁	L R 縄文、隆線、渦巻文	にぶい橙	A. H. I. N	B		SK2	1
7	体部	隆線、沈線、連続爪形文	にぶい褐	A. B. N	B		SK2	4
8	体部	沈線	褐	A. N	B		SK2	6
9	体部	L R 縄文、沈線	にぶい黄橙	A. D. N	B		SK2	3

10	深鉢	クシ目文、沈線、連弧文、円形刺突文	明黄褐	A. B. E. N	B		SK2	7
11	体部	沈線、渦巻文、連続爪形文	橙	A. B. E. I. K. N	B		SK3	1
12	体部	沈線	明赤褐	A. B. E. J. N	B		SK3	3
13	体部	クシ目文、沈線、キザミ文、渦巻文	橙	A. B. C. D. N	B		SK3	4
14	口縁	クシ目文、沈線、キザミ文、渦巻文	明赤褐	A. H. I. N	B		SK2	2
15	体部	クシ目文、隆帯、キザミ文	明赤褐	A. B. J. N	B		SK3	2
16	体部	連続キザミ	明赤褐	A. B. E. J. N	B		SK4	3
17	体部	L R 縄文、磨消沈線	明赤褐	A. B. C. E. I. J. N	B		SK3	5
18	底部	ナデ	赤褐	A. B. E. N	B		SK4	1

第3次6.7号土坑（SD6.7）-第31図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	深鉢1/4	無文、隆線	内：にぶい赤色 外：橙	A. B. I. J. N	B		SD6	1
2	口縁	隆帯、刺突、連続爪形文	内：黒褐 外：褐	A. E. I. N	B		SD6	5
3	口縁	連続爪形文	内：赤褐 外：褐	A. B. E. I. N	B		SD6	6
4	体部の一部	連続爪形文、沈線	内：黄褐 外：褐	A. N	B		SD7	1
5	体部の一部	三角区画、隆帯、クシ目、連続爪形文	明赤褐	A. B. C. D. H. J. N	B		SD6	3
6	口縁の一部	沈線、渦巻隆帯、槍状把手	明赤褐	A. D. K. N	B		SD6	2
7	体部の一部	沈線、斜縄文	内：にぶい褐 外：赤褐	A. H. I. N	B	SK4No.2と同一個体	SD6	4
8	体部の一部	隆線、キザミ	内：赤褐 外：褐	A. B. J. N	B		SD7	2
9	体部の一部	隆線、キザミ	内：明褐 外：赤褐	A. B. C. E. G. K. I. N	B		SD7	3
10	体部の一部	隆線、キザミ	内：明黄褐 外：黄褐	A. B. C. D. E. J. N	B		SD7	4

第3次47.46号土坑（SD1, SK46注記）-第32図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	口縁部1/7	連続爪形三角文	内：橙 外：赤褐	A. B. E. I. J. N	B	SD6接合	SD1	1
2	口縁の飾	沈線、連続爪形文	茶褐	A. B. N. D	B		SD1	9
3	須恵器碗	口径12.6cm、底径5.0cm、器高5.4cm	にぶい黄褐	A. B. I. L. N	C		SK46	2
4	須恵器碗	口径13.9cm、底径5.4cm、器高5.2cm	明黄褐	A. B. D. I. J. L	C	灯明皿、灯芯口アリ	SK46	1
5	須恵器碗	口径13.5cm、底径5.2cm、器高5.0cm	明赤褐	A. B. N	B	墨書「而」	SK46	3
6	須恵器碗	口径12.9cm、底径5.3cm、器高5.2cm	黄褐	A. B. N	B		SK46	4
7	口縁	連続爪形沈線文、隆帯	赤褐	A. B. E. I. J. N	B		SD6.15	11

第3次包含層一括-第33～35図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	体部	キャタピラ状刺突文、隆線	暗褐色	A. B. N. O	B		一括	37
2	口縁	連続刺突文	橙	A. B. I. N	B		一括	9
3	口縁	沈線、キザミ文	明赤褐色	A. B. N	B		一括	12
4	体部	方形連続刺突文	明赤褐色	A. I. N	B		一括	63
5	口縁	連続爪形文	明赤褐色	A. D. N. I	B		一括	20
6	体部	隆帯、クシ目文	明赤褐色	A. B. D. N	B		一括	45
7	体部	渦巻状連続爪形文	橙	B. C. N	B		一括	40
8	体部	連続爪形文	橙	B. N	B		一括	41
9	体部	連続爪形文	明赤褐色	A. E. I. N	B		一括	49
10	体部	連続爪形文、連続三角刺突文	橙	A. C. D. I. J	B		一括	54
11	口縁	連続刺突文、隆帯	にぶい赤褐色	A. B. C. J	B		一括	16
12	口縁	沈線文	橙	A. B. C. I. N	B		一括	11
13	口縁の飾り部分	L R 燃糸文、渦巻文、隆線、キザミ	橙	A. B. D. I. J	B		一括	7
14	深鉢(底部)	押圧隆帯、クシ目文	橙	A. B. C. J. N	B		一括	33
15	体部	L R 縄文、隆帯、キザミ文	にぶい赤褐色	A. B. E. I. N	B		一括	57
16	口縁	連続弧状刺突文、L R 縄文	にぶい赤褐色	A. I. N	A		一括	6
17	体部	隆帯、クシ目文	明赤褐色	A. B. D. N	B		一括	48
18	体部	連続爪形刺突三角文	にぶい赤褐色	A. B. I. N	B		一括	44
19	体部	渦巻隆帯、キザミ文	にぶい橙	A. N	B		一括	56
20	胴部	渦巻隆帯、キザミ文	明赤褐色	A. D. I	A		一括	59
21	底部	隆帯、キザミ文	明赤褐色	A. B. D	A		一括	32
22	口縁	隆線、キザミ文、クシ目文	橙	B. D. I	B		一括	15
23	体部の一部	沈線文	にぶい褐	B. C. N	B	内側焼土有	一括	52
24	鉢	クシ目、円環	赤褐	A. B. I. N	B		一括	75
25	体部の一部	隆帯、キザミ文	内：にぶい橙 外：にぶい赤褐	A. B. E. N	B		一括	55
26	口縁1/4	沈線、渦巻文	内：明褐 外：赤褐	A. B. D. E. I. J. N	B		一括	73
27	口縁の飾り	隆帯、沈線	暗褐	A. D	A		一括	5
28	体部の一部	沈線、刺突、クシ目	にぶい黄橙	A. I. N	B		一括	64
29	口縁の一部	沈線、無文	明黄褐	A. D. I. J. N	B		一括	24
30	口縁の一部	隆起線、沈線	明赤褐	A. N. I	A		一括	21
31	体部の一部	隆線、渦巻文	明黄褐	A. I. J. C	A		一括	53
32	口縁の一部	L R 縄文、沈線	にぶい黄橙	A. D. I. J	B		一括	26
33	口縁の一部	隆線	赤褐	A. B. J	B		一括	18
34	口縁の一部	隆帯、渦巻文、L R 縄文	にぶい黄橙	A. B. C. D. K. N	B		一括	74
35	口縁の一部	隆帯、渦巻文、L R 縄文	赤褐	A. B. D. I. N	B		一括	1
36	口縁の一部	隆帯、渦文、L R 縄文	明赤褐	A. B. C. J	B		一括	22

37	口縁の一部	隆帯、渦文、L R 縄文	明赤褐	A. O. N	B		一括	14
38	口縁の一部	隆帯、渦文、L R 縄文	黒褐	A. B. J	B		一括	17
39	口縁の一部	沈線文	浅黄橙	A. D. N. I. O	B		一括	4
40	口縁の一部	沈線、刺突文	赤褐	C. A. I	A		一括	8
41	口縁の一部	隆帯、L R 縄文	にぶい赤褐	A. C. I. N	B		一括	66
42	体部の一部	隆帯、沈線内L R 縄文	にぶい黄橙	A. B. C. I. J. N	B		一括	2
43	体部の一部	沈線、L R 縄文	橙	A. B. J. N	B		一括	42
44	口縁の一部	クシ目文	暗赤褐	A. B. C. I. J. N	B		一括	27
45	体部の一部	隆帯渦文、L R 縄文	にぶい橙	A. B. K. N	B		一括	70
46	体部の一部	クシ目文	橙	A. D. I. N	B		一括	67
47	口縁の一部	沈線文	にぶい赤褐	A. N. I	A		一括	19
48	体部の一部	クシ目文、沈線文	にぶい赤褐	A. B. J. N	B		一括	43
49	体部の一部	L R 縄文、沈線文	明赤褐	A. B. D. J. N	B		一括	50
50	体部の一部	L R 燃糸文、沈線、刺突文	橙	A. B. I. N	B		一括	71
51	口縁の一部	L R 縄文、押引沈線	浅黄橙	A. D. I	B		一括	3
52	体部の一部	L R 燃糸文、隆線	にぶい橙	A. B. E. I. N	B		一括	36
53	口縁の一部	押引沈線、L R 燃糸文	にぶい黄褐	A. B. J	A		一括	25
54	口縁の一部	沈線、刺突文、縄文	にぶい褐	A. B. C. J	B		一括	13
55	体部の一部	隆線、L R 付加縄文	にぶい黄褐色	A. B. J. N	B		一括	51
56	体部	L R 縄文、隆線	橙	A. C	B		一括	62
57	体部	クシ目文	橙	A. B. C. N	B	焼土あり	一括	39
58	体部	L R 縄文、沈線	橙	A. N. I	B	No.65と接合	一括	68
59	体部	沈線、刺突、L R 縄文	にぶい黄橙	A. B. C. I. J. N	B		一括	61
60	体部	隆線、燃糸文	にぶい褐色	A. D. N	B		一括	72
61	体部	L R 付加縄文、沈線	にぶい黄橙	A. B. I. N	B		一括	38
62	体部	L R 縄文、沈線	にぶい橙	A. B. K. N	B		一括	69
63	体部	L R 縄文、沈線	にぶい橙	A	B		一括	46
64	口縁	沈線	灰褐色	A. B. C. N	B		一括	23
65	体部	L R 燃糸文、沈線	にぶい赤褐色	A. B. E. I. N	B		一括	58
66	底部	L R 燃糸文	橙	A. D. I. N	B		一括	34
67	底部	L R 燃糸文、沈線	橙	A. B. J	B		一括	35
68	底部	ナデ	明赤褐	A. D. I. J	B		一括	30
69	底部	ナデ	にぶい橙	A. B. C. I. N	B		一括	31
70	底部	ナデ	にぶい黄橙	A. B. C. J	B		一括	29
71	底部	ナデ、内底面炭化物付着	赤褐色	A. D. I. J	A		一括	28
72	口縁	ナデ	黒褐色	A. D. I. N	B	赤彩あり	一括	76
73	口縁	ナデ	赤褐色	D. I. K	A	赤彩あり両面	一括	77

第3次土製品-第36図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	遺構	実No.
1	土製円盤	沈線、全周研磨	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄褐	A. B. D. N	B		S11	3
2	土製円盤	L R 縄文、全周研磨	内：赤褐 外：黒褐		B		一括	9
3	土製円盤	L R 縄文、部分研磨	内：にぶい赤褐 外：赤褐		B		S11	6
4	土製円盤	クシ目、部分研磨	内：黒褐 外：暗オリーブ褐	A. B. D	B		SS20	4
5	土製円盤	燃糸文、全周研磨	内：黒褐 外：褐	A. E. I. N	B		S11	1
6	土製円盤	燃糸文、全周研磨	内：褐 外：褐		B		SS20	8
7	土製円盤	無文、全周研磨	内：明赤褐 外：明赤褐	A. B. K. N	B		SS20	12
8	土製円盤	無文、部分研磨	内：暗灰黄 外：褐	A. C. E. J. N	B		S11	2
9	土製円盤	無文、部分研磨	内：明赤褐 外：橙	A. B. D. I. N	B		SS20	5
10	土製円盤	無文、全周研磨	内：明褐 外：明褐	A. B. C. I. N	B		SS20	13
11	土製円盤	無文、部分研磨	内：黒褐 外：明褐		B		S11	7
12	耳飾り	無文、ナデ、土製	外：赤褐	A. I. N	B		SS20	10
13	耳飾り	無文、ナデ、土製	外：灰黄褐	A. B. C. E. N	B		SS20	11

凡例 胎土 A-白色粒子 B-黒色粒子 C-赤色粒子 D-褐色粒子 E-赤褐色粒子 F-白色針状物質 G-長石
H-石英 I-白雲母 J-黒雲母 K-角閃石 L-片岩 M-砂岩 N-小礫 O-金雲母 P-不明

凡例 焼成 A-良好（硬く焼きしまり、胎土のこぼれや、風化がみられないもの）
B-普通（焼きしまってはいるが、風化が進み胎土おちのするもの）
C-不良（焼きが甘く、胎土落ちが顕著で、風化の進んでいるもの）

第4次住居跡-第52図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	実No.
1	深鉢	口縁の一部 無文、沈線、L R 縄文	にぶい黄橙	A. C. J	A	SK1 縄文土器	3
2	深鉢胴部	沈線、L R 縄文	橙	A. D. N	A	SK1. 3	13
3	深鉢胴部	沈線、L R 縄文	橙	A. D. N	A	SK1. 14	15
4	深鉢	口縁の一部 無文	にぶい黄橙	B. C. D. H. N	A	SK1. 13	9
5	深鉢	口縁の一部 無文帯、沈線	橙	A. B. D. N	A	SK1. 15	11
6	深鉢胴部	無文帯、沈線	黄橙	A. C. N. I	A	SK1. 4	6
7	深鉢胴部	無文帯、沈線	にぶい褐	A. D. N. H. J	B	SK1. 8	19
8	深鉢胴部	無文帯、沈線	赤褐	A. J. N	B	SK1. 2	2
9	深鉢胴部	無文帯、沈線	明黄褐	C. N. J	B	SK1. 7	8
10	深鉢胴部	無文帯、沈線	橙	B. D. N. J	B	SK1. 4	16
11	深鉢胴部	無文帯、沈線	にぶい黄褐色	A. J. N	B	SK1. 2	1
12	深鉢胴部	無文帯、沈線	橙	A. B. H	B	SK1. 8	10
13	深鉢胴部	無文帯、沈線	黄褐	A. B. I. J	A	SK1. 9	14
14	深鉢胴部	沈線、円形刺突	明黄褐	A. B. N. J	B	SK1	4
15	深鉢胴部	L R 縄文、クシ目文	明赤橙	N. C	B	SK1. 2	21
16	深鉢胴部	L R 縄文	明黄褐	A. N	B	SK1	5
17	深鉢胴部	L R 縄文	にぶい黄橙	A. B. D. J	B	SK1. 4	7
18	深鉢胴部	クシ目文	黄褐	A. D. N. I. J. K	B	SK1. 5	12
19	深鉢胴部	沈線	褐灰	C. D. I. J	A	SK1. 14	20
20	深鉢胴部	円形刺突文	橙	A. D	A	SK3	2
21	深鉢胴部	L R 燃糸文	灰黄褐	A. C. D. N. J	A	SK1. 10	18
22	深鉢胴部	無文帯、沈線	橙	A. C. D. I. J	B	SK3	1
23	深鉢胴部	無文帯、沈線	にぶい黄	A. E. H	B	SK3	3
24	深鉢胴部	無文帯、沈線	にぶい橙	A. B. N	B	SK5	2
25	深鉢胴部	沈線、縄文	にぶい褐	A. B. D. N	B	SK4	1
26	深鉢胴部	無文	明黄褐	A. J. N	B	SK5	1
27	深鉢胴部	無文	にぶい黄橙	B. N	B	SK7	1
28	深鉢胴部	無文帯、沈線	にぶい黄	A. N	B	SK7	2
29	深鉢胴部	L R 縄文	にぶい黄橙	D. I	B	SK12	2
30	深鉢胴部	L R 縄文	にぶい橙	D. N	B	SK12	1
31	深鉢胴部	沈線間、L R 縄文	にぶい黄橙	A. B. C. J. N	A	SK6	1
32	深鉢胴部	L R 縄文	にぶい黄橙	N. D. J	A	SK6	2
33	深鉢胴部	L R 縄文	橙	C. N. I. J	B	SK12	3

第4次 土壌一括-第53図

No.	器種	特徴	色調	胎土	焼成	備考	実No.
1	深鉢把手	沈線、刺突	にぶい橙	A. B. J. N	B	縄文	12
2	深鉢胴部	沈線	明赤褐	N. I. J	A		1
3	深鉢一部	沈線、円形刺突	にぶい黄橙	A. B. J	B		15
4	深鉢口縁	口縁の一部 沈線間、縄文	にぶい褐色	A. N	B		26
5	深鉢胴部	沈線間、縄文	にぶい黄橙	B. D. J	B		2
6	深鉢胴部	沈線間、縄文	明赤褐	C. I. J	A		8
7	深鉢胴部	沈線	にぶい黄橙	N. C	A		10
8	深鉢胴部	無文	にぶい黄褐	N. D	A		9
9	深鉢胴部	沈線、刺突	にぶい橙	A. N	B		6
10	深鉢破片	沈線、刺突	内：橙 外：にぶい橙	A. B. I. K	B		14
11	深鉢胴部	沈線、刺突	にぶい黄橙	N	B		4
12	深鉢一部	沈線、刺突	黄褐	B	B		3
13	深鉢胴部	沈線、刺突	横	N. D. J	B		16
14	深鉢	沈線、刺突	にぶい黄橙	A. B. C. I. J	A		5
15	深鉢	口縁の一部 無文帯	にぶい黄橙	A. J. N	B		23
16	深鉢	口縁の一部 無文帯	橙	A. B. N. J. O	A		17
17	深鉢胴部	口縁の一部 無文帯、クシ目	褐	N. H	A		22
18	深鉢	L R 縄文	明黄褐	A. B. N. J	B		7
19	深鉢	隆線、キザミ	暗褐	A. B. N	B		19
20	深鉢	L R 縄文	明赤褐	N. J	A		18
21		クシ目	明赤褐	A. C. N. I. J	A		11
22		底部の一部 ナデ	橙	A. B. N. I	A		21
23		底部の一部 ナデ	にぶい橙	A. J. N	B		20
24		底部の一部 無文	浅黄橙	B. N	B	中世の土師質皿	13
25		口縁の一部	にぶい橙	A. B. N	B	古墳時代土師器坏	24
26		底部 無文	にぶい橙	A. N	B		25

第2表 上原遺跡第3・4次出土石器観察表

第3次1号住居跡-第37図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
一括12	1	一括	石鏃	黒曜石	(1.8)	1.1	0.4	1.0	凹式	欠	00%	1.1	1.6	—		
SS20-20	2	SS20-105	ナイフ型石器	黒曜石	3.6	1.8		2.1			完形品	1.6		2.3		基部調整 使用痕あり
SI1-4	3	SI1-15	打製石斧	ホルンフェルス	11.4	5.2	2.8	184.4								
SI1-1	4	SI1-11	打製石斧	ホルンフェルス	(10.5)	4.5	2.1	132.0								
SI1-12	5	SI1	打製石斧	石英閃緑岩	8.5	4.9	1.8	95.7	3偏刃			1	4.0	4.9	5.2 B	
SI1-2	6	SI1-9	打製石斧	中粒砂岩	(9.4)	(6.0)	2.2	117.1	3直刃		4 (刃部1/2欠損)	1.5	4.8	(6.0) A		
SI1-13	7	SI1	剥片	硅質泥岩	12.0	9.8	3.3	441.6	—			1	5.8	9.8	B	
SI1-11	8	SI1	打製石斧	泥岩	4.8	3.8	2.4	51.1	2直刃			1	3.4	3.8	4.0 B	
SI1-10	9	SI1	撻器	泥岩	9.0	7.4	3.7	282.6	—		1 (無欠損)	5.5	7.4	—	B	
SI1-14	10	SI1-36	打製石斧	泥岩	(6.0)	(4.7)	(1.8)	61.0								

第3次1・2号住居跡-第38図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
SI1-8	1	包含層	敲石	泥岩	8.7	2.5	1.7	41.7			a (100%)					被熱あり 擦痕
SI1-9	2	包含層	敲石	細粒砂岩	12.8	6.3	2.3	308.2	3-a	a	a (100%)					敲きあり
SI1-5	3	SI1-41	磨石	角閃石黒雲母砂岩	11.4	7.6	3.6	428.1	II-b		a					
SI1-6	4	SI1-87	磨石	石英閃緑岩	9.7	7.5	4.2	394.5	II-b	—	a					凹石?
SI1-3	5	SI1-18	磨石	角閃石黒雲母砂岩	(11.5)	(9.8)	(7.5)	1013.3	II-b	—	b (1/2)				A	
SI1-7	6	SI1-97	撻器	チャート	2.7	3.0	0.6	4.0								調整あり
SI1-2	7	SI2	打製石斧	砂質泥岩 (D)	(10.3)	5.9	(2.2)	144.2	3	—	10	—	4.0	—	B	
SI2-1	8	SI2	打製石斧	泥岩	8.8	4.6	1.8	81.8	3円		1	2.5	4.6	5.3 A		

第3次2号住居跡-第39図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
SS20-3	1	SS20-40	打製石斧	砂岩	9.8	4.6	2.0	115.5	2円		1	2.8	4.4	4.4 AB		敲打による刃潰しあり
SS20-5	2	SS20	打製石斧	砂岩	8.3	4.3	1.1	52.0	1円		1	3.5	3.2	4.3 A		敲打による刃潰しあり
SS20-2	3	SS20-154	打製石斧	ホルンフェルス	(16.2)	5.5	4.4	461.0	2	—	7	2.0	5.5	—	A	敲打による刃潰しあり
SS20-8	4	SS20-29	打製石斧	緑泥片岩	(10.0)	3.8	2.1	132.1	2円		2	3.1	3.7	3.6 AB		敲打による刃潰しあり
SS20-7	5	SS20-25	打製石斧	ホルンフェルス	9.8	5.2	1.6	101.0	2円		1	4.5	4.4	5.2 A		
SS20-23	6	SS20	打製石斧	泥岩	8.5	4.8	1.4	55.0	3直		1	2.5	4.1	4.2 A		
SS20-9	7	SS20	打製石斧	ホルンフェルス	13.8	7.9	4.4	425.0	3円		1	3.9	6.1	7.7 A		敲打による刃潰しあり 凹位深い
SS20-15	8	SS20-109	打製石斧	千枚岩	(12.0)	4.0	1.4	90.0	2円		10	2.8	4.0	2.8		
SS20-6	9	SS20-3	打製石斧	滑石	(10.2)	5.0	1.5	99.7	3	—	10	—	4.4	—		
SS20-16	10	SS20-151	打製石斧	絹雲母片岩	(8.9)	5.1	1.5	104.0	1	—	7	4.7	3.9	—	A	
SS20-14	11	SS20-72	打製石斧	千枚岩	9.7	4.7	1.4	65.0	2円		1	2.5	4.7	4.0 AB		
SS20-21	12	SS20	打製石斧	砂質泥岩	(5.6)	4.1	2.0	60.0	2	—	7	3.2	4.1	—	A	

第3次2号住居跡-第40図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
SS20-22	1	SS20	打製石斧	チャート	(10.2)	5.6	2.8	189.0	3円		3	—	5.3	5.0 A		
SS20-4	2	SS20-32	打製石斧	砂質泥岩	(7.0)	5.3	1.3	80.0	1	—	10	—	4.3	—	A	
SS20-17	3	SS20-152	打製石斧	千枚岩	9.8	6.6	1.9	138.0	3直		1	4.0	5.3	6.2 B		
SS20-1	4	SS20-17	磨石	石英閃緑岩	16.8	7.6	4.2	820.0	3-a		a					敲打あり
SS20-11	5	SS20-47	磨石	石英斑岩	13.2	8.0	2.8	514.0	V-a		a					

SS20-10	6	SS20-28	チャート	3.8	125.0	2円	7	3.0	3.8	(3.5) AB	全面研磨 敲打あり
SS20-13	7	SS20-70	石英岩	8.3	739.0	II-b	d				全面被熱 赤化 隆痕 凹六
SS20-12	8	SS20-51	凹石・磨石	9.2	485.0	II-b	d				

第3次2. 3. 5. 14. 16. 19. 22号集石土坑-第41図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
SS2-2	1	SS2	打製石斧	砂質泥岩	(7.2)	4.8	1.4	50.0	2円		2	4.5	4.8	(4.0) B		
SS2-1	2	SS2	凹石	中粒砂岩	12.0	9.7	5.4	735.0	II-b		a(100%)					研磨面あり 被熱 赤化
SS3-3	3	SS3	磨石	石英閃緑岩	9.5	7.4	2.2	253.0	II-a		a(100%)					
SS5-4	4	SS5	磨石	中粒砂岩	12.4	6.7	3.6	355.0	VI-a		d(1/4以下欠損)					
SS14-5	5	SS14	磨石	石英閃緑岩	14.0	11.4	3.0	726.0	II-a		a(100%)					被熱赤化 風化顕著
SS16-6	6	SS16	打製石斧	チャート	(7.4)	6.2	3.0	200.0	—		10	—	6.2	—	AB	
SS19-8	7	SS19	磨石	中粒砂岩	(11.9)	7.5	4.3	535.0	3-b		b(50%)					
SS22-9	8	SS22	打製石斧	千枚岩	9.8	4.8	1.9	110.0	2円		1	3.3	3.6	4.3 A		

第3次19. 29. 30. 38. 40号集石土坑-第42図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
SS19-7	1	SS19	磨石	石英閃緑岩	17.2	13.6	3.6	1085.0	II-b		a(100%)					被熱あり 赤化
SS38-12	2	SS38	凹石・石皿	絹雲母片岩	(28.1)	10.2	4.8	1330.0	V-a		b(50%)					被熱剥離あり 赤化
SS29-10	3	SS29	棒状礫器	中粒砂岩	15.4	5.5	3.0	396.0	II-a		a(100%)					被熱 赤化
SS30-11	4	SS30	打製石斧	チャート	(10.3)	5.0	2.6	195.0	2円		2	(4.6)	4.9	5.0 A		使用隆痕
SS40-13	5	SS40	剥片	千枚岩	8.9	7.5	4.0	254.0	?		1					

第3次42号集石土坑-第43図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
SS42-14	1	SS42	凹石・石皿	絹雲母片岩	(23.4)	(24.7)	7.6	3000.0	V-a		b(30%くらい)					被熱 風化

第3次6. 7号土坑-第44図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
SK1-1	1	SK1	磨製石斧	絹雲母片岩	(6.1)	6.3	1.8	84.8	I		3					
SK3-1	2	SK3	打製石斧	砂質泥岩	(6.7)	3.9	(0.9)	28.4	3円		10	(6.7)	3.9	3.9 A		研磨
SD5-3	3	SD5-61	磨製石斧	泥岩	(5.2)	3.7	2.8	63.0	I		9					
SD5-2	4	SD5-39	磨製石斧	中粒砂岩	(3.7)	(6.1)	(1.8)	45.2	I		10.1					
SD5-1	5	SD5-27	剥片	中粒砂岩	(6.8)	(5.3)	(1.3)	46.5							A	
SK1-2	6	SK1-10	凹石	絹雲母片岩	(35.0)	18.2	9.5	8500.0	II-a		b					被熱風化 炉石に使用か?
SK1-1	7	SK1-7	掘石	中粒砂岩	(23.6)	(21.4)	(14.1)	10400.0	II-b		b					

第3次包含層一括-第45～49図

実測番号	図版番号	出土地	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部	残存	備考 幅			自然面	その他
												基部	中央	刃部		
12	45-1	包含層	剥片	泥岩	13.4	9.8	3.6	488.9	II							
31	45-2	包含層	打製石斧	千枚岩	9.5	4.4	1.6	90.5	3円		1	3.3	3.9	4.0 A		全体風化顕著
30	45-3	包含層	打製石斧	砂質泥岩	10.8	4.0	1.8	92.0	2円			3.3	3.7	3.0 A		
21	45-4	包含層	打製石斧	砂岩	(11.9)	5.2	2.3	199.6	2円		2	(3.2)	5.0	5.1 A		
18	45-5	包含層	打製石斧	砂質泥岩	8.7	4.5	1.8	84.8	3円		2	(3.5)	3.8	4.7 AB		
26	45-6	包含層	打製石斧	泥岩	9.5	5.2	1.5	75.1	3円		1	3.5	4.8	5.3 A		
16	45-7	包含層	打製石斧	千枚岩	9.8	4.8	1.7	84.8	3円		1	2.0	4.5	5.0 A		
24	45-8	包含層	打製石斧	千枚岩	7.9	4.7	1.2	50.2	3円		1	2.6	3.0	4.6 A		
17	45-9	包含層	打製石斧	千枚岩	9.2	5.7	2.1	128.6	1円		1	3.0	3.7	5.9 B		
25	45-10	包含層	打製石斧	千枚岩	(8.2)	5.7	2.2	123.7	3円		8	—	4.1	5.6 A		

29	46-11	包含層	打製石斧	硅質泥岩	(9.2)	6.0	3.0	198.5	2	—	10	—	5.7	—	A	
15	46-12	包含層	打製石斧	千枚岩	(9.1)	5.8	2.9	160.5	3	—	4	3.7	5.2	—	A	
32	46-13	包含層	打製石斧	砂質泥岩	(5.8)	4.6	3.1	120.7	3	—	10	(3.5)	4.5	(3.5)	AB	
27	46-14	包含層	打製石斧	硅質泥岩	(8.9)	6.5	2.3	172.3	3	—	7	(2.7)	6.6	—	AB	折れ
23	46-15	包含層	打製石斧	砂岩	(7.1)	6.2	1.1	86.0	2	—	4	6.2	5.9	—	B	
19	46-16	包含層	打製石斧	砂岩	7.5	4.2	1.8	81.4	—	円	5	—	—	—	4.2AB	磨痕
20	46-17	包含層	打製石斧	硅質泥岩	(8.2)	6.4	2.2	161.9	3	円	8	—	5.1	—	AB	
13	46-18	包含層	打製石斧	千枚岩	(6.6)	4.4	1.4	64.0	3	円	3	—	3.0	4.2	—	風化顕著
28	46-19	包含層	打製石斧	砂岩	(6.0)	4.8	1.3	47.6	3	円	3	—	3.2	4.7A	—	
14	46-20	包含層	打製石斧	硅質泥岩	(6.8)	4.0	2.0	92.8	2	—	10	(3.3)	(4.0)	(4.2)	—	両側折損
33	46-21	包含層	打製石斧	砂質泥岩	(8.1)	5.0	2.0	96.0	2	—	2	(2.7)	4.6	5.0A	—	
37	46-22	包含層	棒状礫器	砂岩	16.6	5.3	2.9	342.3	3	円	d	(80%)	—	—	—	
38	46-23	包含層	棒状礫器	千枚岩	13.6	5.0	2.4	209.0	—	—	90%	—	—	—	—	
40	46-24	包含層	棒状礫器	泥岩	8.4	2.2	1.5	48.0	2--b	—	a(100%)	—	—	—	—	
4	47-25	包含層	磨石	石英閃緑岩	10.6	8.6	4.7	644.6	1-b	—	a(100%)	—	—	—	—	磨面あり
3	47-26	包含層	磨石	閃緑岩	15.8	12.3	3.5	1006.0	II-a	—	a(100%)	—	—	—	—	
5	47-27	包含層	磨石	細粒砂岩	12.0	6.6	3.0	340.2	II-a	—	a(100%)	—	—	—	—	
22	47-28	包含層	磨石	閃緑岩	10.3	7.5	3.7	420.0	II-b	—	a(100%)	—	—	—	—	表採
39	47-29	包含層	磨石	砂岩	13.0	6.9	3.7	494.0	II-a	—	a(100%)	—	—	—	—	
8	47-30	包含層	磨石	粗粒砂岩	(9.3)	6.3	4.8	371.6	3-b	—	b(50%)	—	—	—	—	
35	47-31	包含層	四石	砂岩	(14.0)	(10.5)	(5.6)	939.0	II-b	—	d(1/4以下)	—	—	—	—	
9	48-32	包含層	磨石	閃緑岩	(11.4)	8.6	4.5	555.5	II-b	—	c(70%)	—	—	—	—	
1	48-33	包含層	磨石	角閃石黒雲母安山岩	(12.5)	8.5	3.5	481.6	II-a	—	a(90%)	—	—	—	—	
6	48-34	包含層	磨石	角閃石黒雲母安山岩	(12.5)	13.3	4.1	1029.4	II-a	—	b(50%)	—	—	—	—	
10	48-35	包含層	磨石	小礫岩	10.6	7.1	4.8	545.2	II-b	—	II-a	—	—	—	—	
34	48-36	包含層	石皿	砂岩	24.4	16.1	5.9	2840.0	II-d	—	90%	—	—	—	—	
7	48-37	包含層	磨石	角閃石黒雲母安山岩	11.0	9.1	3.4	536.6	II-a	—	a(95%)	—	—	—	—	
36	49-38	包含層	石皿	緑泥石片岩	(43.7)	(14.3)	(3.7)	3728.0	V-a	—	b(50%)	—	—	—	—	
2	49-39	包含層	磨石	閃緑岩	17.3	15.2	4.0	1744.0	II-a	—	a(100%)	—	—	—	—	
11	49-40	包含層	磨石	細礫岩	19.8	17.8	6.7	3767.0	II-b	—	a(100%)	—	—	—	—	

※石材の判別については、海野芳聖氏の作製していただいた判別石材資料により担当者が分類した判別した。

第4次出土石器-第52・53図

実測番号	図版番号	出土地点	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	形状	刃部 (cm)	残存	備考				その他
												基部	中央	刃部	自然面	
11	52-1	一括	礫器	千枚岩	9.5	7.4	4.5	310.0	—	5.1	完(a)	—	—	—	—	
8	52-2	一括	礫器	千枚岩	7.1	8.1	4.1	380.0	—	5.2	完(a)	—	—	—	—	
9	53-3	一括	礫器	泥岩	10.2	8.3	4.8	450.0	—	10.0	完(a)	—	—	—	—	
12	53-4	SKI-11	礫器	千枚岩	9.5	8.5	4.5	500.0	—	5.9	完(a)	—	—	—	—	4次の中のSKI-11
10	53-5	一括	剥片	泥岩	12.5	8.4	5.5	670.0	—	12.6	完(a)	—	—	—	—	
3	53-6	一括	打製石斧	泥岩	(9.4)	—	2.6	175.0	台形(3)	円	基欠(3)	3.3	5.5	6.0A	—	
1	53-7	一括	打製石斧	千枚岩	9.0	—	1.0	55.0	台形(3)	円	無欠(1)	3.0	3.8	5.0A	—	
5	53-8	一括	打製石斧	粘板岩	8.0	—	2.5	180.0	台形(3)	直	基欠(3)	(3.5)	5.7	5.5A	—	
4	53-9	一括	打製石斧	砂岩	9.5	—	1.8	110.0	鉢(1)	直	基欠(1)	3.5	4.0	6.7A	—	
6	53-10	一括	剥片	泥岩	9.1	7.3	1.1	80.0	—	—	無欠(1)	—	—	—	—	
7	53-11	一括	磨石	石英閃緑岩	(5.8)	(10.0)	4.8	375.0	II-b	—	1/2	—	—	—	—	
2	53-12	一括	握器	粘板岩	8.7	—	1.3	75.0	台形(3)	円	基欠(3)	2.0	4.5	5.5A	—	

第3表 上前原遺跡第3次集石属性表

No.	位置 (X Y座標)	形状 (c m)	礫数 (個)	礫重量 (kg)	備考
SS1	X-13795.5 Y-44668.5	76x112	184	32	
SS2	X-13793.5 Y-44668.0	65x86	481	39	
SS3	X-13792.5 Y-44662.0	196x90	1761	300	
SS4	X-13795.5 Y-44662.5	90x100 70x70	1645	195	重複2 下部張石
SS5	X-13796.5 Y-44661.5	110x130	428	86	重複2 下部配石
SS6	X-13799.5 Y-44663.0	104x90	795 (13)	140 (38)	土器片 下部張石
SS7	X-13792.0 Y-44658.5	90x105	517	86	
SS8	X-13795.5 Y-44675.5	140x171	974 (20)	431 (22)	襷 下部張石
SS9	X-13796.5 Y-44656.5	90x95	450 (9)	62 (1)	
SS10	X-13791.0 Y-44656.5	75x76	467	121	
SS11	X-13789.5 Y-44653.5	55x60	66	7	
SS12	X-13792.0 Y-44653.5	110x120	296 (7)	145 (18)	下部張石
SS13	X-13795.0 Y-44653.5	115x110	1122	274	
SS14	X-13796.0 Y-44652.0	90x95	549	63	
SS15	X-13790.0 Y-44651.0	65x70	63	9	
SS16	X-13788.0 Y-44650.0	56x64	97	18	
SS17	X-13788.0 Y-44649.0	70x65	36	9	
SS18	X-13792.0 Y-44652.5	45x60	12	10.5	
SS19	X-13799.0 Y-44655.5	90x115	489	90	
SS20	X-13799.0 Y-44660.5	100x125	1072	103	
SS21	X-13800.5 Y-44651.0	50x30	13	4	
SS22	X-13801.0 Y-44651.0	36x32	13	5	
SS23	X-13801.5 Y-44646.0	68x86	23	4.5	
SS24	X-13803.0 Y-44648.0	48x55	73	10	
SS25	X-13803.5 Y-44647.0	78x70	366	110	
SS26	X-13804.0 Y-44648.5	46x65	42	7	
SS27	X-13805.5 Y-44649.5	58x66	215	40	
SS28	X-13804.0 Y-44652.0	50x52	79	12	
SS29	X-13805.5 Y-44652.0	51x47	109	16	
SS30	X-13806.0 Y-44651.0	71x90	435	120.4	
SS31	X-13806.5 Y-44648.5	84x80	119	12.5	

No.	位置 (X Y座標)	形状 (c m)	礫数 (個)	礫重量 (kg)	備考
SS32	X-13805.5 Y-44646.0	48x68	86	24.5	
SS33	X-13808.0 Y-44650.0	120x85	187	17.5	土器片
SS34	X-13809.0 Y-44649.0	65x74	139	38	
SS35	X-13810.0 Y-44647.0	130x148	388	50	
SS36	X-13809.5 Y-44651.0	a. 80x110 b. 100x80	1361 (9)	228 (16)	重複3 下部張石
SS37	X-13802.5 Y-44643.5	51x60	31	5.5	
SS38	X-13793.5 Y-44663.0	56x70	143	20	
SS39	X-13794.0 Y-44657.0	90x110	324 (5)	55 (8)	下部張石
SS40	X-13793.0 Y-44660.0	180x185	992	458	重複2
SS41	X-13797.5 Y-44655.5	50x90	141	84	
SS42	X-13790.0 Y-44661.0	85x76	173	62	
SS43	欠番				
SS44	X-13798.5 Y-44655.0	92x90	465 (11)	55 (9)	下部張石
	計		12756	2543.4	
			(29)	(23)	
	※ 使用石数は土壌内の礫の数と重量 () 内は総量中の下部張石数値を示す。				

写真図版



箕輪遺跡調査区全景、南北土塁



南土塁西端屈曲部



南土塁（南より）



南土塁（北西より）



南土塁下遺物出土状況



第1号住居跡



第4号住居跡カマド



第2号住居跡



第7号住居跡



第3号住居跡



第8号住居跡



第4号・5号・6号住居跡



第9号住居跡、第1号墳



第1号方形周溝墓



堀・同断面



第1号方形周溝墓主体部



堀北端部状況



第2号方形周溝墓



堀北端部状況・第3号溝跡



第1号井戸跡



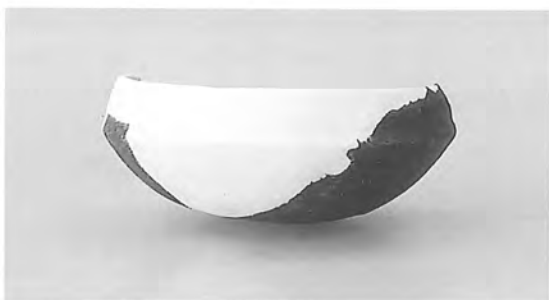
柱列、ピット



第1号住 20



第4号住 5



堀 7



第4号住 3



堀 8



第4号住 4



第1号墳 2



第1号住 25



第9号住 4



土壘 15



土壘 6



試堀 1



第1号方周 7



第9号住 1



第1号墳5、遺構外Ⅱ5



第4号住 6



土壘27、堀64



第8号住 7



第1号住31、第1号住32、土壘28



第3号住24、第1号井戸跡3



縄文式土器①前期



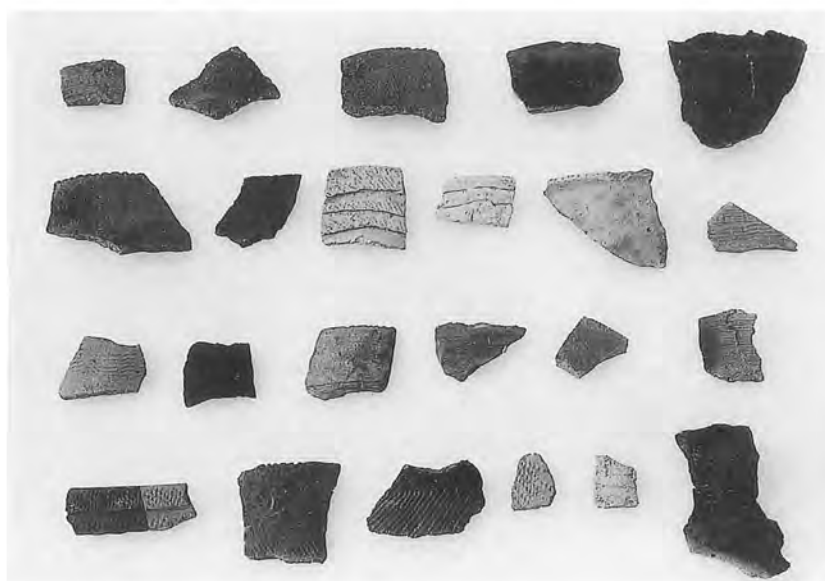
縄文式土器②中期



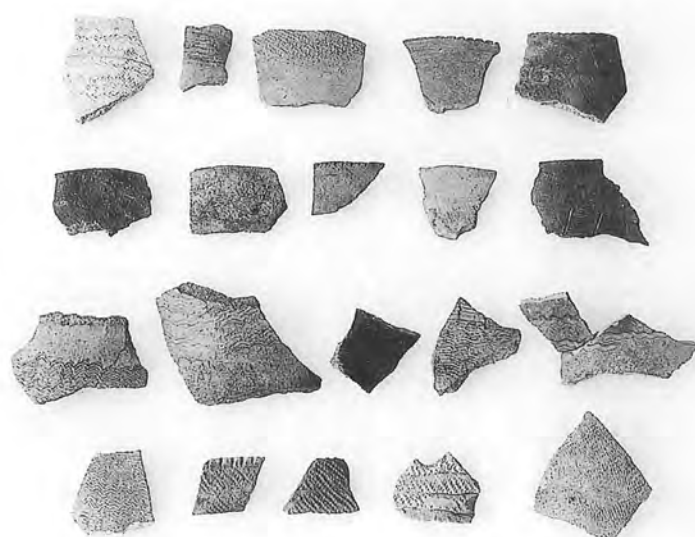
遺構外 I 18

遺構外 I 19

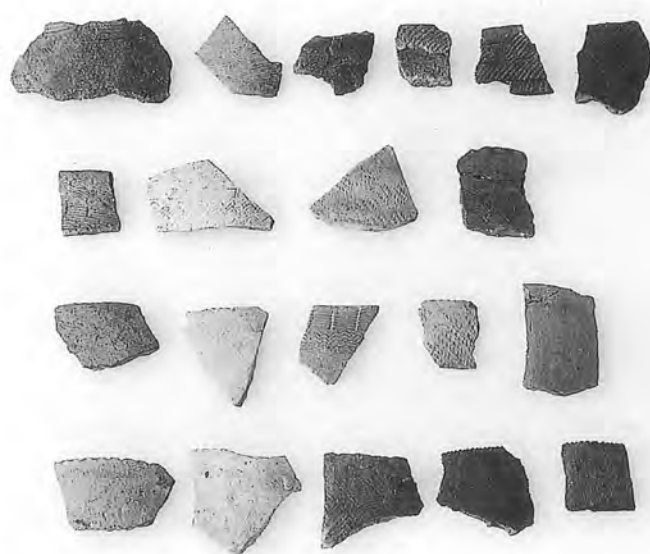
第7号住6、第1号墳10、第1号井戸跡4、遺構外 I 20



弥生式土器①
甕・住居跡出土



弥生式土器②
甕・堀出土

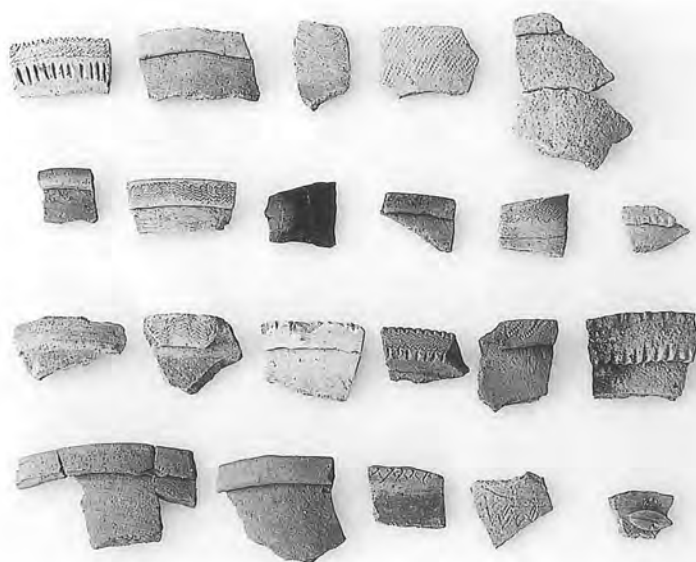


弥生式土器③
甕・その他の遺構出土



埴輪

弥生式土器④ 壺・住居出土



弥生式土器⑤
壺・その他の遺構出土



弥生式土器⑥ 壺・甕



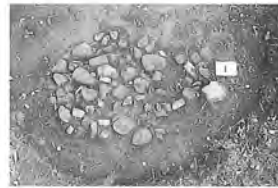
上前原遺跡全景 南から



上前原遺跡 第4次調査区全景空中写真



集石群の分布



SS-1 1号集石



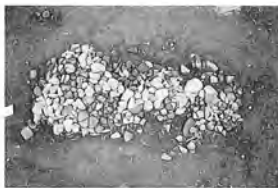
SS-1. SK11. 1号集石下部



SS 2 2号集石



SS 2 2号集石半切



SS 3 3号集石



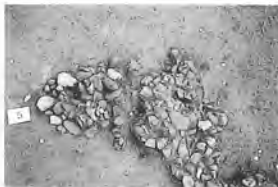
SS 3 3号集石半切



SS 4 4号集石



SS 4 4号集石半切



SS 5 5号集石



SS 5 5号集石半切



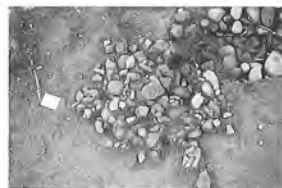
SS 6 6号集石



SS 6 6号集石半切



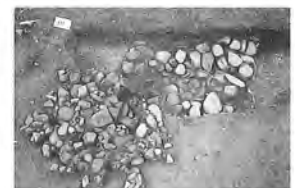
SS 6 6号集石下部



SS 7 7号集石



SS 7 7号集石半切



SS 7.40 7.40号集石



SS 8 8号集石



SS 8 8号集石半切



SS 8 8号集石半切



SS 8 8号集石下部



SS 10 10号集石



SS 10 10号集石半切



SS 11 11号集石半切



SS 12 12号集石



SS 12 12号集石半切



SS 12 12号集石下部



SS 12 12号集石堀方



SS 13 13号集石半切



SS13 13号集石堀方



SS14 14号集石



SS15 15号集石



SS15 15号集石堀方



SS16.17 16.17号集石



SS16.17 16.17号集石堀方



SS18 18号集石



SS18 18号集石半切



SS19 19号集石



SS20 20号集石



SS21 21号集石



SS22 22号集石



SS23 23号集石



SS24 24号集石



SS24 24号集石堀方



SS25 25号集石



SS25 25号集石堀方



SS27 27号集石



SS27 27号集石堀方



SS28 28号集石



SS28 28号集石堀方



SS29 29号集石



SS29 29号集石堀方



SS30 30号集石



SS31 31号集石



SS31 31号集石堀方



SS32 32号集石



SS33 33号集石



SS33.34 33.34号集石



SS34 34号集石



SS34 34号集石堀方



SS35 35号集石



SS35 35号集石堀方



SS36 36号集石



SS37 37号集石



SS38 38号集石



SS38 38号集石半切



SS39 39号集石



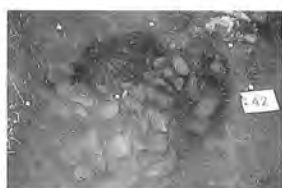
SS40 40号集石



SS7.40 7.40号集石堀方



SS6.41 6.41号集石



SS42 42号集石



SS44 44号集石



SS44 44号集石半切



SS44 44号集石下部



Si1 1号住居跡



Si1 1号住居炉跡



Si2 2号住居炉跡



Si1 1号住居炉跡



Si2 2号住居跡



SK2.SS6 2号土壇6号集石



SK2 2号土壇出土土器



1号埋甕



Si2 2号住居遺物出土状況



SK2 2号土壇



SK46 46号土坑



SK46 46号土坑、遺物



SK 6 6号土坑



調査状況 西から



SS45 45号集石下部



上前原遺跡第4次調査区全景 南側より



Si 1 1号住居跡



SD 1 1号溝、土坑堀方



SD 1 1号溝堀方



Si 1 1号住居堀方



調査区全景 北より



SK 2 2号土坑



SK 1 1号土坑



調査区全景 西から



調査状況 南から



SI-1



SI-1



SI 1



SI 1. 2. 3



SS 1. 3. 4



SI 2



SI 2



SI-2. 3



SI 2



SI 2、SS16. 19



SI 2、SS22. 24. 26. 29. 30



SS 7. 9. 13. 14



SS 7. 9. 13. 14. 16. 19



SS22. 24. 26. 29. 30



SS33. 35



SS36



SS36. 38. 40. 41. 43. 45



SS38. 40. 41. 43. 44. SK 1 ~ 4



SK 1 ~ 4. 46



SK48. 49



SK49



土器一括



土器一括



土器一括



土器一括



土器一括



土製品



一括



SK46



SK46



SK46



SK46



SI 1



SI 2



包含層



SI 2



SI 2



SI 2



SI 2



SI 2



SS 8



SK 6. 7



1号埋壺



SK 5. 6



SS36



SS33



SK 2



4次一括・土器



4次一括・土器



SI 1・2 1・2



SI 2



SI 2



SI 1. 2、SS 2. 3. 5. 14. 16. 19



SS19. 22. 29. 38. 40



SK 1. 3. 47



SS42



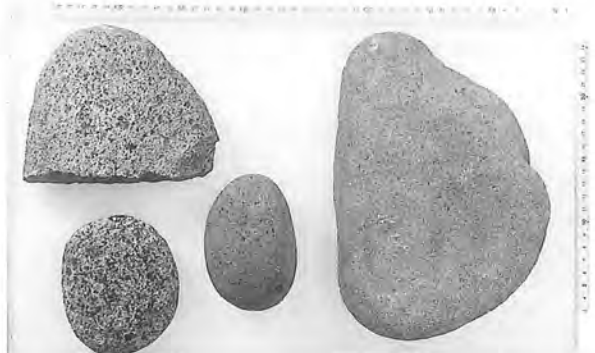
打斧一括



石器一括



磨石一括



磨石一括



磨石一括



一括石皿



SK 1



4次一括・SK 1



4次一括石器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みのわいせき		かみまえはらいせき					
書 名	箕輪遺跡		上前原遺跡		3次		4次	
副 書 名	市内遺跡（旧大里町・旧江南町）		I					
巻 次								
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第2集							
編 集 者 名	寺社下 博		新井 端					
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所 在 地	〒360－0107 熊谷市千代329番地		熊谷市立江南文化財センター		TEL048-536-5062			
発行年月日	西暦2008（平成20）年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		世界測地系 北緯 東経		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
みのわいせき 箕輪遺跡	くまがやしみのわあざ 熊谷市箕輪字 34－1番地他 ばんちほか	0064	040	36° 56′ 26″	136° 36′ 23″	19980202 ～ 19980318 19990301 ～ 19990326	241.00 391.00	宅地造成
かみまえはらいせき 上前原遺跡 3次	くまがやしせんだいあざかみまえはら 熊谷市千代字上前原 65-1、65-4、65-5番地 ばんち	0065	022	36° 7′ 24″	139° 20′ 14″	20041102 ～ 20041202	700.00	個人住宅 建設
かみまえはらいせき 上前原遺跡 4次	くまがやしせんだいあざかみまえはら 熊谷市千代字上前原 140番地 ばんち	0065	022	36° 7′ 16″	139° 20′ 13″	20060801 ～ 20060831	786.00	個人住宅 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特 記 事 項		
箕輪遺跡	集落跡	縄文時代中期 弥生時代後期 古墳時代後期 奈良時代 中世	住居跡 住居跡 方形周溝墓 住居跡 古墳址 住居跡 土壘・堀	1軒 6軒 2基 1軒 1基 1軒	縄文土器 弥生土器 ガラス玉 土師器 須恵器 須恵器	住居跡と方形周溝墓が同居している。また、中世の可能性のある土壘と堀が検出された。		
上前原遺跡 3次	集落跡	縄文時代中期 後期	住居跡 土壘 集石土壘	2軒 8基 43基	縄文土器 土製品・石製品	縄文時代中期前半の勝坂式期に属する遺構・遺物が出土した。		
上前原遺跡 4次	集落跡	縄文時代後期	住居跡 土壘 溝跡 ピット群	1軒 4基 2条	縄文土器 石製品			

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第2集

箕 輪 遺 跡

上前原遺跡 3 次、4 次

市内遺跡（旧大里町・旧江南町） I

平成20年 3 月30日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／大屋印刷株式会社